

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第13集

柳坪遺跡

中央自動車道長坂インターチェンジ
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1986. 3.

山梨県教育委員会
日本道路公団

序

本報告書は、中央自動車道長坂インターチェンジの建設にさきだち、1984年度に発掘調査された山梨県北巨摩郡長坂町大八田地内の柳坪遺跡について、その成果をまとめたものであります。

この遺跡の位置する八ヶ岳南麓の広大な裾野には、幾本もの河川によって細長い尾根が南北に数多く形成され、そこには縄文時代から平安時代にかけての遺跡が無数に散在していますが、本遺跡もまた標高720m前後の尾根上に立地しております。

本遺跡は、1973年、中央自道車道本線の建設の際にも発掘調査され、その成果は柳坪遺跡A地区・B地区として報告書も刊行されていますが、縄文時代から平安時代までの住居址42軒が発見されるなど、山梨県最初の大規模な集落調査として注目を受けました。特に縄文時代中期の住居址から出土した多量の土器群は、曾利式土器編年再考の発端となったという経緯があります。

今回の調査は、約15,000m²の地を9地区に分けて実施されましたが、遺構として縄文時代10・弥生時代1・古墳時代1・平安時代38・平安時代以降2、計52軒の住居址、平安時代以降の掘立柱建物址・溝状遺構各6、縄文時代を中心とする土壙14基等が検出されました。また遺物としては住居址を中心に多量の土器が出土いたしましたが、縄文土器では中期終末の様相を考察する上で貴重な資料が得られ、平安時代、9世紀末から10世紀末までの住居址からは大量の内面黒色土器が発見され、その位置づけに1つの指針が与えられました。なお、平安時代この地は『和名抄』にいう巨麻郡速見郷に属したと考えられ、花粉分析の結果、水田址の存在も予想されましたが、今回の調査では確認されませんでした。

以上のとおり、柳坪遺跡は、縄文時代中期と平安時代の集落を主体とする遺跡で、前回に加え今回の発掘調査によって、ほぼその全容が明らかになったと信じます。本報告書が、近年とみに关心の高い八ヶ岳南麓の歴史、特に縄文時代中期と平安時代の集落の存在形態を究明する一資料として、多くの方にご利用いただければ幸甚です。

末筆ながら、種々ご協力を賜わった関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方に厚く御礼申し上げます。

1986年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯貝正義

例　　言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡長坂町大八田字秋田に所在する柳坪遺跡の調査報告である。
2. 本調査は、中央自動車道長坂インターチェンジ建設に伴う事前調査であり、山梨県教育委員会が日本道路公団より委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施した。
3. 整理作業の分担は以下の通りである。
 - 土器復元作業 弦間文代、土肥正治、広瀬勝子
 - 遺構図トレース 岡本範之、米田明訓
 - 土器実測 石川操、岸崎浩実、齊藤智子、内藤真千子、松野和美、米田、若尾悦子
 - 石器実測 長沢宏昌、保坂康夫
 - 土器トレース 石川、内藤、松野、米田、若尾
 - 石器トレース 米田
 - 写真撮影（遺構・遺物） 塚原明生、米田
 - 図面・図版作成 井上義彦、清水理枝、中山豊、深味義博、古屋満喜子、米田、渡辺美和子
4. 本書の原稿執筆分担は以下の通りである。
 - 第1章 ————— 米田
 - 第2章 第1節 ————— 米田
　　　　　　第2節 ————— 河西 學、米田
 - 第3章 ————— 米田
 - 第4章 第1節 ————— 米田
　　　　　　第2節1 ————— 米田
　　　　　　2 ————— 河西、米田
 - おわりに ————— 米田
5. 花粉分析、プラントオバール分析および材の同定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
6. 本書の編集は米田が行なった。
7. 本書で報告された遺物・実測図等は、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまでに、以下の方々から御教示、御協力をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）
秋山道生（東京都板橋区教育委員会）、安孫子昭二（東京都教育委員会）、兩宮正樹（高根町教育委員会）、柳原功一（大泉村教育委員会）、清水嘉寿彦（長坂町）、滝田佑（長坂町）、田中行英（長坂町）、奈良泰史（都留市教育委員会）、平野修（白州町教育委員会）、山路恭之助（須玉町教育委員会）、山下孝司（韮崎市教育委員会）

凡　　例

1. 採図の縮尺は次の通りである。

区全体図1/300、住居址1/60、カマド微細図1/40、掘立柱建物址1/60、土墻1/60、溝1/60・1/160、埋設土器1/40、縄文土器1/6、拓本類1/3、縄文石器1/3、土偶1/2、弥生土器1/4、土師器・陶器類1/4、木製品1/4

2. 造構築図内のレベルポイントは、図面上での同一レベルを示すのみであり、標高は示していない。
3. 住居址平面図でカマド部分はスクリーン・トーンで範囲を示してある。
4. カマド微細図におけるスクリーン・トーンは、斜線が石断面、点は焼土範囲を示す。
5. 土器図面で断面図が黒色のものは陶器類（須恵器、灰釉陶器）であることを示している。
6. 土師器の中で内外面が黒色のものは、スクリーン・トーンでその範囲を示してある。
7. 土師器の墨書きは、投影図ではなく見通し図である。
8. 木葉痕、糸切り底は原則として全て拓本が貼付してある。但し極端な小片や摩耗の激しいものは例外である。
9. 住居址内のピットに添えた数字は、その床面からの深さを示している。

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査の実施と経過	1
第1節 調査にいたるまで	1
1. 発掘調査事務経過	1
2. 調査組織	1
第2節 調査の実施	2
1. 発掘区の設定と調査方法	2
2. 調査の経過	3
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	4
第2節 遺跡周辺の地形と地質	4
1. 概要	
2. 遺跡の微地形について	
第3章 遺構と遺物	11
第1節 1区の遺構と遺物	11
1. 1号住居址	11
3. 3号住居址	16
5. 5号住居址	19
7. 7号住居址	21
9. 1号土壤	27
第2節 2区の遺構と遺物	28
1. 8号住居址	28
3. 9号住居址	31
5. 11号住居址	36
7. 2号土壤～5号土壤	50
9. 12号住居址	51
11. 25号住居址	54
13. 8号土壤	55
第3節 3区の遺構と遺物	56
1. 17号住居址	56
3. 19号住居址	59
2. 18号住居址	57
4. 20号住居址	62

5. 21号住居址	64	6. 22号住居址	66
7. 23号住居址	69	8. 49号住居址	71
9. 50号住居址	73	10. 51号住居址	73
11. 7号土壤	74		
第4節 4区の遺構と遺物			74
1. 3号溝・4号溝	74	2. 11号土壤	76
3. 48号住居址	76	4. 5号溝	77
5. 磨厰	77		
第5節 5区の遺構と遺物			90
1. 26号住居址	90	2. 27号住居址	93
3. 28号住居址	94	4. 29号住居址	94
5. 30号住居址	96	6. 31号住居址	97
7. 32号住居址	98	8. 33号住居址	100
9. 34号住居址	101	10. 35号住居址	102
11. 36号住居址	104	12. 37号住居址	105
13. 38号住居址	107	14. 39号住居址	109
15. 40号住居址	111	16. 41号住居址	113
17. 42号住居址	114	18. 43号住居址	116
19. 44号住居址	117	20. 45号住居址	117
21. 1号掘立柱建物址	118	22. 5号掘立柱建物址	121
23. 6号掘立柱建物址	121	24. 1号溝	121
第6節 6区の遺構と遺物			121
1. 24号住居址	122	2. 46号住居址	123
3. 47号住居址	124	4. 3号掘立柱建物址	126
5. 4号掘立柱建物址	127	6. 2号溝	127
7. 6号溝	128	8. 9号溝	128
9. 10号土壤	129	10. 12号土壤	129
11. 13号土壤	129	12. 14号土壤	129
13. 1号埋設土器	131	14. その他の遺物	131
第7節 7区の調査			133
第8節 8区の遺構と遺物			134
1. 遺構について			134
2. 出土遺物			134
第9節 9区の遺構と遺物			139
1. 52号住居址			139
第10節 その他の出土遺物			140

第4章 各 説	147
第1節 縄文時代の遺構と遺物	147
1. 住居址群の展開	147
2. 中期後半の土器の諸問題	147
3. 遺跡間の石器組成の差異について	152
第2節 平安時代の遺構と遺物	153
1. 柳坪遺跡における内面黒色研磨土器の在り方	153
2. 8区の平安時代堆積層の形成について	154
おわりに	159
付 編	160

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	5	第34図 8号住居址出土土器	30
第2図 柳坪遺跡地形図	7～8	第35図 15号住居址出土土器	30
第3図 柳坪遺跡全体図	9～10	第36図 15号住居址出土石器	31
第4図 柳坪遺跡1区全体図	11	第37図 9号住居址平面図	31
第5図 1号住居址平面図	12	第38図 9号住居址出土土器	32
第6図 1号住居址カマド平面図	12	第39図 9号住居址出土石器	33
第7図 1号住居址出土土器	13	第40図 10号住居址平面図	33
第8図 2号住居址平面図	14	第41図 10号住居址出土土器1)	33
第9図 2号住居址出土土器1)	15	第42図 10号住居址出土土器2)	34
第10図 2号住居址出土土器2)	15	第43図 10号住居址出土石器	34
第11図 3号住居址平面図	16	第44図 11号住居址平面図	35
第12図 3号住居址カマド平面図	16	第45図 11号住居址遺物出土状態	36
第13図 3号住居址出土土器	17	第46図 11号住居址出土土器1)	38
第14図 4号住居址平面図	18	第47図 11号住居址出土土器2)	39
第15図 4号住居址カマド平面図	18	第48図 11号住居址出土土器3)	40
第16図 4号住居址出土土器	19	第49図 11号住居址出土土器4)	41
第17図 5号住居址平面図	20	第50図 11号住居址出土土器5)	42
第18図 5号住居址出土土器	20	第51図 11号住居址出土土器6)	43
第19図 6号住居址平面図	21	第52図 11号住居址出土土器7)	44
第20図 6号住居址出土土器	21	第53図 11号住居址出土土偶	44
第21図 7号住居址平面図	22	第54図 11号住居址出土石器1)	45
第22図 7号住居址出土土器1)	22	第55図 11号住居址出土石器2)	46
第23図 7号住居址出土土器2)	22	第56図 11号住居址出土石器3)	47
第24図 7号住居址出土土製筋轆車	23	第57図 11号住居址出土石器4)	48
第25図 14号住居址平面図	23	第58図 16号住居址平面図	48
第26図 14号住居址出土土器1)	24	第59図 16号住居址出土土器1)	48
第27図 14号住居址出土土器2)	25	第60図 16号住居址出土土器2)	49
第28図 14号住居址出土石器1)	26	第61図 16号住居址出土土製品	49
第29図 14号住居址出土石器2)	27	第62図 16号住居址出土石器	49
第30図 1号土壤平面図	28	第63図 4号土壤出土石器	50
第31図 1号土壤出土土器	28	第64図 柳坪遺跡2区東全体図	51
第32図 柳坪遺跡2区西全体図	28	第65図 12号住居址平面図	51
第33図 8号・15号住居址平面図	29	第66図 12号住居址出土土器	52

第 67 図	12号住居址出土土器	52	第 103 図	49号住居址出土土器	72
第 68 図	12号住居址出土石器	53	第 104 図	50号住居址・51号住居址 出土土器	73
第 69 図	13号住居址平面図	54	第 105 図	50号住居址出土鉄鏃	73
第 70 図	13号住居址出土土器	54	第 106 図	51号住居址平面図	74
第 71 図	25号住居址平面図	55	第 107 図	7号土壤平面図	74
第 72 図	25号住居址出土土器	55	第 108 図	柳坪遺跡4区全体図	74
第 73 図	25号住居址出土鉄製紡錘車	55	第 109 図	3号溝・4号溝平面図	75
第 74 図	2号掘立柱建物址平面図	56	第 110 図	11号土壤平面図	76
第 75 図	8号土壤平面図	56	第 111 図	柳坪遺跡4区東全体図	76
第 76 図	柳坪遺跡3区全体図	56	第 112 図	48号住居址平面図	77
第 77 図	17号住居址平面図	57	第 113 図	48号住居址出土土器	77
第 78 図	17号住居址カマド平面図	57	第 114 図	5号溝平面図	78
第 79 図	17号住居址出土土器	58	第 115 図	4区躰層平面図	79～80
第 80 図	18号住居址平面図	59	第 116 図	4区躰層出土土器(1)	82
第 81 図	18号住居址出土土器	59	第 117 図	4区躰層出土土器(2)	83
第 82 図	19号住居址平面図	60	第 118 図	4区躰層出土土器(3)	84
第 83 図	19号住居址カマド平面図	61	第 119 図	4区躰層出土土器(4)	85
第 84 図	19号住居址出土帶金具	61	第 120 図	4区躰層出土土器(5)	86
第 85 図	19号住居址出土土器	62	第 121 図	4区躰層出土土器(6)	87
第 86 図	20号住居址平面図	63	第 122 図	4区躰層出土土器(7)	88
第 87 図	20号住居址カマド平面図	63	第 123 図	4区躰層出土土器(8)	89
第 88 図	20号住居址出土土器	64	第 124 図	26号住居址平面図	90
第 89 図	21号住居址平面図	65	第 125 図	柳坪遺跡5区全体図	91～92
第 90 図	21号住居址カマド平面図	65	第 126 図	26号住居址カマド平面図	93
第 91 図	21号住居址出土革帯	65	第 127 図	26号住居址出土土器	93
第 92 図	21号住居址出土土器	66	第 128 図	27号住居址平面図	94
第 93 図	22号住居址平面図	67	第 129 図	27号住居址出土土器	95
第 94 図	22号住居址カマド平面図	67	第 130 図	28号住居址平面図	95
第 95 図	22号住居址出土土器(1)	68	第 131 図	29号住居址平面図	96
第 96 図	22号住居址出土土器(2)	69	第 132 図	29号住居址カマド平面図	96
第 97 図	22号住居址出土土製紡錘車	69	第 133 図	30号住居址平面図	96
第 98 図	23号住居址平面図	70	第 134 図	29・30号住居址出土土器	97
第 99 図	23号住居址カマド平面図	70	第 135 図	30号住居址出土石製紡錘車	97
第 100 図	23号住居址出土土器	70	第 136 図	31号住居址平面図	98
第 101 図	49号・50号住居址平面図	71	第 137 図	31号住居址カマド平面図	98
第 102 図	49号住居址カマド平面図	71	第 138 図	31号住居址出土土器	99

第 139 図	32号住居址平面図	99	第 175 図	5号掘立柱建物址	119
第 140 図	32号住居址出土土器	99	第 176 図	6号掘立柱建物址	119～120
第 141 図	33号住居址平面図	100	第 177 図	1号溝平面図	120
第 142 図	33号住居址出土土器	101	第 178 図	柳坪遺跡 6区全体図	121
第 143 図	33号住居址出土砥石	101	第 179 図	24号住居址平面図	122
第 144 図	34号住居址平面図	102	第 180 図	24号住居址カマド平面図	122
第 145 図	34号住居址出土土器	102	第 181 図	24号住居址出土土器	123
第 146 図	35号住居址平面図	102	第 182 図	46号住居址平面図	124
第 147 図	35号住居址カマド平面図	103	第 183 図	46号住居址出土土器	124
第 148 図	35号住居址出土土器	103	第 184 図	47号住居址・9号土壤平面図	124
第 149 図	36・37号住居址平面図	104	第 185 図	47号住居址出土土器	125
第 150 図	36号住居址カマド平面図	105	第 186 図	3号掘立柱建物址	126
第 151 図	37号住居址カマド平面図	105	第 187 図	4号掘立柱建物址	127
第 152 図	36号住居址出土土器	106	第 188 図	2号溝平面図	128
第 153 図	37号住居址出土土器	107	第 189 図	6号溝平面図	128
第 154 図	38号住居址平面図	108	第 190 図	10号土壤・12号土壤平面図	129
第 155 図	38号住居址カマド平面図	108	第 191 図	13号土壤平面図	129
第 156 図	38号住居址出土土器	109	第 192 図	14号土壤平面図	130
第 157 図	38号住居址出土砥石	109	第 193 図	14号土壤出土土器(1)	130
第 158 図	39号住居址平面図	110	第 194 図	14号土壤出土土器(2)	130
第 159 図	39号住居址特殊遺構平面図	110	第 195 図	1号埋設土器平面図	131
第 160 図	39号住居址出土土器	110	第 196 図	1号埋設土器	131
第 161 図	40号住居址平面図	111	第 197 図	6区出土土器(1)	131
第 162 図	40号住居址カマド平面図	111	第 198 図	6区出土土器(2)	132
第 163 図	40号住居址出土土器	111	第 199 図	6区出土土器(3)	133
第 164 図	41号住居址平面図	112	第 200 図	8区出土土器(1)	135
第 165 図	41号住居址出土土器(1)	112	第 201 図	8区出土土器(2)	135
第 166 図	41号住居址出土土器(2)	113	第 202 図	8区出土木製品(1)	136
第 167 図	42号住居址平面図	114	第 203 図	8区出土木製品(2)	137
第 168 図	42号住居址カマド平面図	114	第 204 図	8区出土木製品(3)	138
第 169 図	43号住居址平面図	115	第 205 図	柳坪遺跡 9区全体図	139
第 170 図	43号住居址カマド平面図	115	第 206 図	52号住居址平面図	139
第 171 図	42号住居址・43号住居址 出土土器	116	第 207 図	52号住居址出土土器	139
第 172 図	44号住居址平面図	117	第 208 図	柳坪遺跡出土石器(1)	141
第 173 図	45号住居址平面図	118	第 209 図	柳坪遺跡出土石器(2)	142
第 174 図	1号掘立柱建物址	118	第 210 図	柳坪遺跡出土石器(3)	143

第 211 図 柳坪遺跡出土石器(4).....	144	第 215 図 柳坪 A 2 号住居址出土土器	149
第 212 図 1 号・2 号住居址間出土土器	145	第 216 図 金の尾遺跡出土土器	150
第 213 図 柳坪遺跡出土遺物・その他	146	第 217 図 8 区土層柱状図	154
第 214 図 天神遺跡出土土器	148	第 218 図 9~10世紀の住居址の変遷	155~156

付 図 八ヶ岳西南麓における縄文時代中期後半の土器の変遷

表 目 次

表 1 第 208 図~第 211 図 石器一覧表 145

表 2 縄文時代中期後半の集落遺跡における石器出土数 153

図版目次

- | | | |
|------|---|--|
| 図版1 | ○遺跡全景航空写真
○5区航空写真 | ○22号住居址と同址カマド
○23号住居址と同址カマド |
| 図版2 | ○遺跡遠景
○遺跡遠景
○1区全景 | 図版13 ○49号住居址と同址カマド
○50号住居址
○51号住居址 |
| 図版3 | ○1号住居址と同址カマド
○2号住居址と同址遺物出土状態
○3号住居址と同址カマド | 図版14 ○4区3号溝・4号溝と11号土壙
○4区疊群
○4区疊群 |
| 図版4 | ○4号住居址と同址カマド
○5号住居址と同址カマド
○6号住居址と同址カマド | 図版15 ○4区疊群実測風景
○48号住居址と同址埋甕
○5号溝 |
| 図版5 | ○7号住居址と同址遺物出土状態
○14号住居址
○14号住居址埋甕 | 図版16 ○5区調査前
○26号住居址と同址カマド
○27号住居址と同址遺物出土状態 |
| 図版6 | ○2区全景と2区作業風景
○8号住居址
○9号住居址と2~6号土壙 | 図版17 ○29号住居址
○30号住居址
○31号住居址と同址カマド |
| 図版7 | ○10号住居址
○11号住居址と同址遺物出土状態
○11号住居址と同址埋甕 | 図版18 ○32号住居址と同址遺物出土状態
○33号住居址と44号住居址
○33号住居址遺物出土状態 |
| 図版8 | ○12号住居址
○13号住居址と同址焼土ピット
○16号住居址と15号住居址炉 | 図版19 ○35号住居址と同址カマド
○36号住居址と37号住居址
○36号住居址カマド |
| 図版9 | ○25号住居址と同址炉
○8号土壙
○2号掘立柱建物址 | ○38号住居址と同址カマド
○39号住居址と同址特殊遺構 |
| 図版10 | ○3区全景
○3区作業風景
○17号住居址と同址カマド | 図版20 ○40号住居址
○41号住居址と同址埋甕
○42号住居址と同址カマド |
| 図版11 | ○18号住居址と同址遺物出土状態
○19号住居址と同址カマド
○20号住居址 | 図版21 ○43号住居址と同址カマド
○1号掘立柱建物址
○5号掘立柱建物址 |
| 図版12 | ○21号住居址と同址カマド | 図版22 ○6号掘立柱建物址
○1号溝 |

- 6 区全景
- 6 区作業風景
- 図版23 ○ 24号住居址と同址カマド
- 46号住居址
- 47号住居址と同址遺物出土状態
- 図版24 ○ 3号掘立柱建物址と1号埋設土器
- 8区全景と同区木製品出土状態
- 8区全景と同区木製品出土状態
- 図版25 ○ 8区自然木出土状態
- 8区木製品出土状態
- 8区木製品出土状態
- 8区木製品出土状態
- 図版26 ○ 8区木製品出土状態
- 8区木製品出土状態
- 52号住居址
- 図版27 ○ 1号住居址出土遺物
- 2号住居址出土遺物
- 図版28 ○ 3号住居址出土遺物
- 4号住居址出土遺物
- 図版29 ○ 5号住居址出土遺物
- 6号住居址出土遺物
- 7号住居址出土遺物
- 図版30 ○ 14号住居址出土遺物(1)
- 図版31 ○ 14号住居址出土遺物(2)
- 8号住居址出土遺物
- 図版32 ○ 9号住居址出土遺物
- 10号住居址出土遺物
- 図版33 ○ 11号住居址出土遺物(1)
- 図版34 ○ 11号住居址出土遺物(2)
- 図版35 ○ 11号住居址出土遺物(3)
- 図版36 ○ 11号住居址出土遺物(4)
- 図版37 ○ 11号住居址出土遺物(5)
- 図版38 ○ 11号住居址出土遺物(6)
- 図版39 ○ 12号住居址出土遺物
- 15号住居址出土遺物
- 16号住居址出土遺物
- 図版40 ○ 17号住居址出土遺物
- 19号住居址出土遺物
- 図版41 ○ 21号住居址出土遺物
- 22号住居址出土遺物(1)
- 図版42 ○ 22号住居址出土遺物(2)
- 49号住居址出土遺物(1)
- 図版43 ○ 49号住居址出土遺物(2)
- 48号住居址出土遺物
- 4区疊層出土遺物(1)
- 図版44 ○ 4区疊層出土遺物(2)
- 図版45 ○ 4区疊層出土遺物(3)
- 図版46 ○ 4区疊層出土遺物(4)
- 図版47 ○ 4区疊層出土遺物(5)
- 図版48 ○ 26号住居址出土遺物
- 27号住居址出土遺物
- 図版49 ○ 31号住居址出土遺物
- 32号住居址出土遺物
- 33号住居址出土遺物
- 35号住居址出土遺物
- 36号住居址出土遺物
- 図版50 ○ 38号住居址出土遺物
- 39号住居址出土遺物
- 40号住居址出土遺物
- 図版51 ○ 41号住居址出土遺物
- 図版52 ○ 42号住居址出土遺物
- 43号住居址出土遺物
- 24号住居址出土遺物(1)
- 図版53 ○ 24号住居址出土遺物(2)
- 47号住居址出土遺物
- 1号埋設土器
- 図版54 ○ 6区疊層出土遺物
- 図版55 ○ 柳坪遺跡出土石器類(1)
- 図版56 ○ 柳坪遺跡出土石器類(2)
- 柳坪遺跡出土石器類とその他
- 図版57 ○ 石鏃・磨製石鏃・鐵鏃
- 25号住居址出土鐵製紡錘車

- 19号住居址出土鉄製帶金具
- 5区出土磁器
- 図版58 ○8区出土木製品(1)
- 図版59 ○8区出土木製品(2)
- 図版60 ○8区出土曲物拡大写真
- 図版61 ○墨書き土器(1)
- 図版62 ○墨書き土器(2)
- 図版63 ○8区検出花粉(1)
- 図版64 ○8区検出花粉(2)
- 図版65 ○8区検出プラントオバール(1)
- 図版66 ○8区検出プラントオバール(2)
- 図版67 ○8区検出プラントオバール(3)
- 図版68 ○材顕微鏡写真(1)
- 図版69 ○材顕微鏡写真(2)
- 図版70 ○材顕微鏡写真(3)
- 図版71 ○材顕微鏡写真(4)
- 図版72 ○材顕微鏡写真(5)

第1章 調査の実施と経過

第1節 調査にいたるまで

1. 発掘調査事務経過

- 昭和58年7月5日 日本道路公団より長坂インターチェンジ建設地内の埋蔵文化財の有無について、県文化課に照会がある。
- 8月16日 県文化課より日本道路公団に、インターチェンジ建設地内に埋蔵文化財存在の旨を回答する。
- 12月28日 日本道路公団より県文化課に発掘調査の依頼がある。
- 昭和59年2月13日 県文化課より日本道路公団に発掘調査実施の受諾を回答する。
- 4月11日 文化庁に発掘通知を提出する。
- 5月15日 委託契約を締結し、1部を日本道路公団に返送する。
- 6月11日 発掘調査を開始する。
- 7月6日 文化庁より発掘通知の受理通知書が送付される。
- 12月20日 発掘調査を終了する。以後現地で整理作業を行なう。
- 昭和60年2月7日 長坂警察署へ遺物発見通知を提出する。
- 9月30日 昭和60年度の報告書作成整理作業の契約を締結する。
- 10月1日 整理を開始する。
- 昭和61年2月28日 整理を終了する。

2. 調査組織

○発掘調査

調査主体 山梨県教育委員会

調査担当者 新津 健（山梨県埋蔵文化財センター文化財主事）

米田明訓（ ）

保坂康夫（ ）

調査員 塚原明生（日本写真家協会会員）

調査補助員 岸崎浩実、中山豊、中山良、山岸洋子（以上 帝京大学）、五味信吾（国学院大学）、中村誠（明治大学）

作業員 浅川英三、浅川けさ子、浅川タマ子、浅川春子、浅川久代、浅川日出子、浅川英之、浅川美喜夫、浅川美代、浅川喜子、浅川米子、小沢和彦、小沢みづえ、石原はづ子、金子義唯、小池みさを、奥水義一、小林和美、齊藤乙士、島田千栄、清水佳大、鈴木節子、滝田悦子、滝田伸治、滝田武子、滝田辰子、田中ヤス子、中沢裕美子、中島たね子、中島ねのえ、仲山満、早矢仕ふさ子、原藤初代、日向一子、平井仁志、平島いそ子、平島孝枝、平島トヨ子、平島長生、

平島弘子、平島富士子、平島マサ子、平島元江、平島みゆき、深沢光子、藤原芳郎、細田絹代、細田みぎわ、細田茂登枝、堀込明子、堀込よしみ、三井静樹、三井澄子、山形克巳、八巻栄、八巻久子、山本まさみ

○整理作業参加者

石川操、井上義彦、岡本範之、河西学、岸崎浩実、弦間文代、齊藤智子、清水理枝、塙原明生、土肥正治、内藤真千子、中山豊、広瀬勝子、深味義博、古屋満喜子、松野和美、若尾悦子、渡辺美和子

第2節 調査の実施

1. 発掘区の設定と調査方法（第2・3図）

柳坪遺跡は、中央自動車道長坂インターチェンジ建設に伴う事前調査であり、調査対象面積は約15,000m²であった。本遺跡は、昭和48年に中央自動車道本線部分の建設の際にも調査されており、柳坪遺跡A地区、柳坪遺跡B地区として既に報告書が刊行されている（末木、1975）。当時は道路本線上のために、比較的広い範囲をまとめて調査ができたわけである。しかし、今回の調査では、建造物がインターチェンジという性格の上に、インターチェンジ自体が、何本もの谷や尾根にまたがるように建設されるため、遺跡全体を9地区に分けて調査せざるを得なくなった。それらを柳坪遺跡1区～9区とした。

- 1区 本線上のB地区的南に接する地区である。言うまでもなくB地区と同じ尾根上に属し、西側は同じ谷に面する。最も遺構、遺物の出土が期待できる地区である。
 - 2区 本線上のA地区的南に接する地区である。浅い溝をはさみ東と西に分かれる。2区西の部分がA地区と接する。この場所も最も遺構、遺物の出土が期待された。
 - 3区 2区の東と同じ尾根に属する。谷をはさんで1区と向かい合う。2区東に比べて、かなり傾斜がある。
 - 4区 本線より北の部分。大部分は低い谷の部分である。A地区的接する部分を4区西、2本の谷の間の微高地を4区東とした。
 - 5区 インターチェンジの料金所、事務所にあたる広い地区である。地形的には本線B地区、インター1区と同じ尾根に属している。
 - 6区 本線上のB地区的北に接する地区である。1区と同様にかなりの遺構、遺物の出土が期待されていた。
 - 7区 本線上のB地区的東端の部分に接する極めて幅の狭い地区である。B地区と同じ尾根に属しているが、東側は谷に面している。
 - 8区 1区と5区が属する尾根と、3区の属する尾根とにはさまれた谷の部分である。比較的傾斜が緩く、泥炭層の形成が予想されていた。
 - 9区 1区と5区を結ぶ道路の範囲である。
- 原則として、表土は重機の使用により取り除くこととした。遺構確認面直上より、人力によ

って精査を行ない遺構の検出につとめる。グリッドは $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ で設定した。

出土遺物の記録・取り上げは次のような手順で行なうこととした。

- 表土除去から遺構確認までは一括遺物を除いてグリッド単位で取り上げる。
- 遺構確認後はセクションベルトを設定し、それ以外の部分を床面まで掘り下げる。その際に完形あるいは完形に近い土器や石器は残し、遺構全体における遺物出土状態を記録して取り上げる。それ以外の細片は遺構覆土出土として取り上げる。
- セクションベルトの土層を記録後に、ベルトも上記と同様に掘り下げ遺物の記録を行なう。

2. 調査の経過

発掘地区が9地区あるため、調査体制と調査可能地区とを考え合わせながら、発掘調査を行なった。原則的には、1区→2区→3区→6区→5区→7区→4区→8区→9区と調査を進行していったが、時には調査団を3班にも分けて3地区の調査を同時に進行させたこともあった。各地区的調査期間を示す。

- 1区 昭和59年6月15日～昭和59年7月12日
- 2区 昭和59年7月9日～昭和59年8月7日
- 3区 昭和59年7月25日～昭和59年8月23日、昭和59年11月15日～昭和59年11月29日
- 4区 昭和59年10月2日～昭和59年11月28日
- 5区 昭和59年8月9日～昭和59年9月13日、昭和59年12月6日～昭和59年12月20日
- 6区 昭和59年8月8日～昭和59年10月5日
- 7区 昭和59年10月1日～昭和59年10月3日
- 8区 昭和59年10月30日～昭和59年12月6日
- 9区 昭和59年12月6日～昭和59年12月8日

上記の様に一部の調査区は冬季にまで調査期間がおよび、標高700mを越す当地域では、土の凍結、霜、積雪などに悩まされた。発掘調査は昭和59年12月20日で終了し、以後図面と出土遺物の整理などの残務整理を昭和60年3月9日まで行ない、同年3月11日に現地から撤収した。

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

柳坪遺跡は山梨県北巨摩郡長坂町大八田字秋田に所在する。ハケ岳の広大な裾野は幾本もの河川によって数多くの尾根が形成されており、それらの尾根上に縄文時代から平安時代にかけての遺跡が数多く存在している。

縄文時代は、ハケ岳西麓の長野県富士見町井戸尻遺跡群に代表されるような、縄文時代中期文化の代表的な地域とまで考えられてきた。しかし、最近の調査では、中期のみではなく、前期や後期、晚期の数多くの集落遺跡が確認されつつある。また平安時代にも『和名類聚抄』に記載された「速見郷」の所在地とも推定される地域であり、やはり同時期の数多くの集落遺跡が発掘されている。

第1図に示した遺跡は以下の通りである。

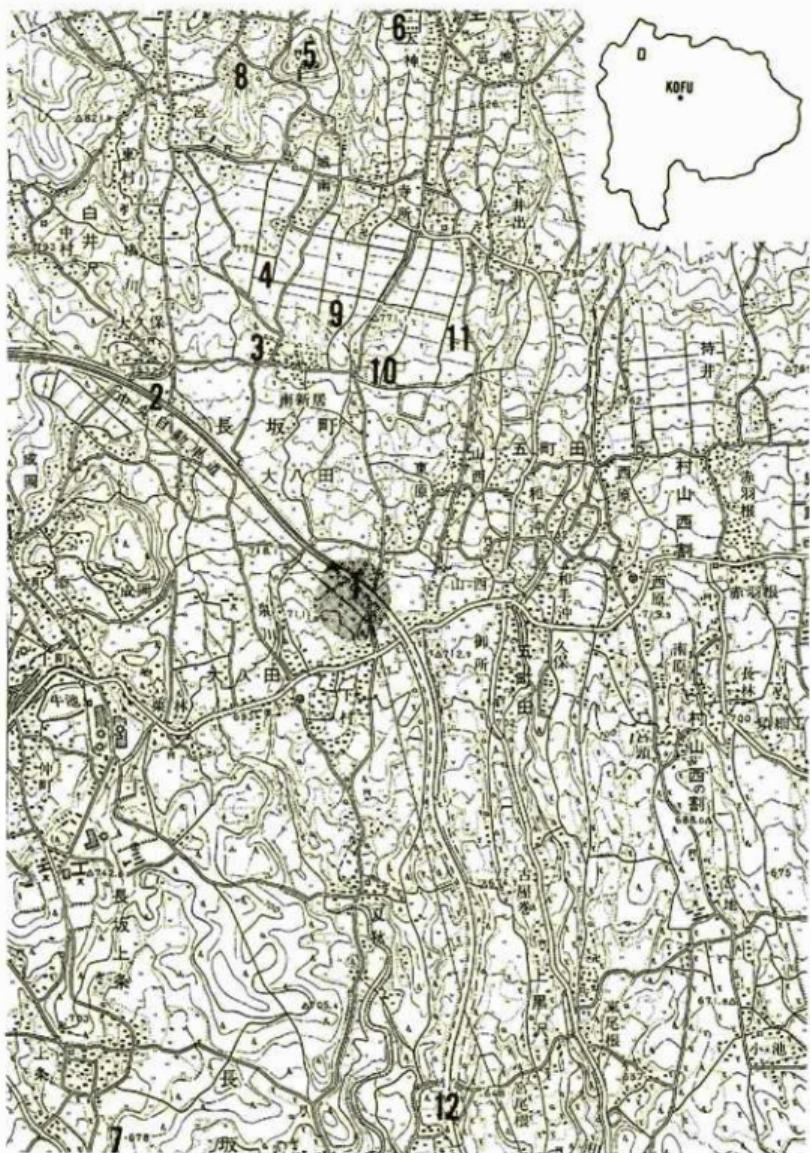
1. 柳坪遺跡（縄文時代中期・後期・晚期、弥生時代中期・後期、古墳時代、平安時代）
2. 小和田遺跡（縄文時代中期、平安時代、中世）
3. 深草館跡（中世）
4. 金生遺跡（縄文時代前期・中期・後期・晚期、平安時代、中世）
5. 谷戸城址（中世）
6. 天神遺跡（縄文時代前期・中期、平安時代）
7. 長閑屋遺跡（中世）
8. 御所遺跡（縄文時代前期、中世）
9. 寺所遺跡（縄文時代前期・中期、平安時代）
10. 木ノ下・大坪遺跡（縄文時代前期、平安時代）
11. 原田遺跡（平安時代）
12. 頭無遺跡（縄文時代中期、古墳時代）

最も新しい事例として、2の小和田遺跡（岡本、1984・1985）に代表されるような中世の館跡やそれに付随する遺構・遺物が、周辺の発掘調査により徐々に類例が増加しつつあり注目されてきている。

第2節 遺跡周辺の地形と地質

1. 概要

柳坪遺跡はハケ岳南麓の緩斜面に位置している。北方には赤岳（2,899m）、阿弥陀岳（2,807m）、権現岳（2,786m）等のハケ岳火山列が存在する。この南麓斜面はハケ岳火山の噴出物や岩屑によって構成されており、南東への延長方向には、多数の流れ山を有する垂崎岩屑流（三村ほか、1982）からなる比高130～140mの垂崎台地が存在する。大泉村から長坂町にかけては、



第1図 遺跡位置図

流れ山の高まりが南北方向に帯状に分布している。これを覆って火山扇状地性堆積物の弘法坂疊層（郷原、1967）が広範囲に分布し、南麓斜面を形成する。さらにその上位には下部ローム層、それを不整合に覆って、御岳第1軽石層（Pm-I：小林ほか、1967）を下部に挟在する中部ローム層および上部ローム層が堆積する（甲府盆地第四紀研究グループ、1969）。

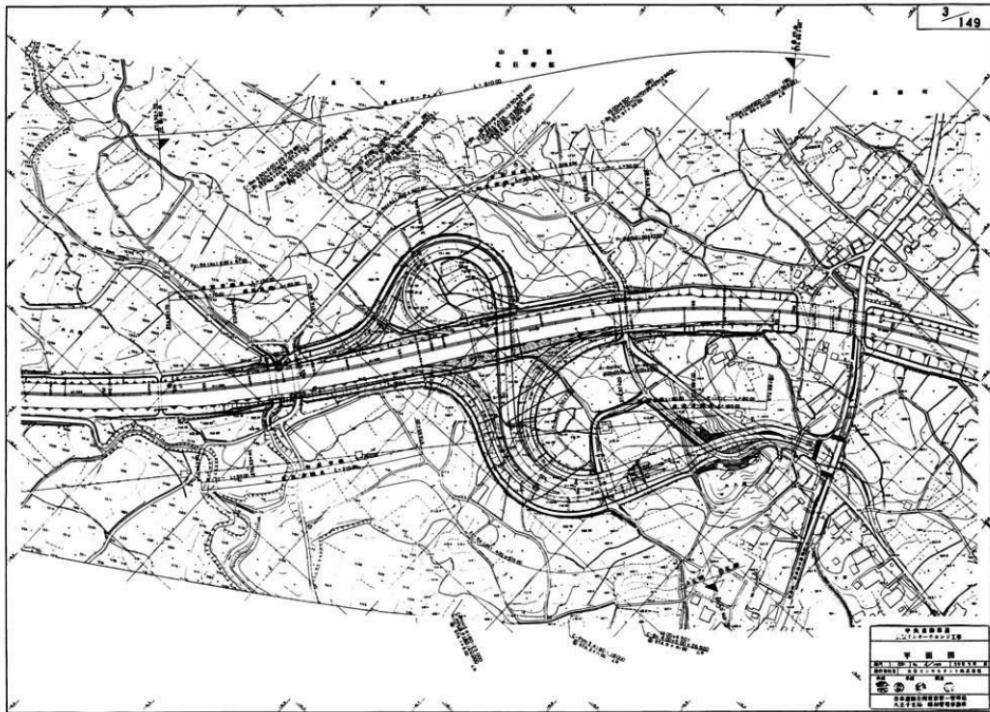
八ヶ岳南麓斜面の南西端には釜無川が、東端には須玉川・塩川が流れている。大泉村から長坂町にかけての流れ山の分布を境として、東半部の鳩川・泉川・甲川・油川・西川等は須玉川に注ぎ込み、西半部の小河川は釜無川に流入する。これらの水系は枝状に広がりを見せる。上流域では浅いが、本遺跡付近より南側の下流域では、谷底にPm-Iを堆積させる古い南北に走る谷地形が発達し、現在の河川は台地縁辺部で深く下刻し、須玉川に流入している。

2. 遺跡の微地形について

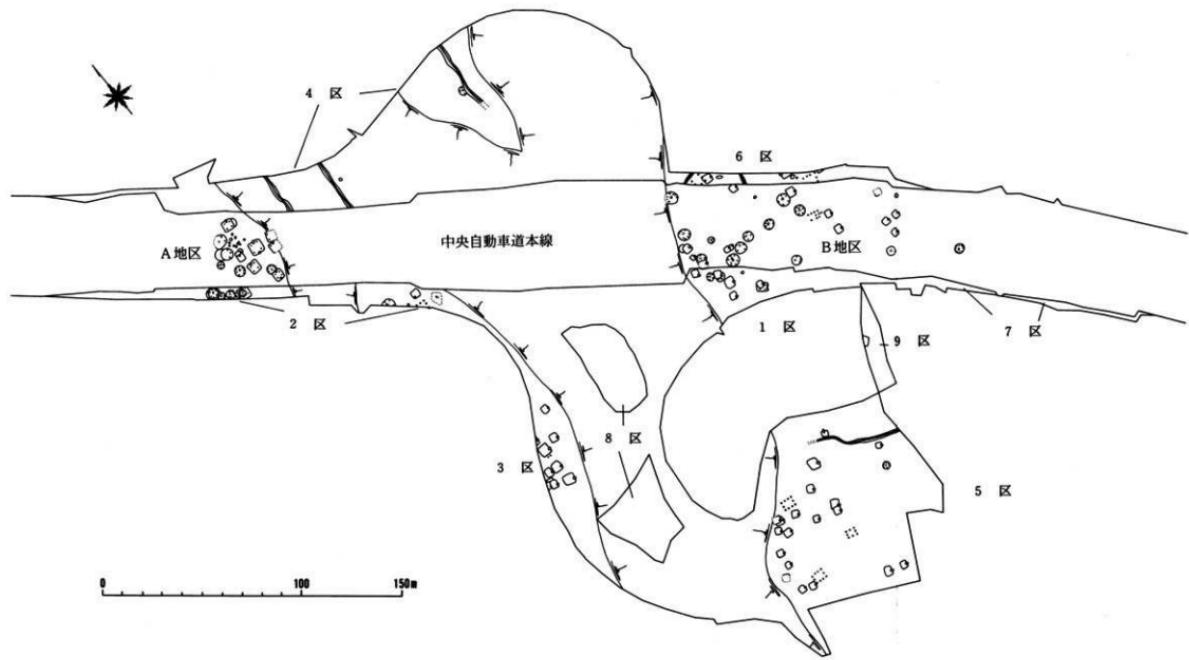
遺跡南東には標高718.5mの残丘が存在する。遺跡西側を流れる泉川は、本線A地区およびインター2区を通過し、一旦西進した後、再び南進し鳩川に合流する。本遺跡中央には南北方向に走る小規模な2つの谷が存在し、インター4区の南で合流し、南進して最終的には鳩川に合流する。遺跡付近における谷の勾配は2/100～4/100程度である。小谷の両側斜面は極めて緩やかで、谷筋に向かって傾斜する。谷底は浅く平坦で、現在は水田として利用されている。インター8区から4区東部に至る谷底は、更に北方に連続し、水路は西側の崖線沿いに流れる。この谷底の休耕田にはヨシが繁茂する。インター8区から4区西部に続く小谷では浅く平坦な谷地形の発達がみられない。谷の両側の台地部分（インター1区と3区）には、縄文時代から平安時代までの住居址が下部ローム層を掘り込んで存在している。

5区東の残丘の断面では、安山岩の巨礫からなる岩屑流堆積物の上に弘法坂疊層、下部ローム層、それを不整合にPm-I以上の中部・上部ローム層が観察される。

弘法坂疊層は、層厚約5m、礫は拳大から人頭大、やや角ばるものからやや丸いもの、分級は不良で、基質は褐色風化火山灰質砂である。その上位に細礫混じりの褐色風化火山灰層（下部ローム層）が漸移的に重なる。弘法坂疊層・下部ローム層とも残丘から谷の方向へと現地形に調和的に傾斜して分布する。谷部の下部ローム層中には細礫～中礫層が挟在している。Pm-I以上の風化火山灰層は、層厚約3m、残丘上に分布しているだけで、発掘調査範囲内では検出されていない。



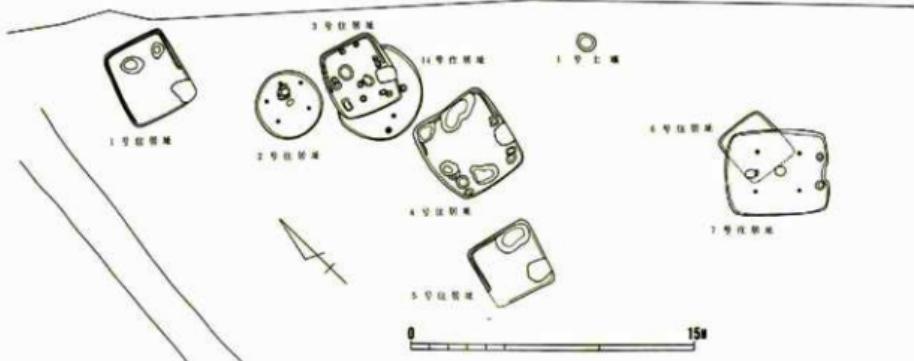
第2図 循環道路地形図



第3図 柳坪道路全体図

第3章 遺構と遺物

第1節 1区の遺構と遺物



第4図 柳坪遺跡1区全体図

1. 1号住居址 (第5~7図、図版3・27)

(形状・規模) 圓丸方形プランを呈し、規模は東西370cm、南北400cmである。

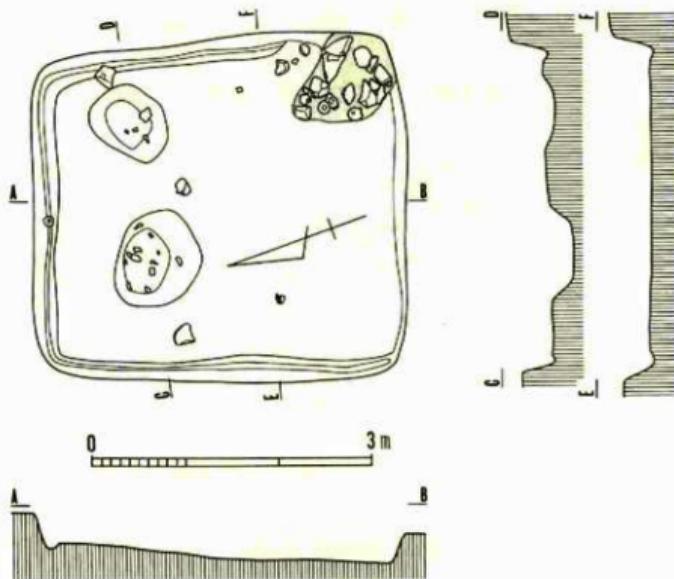
(カマド) 南東コーナーに石組カマドが設立されている。両袖石が比較的良好な姿をとどめており、内側に向かって多少傾斜している。焼土は検出されていないが、埋土の黒褐色粘質土に焼土が混入している。カマドの掘り込みは、東西83cm、南北130cm。

(床面・壁) 少多少凹凸をもち、北側は南側より20cmほど、西側は東側より10cmほどくなっている。周溝は南側及びカマドの部分を除いて認められ、幅7~15cmで、深さは2~7cmほどである。壁は周溝から立ち上がり、壁高は東壁約40cm、西壁約35cm、南壁約45cm、北壁約25cmである。

(その他の施設) 住居址北東コーナーのそばに90cm×70cm、深さ30cmのピットがあり、さらに住居址中央部西北に117cm×87cm、深さ40cmのピットがある。柱穴とは断定できない。

(出土遺物) 土師器の壺と杯、灰釉陶器片が出土している。全て平安時代のものである。

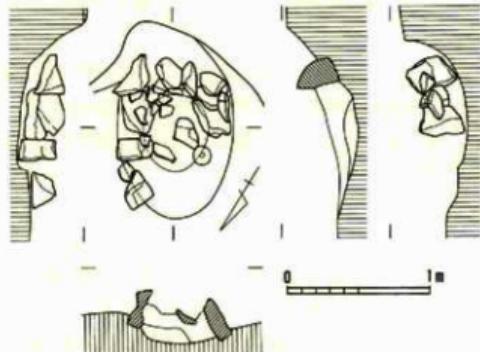
○壺形土器 1はカマド内より出土した。胎土には多量の砂を含み、色調は内外面共に茶褐色を呈している。調整は刷毛調整であり、焼成は良好である。口径28cm、残存高23cmを計る。2もカマド内より出土している。胎土はやはり砂粒が多く、内外面共茶褐色を呈する。内外面刷毛調整であり焼成は良好である。口径23.6cm、残存高6cm。3もカマド内出土の土器である。胎土には砂を多く含み、色調は内外面共に赤っぽい黄褐色を呈する。ヨコナデ後に若干のヘラ削りを行なっている。焼成は良好。口径22cm、残存高10cm。4もカマド内出土。胎土は粗く、表面は茶褐色、内面は暗褐色を呈する。内外面共に刷毛調整であり、焼成は良好である。口径



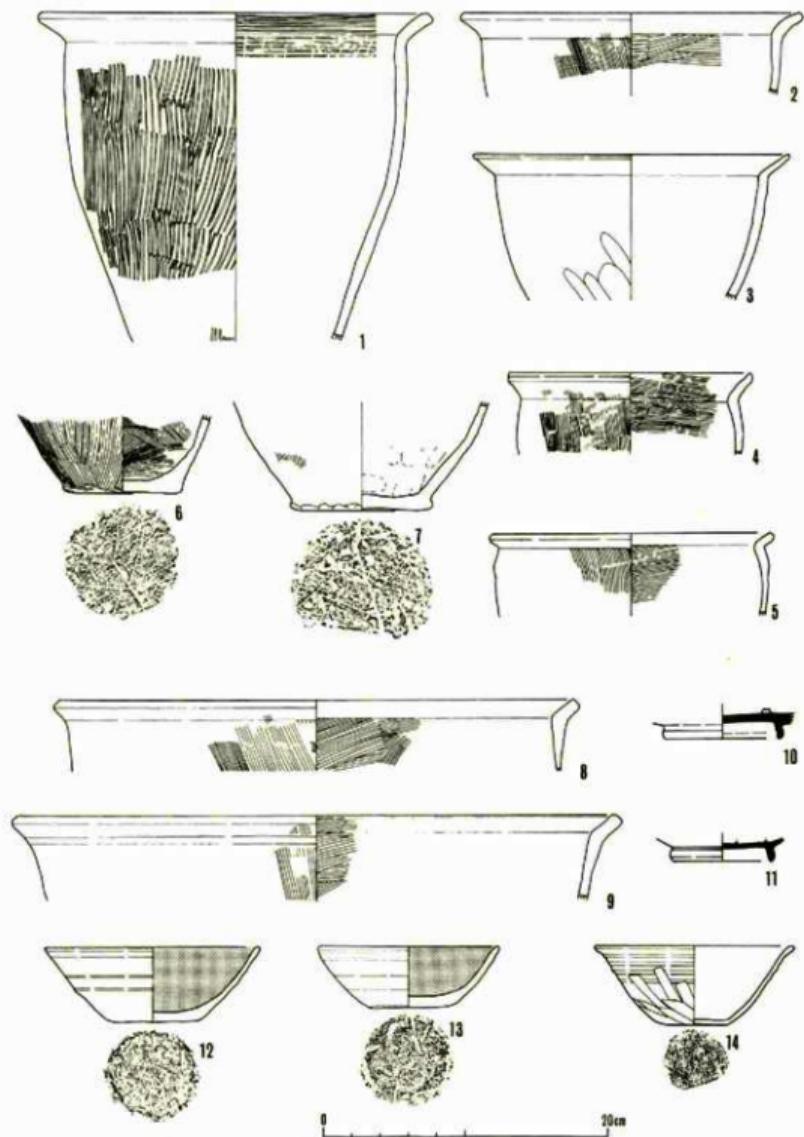
第5図 1号住居址平面図

は16.8cm、残存高5.7cm。5は内外面共に茶褐色を呈する。胎土には砂を多く含み、表面も内面も刷毛調整が施されている。焼成は良好で、口径19.6cm、残存高5.7cm。6と7は共にカマド内出土の底部であり、木葉痕を有する。6は茶褐色を呈し、刷毛調整。7も茶褐色を呈し、表面に若干の刷毛目痕が残っており、内面は指頭痕が残る。8はカマド内出土の小片である。色調は暗褐色。9も小片であり、色調は茶褐色を呈する。

○杯形土器 12は内面黒色を呈する。表面は茶褐色で、胎土はきめが細かく焼成も良好である。口径15cm、底径6.2cm、器高5.4cmを計る。表面はナデ調整が行なわれており、底部は糸切り。13も内面黒色土器であり、表面は黄褐色を呈する。胎土はやや粗いものの焼成は良好である。表面はナデ調整で底部は糸切り。口径14.5cm、底径5.7cm、器高4.3cm。14は内外面茶褐色を呈し、胎土はやや粗い、表面はナデの後にヘラ削りが施されている。底部も糸切り後にヘラ削りが為されている。焼成は良好であり、口



第6図 1号住居址カマド平面図



第7図 1号住居址出土土器

径14cm、底径4cm、器高5.6cm。

○灰釉陶器 10と11は底部破片である。共に灰白色を呈する。11の内面にのみ施釉の部分が残っている。10は底径8cm、11は6.8cm。

2. 2号住居址（第8～10図、図版3・28）

（形状・規模） 円形プランを呈し、東西350cm×南北350cmを計る。

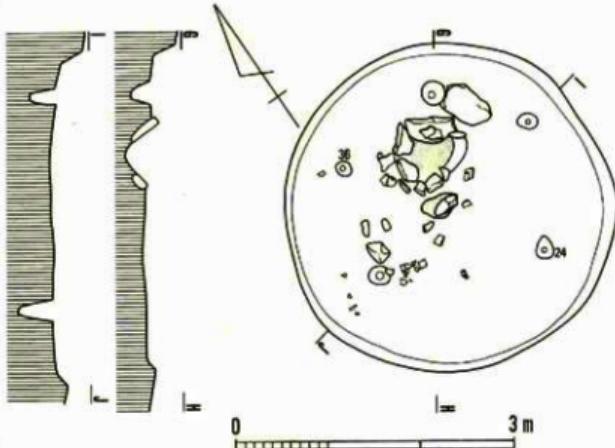
（炉） 住居址中心よりやや北側に石囲い炉がみられる。東側の炉石が抜きとられている以外は残存しており、炉の北側の石がその抜きとられたものと思われる。炉の径は約80cmであり底面には径30cm、厚さ5cmほどの焼土が形成されている。この石囲い炉とは別に、この時期、この地域の住居址に一般的に見られる地床炉が残されている。位置は住居址のはば中心で、焼土の大きさは43cm×25cmほどである。

（床面・壁） ほぼ平坦であるが、北東に17.5cm～30.5cmほど傾斜している。壁は北側で28.5cm、東側で25cm、南側で8cm、西側で15cm。周溝及び埋甃はない。

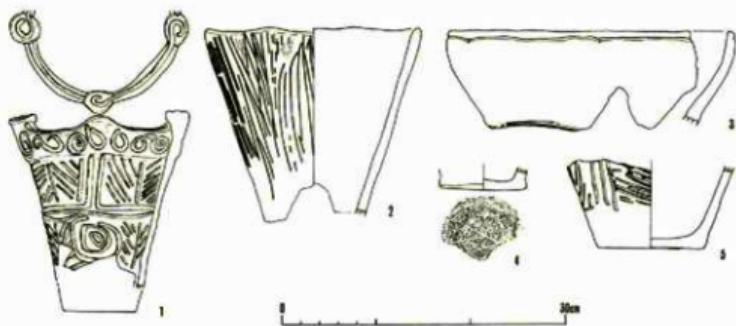
（柱穴） 5本の柱穴が確認された。炉の北側のものをピット1とし、右回りにピット2～5までとすると、ピット1は25cm×20cm～24cm、ピット2は20cm×15cm～30cm、ピット3は20cm×25cm～24cm、ピット4は20cm×20cm～42cm、ピット5は20cm×25cm～30cmである。

（出土遺物） 第9図と第10図が出土遺物である。全て縄文時代中期後半の深鉢形土器とその破片である。第9図1は口径19.5cm、残存高18.6cmを計る。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂粒が極めて多い。焼成は良好。口縁部の突起は4単位で上に渦巻文を沈線で施している。同様に口縁の上部にも一本の沈線を施して突起上の渦巻文と連結させている。口縁部には帯状の粘土紐をめぐらして、円文か渦巻文か区別のつかぬような沈線文様を施して口縁部文様帶としている。体部の文様は上

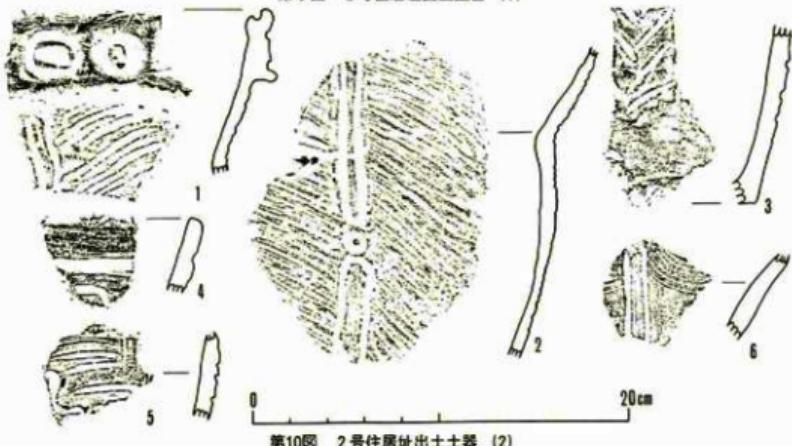
下2つに分けられており、上は直線的モチーフ、下は曲線的モチーフという曾利式土器の中では極く一般的に存在する型式である。この種の土器は、普通上下の文様の境が、器形上の頸部になることが多いが、この土器には頸部が存在せず、若干新しい様相を示している。なお施文



第8図 2号住居址平面図



第9図 2号住居址出土土器 (1)



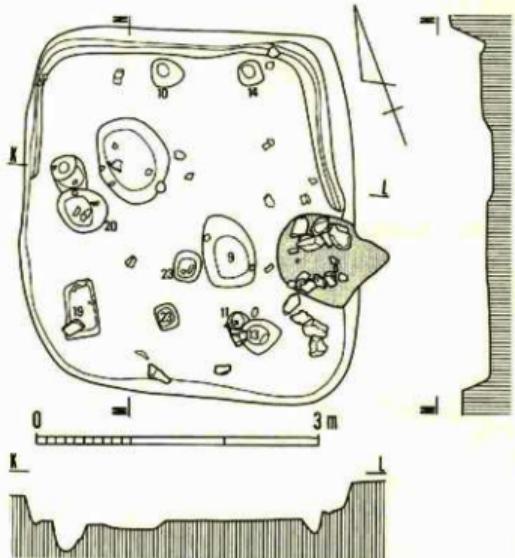
第10図 2号住居址出土土器 (2)

具は単一のヘラ状のものを使用している。第9図2は口径22.6cm、残存高20cmで色調は茶褐色を呈する。胎土は砂粒が多いが、焼成は極めて良好。表面にヘラ状の施文具で粗雑な沈線文を施している。第9図3は深鉢形土器の無文の口頭部である。この型式にはめずらしく口唇部直下に1本の沈線をめぐらしている。頭部にも何本かの沈線が施されているようである。茶褐色を呈し、胎土は粗い。表面はよく磨かれており、焼成も良好である。口径30cmで残存高10.5cm。第9図4は木葉痕を有する深鉢形土器の底部である。底径は8.9cm。茶褐色を呈し、胎土はかなり砂粒を含む。焼成は良好である。第9図5も深鉢形土器の底部である。底径は11cm、残存高9.2cm。表面は黄褐色を呈し、内面は黒っぽく、一部におこげのような炭化物が残っている。胎土は砂粒が多く、焼成は良好。無文部分はよく磨かれている。第10図1は深鉢形土器の口縁部である。装飾は第9図1のものとほとんど変わらないが別個体である。以下第10図4は若干新しい時期のものと思われるが、他は同時期のものと考えてよいと思われる。

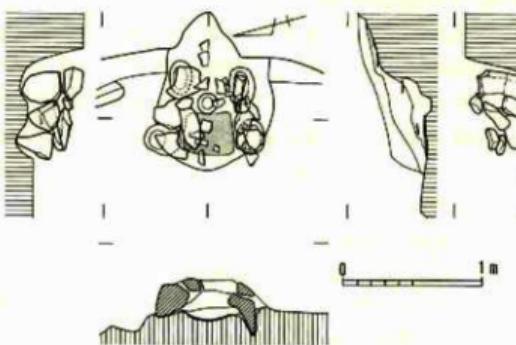
3. 3号住居址（第11～13図、図版3・28）

（形状・規模） 四角形プランを呈し、東西は352cm、南北は392cm。南東側で縄文時代の14号住居址と重複している。

（カマド） 石組みカマドであり、東壁中央よりやや南に設置されている。カマドの掘り込みは煙道も含めて、東西115cm、南北100cmである。袖石は両側ともに良好に残存している。カマド内側には、かなりの土器が散乱していた。焼土も良好に残存しており、カマド中央部に支柱をさしていたと思われる穴が検出された。



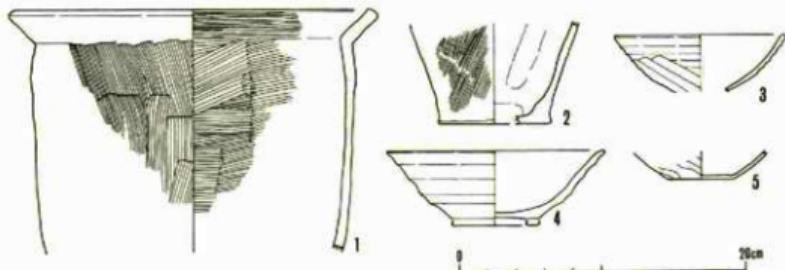
第11図 3号住居址平面図



第12図 3号住居址カマド平面図

（床面・壁） ほぼ平坦な床をもち、東壁中央部南側から南壁及び西壁中央部南側にかけて周溝がある。東壁南の部分と南壁の部分の周溝は壁からわずかに離れている。周溝は幅が3～5cm、深さ2～5cmである。壁の高さは、東壁が約40.5cm、西壁約26cm、南壁約27cm、北壁約42.5cmである。

（その他の施設） 床面から多くのピットが検出されているが、縄文住居との重複関係もあり、その所属の判断が極めてむずかしい。ただ北壁側にある1mの間隔で並ぶ2つのピットなどは、この住居址の上屋を支える上で重要な役割を果たしていた可能性が高い。その他のものについては、積極的に柱穴と断言できるものはなかった。



第13図 3号住居址出土土器

(出土遺物) 土器の甕と环が出土している。全てカマド内部より出土したものである。

○甕形土器 第13図1は胎土に多量の砂粒を含み、色調は茶褐色を呈する。内外面共に刷毛調整されており、焼成も良好である。口径は25.2cm、残存高17cm。2は甕底部であり、色調は茶褐色を呈し、胎土にはやはり多くの砂粒を含む。外面は刷毛調整、内面は指頭によるナデの痕が見られる。焼成は良好である。底径8cm、残存高7cm。

○杯形土器 第13図3は口径12cm、残存高5cmを計る。胎土は砂を含むものの、きめが細かく焼成も良好である。色調は茶褐色を呈している。外面は横ナデの後にヘラ削りが行なわれており、内面は横ナデ。4は高台杯であるが、貼り付け部分である高台は、剥がれ落ちている。内外面共に茶褐色を呈し、胎土はやや粗い。表面だけ横ナデの痕跡が明瞭に残っている。底部は糸切りであるが、拓本では表現できぬほど不明確である。口径15.4cm、器高4.7cm、底径6cmで焼成は良好である。5は环の底部である。底径4.8cm。底部及び表面はヘラ削りが為されている。外面は暗褐色で内面は茶褐色を呈す。胎土はきめが細かく、焼成も良好である。

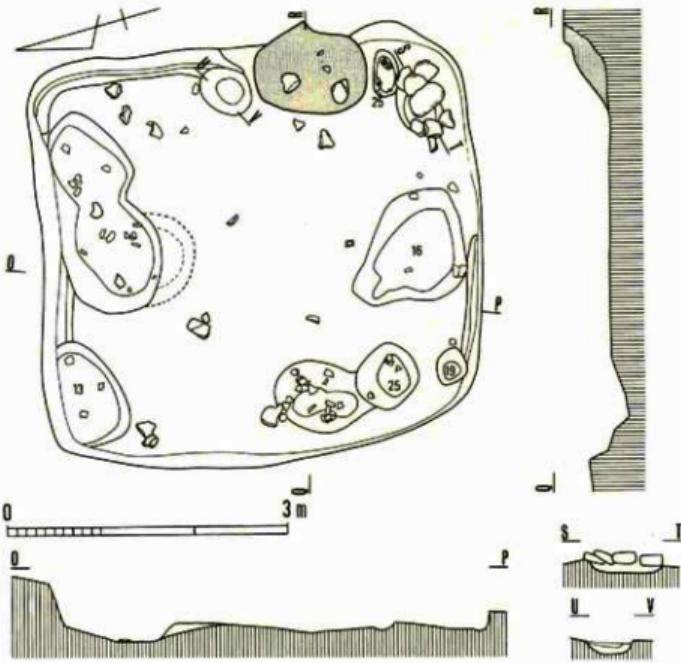
4. 4号住居址(第14~16図、図版4・28)

(形状・規模) 隅丸方形を呈し、東西約450cm、南北472cm。

(カマド) 東壁中央よりやや南に設置されており、掘り込みは、東西107cm、南北115cmである。焼土も良好に残存しており、その範囲は50cm×70cmで厚さも3cmほどであった。カマドの埋土の東側に浮いた焼土も検出されている。全体としては、ほとんど原形をとどめてはいないようである。

(床面・壁) 床面は、ほとんど凹凸がないが、南西方向に低くなっており、40cmほどの高低差が見られる。壁の高さは、東壁約46cm、西壁約34cm、南壁約21cm、北壁約43cmである。周溝は東壁中央北側よりの所から、北壁にかけて存在する。幅は3~12cm、深さ5cmほどである。また南壁側にもわずかに周溝が見られる。幅は3~8cm、深さ7cmほどである。

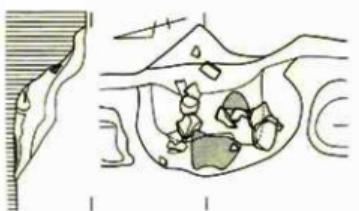
(その他の施設) カマドの南側に平石を数個配した施設が存在する。石の下から浅い皿状のピットが検出されている。その他床面でも壁際の方に、不定形の浅い掘り込みが、いくつも発見されている。一部には上に貼り床の痕跡が見られたが、機能は不明である。



第14図 4号住居址平面図

(出土遺物) 第16図が出土遺物であるが、土師器の壺形土器と杯形土器、須恵器の大甕の破片が出土している。注意すべきは、杯形土器は全て内黒である点であろう。

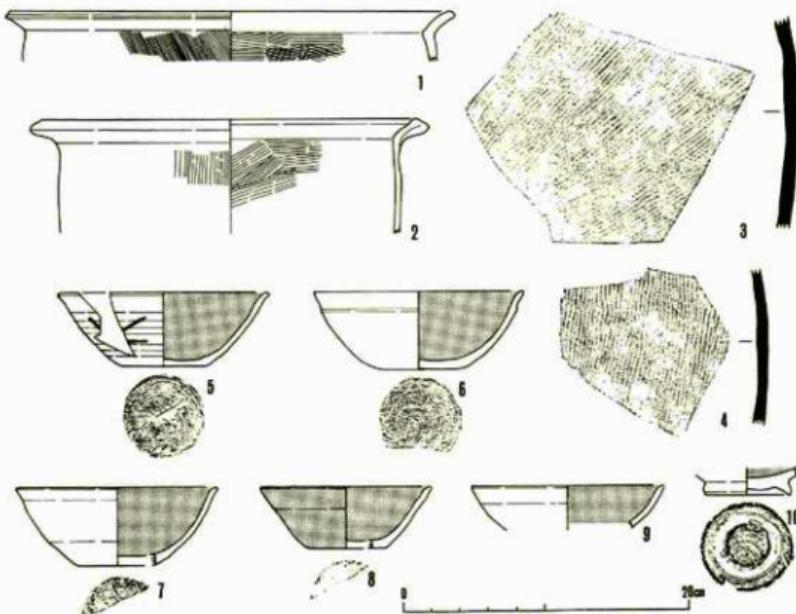
○壺形土器 第16図1は口径31.6cmを計る。茶褐色を呈し、内外面共に刷毛調整されている。



胎土は砂を多く含み、焼成は良好である。2は口径28cm、残存高8cm。やはり茶褐色を呈し、内外面は共に刷毛調整されている。胎土は砂を多く含み、焼成は良好である。口唇は折り返して厚く肥厚させている。

○杯形土器 第16図5は口径14.8cm、器高5cm、底径6cm。表面は茶褐色、内面は黒色を呈する。胎土はやや粗めで砂粒を若干含む。焼成は良好である。表面は横ナデ調整されており、墨書きで「大」(?)の字が記されている。底部は糸切りである。6は口径14.8cm、器高5.3cm、底径5.8cm。表面は茶褐色、内面は黒色。胎土はきめが細かく、焼成は良好。表

第15図 4号住居址カマド平面図



第16図 4号住居址出土土器

面は横ナデ。口縁に近い所に1本の稜がみられる。底部は糸切りである。7は口径14.2cm、器高5.5cm、底径5.6cm。表面は茶褐色で内面は黒色。胎土はきめが細かく、焼成も良好である。表面は横ナデ、底部は糸切り。8は口径12.2cm、器高4.4cm、底径5.6cm。色調は内外面共に黒色である。胎土は非常にきめが細かく、焼成も良好である。表面は横ナデ、底部は糸切り。9は口径13.4cm、残存高3.2cm。表面は赤褐色、内面は黒色。胎土は密で、焼成も良好である。表面は横ナデ。10は高台杯の底部である。高台は貼り付けであり、底部は糸切り。表面は灰褐色、内面は黒色を呈する。胎土は非常にきめ細かで、焼成は良好。

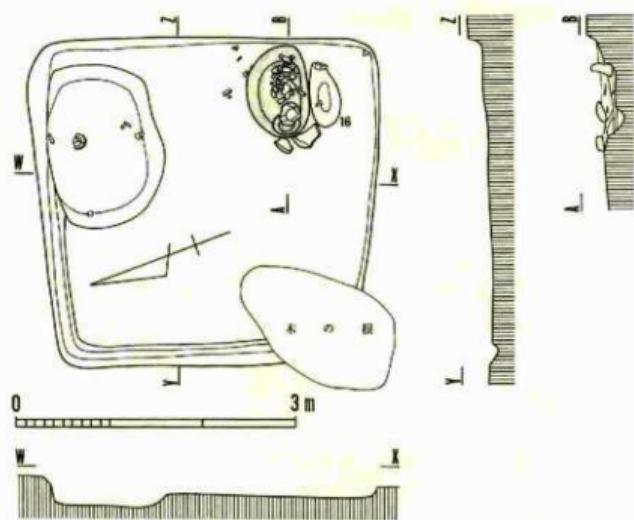
○須恵器 第16図3・4は須恵器の大壺の破片である。表面のみタタキ目が残る。

5. 5号住居址（第17・18図、図版4・29）

（形状・規模） 隅丸方形プランを呈し、東西約348cm、南北375cmの規模である。

（カマド） 東壁の中央よりやや南側にカマドの跡が見られる。おそらく石組みカマドであったろう。焼土がわずかに認められる。大部分が破壊されており、石が3個残るのみであるが、1本は支柱の可能性が高い。掘り込みは100cm×60cmである。

（床面・壁） ほぼ平坦な床面であるが、南西コーナーは木の根による搅乱を受けている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、東壁15cm、西壁5cm、南壁11cm、北壁15cmである。また南壁と東壁を除いて、周溝がみられる。幅は5~10cm、深さは2~6cmである。



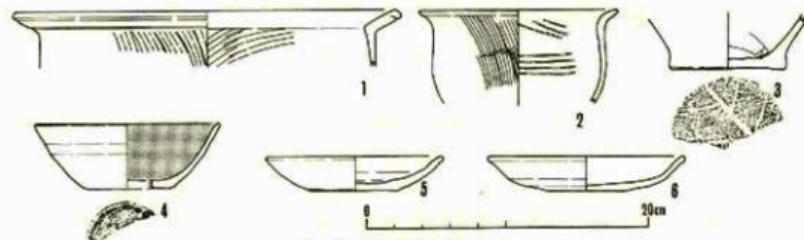
第17図 5号住居址平面図

(その他の施設) 北東コーナーにより、 $65\text{cm} \times 33\text{cm}$ で深さ 15cm ほどの浅い掘り込みがあり、土器を出土している。

(出土遺物) 土師器の壺形土器、环形土器、皿形土器が出土している。

○壺形土器 第18図1は口径 27cm を計り、色調は茶褐色を呈す。胎土には砂を多く含み、焼成は良好。内外面共に刷毛調整されている。2は口径 14cm 、残存高 6.5cm 。色調は黄褐色を呈する。胎土は砂が多く、焼成は良好。内外面共に刷毛調整である。3は壺の底部であり、木葉痕を有する。底径は 8.2cm で色調は茶褐色。胎土はやや粗く、焼成は良好である。

○环形土器 第18図4は、口径 12.8cm 、 4.6cm 、 7.6cm を計る。胎土はきめが細かく、焼成は良好。色調は表面は黄褐色、内面は黒色を呈する。表面は横ナデ、底部は糸切りである。



第18図 5号住居址出土土器

○皿形土器 第18図5は口径12.4cm、器高2.4cm、底径6.5cmを計り、器形に若干のくびれを有する皿である。色調は茶褐色を呈し、胎土はきめが細かく、焼成も良好。内外面共に横ナデ調整されている。6は5よりも明確にくびれを有する皿である。口径13.4cm、器高2.5cm、底径5.2cm。色調は茶褐色を呈し、胎土は密で焼成も良好である。内外面共に横ナデ。

6. 6号住居址（第19・20図、図版4・6）

（形状・規模） 隅丸方形プランを呈する。規模は約250cm×約330cm。弥生時代後期の7号住居址の上に構築されており、住居址の南半分が7号住居址と重複している。

（カマド） 東壁の南側に、若干の焼土粒子と石が散らばっており、おそらくカマドの跡と思われる。

（床面・壁） 全体的に平坦な床面である。7号住居址との重複部分は貼り床されていたが、軟弱な貼り床であった。周溝はない。壁高は、東壁12.5cm、西壁10.5cm、南壁10cm、北壁11cmである。

（その他の施設） その他、ピットなどは検出できなかった。

（出土遺物） 灰釉陶器が1個体出土している。第20図がそれである。環形土器で口径13.4cm、器高4.5cm、底径6.6cmを計る。胎土は緻密であり、焼成も良好である。施袖は刷毛塗りによって行なわれている。

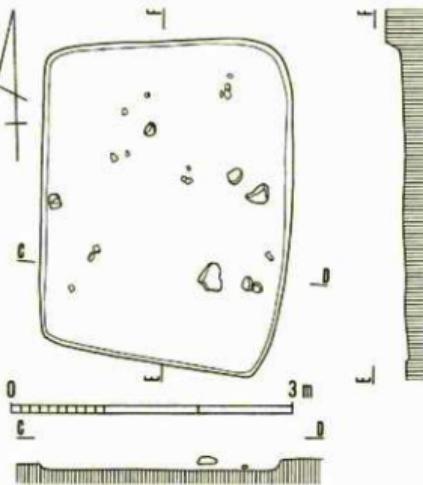
7. 7号住居址（第21～24図、図版5・29）

（形状・規模） 隅丸方形プランを呈する。規模は、東壁が420cm、西壁430cm、南壁525cm、北壁485cmの長さで、かなり大型の住居址である。

（炉） 住居址北側の2本の柱穴の中間に、80cm×60cmで深さ20cmほどの皿状の浅い掘り込みの炉がある。焼土は点々と残るほどしかない。それとは別に、あたかも縄文時代中期後半の住居址と同じように、住居址の中心に地床炉がつくられている。60cm×40cmの範囲にしっかりとした焼土が残っていた。

（床面・壁） 床面は全体に平坦であり、壁は垂直に近い。壁高は5～12cmである。周溝は検出できなかった。

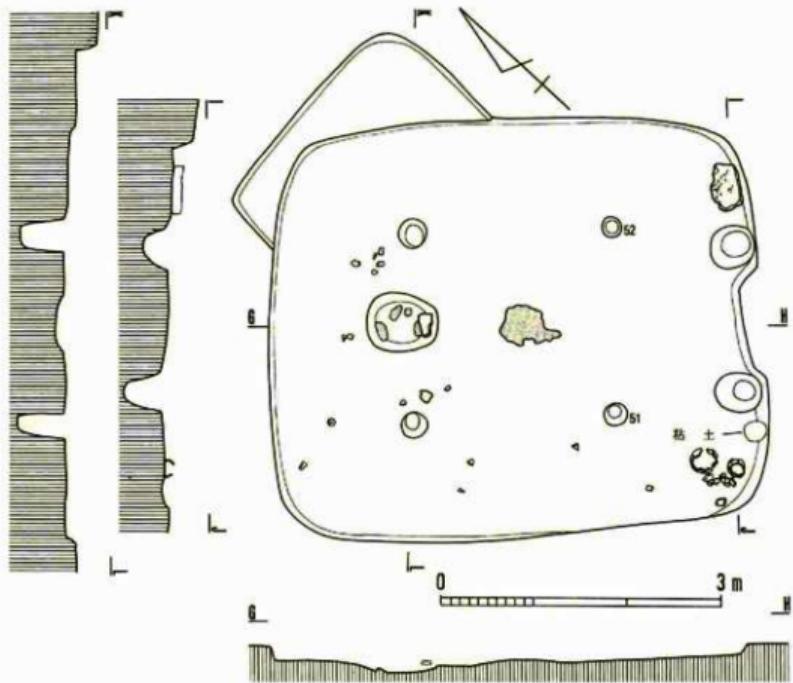
（その他の施設） 主柱穴と思われる4本のピットが、対角線上の対角線の交点と各コーナ



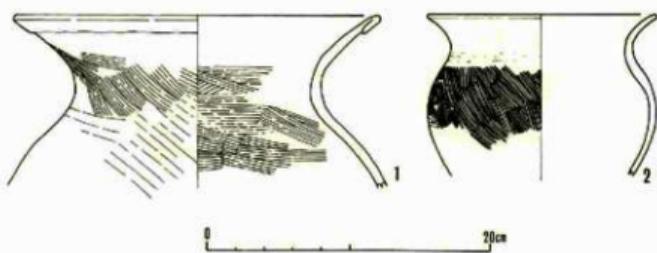
第19図 6号住居址平面図



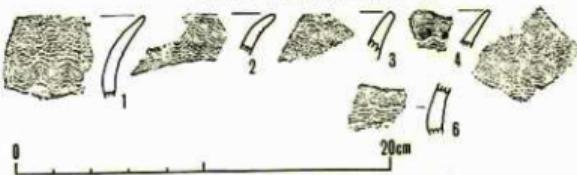
第20図 6号住居址出土土器



第21図 7号住居址平面図



第22図 7号住居址出土土器 (1)



第23図 7号住居址出土土器 (2)

一との中間に掘り込まれている。これら4本の主柱穴は、直径約20~30cm、深さ約40~50cmではほぼ同じ規格である。またこれら4本の柱穴は全て、上面が一部固く貼り床されおり、柱材を立てた後に、材の周囲を踏み固めたものと思わ

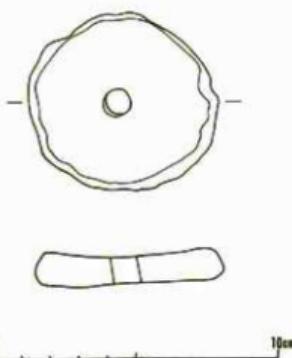
れる。その他、南壁の中央部が住居址内側に張り出しており、その張り出しの両側に、 $50\text{cm} \times 40\text{cm}$ — $40.5\text{cm} \times 50\text{cm}$ — $45\text{cm} \times 30\text{cm}$ の2つのピットが掘り込まれており、明らかに入口部の施設と考えられる。南東コーナーには平石が置かれており、南西コーナーには白色粘土塊と2個体の土器が発見された。

(出土遺物) 弥生時代後期の壺形土器と壺形土器、土製紡錘車が出土している。

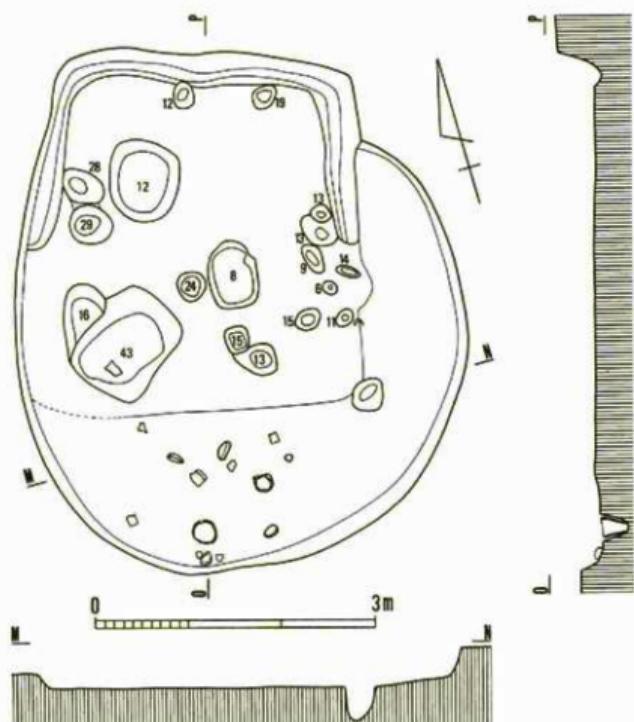
○壺形土器 第22図1は口径 25.8cm 、残存高 12cm で色調は赤褐色を呈する。部分的に黒いスジが付着している。口唇は折り返しで肥厚させており、内外面共に刷毛目調整されている。胎土は砂を含むが、きめが細かい。焼成は良好である。

○壺形土器 第22図2は口径 16cm 、残存高 11.5cm の小型の壺である。胎土は1の土器と変わらず、色調も赤褐色を呈し、やはり黒いスジが付着している。表面は横ナデと刷毛調整。内面はヘラ磨き。焼成は良好である。第23図は櫛描波状文の施された壺の破片である。口唇に刻み目のあるものは見られない。

○土製紡錘車 第24図は扁平な土製紡錘車である。直径 6cm 、厚さ 1cm 、孔の径 9mm を計る。



第24図 7号住居址出土土製紡錘車



第25図 14号住居址平面図

8. 14号住居址（第25～29図、図版5・30・31）

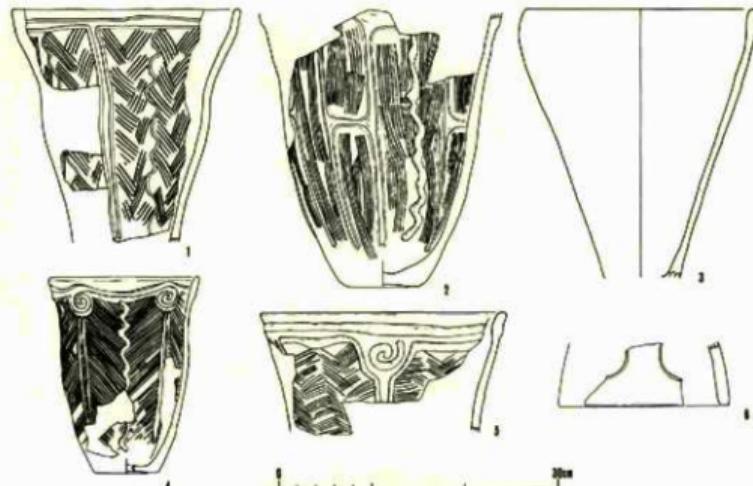
（形状・規模） 3号住居址によって北の半分の部分を破壊されている。おそらく直径が約480cm程の円形プランの住居址になるとと思われる。

（炉） 3号住居址の範囲に含まれていると思われ精査したが、検出されなかった。時期が縄文時代中期末にあたるため、おそらく浅い皿状の掘り込みの炉であったと思われる。

（床面・壁） 床面は東から西へ傾斜しているが、高低差は20cm程である。壁はゆるやかに立ち上がり、壁高は25～40cmの高さである。周溝はない。

（その他の施設） 確実にこの住居址に伴うと思われるピットが東側より1つだけ発見されている。径は30cm×30cmで深さは約40cmである。プランは隅丸方形気味である。その他のピットは3号住居址の床面下を精査したが、確実なものは把えられなかった。また住居址南側の壁際で1つ、それよりやや内側の北東の方向で1つの合計2つの埋甕が検出された。内側の方は上に貼り床されていた。

（出土遺物） 土器と石器が出土している。第26図2と3が埋甕である。3が壁際のもので、2がやや内側で貼り床の下から発見されたものである。2は薄い粘土紐の貼付で、H字状の懸垂文を施し、地文として櫛状の施文具で条線文をつけた深鉢形土器である。口縁部は欠損しており、文様は不明である。H字状の懸垂文の間に、幅広い蛇行の沈線文を施しているが、一部施していない所もある。底径7.8cm、残存高29cm。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂っぽい。焼成は良好である。3は、この時期では極めてめずらしい無文の深鉢形土器である。口径は24cm、残存高28.3cm。色調は明褐色を呈し、内外面共によくヘラ磨きされている。底部の円板の部分だけ欠損しているようである。胎土もきめが細かく、焼成も良好である。第26図1は口径23.8

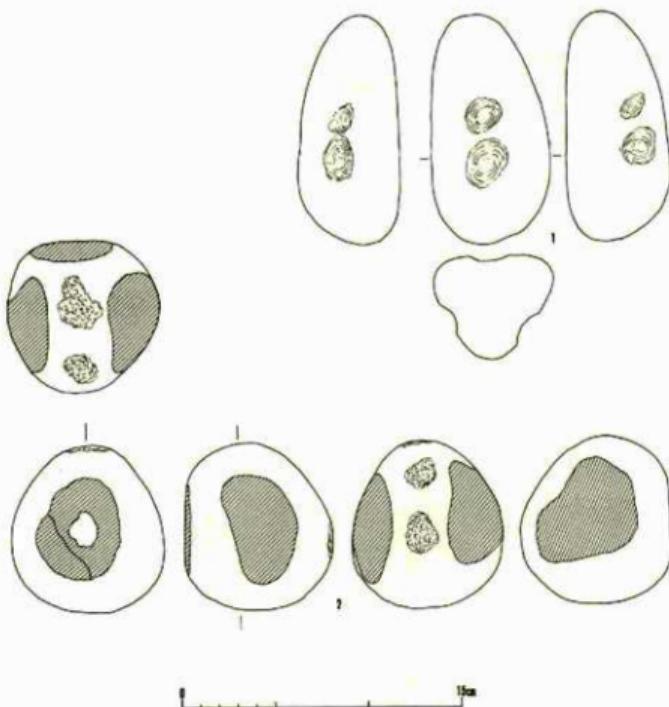


第26図 14号住居址出土土器 (1)



第27図 14号住居址出土土器 (2)

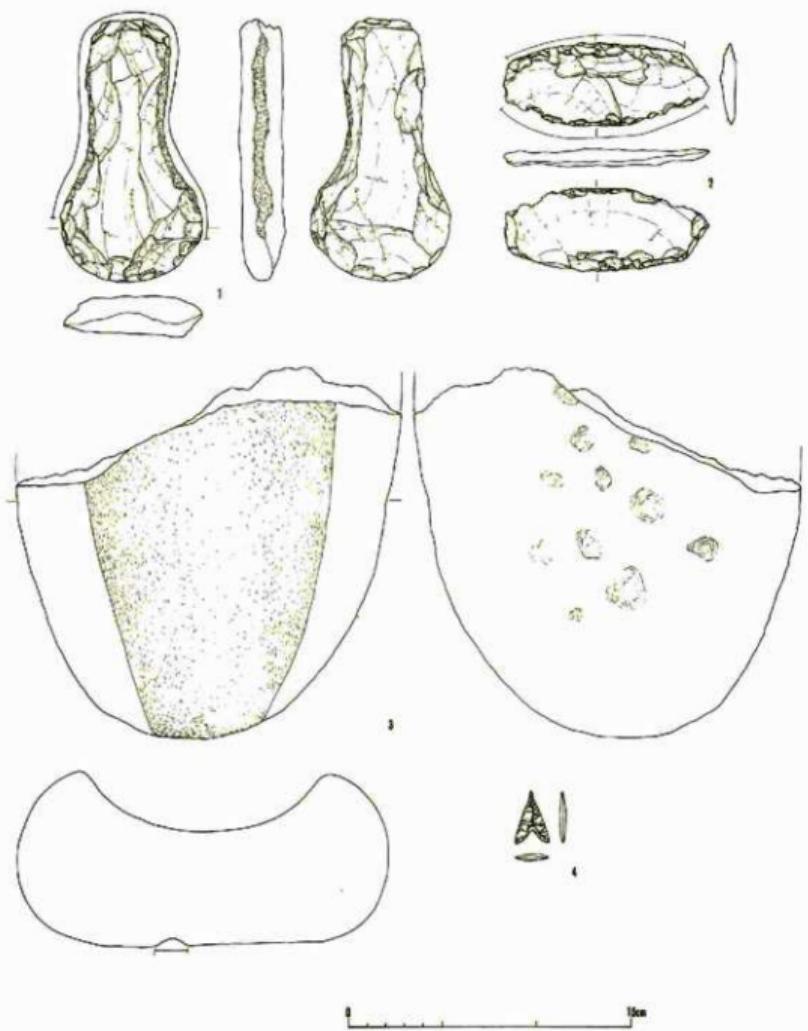
cm、残存高 24.5 cm で黄褐色を呈する。胎土には砂を多く含む。焼成は良好である。文様表現は完全に沈線文化しており、沈線の懸垂文区画後に、櫛状施文具で綾杉状の地文を施し、次に蛇行沈線文を描いている。このことは蛇行沈線文の消失以前に、文様表現の完全な沈線文化が開始



第28図 14号住居址出土石器 (1)

されたことを意味する。4は口径16cm、器高21cm、底径7cmで茶褐色を呈する。口縁部の渦巻文表現のみ隆線で表現されている。体部の文様は全て沈線文である。胎土は密であり、焼成も良好である。5は口縁部文様と懸垂文が隆線で表現された深鉢である。6は器台の破片。第27図も出土土器であるが、一括土器の中には見られなかった地文として繩文をもつものや磨消繩文をもつものなどが見られる(3~5、7~9、11、12、15)。

石器では凹石、敲石、磨石、打製石斧、石皿、石鏃が出土している。第28図1は断面三角形の凹石である。安山岩製で重量は500g。2は敲石と磨石の両方に使用されている。安山岩製で重量は850g。第29図1は砂岩製の打製石斧である。重量は276gあり、両側面に敲打痕が残っている。2は長軸方向の両側面に刃部がつくられている石器である。両側面が刃部という点で、所謂「横刃型石器」とは異なっている。頁岩製で重量は43gである。3は安山岩製の石皿で、約半分近くを欠損している。石皿としての機能とは別に、裏面に多くの凹みがつくられている。表面は非常に良く使い込まれている。重量は3980gである。4はチャート製の石鏃である。重量は1.1g。



9. 1号土塚 (第30・31図)

(形状・規模) 直径 120 cm、深さ 50 cm の円形プランの土塚である。

(床面・壁) 床面は平坦であり、壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。

(出土遺物) 第31図に示す土器片が1片のみ出土している。原体 L R の縄文が施文されている。縄文時代中期末～後期初頭のものと思われる。

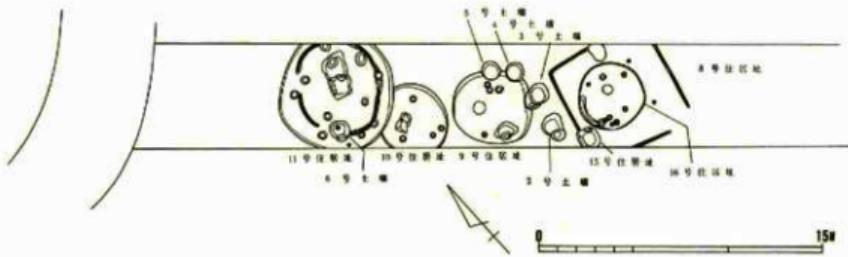


第30図 1号土壙平面図

第31図 1号土壙出土土器

以上が1区で確認された遺構と遺物である。当初は、更に東側の方にも遺構が広がっているのではないかと思われたが、何1つその痕跡さえも確認できなかった。昭和48年の本線の調査では、かなり東側まで遺構が広がっていたのであるが、今回の調査地区では耕作土を除くと、ハードロームがすぐ表われてしまった。

第2節 2区の遺構と遺物



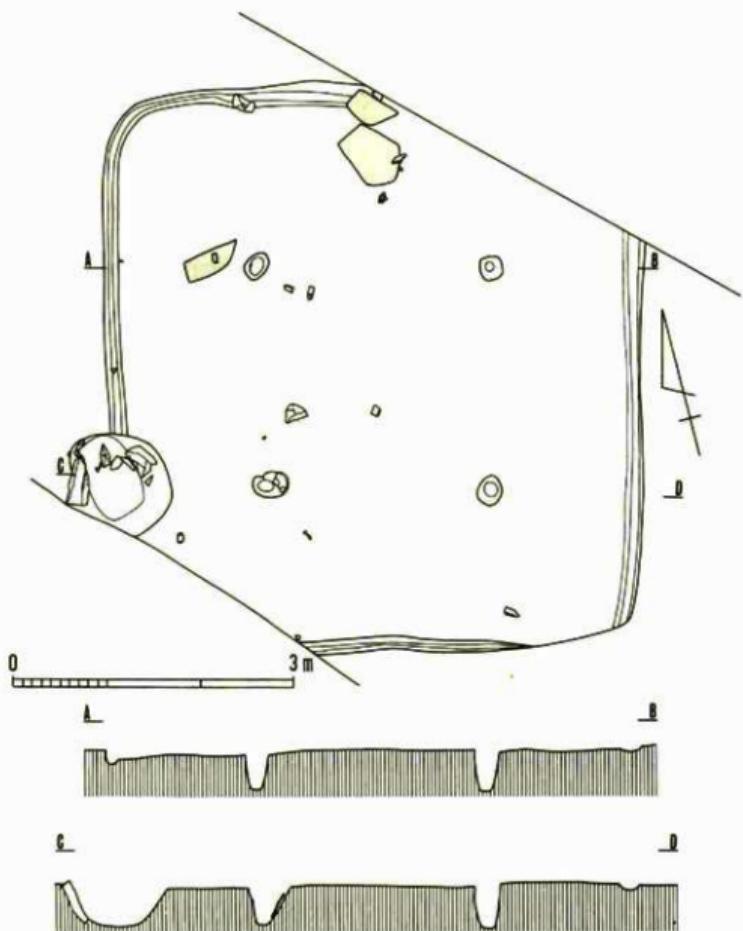
第32図 柳坪遺跡2区西全体図

1. 8号住居址 (第33・34図、図版6・29)

(形状・規模) 方形プランを呈し、東西560cm、南北600cmの規模である。一部北東コーナーと南西コーナーが調査区域外のため未掘。また南西コーナーの所で縄文期の15号住居址の炉址が露出している。

(カマド) 北壁のほぼ中央で、壁に接して硬くしまった焼土が100cm×50cmの範囲で発見されている。カマドの跡だと思われる。また北西ピットの西側にも、わずかに焼土が確認されているが、炉とは言い難い。

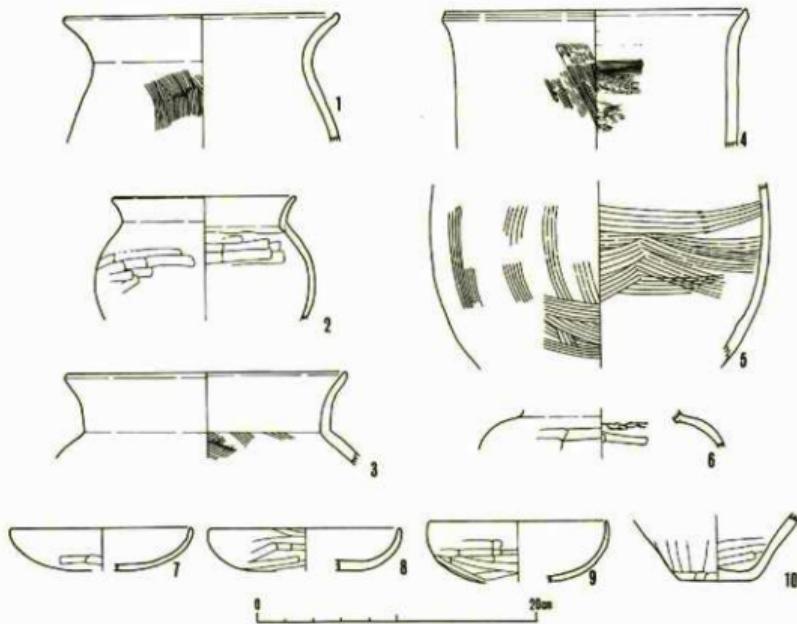
(床面・壁) 床面はほぼ平坦であるが、北と南で、南の方が10cmほど低くなっている。また東と西では西の方が10cmほど低くなっている。もともと周溝が1周していたと思われるが、上部の搅乱によって、南東コーナーの部分で削られている。幅は10~15cm、深さ5~10cm。壁は周溝から直接立ち上がっていたと思われるが、西壁で10cmほどの高さがある以外に、削られていて床面との高低差がない。



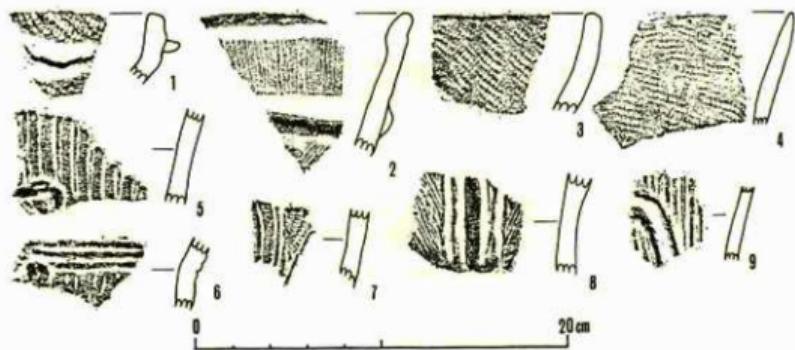
第33図 8号・15号住居址平面図

(その他の施設) 主柱穴が4本確認されている。対角線上で、対角線の交点と各コーナーとの間に、それぞれ掘り込まれている。北西の柱穴は $30\text{cm} \times 30\text{cm} - 42\text{cm}$ 、北東の柱穴は $25\text{cm} \times 30\text{cm} - 46\text{cm}$ 、南東の柱穴は $25\text{cm} \times 25\text{cm} - 45\text{cm}$ 、南西の柱穴は $25\text{cm} \times 25\text{cm} - 38\text{cm}$ であり、南北の柱穴は、この8号住居址の下面にある縄文期の住居址の埋甃を破壊していた。

(出土遺物) 第34図が出土遺物で、全て古墳時代後期のものである。土師器の壺形土器と环形土器を出土している。1は口径19cm、茶褐色を呈し胎土はやや粗い。焼成は良好である。表面はナデと刷毛調整、内面はナデ。2は口径12.8cmで残存高9.5cm。内外面共にヘラ削り。

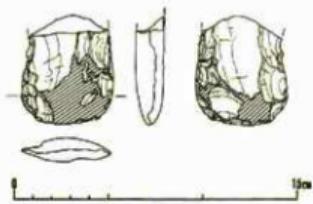


第34図 8号住居址出土土器



第35図 15号住居址出土土器

色調は暗褐色で胎土は砂っぽく、焼成は良好。3は口径20cm、胎土は密であり色調は灰褐色。内面のみ刷毛調整の跡がみられる。4は口径21.6cm、残存高9.5cmで、胎土・焼成は3と変わらない。色調も灰褐色。内外面共に刷毛調整。5は甕の体部であり、内外面共に刷毛調整。表面は茶褐色、内面は黒色を呈する。5は内面の頸部に指頭痕が残っており、その他の部分はへ



第36図 15号住居址出土石器

ラ削り。7~9は杯形土器であり、3個体共に、表面ヘラ削り、内面ヘラ磨きされており、茶褐色を呈し胎土は密で焼成も良好である。

2. 15号住居址（第33・35・36図、図版8・39）

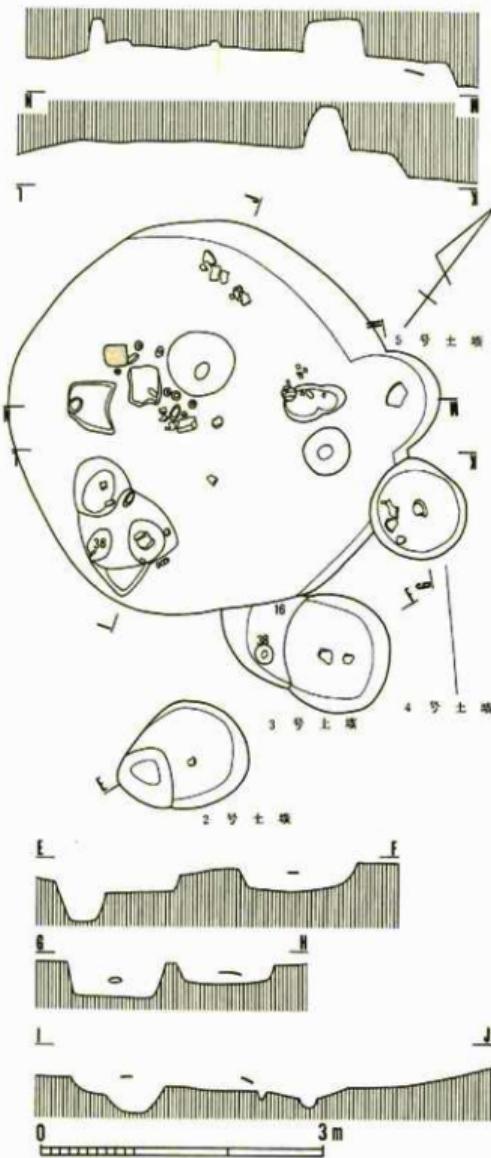
8号住居址の南西コーナーのところに炉址だけ発見された。第35図が出土土器であり、第36図が出土石器である。炉址は石囲い炉であったと思われるが、一部の石しか残っていない。径は110cmで深さ45cm、焼土はない。出土土器は全て縄文時代中期後半のものである。石器は頁岩製の局部磨製石斧であり、重量は56gである。

3. 9号住居址（第37~39図、図版6・32）

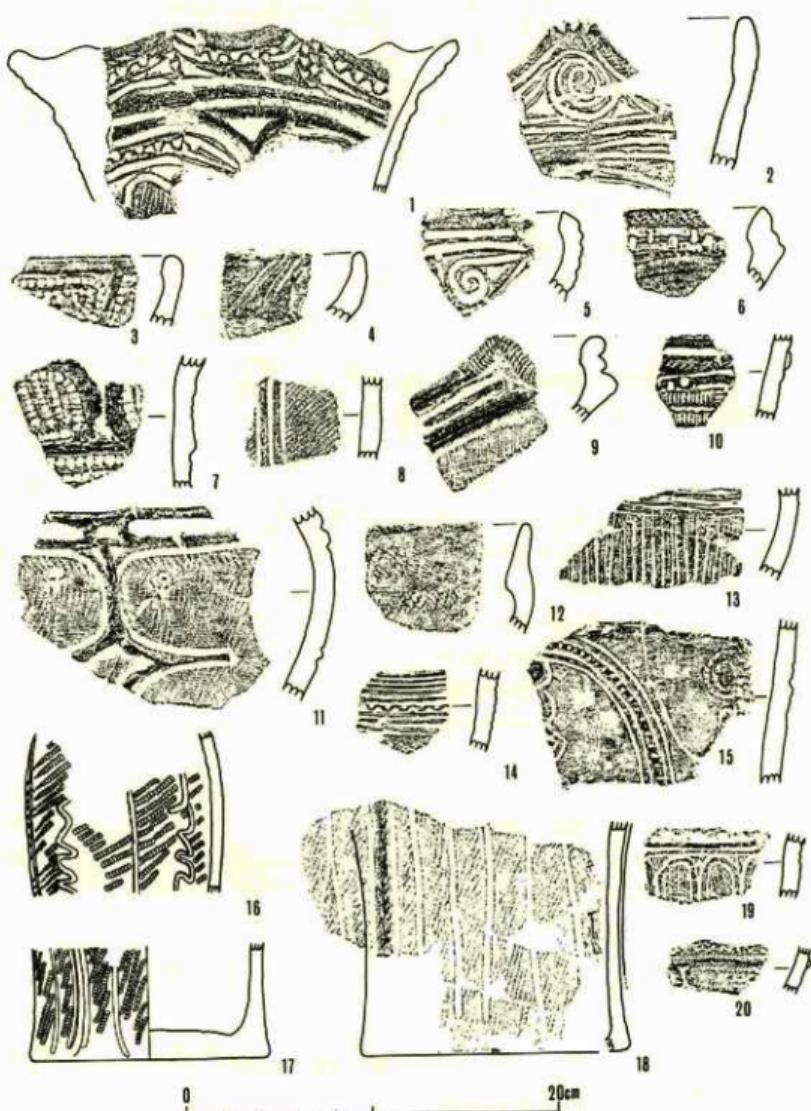
（形状・規模） 円形プランを呈し、直径は約410cm。

（炉） 明確な炉は確認できなかったが、住居址中心より西のところに30cm×20cmの範囲で焼土を確認できた。おそらく炉址であろうが、この時期の住居址では埋甕炉が一般的であり、不明な点も多い。

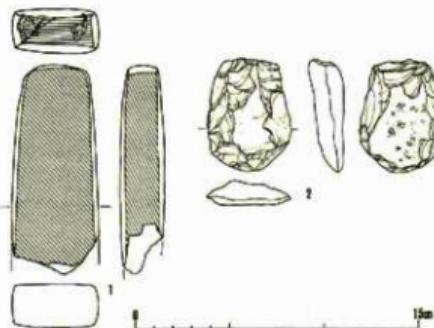
（床面・壁） 北西に向かって、



第37図 9号住居址平面図



第38図 9号住居址出土土器



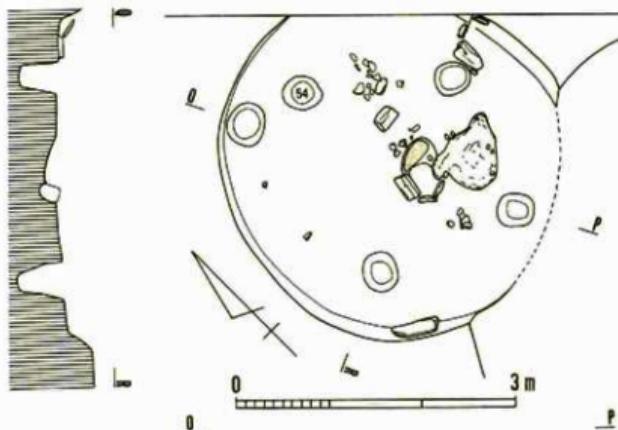
第39図 9号住居址出土石器

岩製の磨製石斧で刃部は欠損している。重量は238 g。2は頁岩製の打製石斧であるが、欠損している様子はない。片面は火を受けているようで、赤黒色を呈する。

30cmほど傾斜している。壁は南側では削られており、ほとんど存在しない。北側の壁は緩く傾斜し、壁高は4~20cm程である。床面は凹凸がはげしい。

(その他の施設) 床面には大小数多くのピットが掘られており、明確に柱穴と言えるものは極めて少ない。

(出土遺物) 第38図が出土遺物であり、全て縄文時代中期初頭の土器群である。縄文を多用するものが圧倒的に多いようである。第39図は出土石器で1は輝



第40図 10号住居址平面図

4. 10号住居址 (第40~43図、図版7・32)

(形状・規模)
円形プランを呈し、直径は約360 cm。
北側で11号住居址
に一部切られている。

(炉) 住居址
中心より北西より
に石囲い炉がある。
一部自然の巨石を
炉石として使用し
ている。焼土も残
りが良い。



第41図 10号住居址出土土器 (1)

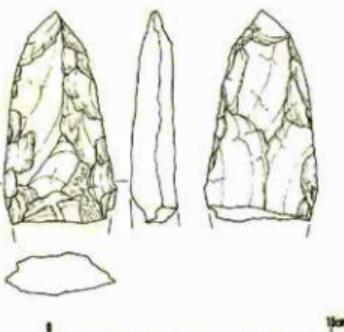


第42図 10号住居址出土土器 (2)

(床面・壁) 床面はほぼ水平であり、壁高は10~25cmほどである。周溝はない。

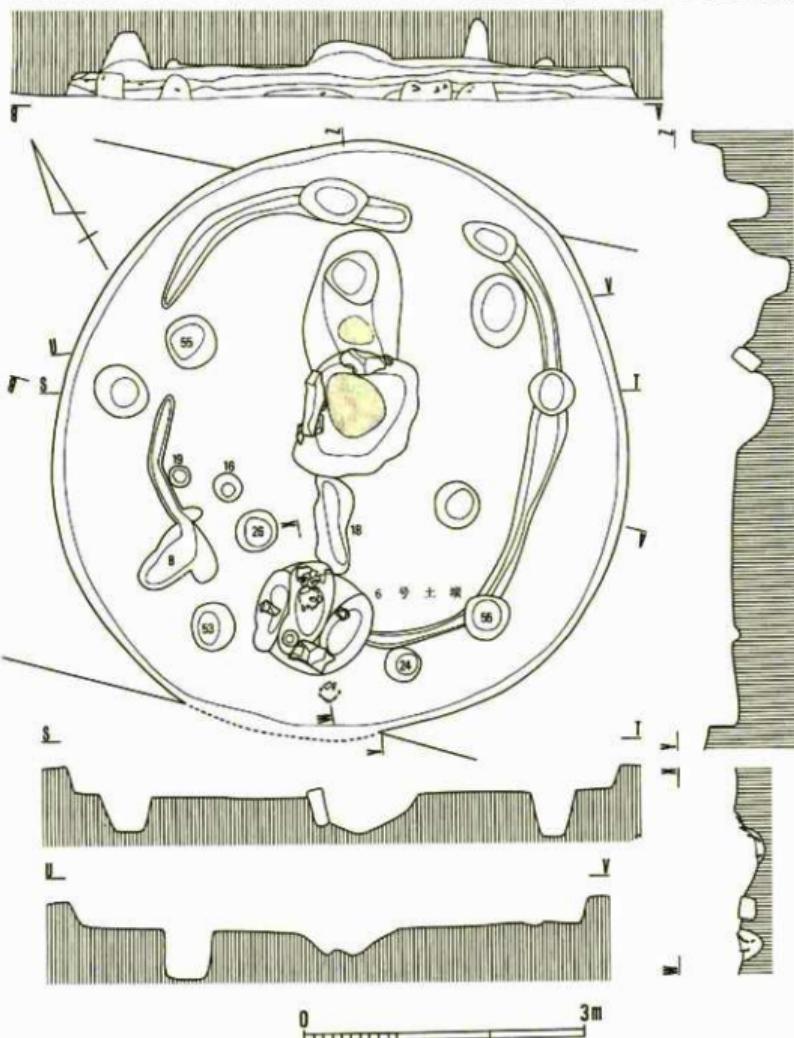
(その他の施設) 発見された柱穴は5本ある。直徑は40cm前後、深さも40~55cmほどである。

(出土遺物) 第41図と第42図が出土土器である。第41図1~3・6は勝坂式土器に特徴的な屈折底である。1は茶褐色を呈し、胎土は砂を多量に含む。原体RLの縄文が見られ、斜方向に回転されている。2は外面は茶褐色、内面は黒色で、胎土には多くの砂を含んでいる。底径は10.2cm。やはり原体RLの縄文を斜方向気味に回転させている。3は胎土に砂を多く含み表面は赤褐色、内面は黒褐色である。原体RLの縄文を横方向に回転させている。6は小型深鉢の底部である。



第43図 10号住居址出土石器

る。底径は 6.3 cm。茶褐色を呈し、胎土は粗い。4 は底径 12.4 cm を計り、表面は茶褐色、内面は黒褐色を呈する。原体 R L の縄文を斜方向に回転させている。第41図 5 はやや新しいもののかもしれない。第42図を見てもわかるように、本住居址は縄文時代中期中葉の藤内期のものと思われる。1 や 16 の三角形の文様区画、4 や 7 の長方形の文様区画などこの時期に特徴的



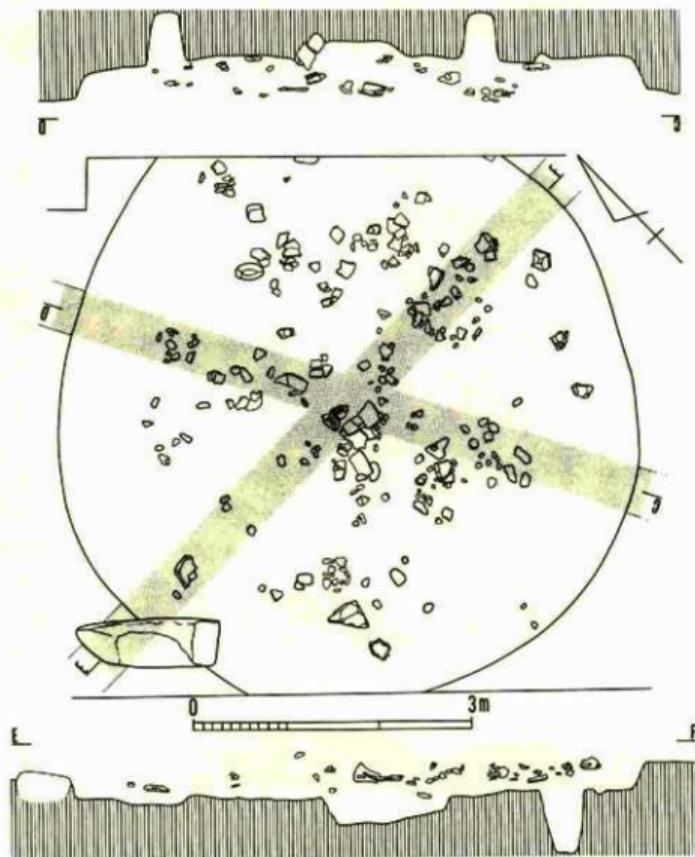
第44図 11号住居址平面図

な装飾が見られる。7と8は地文か撫糸文である。その他打製石斧が一点出土している。第43図がそれである。ホルンフェルス製で刃部を欠損している。基部は尖ってはいるものの、故意に先端部を作り出した形跡はない。重量は160 gである。

5. 11号住居址（第44～57図、図版7・33～38）

（形状・規模） 円形プランを呈し、径は東西630 cm、南北620 cmでかなりの大型住居址である。また本住居址は1度拡張が行なわれており、拡張前の形状及び規模は、円形プランを呈し、東西470 cm、南北510 cmを計る。

（炉） 住居址のほぼ中心に方形の石囲い炉があるが、大部分の炉石は撤去されている。炉



第45図 11号住居址遺物出土状態

の規模は、 $125\text{cm} \times 140\text{cm}$ で、深さは 47cm を計る。底面には $60\text{cm} \times 55\text{cm}$ の範囲で焼土が残っていた。この炉の北側に接して、もう1つの竪穴炉が検出された。東西 100cm 、南北 130cm 、深さ 30cm の規模であり、焼土も残っている。この炉の北側の部分は別のピットが破壊している。この炉は拡張前の住居址のものであろう。

(床面・壁) 床面は全体に平坦であるが、北側が南側より 10cm ほど低くなっている。壁はほぼ垂直で、壁高は東壁が 25cm 、西壁が 27cm 、南壁が 31cm 、北壁が 21cm である。拡張前と拡張後の床面のレベルはほぼ同じであったと思われる。周溝は拡張前の住居址に伴うものが検出されている。ところどころ切れているが、ほぼ一周している。幅は $10\text{cm} \sim 40\text{cm}$ で、深さは $3\text{cm} \sim 16\text{cm}$ 。

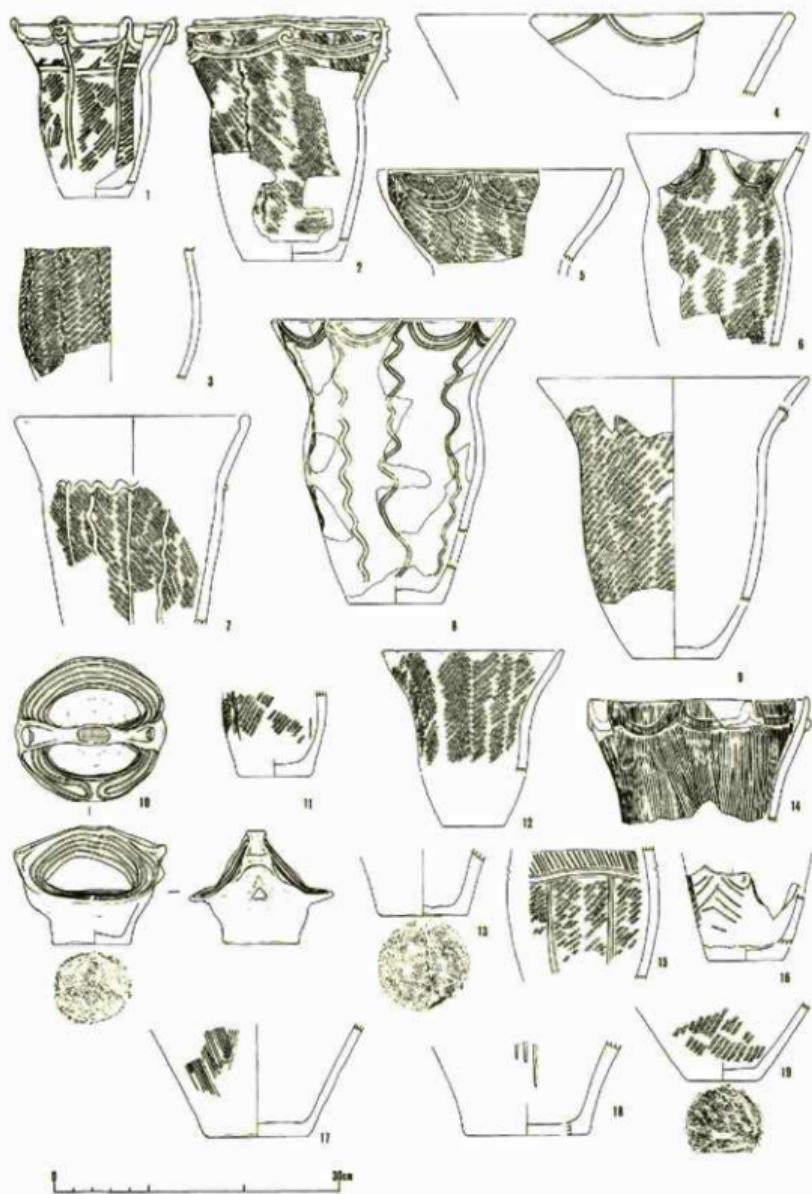
(その他の施設) 周溝より内側に存在するピットは拡張前の住居址に伴う柱穴であろう。周溝上及び周溝より外側にあるピットは拡張後の住居址の柱穴であろう。住居址南端より埋甕が検出された。壁から 30cm も離れていない場所である。その埋甕から 1m ほど住居址内側へいった所に、もう1つの埋甕が発見された。この埋甕は拡張前の住居址のものと思われるが、6号土壙によって上部が破壊されている。

(出土遺物) 繩文時代中期後半の土器群を大量に出土している。遺物出土状態の図面が示すように、ほとんど全ての土器群が床面より浮上して出土している。また多くの石器も出土しているが、出土状態は同様である。

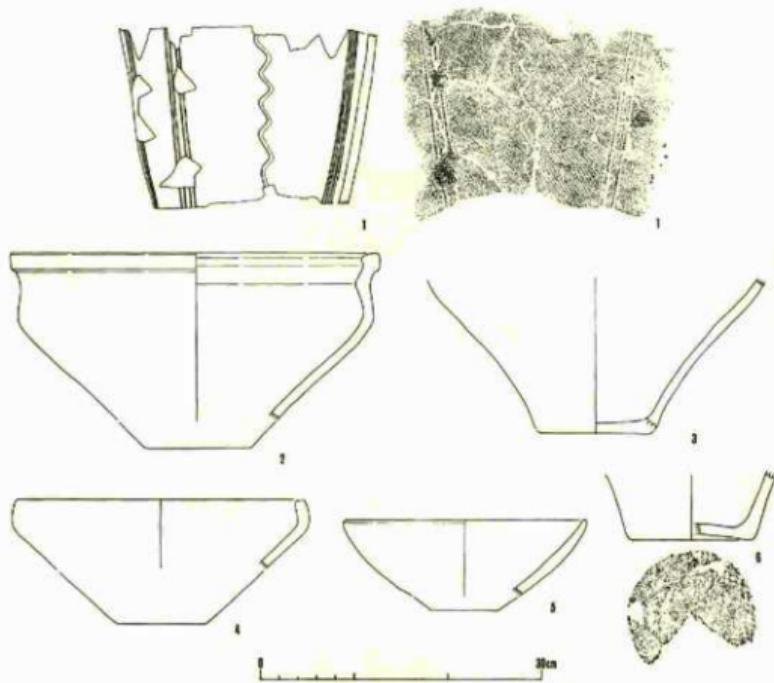
第46図1はX字状把手を有する大型の深鉢形土器である。地文はヘラ状の施文具で刺突文を施している。体部の渦巻文モチーフと、その下の“匁”状のモチーフは、両者がセットで施されることの多い、一般的モチーフである。粘土紐の貼付によって表現されており、渦巻文モチーフは3本の隆線、“匁”状モチーフと把手部分は2本の隆線で表現されている。モチーフ単位は3単位と思われる。把手の単位は5単位と思われる。口頭部は無文で強く外反している。口径は 50cm 、残存高 52cm 。茶褐色を呈し、胎土は砂が多い。2も1と同様の地文である。口縁部文様帶には粘土紐の貼付によって、渦巻文と、それらを連結する半円形の隆線が施されている。渦巻はS字状のもので、口唇上にも伸びている。文様単位は8単位と思われる。口縁部の渦巻文の直下から、2～3本の沈線の懸垂文が垂下しているが、体部下半までは施されてはいないであろう。色調は暗褐色を呈し、胎土はきめが細かい。3もやはり刺突文を地文とする。口縁部文様帶には粘土紐の貼付によって、弧状モチーフが6単位施されており、2種類の小突起が3単位づつ施されている。やや突出した方には沈線で曲線的モチーフが、低い方には渦巻文が施されている。体部文様帶は頸部で上下に分かれ、上半分には沈線で懸垂文が、下半分には沈線で梢円形モチーフが描かれている。赤褐色を呈し、胎土には砂が多い。口径 19.5cm 、器高 21.5cm 、底径 8cm 。6も地文は刺突文で、体部の渦巻文モチーフは粘土紐の貼付で表現されている。表現は3本単位である。口頭部は無文で大きく外反している。赤褐色を呈する。口径は約 53cm 、残存高 40cm 。4は櫛齒状の施文具で条線文が施されている。5は口唇部に沈線文が施されているが、一部突起が剥がれた痕跡があり、6単位あったようである。頸部には沈線が1本めぐらされている。口径 20cm 。7は体部は全面に櫛齒状の施文具で条線文が施されている。



第46図 11号住居址出土土器 (1)



第47図 11号住居址出土土器 (2)



第48図 11号住居址出土土器 (3)

口径25cm、残存高18.7cm。色調は赤褐色を呈し、胎土はきめが細かい。8は口径15cmの小型深鉢である。体部には櫛歯状の施文具により条線文が施され、その上から、頸部付近にヘラによって、横方向にジグザグの沈線文が、その直下に沈線の緩い弧線文が施されている。口縁部には1本の浅い沈線をめぐらし、その中へ、体部の地文に使用した櫛歯で刺突文を施している。胎土には小石を多く含み、内面は黒褐色、外面は明褐色を呈する。どこか東海地方の匂いを感じさせる土器である。9は口頸部が大きく外反し、半截竹管状の施文具によって半肉彫りの斜線が施される。体部は刷毛状の施文具で条線文を施し、上から粘土紐の貼付によって、直線的な、あるいは蛇行した懸垂文を表現している。口径37cm、残存高26.5cm。胎土はきめが細かく、色調は暗褐色を呈する。

第47図1は地文は原体R Lの繩文である。口縁部には粘土紐を弧状に6単位貼付している。1単位ごとに粘土瘤を貼って、その上から粘土紐を蛇行させて貼付する。体部は半截竹管状の施文具によって地文の上から6単位の懸垂文を垂下させ、頸部直上で同じ施文具によって懸垂文の間に横位に沈線区画を行なっている。口縁内面に1本の粘土紐が貼付され、めぐらされている。内面は暗褐色、外面は暗褐色だが下半部は二次焼成を受けて赤褐色を呈する。2は口縁部に粘土紐の貼付によって、所謂「渦巻つなぎ文」を施す。地文は原体L Rの繩文であり、結



第49図 11号住居址出土土器 (4)

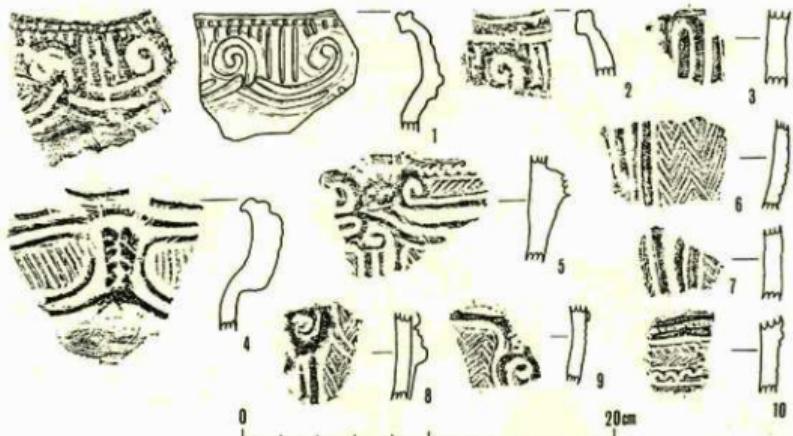


第50図 11号住居址出土土器 (5)



第51図 11号住居址出土土器 (6)

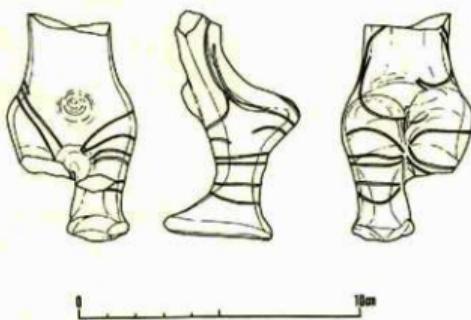
節縄文を懸垂文として垂下させている。渦巻文は5単位で、内外面共に黄褐色を呈する。3も同様の施文方法をとっているが、原体がR.Lである。4～6・8は口縁部に沈線の弧線文をめぐらす土器である。4と8は半截竹管状のもので表現されている。いずれも口頭部が大きく外反している。5と8は蛇行懸垂文を施す点で一致するが、8は弧線文のつなぎ部分から懸垂文



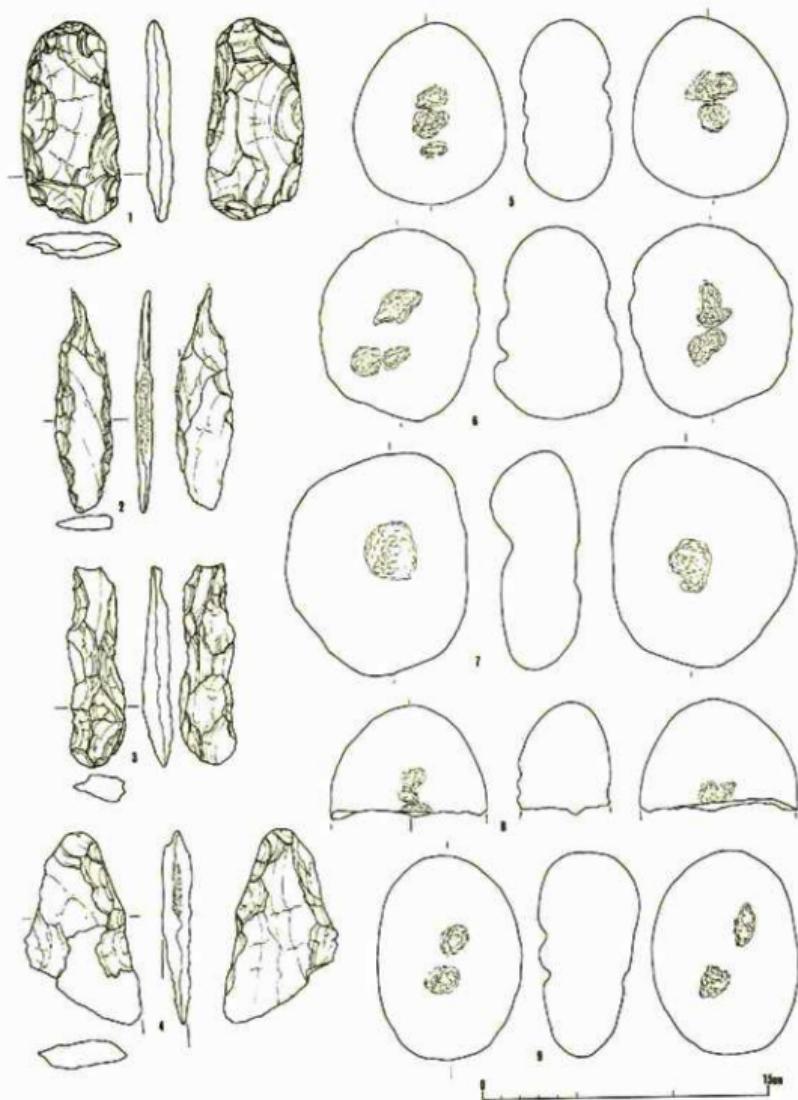
第52図 11号住居址出土土器 (7)

を垂下させる点で5と異なる。7は口頸部が無文の深鉢形土器で、体部には原体L Rの縦文を縦位に回転施文している。その地文の上から粘土紐貼付によって懸垂文を施している。頸部にも粘土紐の貼付が見られる。口径は24.6cm、残存高22cmで暗褐色を呈する。9は新しい方の埋甕である。口縁部に粘土紐の貼付の痕跡があるがモチーフは不明。地文に原体R Lの縦文を施した後に、沈線の蛇行懸垂文を垂下させている。茶褐色を呈し、胎土には多量の砂を含んでいる。14も口縁に粘土紐を貼付するものであるが、連弧状に貼付されている。その上から櫛齒によって地文が施されている。暗褐色を呈し、胎土には砂が多い。口径は23cm、文様単位は9~10あると思われる。10は吊手形土器であり、吊手の頂きには、何かが剥落した痕跡が見られる。底部は木葉痕を残す。暗褐色を呈し、胎土には小石が多く含まれる。12は原体R Lの縦文を縦位に施文した深鉢形土器である。赤褐色を呈し、胎土は粗い。

第48図1は古い方の埋甕である。体部しか残存していなかった。原体R Lの縦文を施文後に、半截竹管状の施文具によって直線の懸垂文を、ヘラ状の施文具によって蛇行の懸垂文を垂下させている。赤褐色を呈し、胎土は砂が多い。2は浅鉢形土器であり、口径39cm、残存高17.5cmを計る。赤褐色を呈し、胎土は極めて密である。4と5も浅鉢形土器である。4は口径30.6cm、茶褐色を呈し、胎土には砂を多く含む。



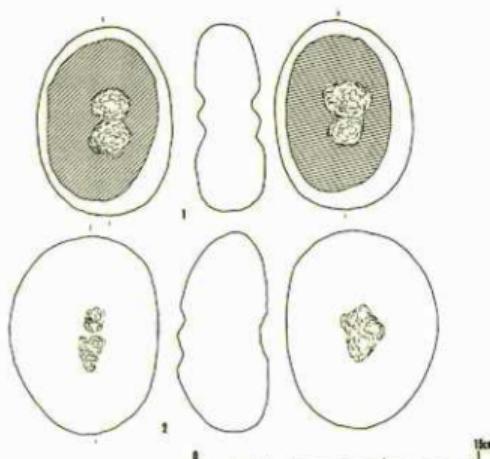
第53図 11号住居址出土土偶



第54図 11号住居址出土石器 (1)

5は口径28cm、暗褐色を呈し、胎土は砂が多い。

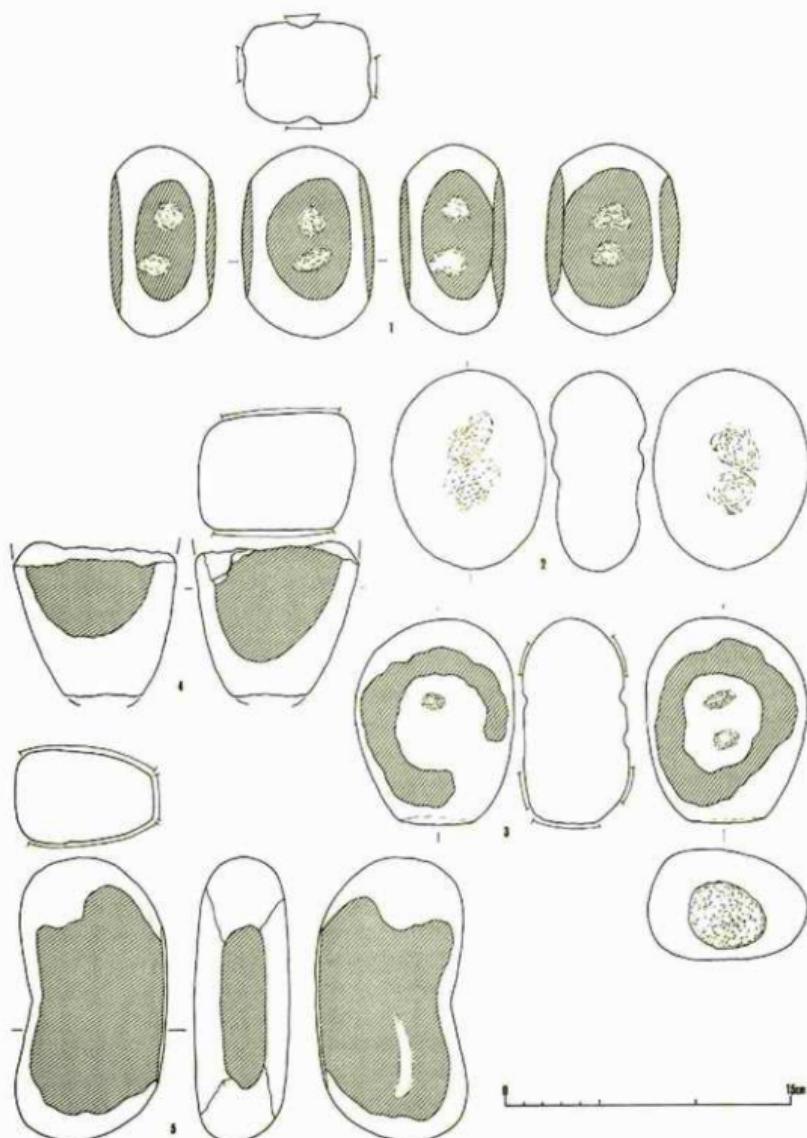
第49～52図も11号住居址の出土土器であるが、一括土器群と同様に、結節縄文を伴うものが、それほど存在しないことが注目される。なお、第52図に示したものは、諫訪から上伊那地方に主体的に分布する「唐草文土器」である。今回の調査では、この11号住居址のみから纏まって出土している。出土したものすべてについて、胎土、焼成、施文技術



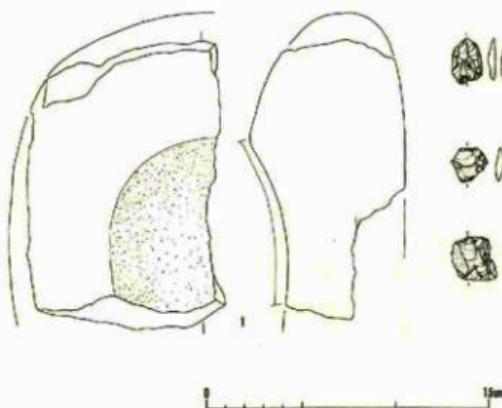
第55図 11号住居址出土石器 (2)

などが他の土器群とは異なっている。おそらく搬入品であろう。

石器類は、打製石斧、凹石、磨石、石皿、楔形石器が出土している。第54図1～4は打製石斧である。1は粘板岩製で、刃部以外の縁の部分の加工が細かく丁寧である。重量は89g。2も粘板岩製で基部は折れている。片方の側面には敲打痕が明瞭に残っている。重量は36g。3もやはり粘板岩製の打製石斧で重量は49g。欠損している様子は見られない。4は頁岩製であり、刃部は欠損している。重量は80g。第54図5～9は凹石である。5は安山岩で2面に凹みを有する。それぞれの凹みの数は3と2で、重量は530g。6も安山岩製で重量は645g。凹みは2面のみに見られる。凹みの数は、やはり3と2である。7も安山岩製で重量は700g。2面にそれぞれ1つの凹みを有する。8も安山岩製で重量は306g。半分ほど欠損している。9も安山岩製で重量は540g。2面に凹みを有し、各々2個と1個の凹みをもつ。第55図1は安山岩製で2面に2個づつの凹みを有する。2面とも極めて平坦に磨かれている。重量は400g。2も安山岩製で重量は540g。2面に凹みを有し、各々2個と1個である。第56図1は4面に凹みを有する凹石である。凹みは各々2個づつで計8個みられる。また各々の面は非常によく磨きあげられている。安山岩製で重量は595g。2も安山岩製で重量は540g。2面に2個づつの凹みを有する。3も凹石であるが、礫石としても利用されたようである。2面に2個と1個の凹みを有し、一方の端は敲打によって扁平にまで潰れている。凹みを有する2面は環状に磨かれた痕跡を残している。安山岩製で重量は860g。4は安山岩製の磨石であり、重量は570gを計る。約半分と、一端の一部を欠損している。2面とも磨った痕跡があり、非常に平坦になっている。5も磨り石であるが3面に磨った痕跡がある。1面には三日月状の凹みが見られる。安山岩製で重量は950g。第57図1は安山岩製の石皿である。重量は1940g。大部分が欠損している。2～4は楔形石器である。すべて黒曜石製であり、重量は、2が1.8g、

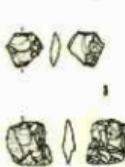


第56図 11号住居址出土石器 (3)



第57図 11号住居址出土石器 (4)

3が1.6g、4が4.0gである。



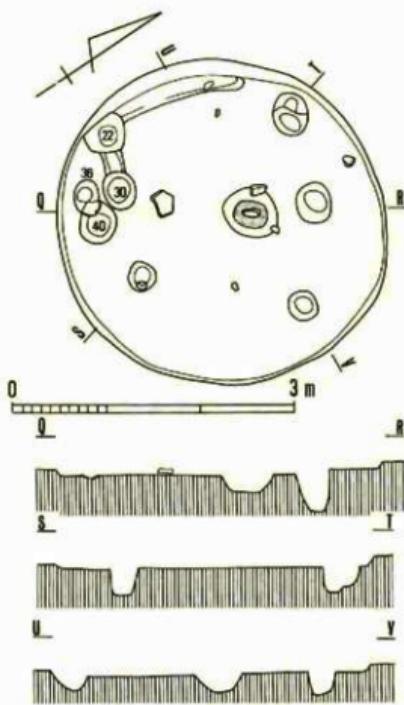
6. 16号住居址(第58~62
図、図版8・39)

(形状・規模) 円形プランを呈し、径は南北345cm、東西350cmである。

(炉) 住居址の中心より、やや北側に竪穴炉が存在する。規模は東西55cm、南北50cmで、深さは約30cmである。底には焼土が残っており、炉石は北西の部分にわずかに1個残るのみである。

(床面・壁) 全体的に平坦である。本住居址は8号住居址の床面下より検出されたにしては、壁の状態は良い。高さは、東側で5cm、西側で20cm、南側で5cm、北側で10cmを計る。周溝は住居址の西側にわずかに見ることができる。長さ約1.5mほどしかない。幅30cm、深さ15cm。

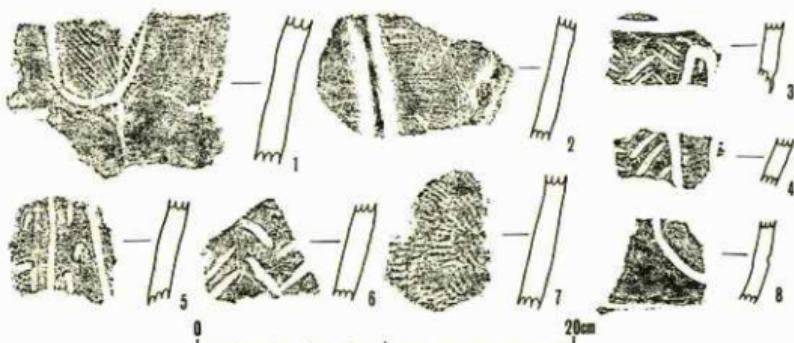
(その他の施設) 主柱穴と思われるものが7つ発見されている。埋甕は、本住居址の上に構築された8号住居址の柱穴によって、約半分が破壊されている。



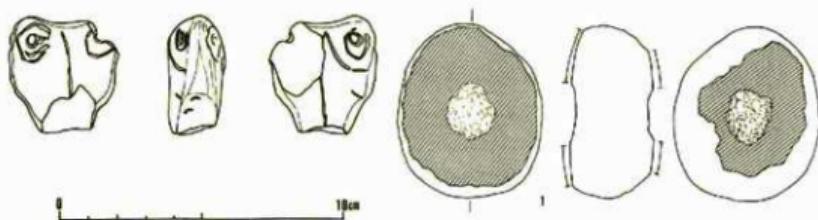
第58図 16号住居址平面図



第59図 16号住居址出土土器 (1)



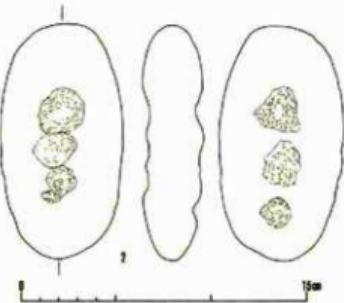
第60図 16号住居址出土土器 (2)



第61図 16号住居址出土土製品

(出土遺物) 第59図に示す土器が埋蔵に使用されていたものである。口径 25.6cm、器高 26.3cm で茶褐色を呈し、胎土には砂を多く含む。文様モチーフは全て沈線で表現されている。口縁部に梢円文を施し、巻手状のモチーフを有する懸垂文を口縁部から底部付近まで垂下させている。地文は綾杉状沈線文、所謂「八の字文」である。第60図も出土土器であるが、すべて縄文時代中期末葉のものであろう。それらの中で2の1点だけに隆線の表現が見られるが、他は沈線による表現である。第61図の土製品は一見土偶のように見えるが、この時期にこのような類例はない。頭部と思われる所に孔を2つあけており、文様は細い沈線で表現される。

石器も2点の凹石が出土している。第62図1は安山岩製であり、重量は426g。2面に各々1個づつの凹みを有する。両面共に非常によく磨き出されており、面は平坦である。2も安山岩製で、重量は362g。2面に各々4個と3個、計7個の凹みを有する。



第62図 16号住居址出土土器

7. 2号土壌～5号土壌（第37・63図、図版6）

2号土壌から5号土壌までの4基の土壌は9号住居址の周囲に掘り込まれている。3号から5号までは9号住居址と重複していたが、その新旧関係は残念ながら明らかにできなかった。出土遺物も4号土壌より多孔石が1点出土したのみであった。しかし覆土の状態は明らかに縄文時代のものであった。

2号土壌は140cm×110cmの楕円形プランで、南側がピット状に一段低くなっている。最も深い所で深さ40cm、一段高い所で深さ20cm。

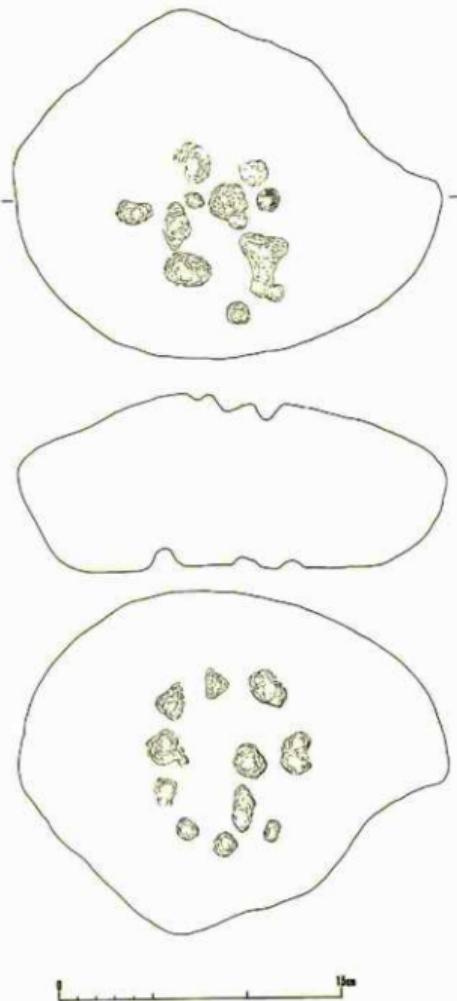
3号土壌は2基の土壌が重複しているのかもしれないが、190cm×130cmの楕円形プランを呈する。西側が一段やや高くなっている。最も深い所で深さ16cm、東側は深さ30cmほどである。高い方に深さ38cmほどの小さなピットが掘り込まれている。

4号土壌は径100cmの円形プランを呈する。深さも35cmほどで底は平坦である。この土壌からは多孔石が1点出土している。底から15cmほど浮いて出土した。第63図が出土した多孔石であるが、安山岩製で、重量は4400gである。

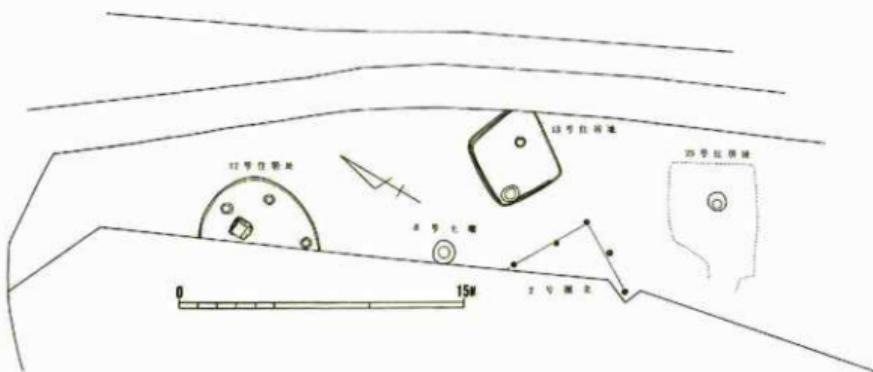
5号土壌は径が約110cmほどの円形プランであったと思われる。深さは25cm。プランの半分が9号住居址と重複しており、底面と9号住居址の床面とが、ほぼ同レベルであった。

8. 6号土壌（第44図）

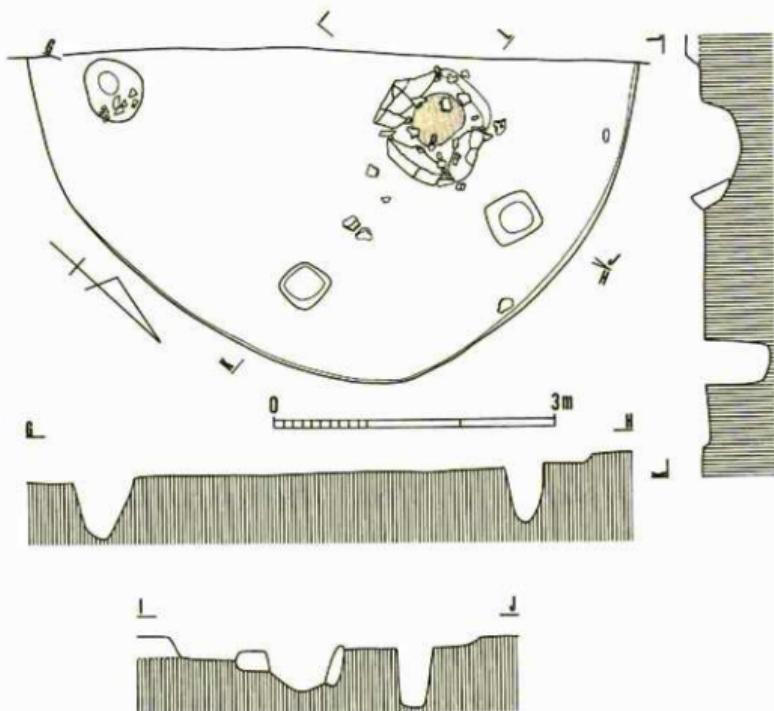
11号住居址の古い方の埋廻を破壊して掘り込まれていた。円形プランと思われるが状態があまり良くない。径は約120cmほどと思われる。建て直し後の11号住居址よりも新しい時期のものであるという点以外に出土遺物も全く存在せず、不明な点が多くあった。深さは11号住居址の壁の上から測ると50cmほどあった。



第63図 4号土壌出土石器



第64図 柳坪遺跡2区東全体図



9. 12号住居址 (第65~68図、図版8・39)

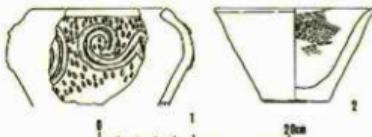
(形状・規模) 円形プランと思われるが、約半分ほど調査区域外であり、全体の姿は正確には把握できない。径は約650cm前後あると思われる。

(炉) 住居址の中心と北側の壁との中間点に方形石囲いが設けられている。東辺が70cm、西辺100cm、南辺90cm、北辺80cmで深さは45cmを計る。焼土も残っている。石囲いの中で西側の石だけ取り除かれている。

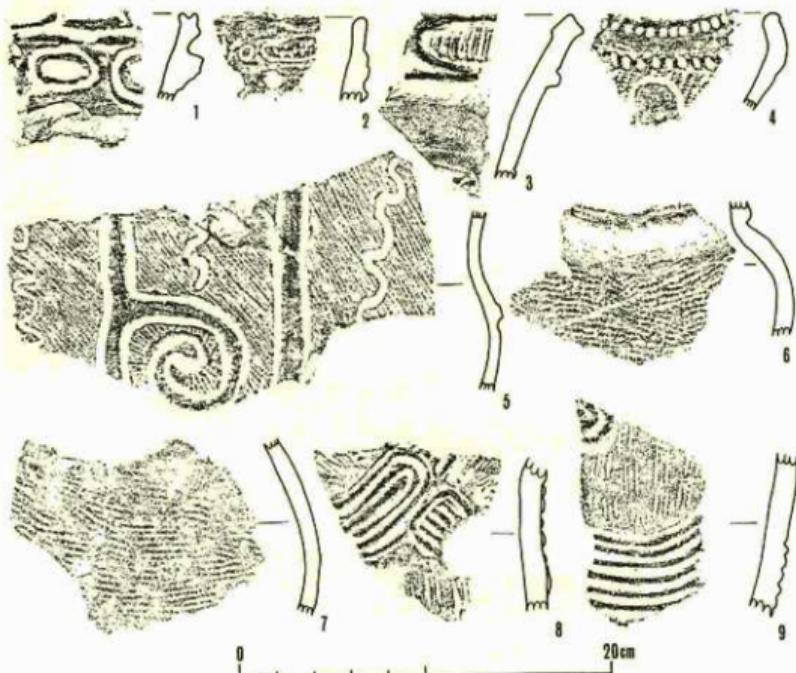
(床面・壁) 床面は南に7cmほど低くなっている。壁は東側でほとんど高さを失う。それ以外は5~8cmの高さで垂直に立ち上がっている。周溝はない。

(その他の施設) 主柱穴と思われるピットが3本発見されている。炉の北のものが55cm×50cm~64cm、炉の東のものが45cm×50cm~65cm、南側のものが60cm×70cm~67cm。埋甕については、その存在の可能性が最も高い住居址南側の部分が調査区域外だったため、確認はできなかった。

(出土遺物) 第66・67図に示したものが出土土器である。第66図1は口縁部に粘土紐の貼付による渦巻文を施された深鉢形土器の口頭部である。地文は刺突文。暗褐色を呈し、胎土に



第66図 12号住居址出土土器



第67図 12号住居址出土土器



第68図 12号住居址出土石器

は砂を多く含む。2は鉢形土器で、口径16.4cm、器高9.7cm、底径7cm。赤褐色を呈し、胎土は粗く砂も多い。第67図の中で4だけは、かなり時代の新しいものである。8と9はX字状把手が施された大甕の破片であろうか。地文は2本1単位の刺突気味の沈線文である。

石器は第68図に示した。1は安山岩製の凹石である。1面に2つの凹みを有する。重量は、540g。2は炉の中より出土したものである。多孔石の一部であろうか。凹みは7つ残っている。安山岩製で、重量は800g。3は黒曜石製のコアである。白色の縞があり、半透明である。自然面および自然剥離面が多く、側面の部分は折れの部分である。重量は144g。

10. 13号住居址（第69・70図、図版8）

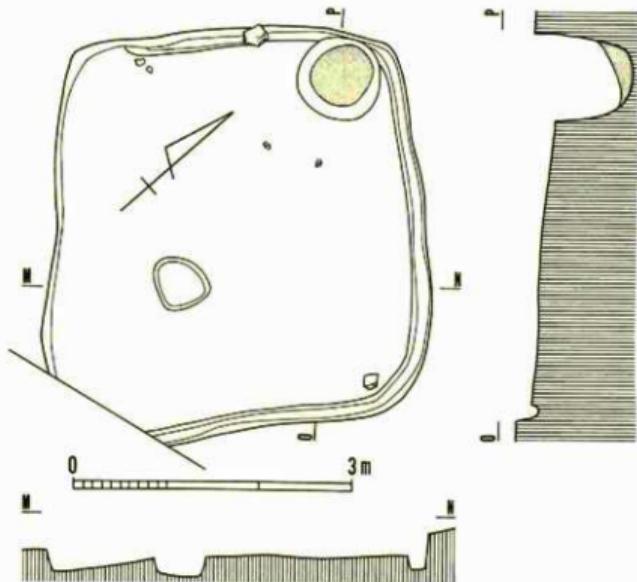
（形状・規模） 隅丸方形プランを呈する。一辺が約400cm前後と思われるが、南のコーナーは農道にかかるて発掘できなかった。

（カマド） 確実にカマドと断言できる施設は確認できなかった。ただ西のコーナー付近の床がわずかに浅く凹み、極くわずかの焼土粒子が散っていたのみであった。カマドの痕跡と言えないこともないだろうが、根拠は弱い。

（床面・壁） 北東から南西に向かって20cmほど低い床になっているが、ほぼ平坦である。周溝は南西壁以外で見られる。幅は5~15cm、深さは10~15cm。壁高は20~40cm。

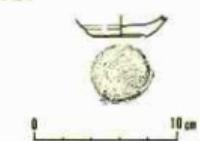
(その他の施設)

住居址中心よりやや南側に径が65cm×55cm、深さ20cmのピットが掘り込まれている。また北のコーナーのところに径が90cm×90cm、深さ70cmのピットが存在するが、このピットの底には厚さ20cmもの焼土が堆積していた。これは壁の状態から考えて、ピット内で火を使用した結果ではない。遺棄されたものであろう。



第69図 13号住居址平面図

(出土遺物) 第70図が出土遺物である。底径4.2cmで糸切り底。暗褐色を呈し、胎土は密で金雲母を含む。所謂「カワラケ」と呼ばれているものである。



第70図 13号住居址出土土器

11. 25号住居址 (第71~73図、図版9・57)

(形状・規模) プランは不明瞭であるが、黒色土層中に黄色っぽい砂の粒子が、方形に散らばっていた。その範囲は、東辺が560cm、西辺が458cm、南辺が400cm、北辺が410cmである。南側に張り出し部があるが、削られていて全体の姿は把握できない。

(炉・カマド) 住居址中心より北に、皿状に浅く掘り込まれた炉が設けられている。径は93cm×60cmで、深さは11cmである。焼土も明瞭に残っている。カマドと思われる施設は、その痕跡さえも存在しない。

(床面・壁) 壁はない。床面は炉より北の部分から住居址南側の部分にかけて、硬く踏み固められている。また床面は、住居址の中央の部分が、周囲よりも若干低くなっている。周溝と思われるものは存在しない。

(その他の施設) 柱穴は1本も発見できなかった。

(出土遺物) 第72図が出土土器である。1は口径15cmの壺形土器である。茶褐色を呈し、胎土は砂が多くザラザラとしている。内外面共にナデ調整されている。焼成は良好である。2

は杯形土器で口径は14cmを計る。茶褐色を呈し、胎土は密である。内外面共にナデ調整で、焼成は良好である。1と2は共に今回の調査によって得られた土器の中でも、最も新しい時代に属するものと思われる。先の13号住居址とほぼ同時期と考えられ、本県では12世紀後半代の実年代が与えられている。

12. 2号掘立柱建物址(第74図、図版9)

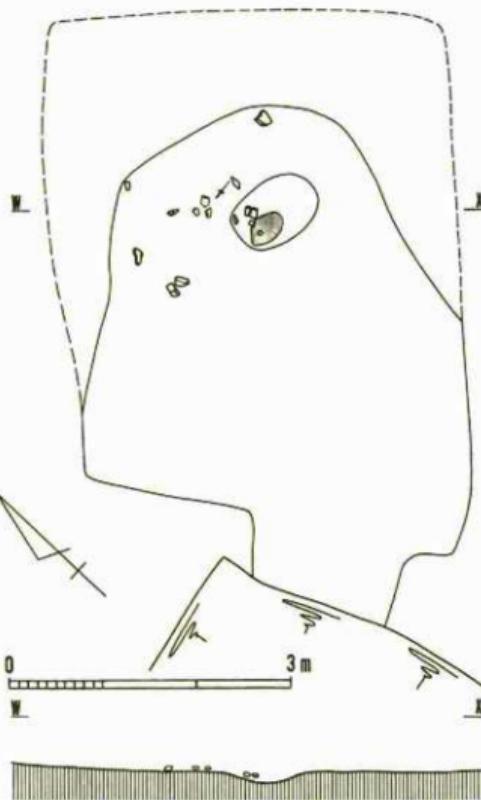
約半分以上が調査区域外のため、全体の様子は不明である。確認できたものは、北辺と東辺にあたる部分であり、計5本の柱穴列が発見されている。確認面も南東方向に向かって、かなり低くなっている。検出された柱穴も、直径20cm前後、深さ10~30cmと浅いものであった。柱穴間の距離は約200cm前後であり、柱穴内からも出土遺物は確認できなかった。時代の限定は困難ではあるが、他の類例から考えて平安時代以降のものと考えるのが妥当であろう。

13. 8号土壙(第75図、図版9)

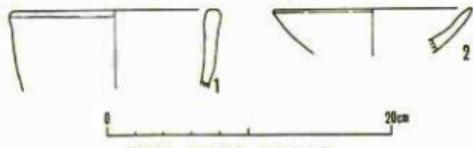
(形状・規模) 東西120cm、南北100cmの径を計る楕円形プランを呈する。

(床面・壁) 底は西側が東側より15cmほど低くなっている。壁もほぼ垂直に立ち上がる。

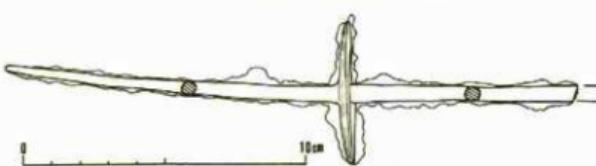
(出土遺物) 人工



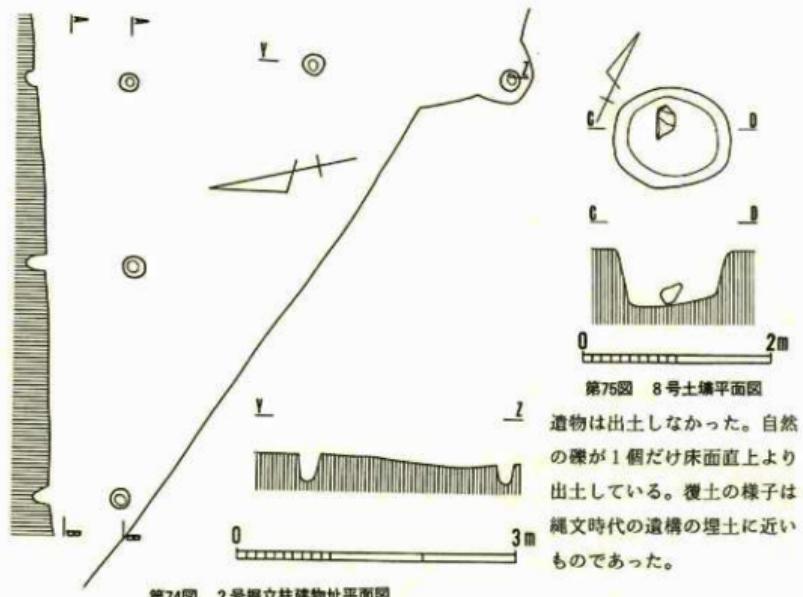
第71図 25号住居址平面図



第72図 25号住居址出土土器



第73図 25号住居址出土鐵製紡錘車

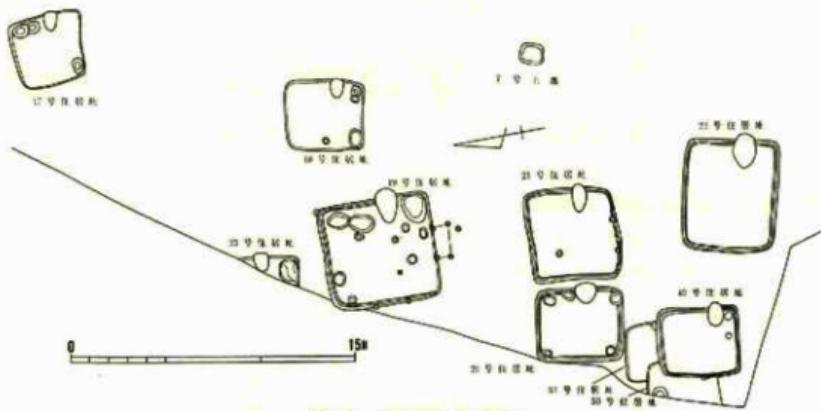


第74図 2号柱立柱建物址平面図

第75図 8号土塁平面図

遺物は出土しなかった。自然の礫が1個だけ床面直上より出土している。覆土の様子は縄文時代の遺構の埋土に近いものであった。

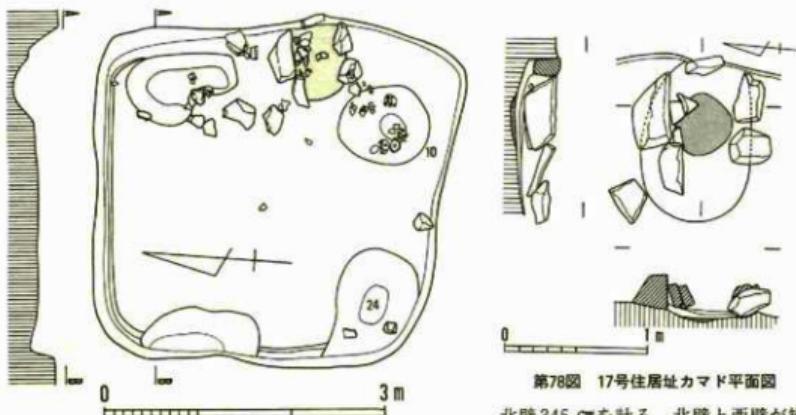
第3節 3区の遺構と遺物



第76図 柳坪遺跡 3区全体図

1. 17号住居址（第77～79図、図版10・40）

（形状・規模）隅丸方形プランを呈する。規模は東壁350cm、西壁400cm、南壁350cm、



第77図 17号住居址平面図

第78図 17号住居址カマド平面図

北壁345cmを計る。北壁と西壁が短かめで、台形に近いプランである。

(カマド) 東壁の中央よりも、やや南側に設置された石組みカマドである。カマド内に40cm×45cmの範囲で焼土が形成されている。残存する袖石は4個で、カマド内には小砾が数個落ち込んでいる。掘り込みの規模は、東西115cm、南北80cmほどである。

(床面・壁) 全体的に平坦な床面であるが、南側が40cmほども低くなっている。壁高は、東壁13cm、西壁15cm、南壁8cm、北壁20cmである。北壁から西壁にかけて周溝が掘られている。幅は5cm前後で、深さは3~30cm。

(その他の施設) 住居址内に4個所ほど深い皿状の掘り込みがある。遺物は掘り込み内でなく、掘り込み上より出土している。

(出土遺物) 第79図が出土遺物である。主として土師器の壺形土器と环形土器がある。

○壺形土器 1は口径26.4cm、残存高21.5cm、で暗褐色を呈し内外面共に刷毛調整されている。口唇がかなり肥厚している。2と3も壺形土器であるが、1よりも口唇は薄い。4は表面がロクロ使用による刷毛調整が行なわれている。

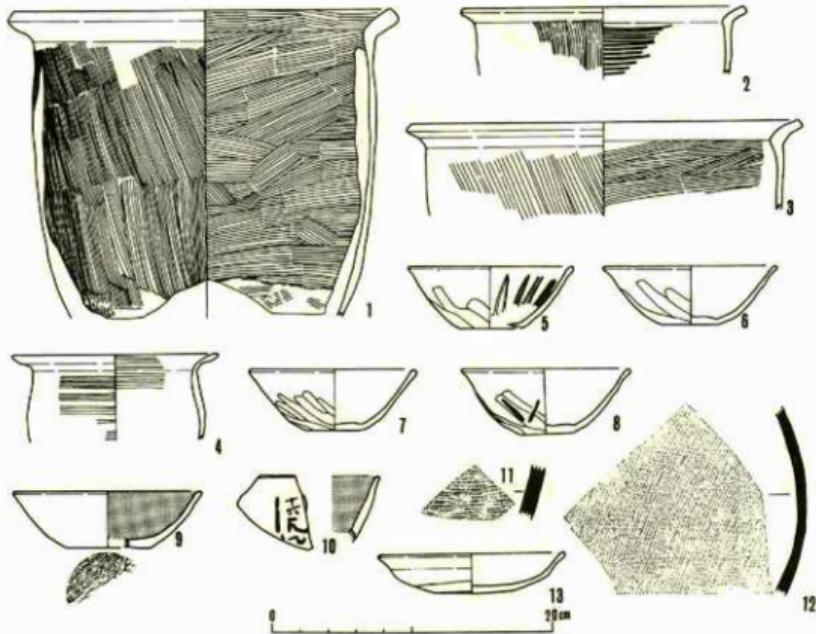
○环形土器 5は内面に暗文が施されている。表面はナデとヘラ削り。茶褐色を呈する。6~8は全て表面と底部がヘラ削り調整されている。内面はナデ。8には「八」の墨書が見られる。9は内面黒色土器で、底部は糸切り。表面はナデ、内面はよく研磨されている。10も内面黒色土器だが墨書が伴う。文字は不明。

○皿形土器 13は底部周辺がヘラ削りされている。内外面はナデ調整。

2. 18号住居址 (第80・81図、図版11)

(形状・規模) 隅丸方形プランを呈する。規模は東西が355cm、南北が405cmで、南北軸がかなり長めの長方形である。

(カマド) 東壁でも南東コーナーに近いところに100cm×50cmの範囲で、焼土が検出された。この焼土は床面から壁、そして壁外までも続いている、おそらくカマドの痕跡と思われる。



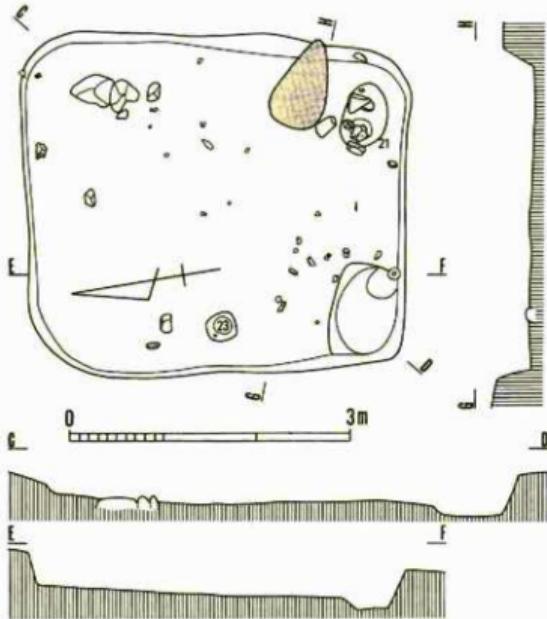
第79図 17号住居址出土土器

掘り込みと言えるものは確認されなかった。

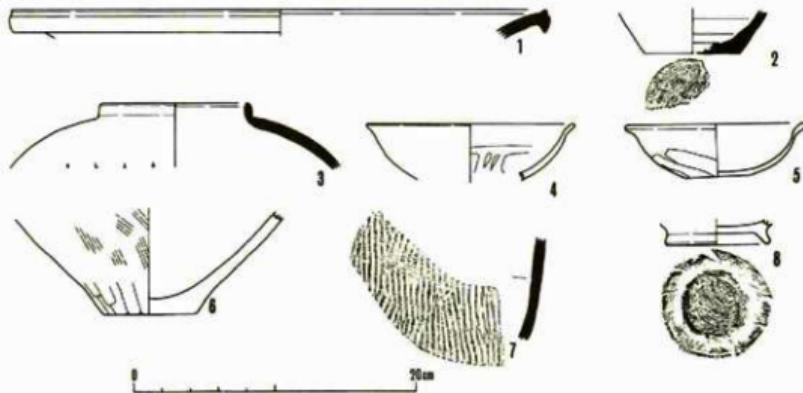
(床面・壁) 床自体に若干の凹凸が見られる。その上、北東コーナーの付近には自然石が露出しており、更に凹凸が激しい感じを与える。また北側より南側の方が約20cmほど低くなっている。壁高は北壁を除けば、約40cmの高さで周囲をめぐっている。北壁は15cmほどの高さしかない。周溝は検出されなかった。

(その他の施設) 深さ20cm前後の深いピットが3個所で確認できた。柱穴といえるものは西壁中央の近くにある1つのみである。

(出土遺物) 第81図が出土遺物である。1と2は須恵器であり、大甕の口縁と甕の底部である。3は灰釉陶器の壺形土器であり、口径は10.4cm。4と5は土師器の杯形土器である。4は口径14.6cm、茶褐色を呈する。内外面共にナデ調整であるが、内面には暗文のようなヘラ磨きが見られる。5は口径が12.2cm、器高が3.7cm、底径が4.6cmを計る。茶褐色を呈し、表面と底部はヘラ削り調整が行なわれている。内面はナデ。4も5も極めて肥厚した玉縁口縁を有している。6は土師器の甕の底部である。底径は6.6cm。8は土師器の高台の杯形土器である。底部は糸切りであり、その後に高台部分が付けられている。底径は7.0cmで茶褐色を呈している。胎土は極めて密である。



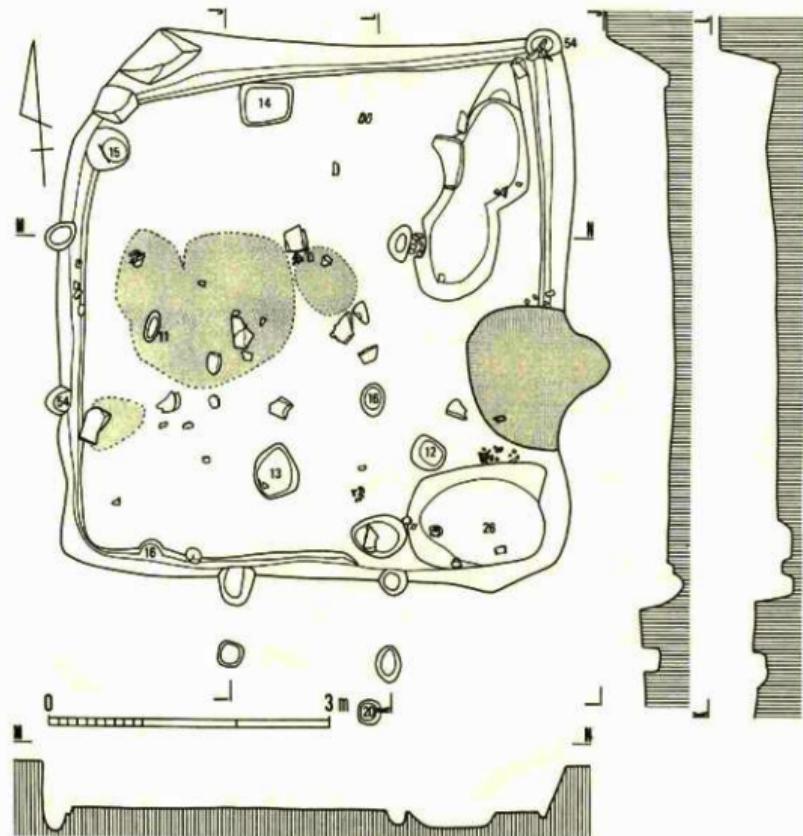
第80図 18号住居址平面図



第81図 18号住居址出土土器

3. 19号住居址（第82～85図、図版11・40・57）

（形状・規模） 方形プランを呈する。北西コーナーの壁上部は調査区域外のため未発掘。ただし下部は確認できた。規模は南北570 cm、東西550 cmを計り、今回調査された平安時代の住居址の中でも最も大型の部類に属する。



第82図 19号住居址平面図

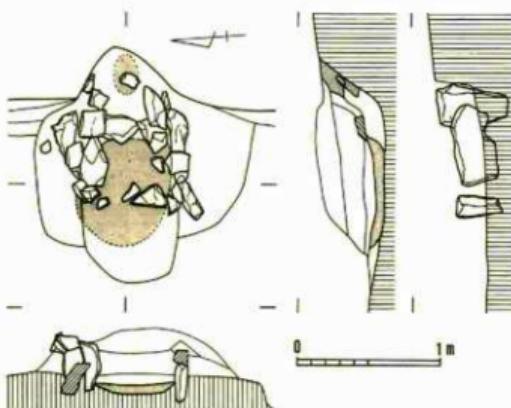
(カマド) 東壁中央南より石組みカマドが設けられている。両袖石は良好に残っている。掘り込みは東西70cm、南北100cmであり、焼土も80cm×60cmの範囲で良好に残存している。また煙道部分にも焼土がはっきりと残っており、全体として非常に状態の良いカマドである。このカマドとは別に、住居址内の西側の部分に、かなり広い範囲で焼土が検出された。床面が焼けたものであることだけは確かであったが、如何なる性格を有するのかは不明である。

(床面・壁) ほぼ平坦であるが、住居址断面図に見られるように、北壁東よりの床の一部に盛り上がった場所が存在する。周溝はカマド部分と南東コーナーのピットの部分を除いて、ほぼ住居址内を一周する。幅は5~15cm、深さは5~10cmである。壁高は、東壁が50cm、西壁が53cm、南壁が32cm、北壁が65cmあり、かなり掘り込みの深い住居址である。

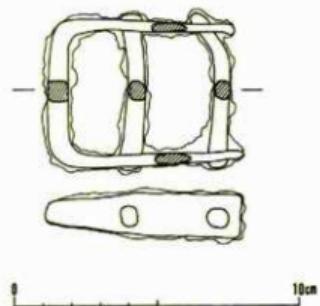
(その他の施設) 本住居址で注目すべきは多くのピット群であろう。まず住居址南壁の部

分であるが、壁にかかって 150 cm ほどの間隔をもって 2 本のピットが掘り込まれており、それと対を為すように、住居址外にも 2 本のピットが掘られている。明らかに住居址出入口に関係するピットと思われるが、西側にも一部同様なピットが見られ、関連性が問題となるだろう。また北東コーナーにも深いピットが掘り込まれており、上屋の構造に何らかの意味をもつていると考えられる。

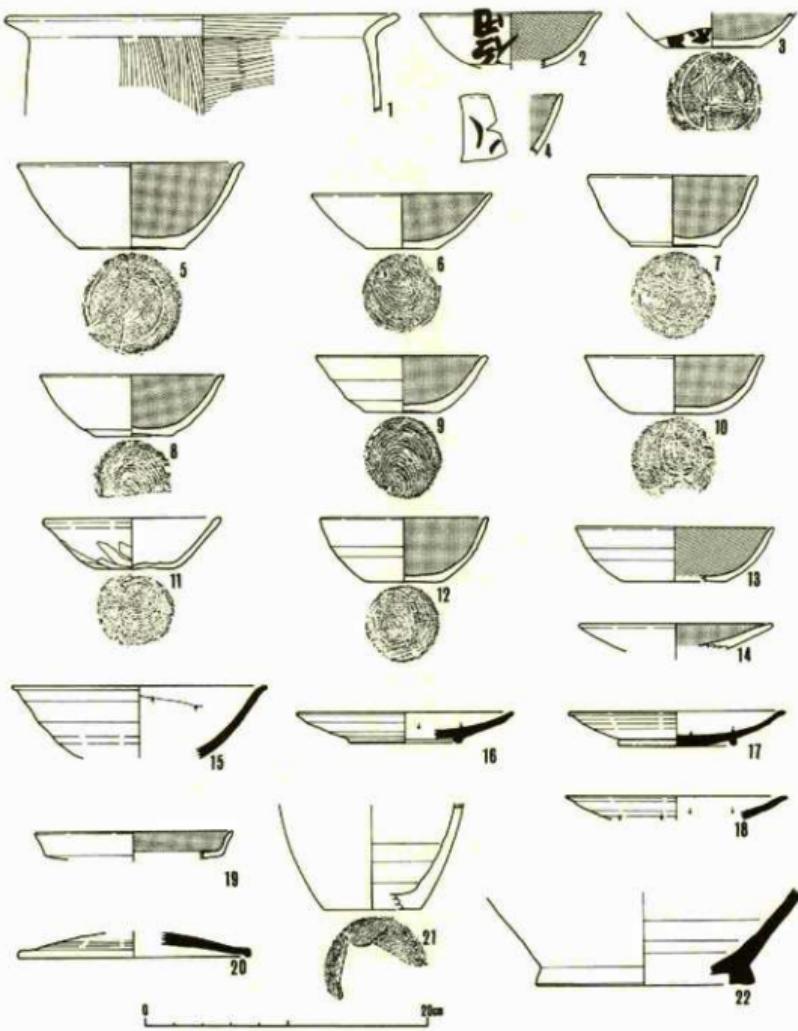
(出土遺物) 出土遺物の中で特徴的なのは内面黒色土器であり大半を占める。第85図 2 ~ 10、12 ~ 14、19がそれであり、14と19を除いて全て杯形土器である。2は「名田」の墨書きをもつめずらしい土器で口径 12.8 cm、表面は茶褐色。3も墨書き土器であるが字は不明。底部は糸切り。4も墨書き土器で「八」の字である。5は口径 16 cm、器高 6 cm、底径 7.4 cm、で底部糸切りである。6は口径 12.8 cm、器高 3.8 cm、底径 5.2 cm で底部糸切り。7は口径 12 cm、器高 5 cm、底径 6.3 cm で底部糸切り。8は口径 13 cm、器高 4.2 cm、底径 5.6 cm で底部糸切り。9は口径 12.2 cm、器高 4 cm、底径 5.4 cm で底部糸切り。10は口径 12.6 cm、器高 4 cm、底径 5.8 cm で底部糸切り。11は口径 12 cm、器高 4.5 cm、底径 5.4 cm で底部糸切りであるが、唯一、糸切り後にヘラ削りが行なわれている。13については底部の状態は不明である。これらの杯形土器は全て、内面は黒彩されており、光沢をはなつほどである。表面はナデ調整されている点で同一である。14と19は皿形土器と思われるが、やはり内面は光沢をもち、表面はナデ調整されている。11は唯一内面黒色ではない杯形土器である。表面も他の土器では見られないヘラ削り調整が為されている。底部は糸切りである。21は土師器の壺形土器の底部で糸切り底が見られる。内外面ナデ調整。15~18は灰釉陶器である。15は杯形土器で口径 18 cm。施釉は刷毛塗りであり、内面だけ行なわれている。16~18は皿形土器である。16は口径 15.6 cm、器高 2.2 cm、底径 8 cm で施釉は刷毛塗りである。17は口径 15.4 cm、器高 2.6 cm、底径 8 cm で施釉は刷毛塗りである。その他、20は須恵器の蓋形土器でやや古い時期のものと思われる。22は須恵器の壺形土器の底部であり、底径は 15.4 cm を計る。第84図は鉄製の革金具である。バックルの部分である。



第83図 19号住居址カマド平面図



第84図 19号住居址出土革金具

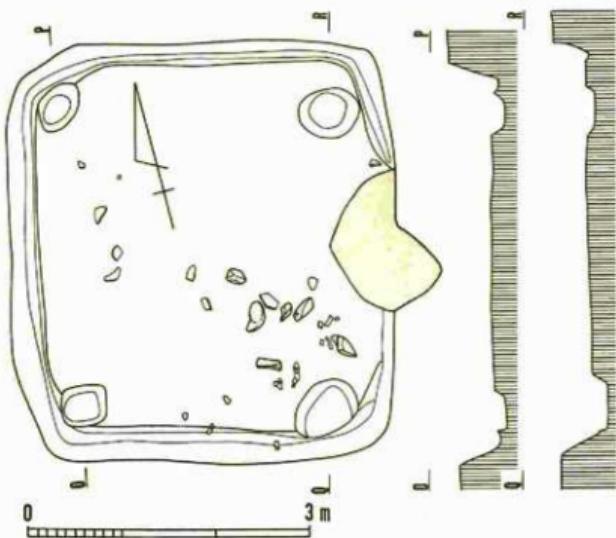


第85図 19号住居址出土土器

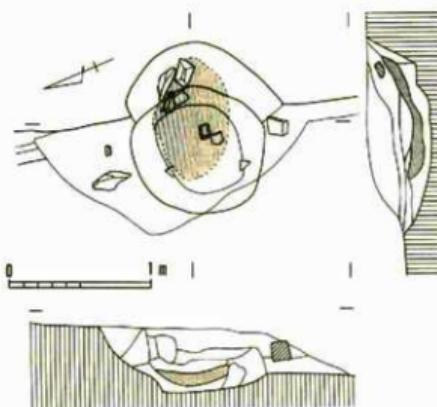
4. 20号住居址（第86～88図、図版11）

（形状・規模） 隅丸方形プランを呈する。規模は東西410cm、南北440cmを計りほぼ正方形に近い。

（カマド） 東壁のはば中央に石組みカマドが設けられている。掘り込みは直径約90cmの円



第86図 20号住居平面図



第87図 20号住居址カマド平面図

内外面共に刷毛調整。2は口径22cm、残存高7.5cmで、表面は黄褐色、内面は赤褐色を呈する。胎土は粗く砂を多く含むが焼成は良好である。内外面共に刷毛調整されている。3は口径24.8cm、残存高15cmで暗褐色を呈する。胎土はかなり粗く、内外面共に状態は極めて悪く、調整の具合も不明瞭である。これらの壺形土器に共通している特徴は、口唇が薄いことである。体部の厚さと大差ない。5は土師器の杯形土器である。口径12.2cm、器高4.2cm、底径6.3cmで底部がかなり大きい。茶褐色を呈し、胎土は密で焼成は良好である。表面はヘラ削り、内面はナ

形プランである。カマド内に80cm×50cmの範囲で焼土を良好に残す。釉石は大部分が破壊されている。

(床面・壁)

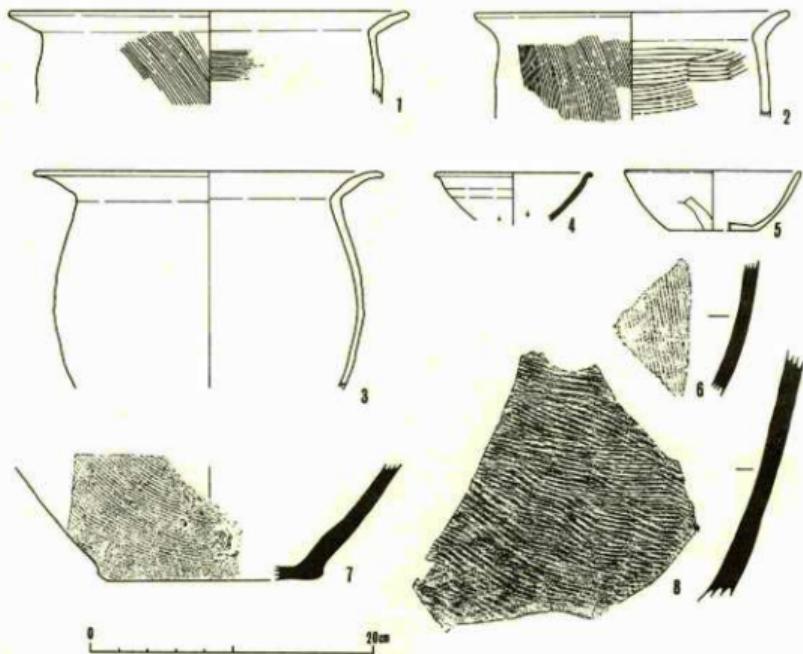
床面は北側より南側の方が約10cmほど低くなっているが、ほぼ平坦である。周溝はカマドの部分を除いて住居址を一周する。幅は10~20cm、深さは5~10cmを計る。壁は周溝から

ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は東壁が26cm、西壁が37cm、南壁が34cm、北壁が42cmである。

(その他の施設) 4つの各コーナーに直径50cm前後、深さ10cm前後のピットが掘り込まれている。住居の上屋構築に関連のあるピットと思われるが、4つ共深さがあまりないところが少々問題となる。

(出土遺物) 第88図が出土遺物である。1~3は土師器の壺形土器である。

1は口径28cm、残存高6.5cmで茶褐色を呈する。胎土は少々粗いが焼成は良好。



第88図 20号住居址出土土器

デ。4は灰釉陶器の杯形土器である。施釉は内外面に行なわれ、刷毛塗りである。この土器は少々時代の新しいものであろう。口径は10.8cm、残存高3.3cm。6～8は須恵器の大甕の破片である。

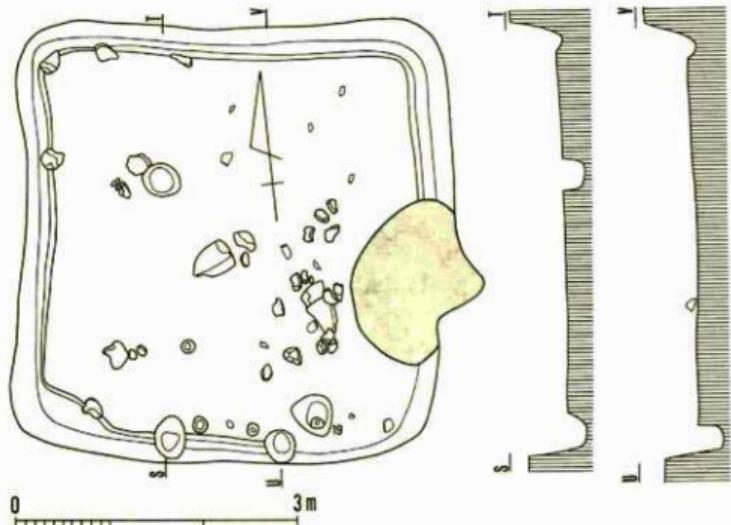
5. 21号住居址（第89～92図、図版12・41）

（形状・規模） 隅丸方形プランを呈する。規模は南北450cm、東西450cmでほぼ正方形プランである。

（カマド） 東壁の中央南よりに石組みカマドが設けられていた。掘り込みは130cm×90cmで、焼土も40cm×60cmの範囲で良好に残っている。このカマドの袖石は、片側は巨大な自然石をそのまま利用しており、もう片方の袖も残りは良い。また丁度焼土のはば中心に支脚の石が立ったまま残存していた。

（床面・壁） 床面はほぼ平坦であるが、南側が北側よりも10cmほど低くなっている。周溝はカマドの部分と南東コーナーの部分を除いて、ほぼ一周している。幅は10～15cm、深さは10～20cmある。南西コーナーは部分的に幅30cmほどある。壁は周溝からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁が43cm、西壁が37cm、南壁が60cm、北壁が55cmを計る。

（その他の施設） 先の19号住居址と同様に、南壁にかかる2つのピットが存在する。19号

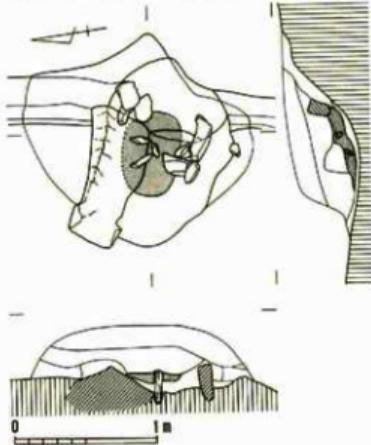


第89図 21号住居址平面図

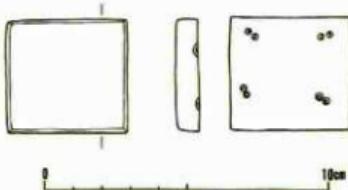
住居址の場合は壁外にもピットが存在したが、本住居址にはそれはない。他に住居址内に直径30cm前後、深さ20cm前後の2つのピットが掘り込まれている。

(出土遺物) 第91・92図が出土遺物である。土師器と灰釉陶器の环形土器が主である。第92図1は口径12.6cm、器高3.5cm、底径4.7cmを計り、底部は糸切りである。茶褐色を呈し、

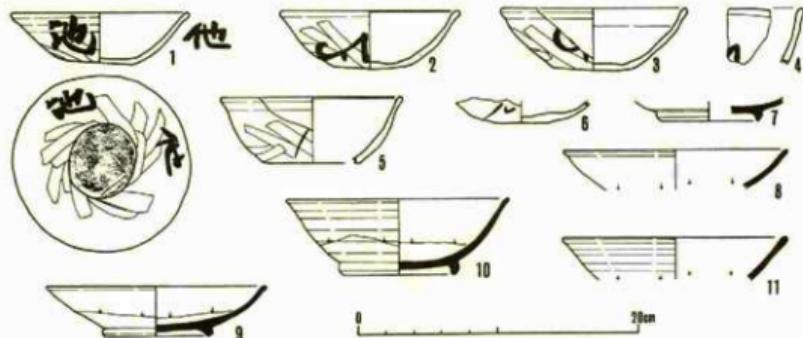
表面はヘラ削り、内面はナデ。表面には「池」と「他」の2つの墨書きが見られる。2は「山」の墨書きをもつ。表面ヘラ削り、内面ナデ。3も表面ヘラ削り、内面ナデで墨書きを有するが文字は不明。5も表面ヘラ削り、内面ナデで墨書きを有するが文字は不明である。4と6も墨書きであるが判読はできない。これらの环形土器は全て玉縁口縁を有す



第90図 21号住居址カマド平面図



第91図 21号住居址出土器物



第92図 21号住居址出土土器

るものである。第92図7～11は灰釉陶器である。7は高台の环形土器の底部で底径6.8cm。9は口径15.6cm、器高3.6cm、底径7.8cmで施釉は刷毛塗り。10は口径15.8cm、器高5.3cm、底径7.8cmで施釉は刷毛塗り。8と11も施釉は刷毛塗りが行なわれている。その他に第91図に示した石製の革帶が出土している。暗緑色を呈し、孔は4個所に穿たれている。

6. 22号住居址（第93～97図、図版12・41・42）

（形状・規模） 隅丸方形プランを呈する。東西が577cm、南北が490cmで長方形と表現した方がよいだろう。この住居址の貼り床の下から、建て直し前の住居址が確認できた。やはり隅丸方形プランを呈し、規模は東西430cm、南北420cmではほぼ正方形であった。

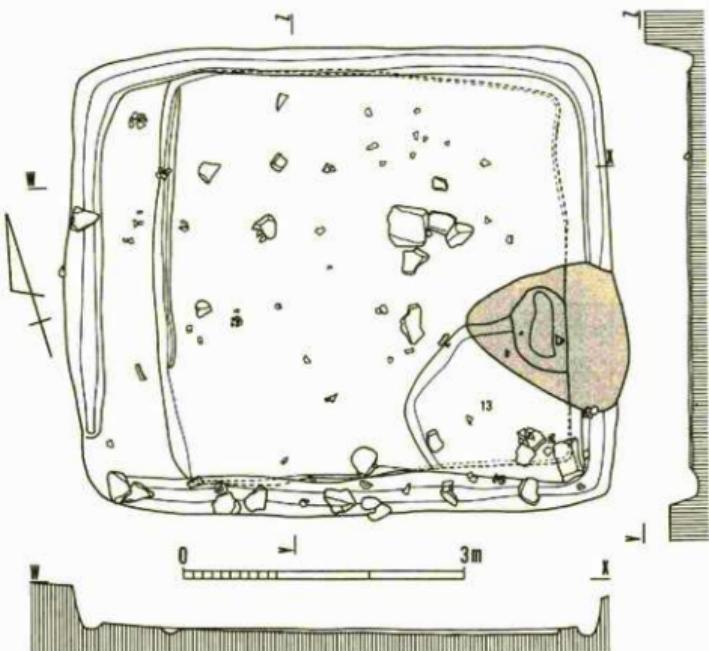
（カマド） 東壁中央南よりに石組みカマドが設けられている。両袖石の残存状態は極めて良好。焼土も50cm×50cmの範囲で残っている。掘り込みは直径100cmほどの円形プランを呈する。煙道部分が壁よりもわずかに外に張り出している。いうまでもなくこのカマドは新しい方の住居址に伴うものであるが、古い方の住居址のカマドの痕跡が全くないことや、カマドの設置されている位置から考えて、建て直し前も同じ場所にカマドが設けられていたと思われる。

（床面・壁） 床面は平坦である。周溝はカマドの部分と南西コーナーの部分を除いて、住居址内を一周している。幅25～40cm、深さ6～10cm。壁は周溝からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁が40cm、西壁が44cm、南壁が30cm、北壁が50cmを計る。建て直し前の住居址は、壁高はほとんどないものの、床面は残りが良く、ほぼ平坦である。周溝は西壁に沿って一部見ることができる。幅17～20cm、深さ5～7cm。

（その他の施設） 下面の住居址に伴って、カマドの南に浅い皿状の掘り込みが見られる。深さは、下面の住居址の床面より13cm低い。

（出土遺物） 第95～97図が出土遺物であり、土師器の壺形土器と环形土器と皿形土器、灰釉陶器、須恵器などを出土している。

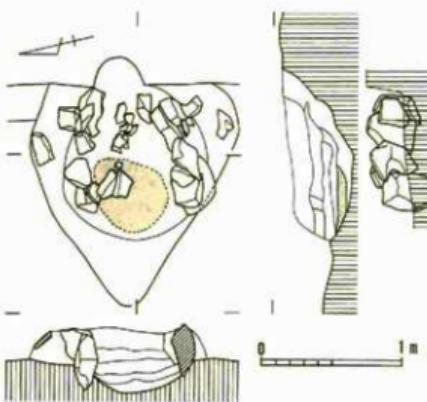
○壺形土器 第95図1と2は口唇の肥厚した壺で内外面刷毛調整。1は口径33cm、暗褐色を呈



第93図 22号住居址平面図

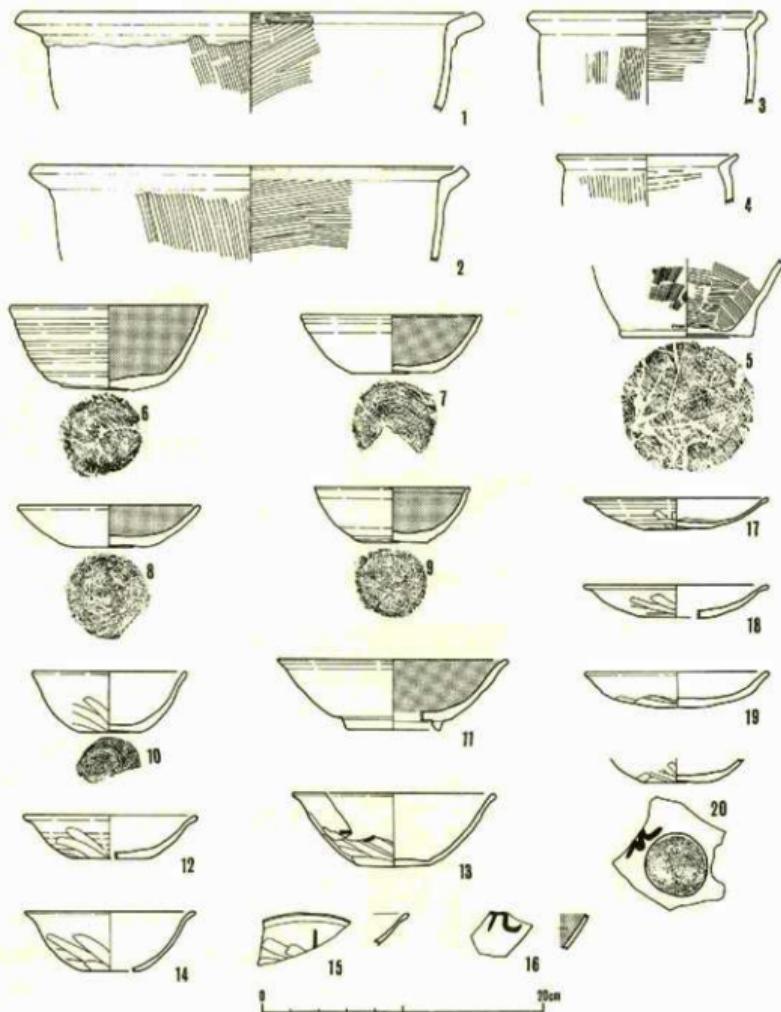
し胎土には砂が多い。2は口径30.4cmで暗褐色を呈す。3と4は小型の甕形土器で、やはり内外面共に刷毛調整。5は底部で木葉痕を有する。

○环形土器 第95図6、7、9は内面黒色土器である。6は表面を棒状のもので調整しており、表面は波打っている。7と9は表面はナデ調整であり、3個体共に糸切り底である。10は表面ヘラ削り、内面はナデ。底部は糸切り後にヘラ削りされている。12~14は表面はヘラ削り、内面はナデである。底部はヘラ削りされており、糸切り痕は見えない。13、15、16、20は墨書き土器であるが、いずれも判読はできない。20は底部糸切りである。これら内面黒色土器は、それ以外のものと比べると、後述する甕形土器も含め、口唇の形に違いが見られる。すなわち、黒色土器の口唇が直線的に



第94図 22号住居址カマド平面図

後述する甕形土器も含め、口唇の形に違いが見られる。すなわち、黒色土器の口唇が直線的に

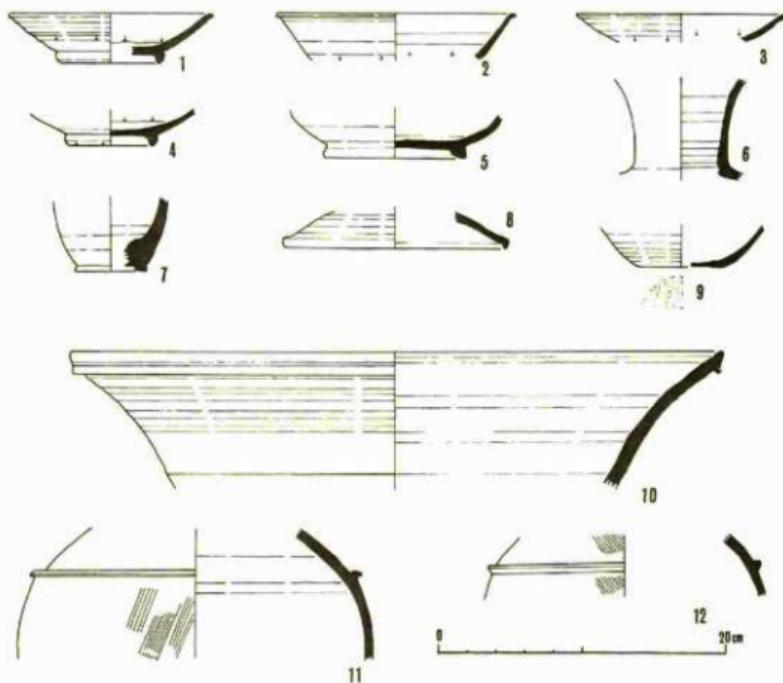


第95図 22号住居址出土土器 (1)

立ち上がっているのに対し、それ以外の杯や皿は玉縁口縁を有しているのである。

○高台环形土器 第95図11は内面黒色で、表面はナデ調整されている。

○皿形土器 第95図8、17～19は皿形土器である。8は内面黒色で、表面はナデ。底部は糸切り。17～19は、表面はヘラ削り、内面はナデ。底部もヘラ削りされており、糸切りの痕跡は見ることができない。先に示したように、黒色土器と異なって玉縁口縁を有している。また、表



第96図 22号住居址出土土器 (2)

面のヘラ削りの有無も、内面黒色土器とそれ以外の土器との大きな違いである。

○灰釉陶器 第96図1～4は灰釉陶器で、全て施釉は刷毛塗りで行なわれている。また全て内外面共に施釉されている。5も灰釉陶器であろう。

○須恵器 第96図6～12は須恵器である。6、7、11、12は自然釉が見られる。8の蓋形土器と9の环形土器は少々時代の古いものかもしれない。なお9の底部は糸切りである。本住居址は、今回の調査では最も多くの須恵器を出土した住居址である。

10cm

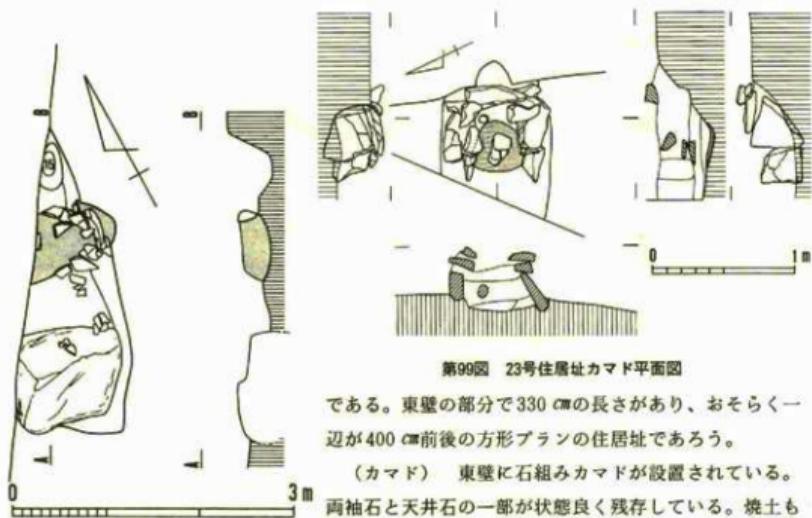
第97図 22号住居址出土土製紡錘車

の住居址の床下より出土した。他の出土遺物は全て上面の住居址に伴うものである。

○土製紡錘車 第97図が土製紡錘車で、唯一上面

7. 23号住居址 (第98～100図、図版12)

(形状・規模) 方形プランと思われるが、住居址の大半の部分は調査区域外のため未発掘



第98図 23号住居址平面図

である。東壁の部分で330cmの長さがあり、おそらく一方が400cm前後の方形プランの住居址であろう。

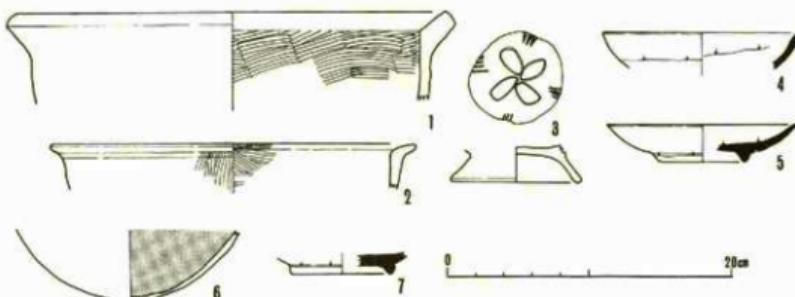
(カマド) 東壁に石組みカマドが設置されている。

両袖石と天井石の一部が状態良く残存している。焼土も35cm×40cmの範囲で良好に残る。煙道は、わずかに壁より突出している。支脚は見られなかった。

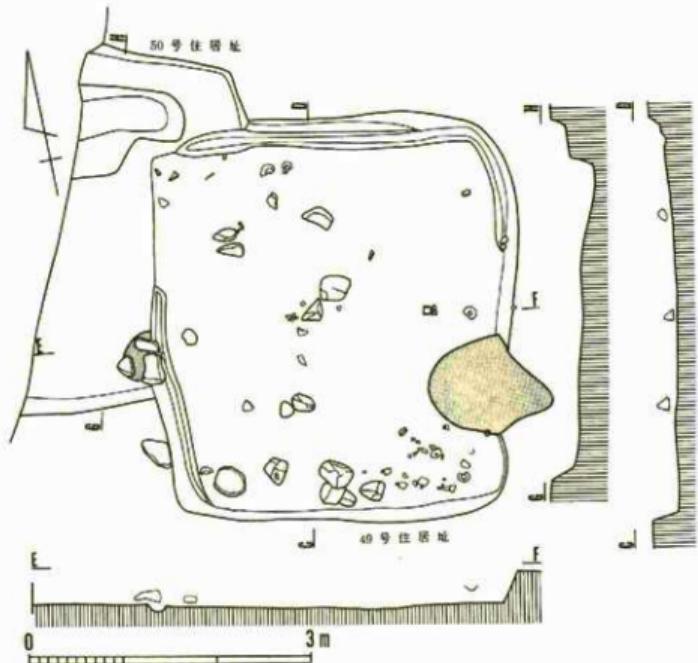
(床面・壁) 住居址の大部分が調査区域外の上に、住居址内南側に巨大な自然の岩が露出しており、床面の状態は不明である。周溝の有無も明らかではない。壁高は確認できるところで20cm前後である。

(その他の施設) カマド北側に径が50cm×20cmで深さが15cmのピットがある。

(出土遺物) 第100図が出土遺物である。1はカマド内より出土した壺形土器である。口唇は著しく肥厚している。表面は風化が激しく、調整の状態はよくわからないが、刷毛調整のようである。内面は刷毛調整。口径は30.6cm、茶褐色を呈し胎土は砂を多く含む。2も壺形土器であるが、1に比べると口唇は極めて薄い。内外面共に刷毛調整。茶褐色を呈し、胎土には砂を多く含む。3は台付杯形土器の台の部分と思われる。底径は9.4cm、色調は茶褐色を呈す



第100図 23号住居址出土土器



第101図 49号・50号住居址平面図

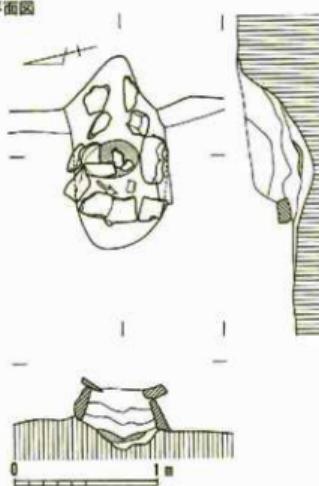
る。内面には暗文が見られる。6は坏形土器であろうか。底部はほとんど丸底で、内面は黒色。表面はナデ調整。4、5、7は灰釉陶器である。全て施釉は刷毛塗りである。4は口径14cm、5は口径13.4cm、器高2.7cm、底径6cmを計る。

8. 49号住居址（第101～103図、図版13・42・43）

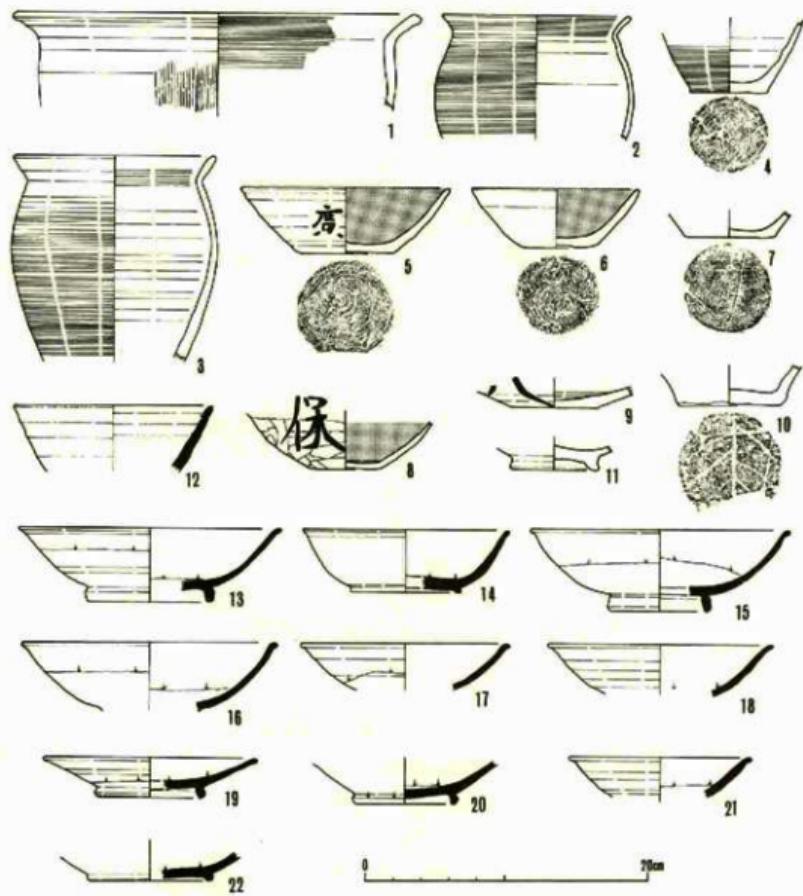
（形状・規模） 隅丸方形プランを呈する。東西380cm、南北430cm。50号と51号の両住居址を切っている。

（カマド） 東壁の南よりに設置された石組みカマドである。袖石の残りも良いようである。焼土も30cm×25cmの範囲で残り、掘り込みも東西100cm、南北60cmある。

（床面・壁） 床面は南に向かって低くなってしまっており、北との差は16cmある。面はほぼ平坦である。周溝は西壁南半分、北壁から東壁の北側にかけて掘り込まれている。



第102図 49号住居址カマド平面図

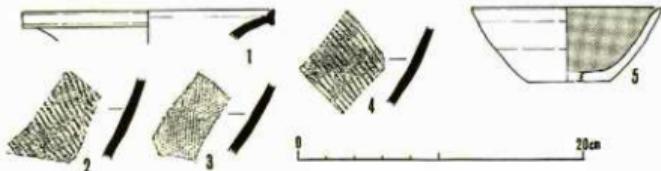


第103図 49号住居址出土土器

幅は10~20cm、深さは5~8cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁高は東壁が30cm、西壁が37cm、南壁が28cm、北壁は15cmである。

(出土遺物) 第103図が出土土器である。土師器の壺形土器と环形土器、灰釉陶器などが出土している。

○壺形土器 1は口径28.4cmで茶褐色を呈する。内外面共に刷毛調整。2~4は小型の壺形土器である。表面は刷毛でナデを行なっている。内面も口縁付近は刷毛によるナデ。それ以外は指によるナデ。2は口径13.0cm、残存高8.8cmで茶褐色を呈す。胎土はやや粗い。3は口径が14cm、残存高14.5cmで茶褐色を呈する。胎土には石英粒子を多く含む。4は底部糸切りで暗褐色を呈する。胎土はやや粗い。7と10は壺形土器の底部で、7は糸切り底、10は木葉痕を有す。



第104図 50号住居址(1~4)・51号住居址(5)出土土器

○环形土器 5と6と8は内面黒色土器である。5と6は表面がナデ調整のみである。8は少々形態が異なる上に、ヘラ削り調整も行なわれている。また5と6は糸切り底であるが、8はヘラ削りされている。5は口径が14.8cm、器高4.6cm、底径6.7cmで表面は茶褐色を呈する。「廣」の墨書が見られる。6は口径が11.8cm、器高4cm、底径5.3cm。表面は茶褐色を呈する。8には「保」の墨書が見られる。9も墨書き土器で「八」の字が見られる。底部はヘラ削り。11は高台の环形土器底部。

○灰釉陶器 13~22は灰釉陶器である。施釉は全て刷毛塗りである。13は口径18.4cm、器高5.2cm、底径8.6cm。14は口径14.6cm、器高4.4cm、底径7.8cmで内面のみ施釉されている。15は口径18.2cm、器高5.7cm、底径6.8cm。19は灰釉陶器中で唯一の皿形土器で口径14.6cm、器高2.8cm、底径7.2cm。これらの灰釉陶器で底部に糸切り痕が残るものは1つもない。

第105図 50号住居址出土鉄鏃

○須恵器 12は須恵器の环形土器であるが、やや古い時代のものの混入と思われる。

9. 50号住居址(第101・104・105図、図版13・57)

(形状・規模) 一辺400cm前後の隅丸方形プランを呈すると思われる。西半分は調査区域外、東側は一部を49号住居址に破壊されている。51号住居址を切っている。

(カマド) 住居址内南側床面に焼土が見られ、カマドの痕跡と思われるが、49号住居址に破壊されている。

(床面・壁) 床面はほぼ水平で平坦である。壁高は北壁17cm、東壁10cm、南壁25cm。他に深さ20cmほどの浅い皿状の掘り込みがある。

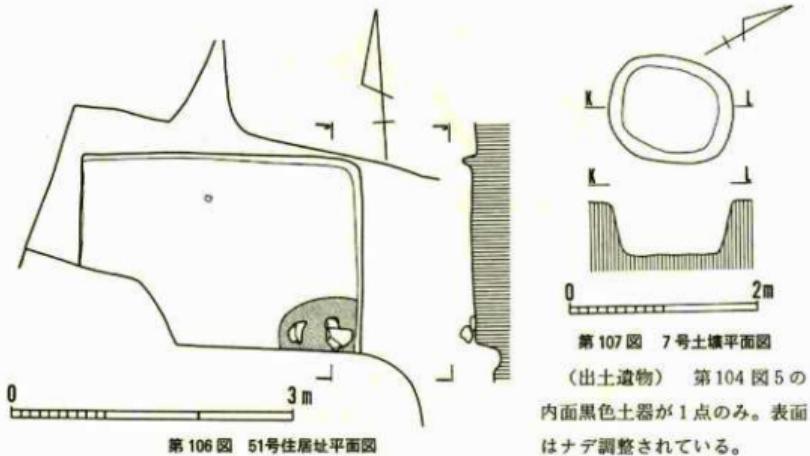
(出土遺物) 第104図1~4が出土土器で全て須恵器である。第105図の鉄鏃も出土した。

10. 51号住居址(第104・106図、図版13・57)

(形状・規模) 一辺が300cmほどの隅丸方形プランを呈すると思われる。

(カマド) 東壁に接して一部床面に焼土が見られ、カマドの痕跡と考えられよう。

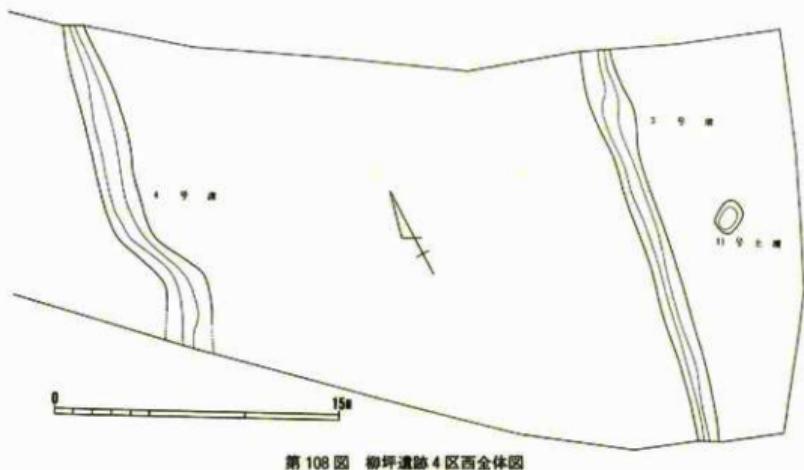
(床面・壁) 床面は平坦ではほぼ水平。壁は西壁ではほとんど立ち上がりがない。



11. 7号土壤 (第107図)

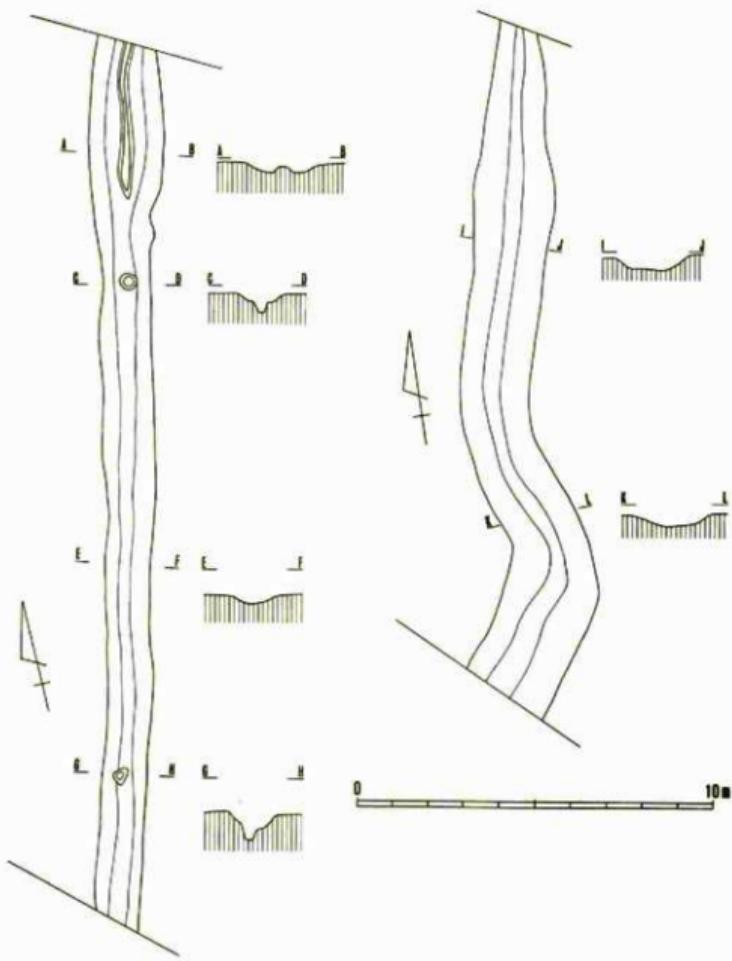
130 cm × 110 cm の楕円形プランを呈し、深さ60cmの土壤である。出土遺物はない。

第4節 4区の遺構と遺物



1. 3号溝 (第109図、図版14)

(形状・規模) 確認できた長さは約25mである。北から南へ向かって一直線に走っている。南北の高低差は130 cmほどである。溝の幅は狭いところで110 cm、広いところで200 cmある。



第109図 3号溝・4号溝平面図

深さは最も浅い所で30cm、最も深い所で100cm。溝は最も北の部分では2本になっており、すぐに1本に合流している。

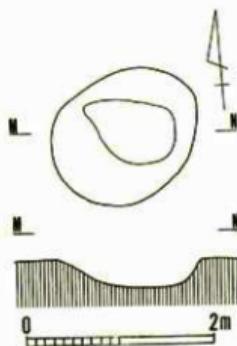
(出土遺物) 出土したものは、摩滅の著しい縄文土器が数片のみであった。溝の覆土の状況は明らかに平安時代以降のものであることを示していた。また溝の底付近には砂が堆積しており、何らかの水路として掘られた溝と考えられる。

2. 4号溝（第109図、図版14）

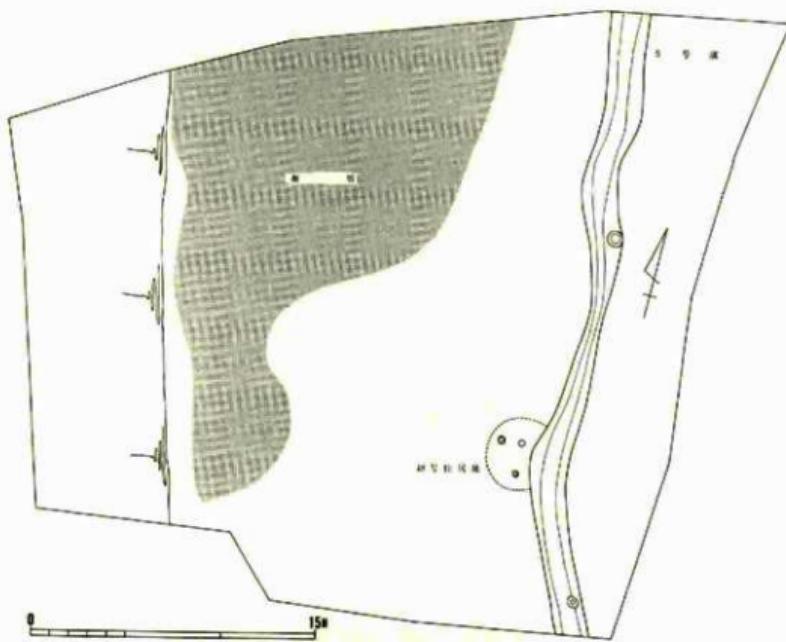
4号溝も3号溝とはほぼ平行して北から南へ走る溝である。しかし4号溝の方が幅が200cm前後と3号溝よりはかなり広い。また3号溝が直線的であったのに、4号溝は南側で屈折している。しかし覆土の様子は3号と4号は全く同じであり、ほぼ同時に掘られた水路であろう。なお南北の高低差は60cmほどである。

3. 11号土壙（第110図、図版14）

楕円形プランを呈し、径は180cm×130cm、深さは30cmを計る。覆土の様子は縄文時代の土壙と近いが、出土遺物が全くなかった。



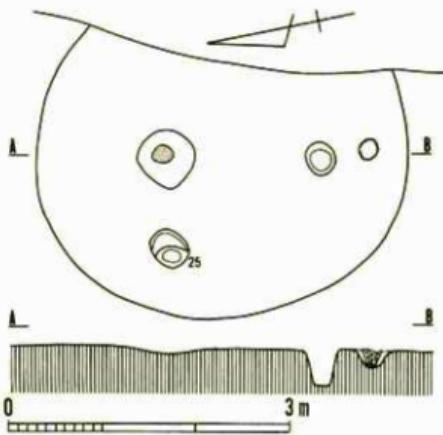
第110図 11号土壙平面図



第111図 緑坪遺跡4区東全体図

4. 48号住居址（第112・113図、図版15・43）

（形状・規模） 直径400cm前後の円形プランを呈すると思われるが、壁はないため、床面と思われる硬い面の範囲でプランの決定を行なった。東側を5号溝に切られている。



第112図 48号住居址平面図



第113図 48号住居址出土土器
(炉) 住居址中心から北寄りに径60cm、深さ5cmほどの浅い炉址を確認。焼土もわずかに残る。床下炉はない。

(床面) 本来の床面はほとんど破壊されている。わずかに硬い面を残し、南が5cmほど低くなっている。住居址南に埋甕が見られる。口縁部は破壊されていた。柱穴と思われるピットが2本だけ確認されている。

(出土遺物) 第113図が埋甕であり、他に遺物はない。ヘラ状施文具による懸垂文区画後に、綾杉状の沈線文、所謂「ハの字文」を施す。

5. 5号溝(第114図、図版15)

(形状・規模) 確認できたのは長さ34mの範囲で、最小幅60cm、最大幅200cm、最も深い所20cm、最も深い所60cmを計る。かなり屈折が激しい。南北の高低差は100cm。

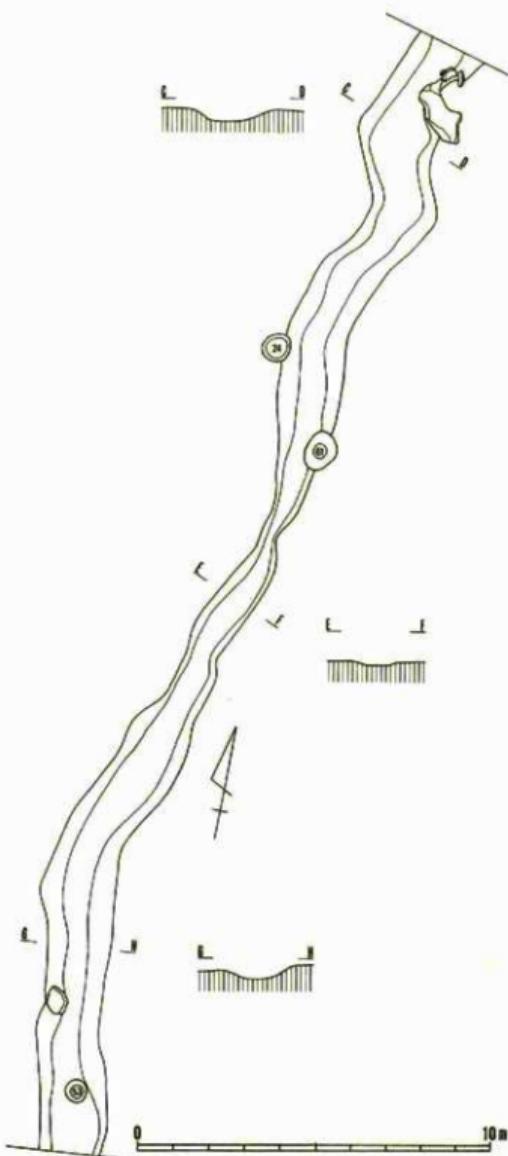
(出土遺物) 摧滅した縄文土器片が出土している。しかし5号溝も先の3号溝や4号溝と全く同じ性格であろう。溝が走る方向も同じであり、覆土の状態も同じである。やはり平安時代以降に掘られた水路であろう。

6. 砥層(第115~123図、図版14~15・43~47)

4区東の西側の谷に接して存在する砥層である。

(形状・規模) 北側は調査区域外であり、調査は行なえなかった。砥層が検出された範囲は、北辺約20m、東辺約30m、西辺約25mの三角形を呈する。中央部分は砥の分布がほとんどない所がある。

(砥の状態) 砥は人頭大のものと、拳大のものが主体であり、他は直径100cm以上の大なものも存在している。砥層は南に向かって傾斜しており、北と南の高低差は100cm以上ある。東西の方向では、西側がわずかに低くなっているものの、ほぼ水平である。西辺から更に西側へは、砥層は黒色土層中に急激に落ち込んでいるようで、そのまま谷になってしまふ。



第114図 5号溝平面図

(疊層の性格) はじめ疊層は人為的な配石造構ではないかと考えられた。それというのもほとんど摩耗を受けていない縄文土器片が無数に出土したからである。それも縄文時代中期末という限られた時期のものばかりであり、「配石址」という可能性が強くなった。しかし全体を発掘してみた結果、何ら人為的に石を配した痕跡がなく、ただの河原から縄文土器が出土しているという状況にしか見えなくなってきた。未発掘の北側に疊層は広がっていると思われるが、北側を調査しない限り別の見解は出せないと思う。おそらく縄文人たちは、自然の疊層を何らかの施設として利用していたのではないだろうか。出土する縄文土器はその結果と思われる。

(出土遺物) 疊層中からは多くの縄文土器が出土している。一括土器はほとんど存在せず、破片ばかりであるが、時代は縄文時代中期末に集中している。わずかに後期や晩期の土器も含むが、中期末の量に比べれば問題にはなるまい。ここで取り上げておきたいのも縄文時代中期末の土器群である。

今回出土した中期末の土器群は、その地文と文様モチーフが密接な関係をもっている。地文は大きく、縄文とそれ以外のも



第115図 4区縦断平面図

の2種類に大別される。つまり地文が縄文の土器はそれなりの文様モチーフが施され、地文が縄文以外の土器——主として沈線文——は、それなりの文様モチーフが施されるのである。そこまで沈線文の地文を有する土器をa型式、縄文を地文とする土器をb型式とし、更に分類を行なった。

○ a 1 型式 第116図1~3。これらは同一個体と思われる。口縁部に粘土紐の貼付による連結する弧線文を施す。隆線で表現されるのは、この弧線文のみで、他は沈線文で表現されている。体部の懸垂文は“匚”状のもので2本の沈線で表現され、口縁の弧線文の連結部分から垂下している。地文はヘラによる「ハの字文」である。20の土器も同一個体かもしれない。口縁部が極端に内湾している。極めて類例の少ないめずらしい型式である。

○ a 2 型式 第116図4~11・15。口縁部に沈線文による弧線文が施される型式である。弧線文は各々独立しており連なってはいない。口縁は垂直に立ち上がるも（6）もあるが、他はキャリバー形に外反している。体部も全て沈線文で文様表現されており、懸垂文は“匚”状のものが一般的なようである。地文はヘラによる「ハの字文」である。沈線の表現も、幅が広くて彫りの浅いものが多いようで、輪郭は明瞭ではない。

○ a 3 型式 第116図17~18、第117図12~14・15、第123図1。口唇直下に1~2本の沈線文をめぐらし、体部は“匚”状の懸垂文によって文様区画されている。第116図18のように、間に“匚”状の懸垂文を入れているものもある。地文は「ハの字文」である。懸垂文間の無文帯は幅が狭いのが特徴である。口縁は直線的に立ち上がる。第123図1のように、ほとんど頬のない器形がa 3型式の土器の一般的な形のようである。

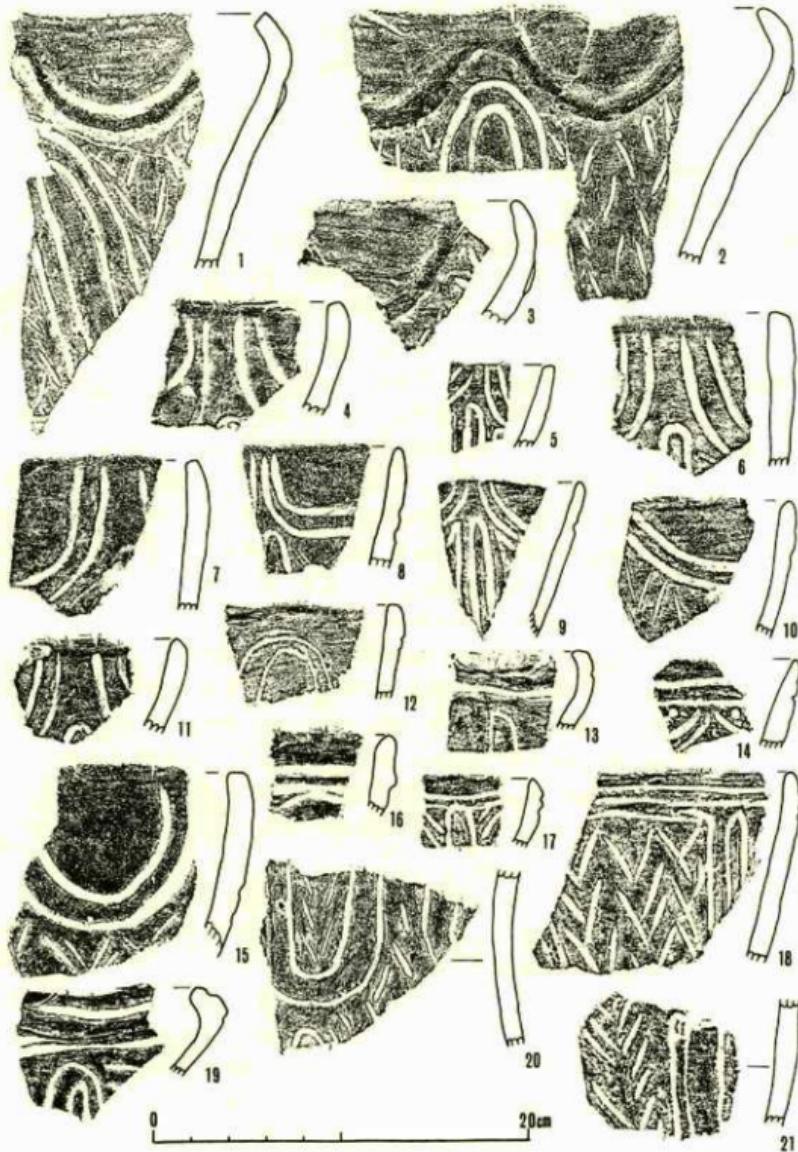
○ a 4 型式 第117図1。口縁に横長の横円文を沈線で施す。懸垂文は“匚”状のもので、地文は「ハの字文」である。この土器の場合、極めて細い沈線で表現されているが、他に太い一般的な「ハの字文」の例が頭無遺跡16号（末木、1975）と居平遺跡3号（藤森、1965）で、刷毛目で表現された例が頭無遺跡1号（末木、1975）で出土している。また、別型式ではあるが地文に縄文を使用しためずらしい例が尖石遺石（宮坂、1957）で出土している。

○ a 5 型式 第117図13~16。口唇直下に1本の沈線文をめぐらす。懸垂文区画は為されていない。地文は「ハの字文」である。

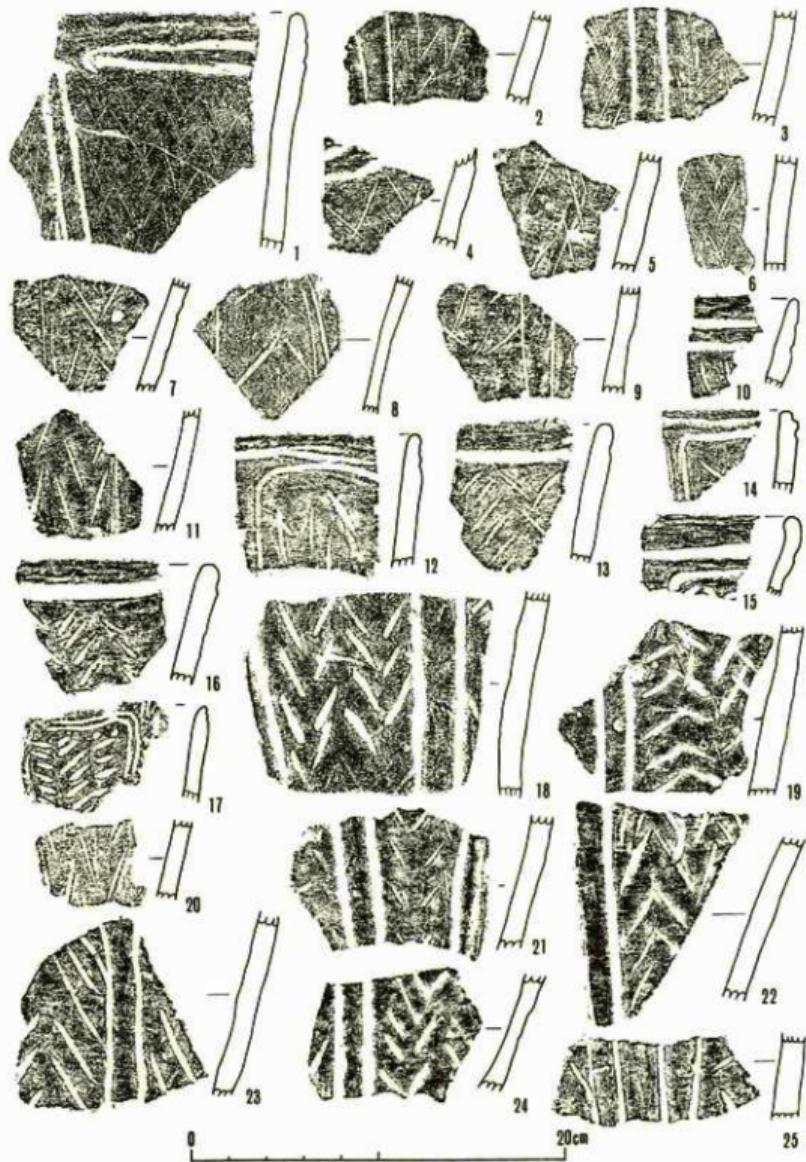
○ a 6 型式 第118図8~10。懸垂文を隆線で表現する土器を一括する。8はa 4型式の口縁に見られたのと同じ「横長横円文」を施している。9・10の口縁は不明である。地文は「ハの字文」と蛇行する沈線文が施されている。

その他に体部の破片が数多く出土しているが、口縁の様子は不明である。しかし「ハの字文」の土器が圧倒的に多いのがa型式の特徴である。これらa型式の大部分は、従来の編年で言えば曾利V式土器と把えられてきた土器群であり、一応当地域の縄文中期終末の編年的位置が与えられているものである。しかし a 1型式や a 2型式は従来の曾利V式の中には極めて共伴例の少ない型式である。また今回の出土土器の中には、本県で曾利V式土器中で最も新しい段階と考えられている金の尾遺跡出土例（末木、1980）のような型式は存在しない。

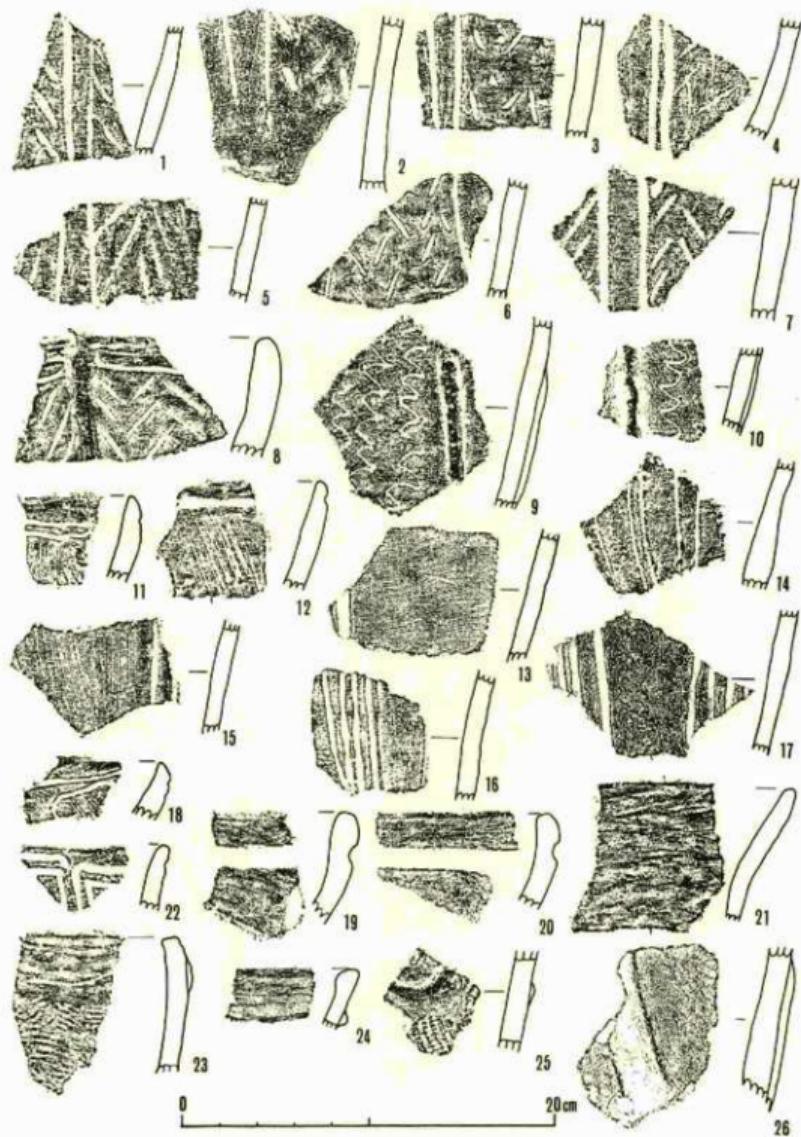
今度はb型式について見てみる。



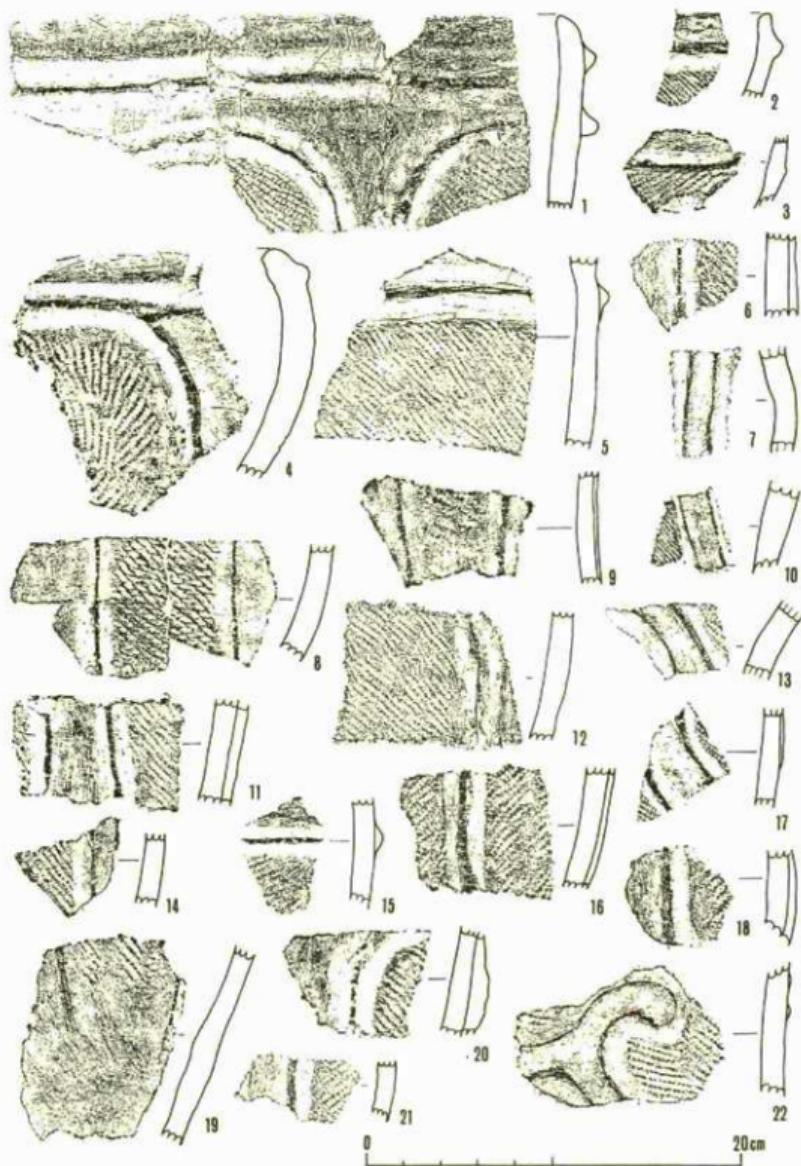
第116図 4区縄層出土土器 (1)



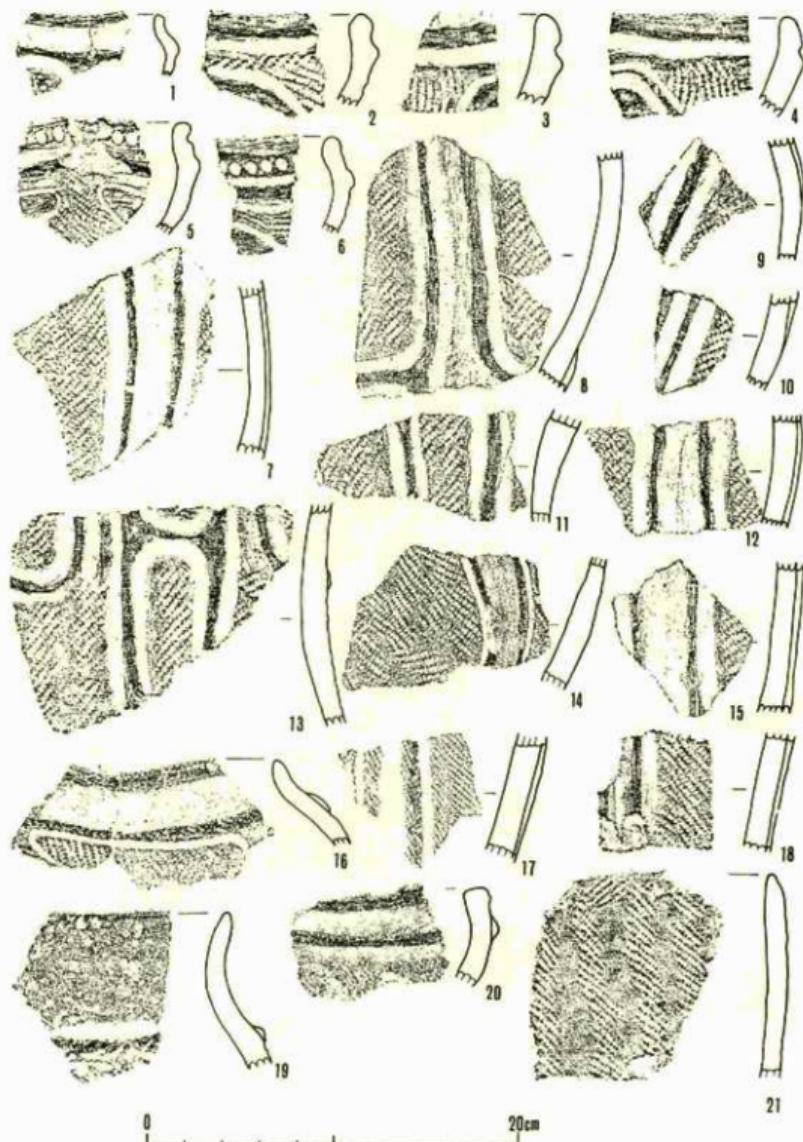
第117図 4区縄層出土土器 (2)



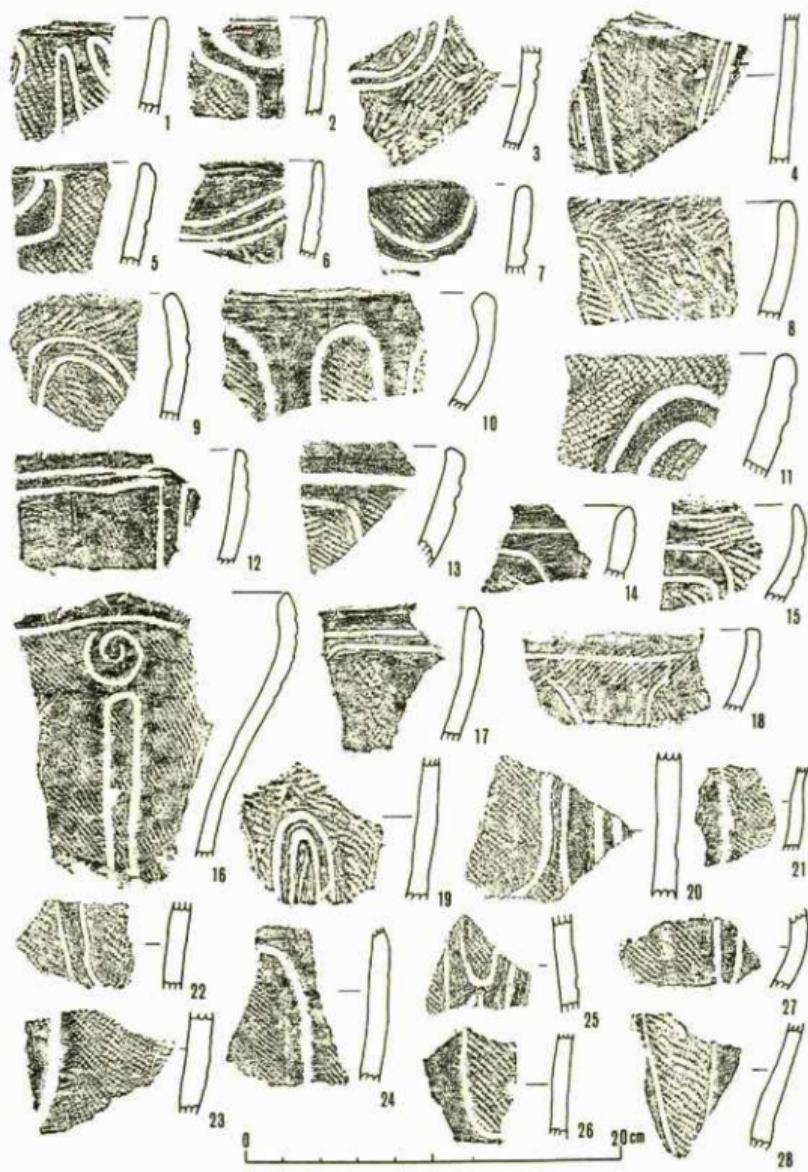
第118図 4区埋層出土土器 (3)



第119図 4区縄層出土土器 (4)



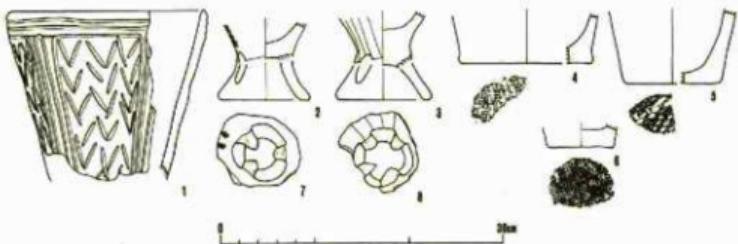
第120圖 4區縕層出土土器 (5)



第 121 図 4 区 離層出土土器 (6)



第122図 4区礎層出土土器 (7)



第123図 4区縄層出土土器 (8)

○ b 1型式 第119図1。口縁に断面半円形の隆線を1本めぐらして口唇との間に幅の狭い無文帯を形成する。体部は“匁”状の懸垂文区画を行ない、内側に縄文を施している。縄文施文後に隆線の脇をつぶしてなぞる。口縁は垂直に立ち上がっている。

○ b 2型式 第119図4。まず体部に“匁”状の懸垂文区画を行なう。断面半円形の隆線を使用する点はb 1型式と変わらない。次に“匁”状の懸垂文の上端同志を隆線で連結させている。縄文の表現方法はb 1型式と同様である。口縁は極端なキャリバー形を呈している。

○ b 3型式 第119図8。唯一、懸垂文間の幅広い無文帯を有する土器である。隆線は断面三角形を呈し、幅は非常に狭い。口縁部はないものの、口縁の無文帯下をめぐる1本の隆線から直接に、懸垂文が垂下するものと思われる。隆線の脇はやはり縄文を磨り消している。

○ b 4型式 第118図25・26、第119図13・17・20・22。断面三角形あるいは半円形の隆線により、体部に渦巻文あるいは曲線的モチーフを表現するもの。隆線の脇はなぞって縄文を磨り消している。

○ b 5型式 第119図12・16・18、第120図7～15・18。断面が台形の隆線で文様表現されるものを一括する。隆線の脇はなぞられ磨消縄文となっている。14はヘラによって沈線が引かれているめずらしい例である。

○ b 6型式 第120図1～3。口唇直下に太い沈線を1本めぐらし、以下も太い沈線で文様区画を行なっている。磨り消し縄文が多用されている。キャリバー形口縁を呈する。

○ b 7型式 第120図4。口唇直下に太い沈線を1本めぐらし、体部は断面半円形の隆線で文様区画を行なっている。やはりキャリバー形口縁を呈する。

○ b 8型式 第121図1・3・4・7。口縁に弧状の沈線文を施す。磨り消し縄文は発達してはいない。

○ b 9型式 第121図2・5。体部に“匁”状の懸垂文区画を行なう。磨り消し縄文は行なわれてはいない。

○ b 10型式 第121図9～11。体部に“匁”状の懸垂文区画を行なう。磨り消し縄文は発達してはいない。キャリバー形口縁を呈する。

○ b 11型式 第121図12～18、第122図4。口唇直下に1本の沈線をめぐらす。口唇と沈線の間は縄文を施さない。以下体部は種々の懸垂文区画を行なっている。やはり磨り消し縄文は

あまり見ることはできない。

以上 b 型式は地文として縄文を用いているにもかかわらず、文様表現が隆線で行なわれるものは磨り消し縄文が発達しているものの、文様表現が沈線で行なわれるものは磨り消し縄文があまり発達してはいないことが判明した。

a 型式と b 型式で、本県で確認された縄文時代中期末の住居址から普遍的に出土するのは、a 3 型式が最もボビュラーであり、他に a 4 型式も伴う。そしてこれらの a 型式に伴出する b 型式は、b 6 型式、b 8 ~ b 11 型式までで、他の型式はほとんど伴ってはいない。それ故、この疊層の時期決定においては、県内の縄文時代中期末の土器編年に若干の再検討が必要となってくると思われる。

他の時期の出土遺物としては、後期と思われるものが、第 118 図 12、第 122 図 1 ~ 3・29などである。いずれも後期初頭のものであろう。唯一の晩期の土器が第 122 図 30 であり、晩期末のものである。

第 5 節 5 区の遺構と遺物

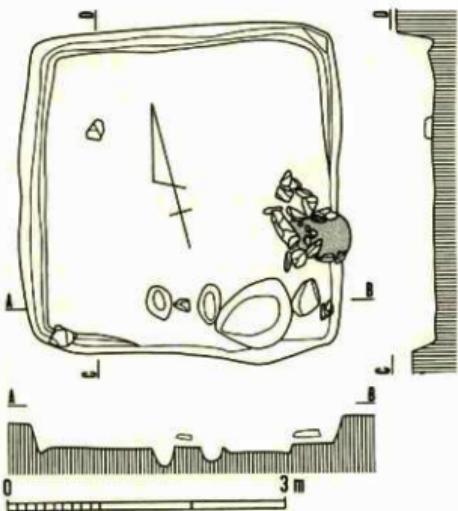
1. 26 号住居址（第 124・126・127 図、図版 16・48）

（形状・規模） 四角形プランを呈する。規模は東壁 330 cm、西壁 307 cm、南壁 310 cm、北壁 316 cm。

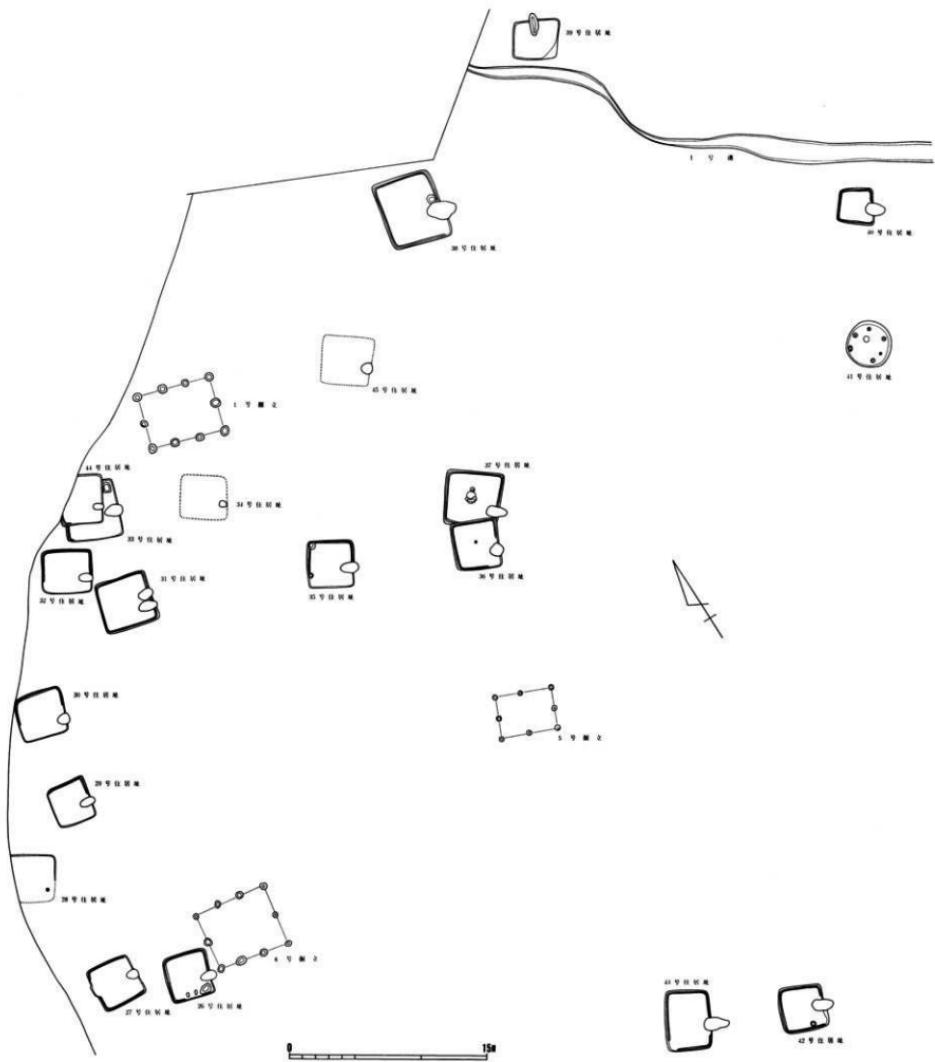
（カマド） 東壁中央より南寄りに石組みカマドが設けられている。袖石は南側が残りが良い。焼土は全く検出されなかった。掘り込みは東西 60 cm、南北 70 cm の径を計る。天井石は無い。

（床面・壁） 床面は平坦であり、ほぼ水平。周溝はカマド部分と南東コーナー付近を除き、ほぼ一周している。幅は 10 ~ 15 cm、深さは 10 cm 前後である。壁は周溝からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁 30 cm、西壁 30 cm、南壁 26 cm、北壁 49 cm を計る。

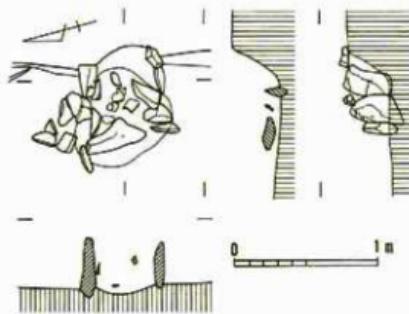
（その他の施設） 住居址の南壁の中央から、内側へ 30 cm いった所に、2 本のビットが 30 cm の間隔をとって掘り込まれている。そこは周溝も切れており、出入口に関係するビットと思われる。そのビットより東側に浅い皿状のビットが掘られている。90 cm × 60 cm の



第 124 図 26 号住居址平面図



第125圖 柳坪遺跡5區全體圖



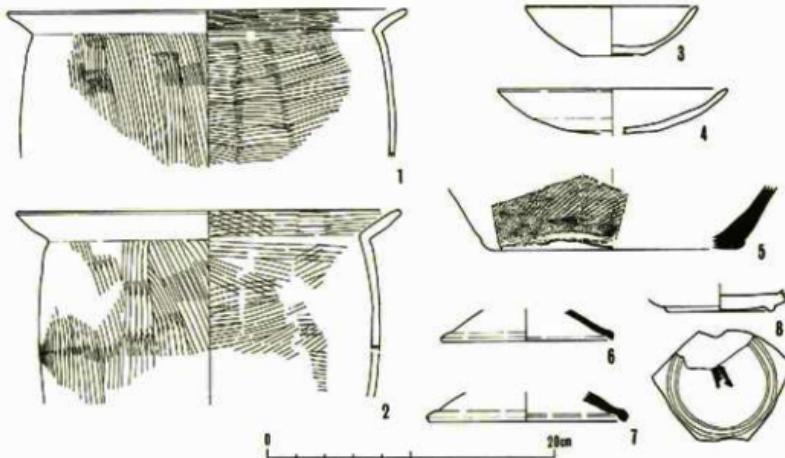
第126図 26号住居址カマド平面図
1も2もカマド内より出土している。
ど薄い壺である。1も2もカマド内より出土している。

○壺形土器 3は底部ヘラ削りされている。口径11.8cm、器高3.4cm、底径2.4cmを計る。胎土は砂が多く、茶褐色を呈する。内外面共にナデ調整。4は口径15.8cm。底部付近は回転ヘラ削り。他はナデ。茶褐色を呈し、胎土はきめが細かい。8は高台杯形土器の底部。墨書きで、「月」の字が見える。

○須恵器 5は大壺底部で、底径17cm。6と7は蓋形土器である。6は口径13.4cm、7は口径11.8cm。

2. 27号住居址（第128・129図、図版16・48）

（形状・規模） 開丸方形プランを呈し、西壁の一部に張り出しをもつ。規模は東西360cm、南北360cmを計る。



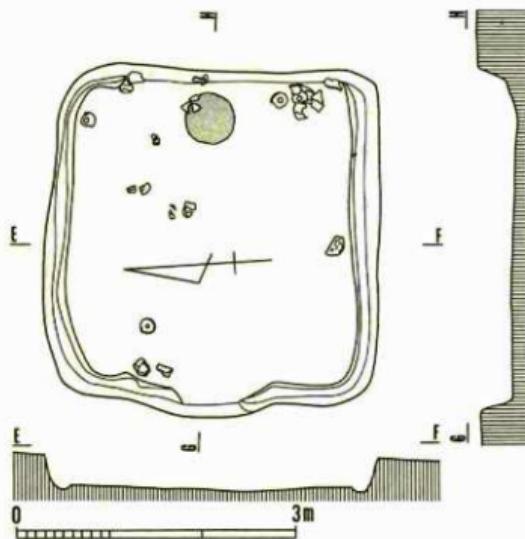
第127図 27号住居址出土土器

(カマド) 東壁中央に面して、直径50cmほどの焼土が床面に確認できた。カマドの跡であろう。

(床面・壁) 床面はほぼ水平。周溝は西の張り出しと東のカマドの部分以外に掘り込まれている。壁は周溝からほぼ垂直に立ち上がる。

(出土遺物) 第129図1は口径26.8cm、残存高35.8cmの甕形土器である。内外面刷毛調整。2は底部糸切りで表面は刷毛でナデを行なう。4と5の甕形土器は内面に暗文が見られる。4は底部ヘラ削り。5もヘラ削りだが、わずかに糸切り痕が残る。6と7は内面黒色の甕形土器で、共に表面はナデ、底部は糸切りである。

6には「長」の墨書きが見られる。8も内面黒色の高台杯形土器で表面はナデ。10も内面黒色で皿形土器である。底部はヘラ削りされており、表面はナデ。6～8、10の内面黒色でよく研磨され光沢をはなつ。9は皿形土器で底部はヘラ削り。内外面共にナデ。本住居出土の甕と皿は共に玉縁口縁を呈しているものが多い。



第128図 27号住居址平面図

3. 28号住居址（第130図）

(形状・規模) 方形プランを呈すると思われるが、西側が調査区域外のうえ、南側は削られている。規模は不明である。カマドも確認できない。

(床面・壁) 床面は北壁付近しか残っていない。ほぼ水平である。壁高は北壁で20cmほど。ピットが1本発見されているが、性格は不明。

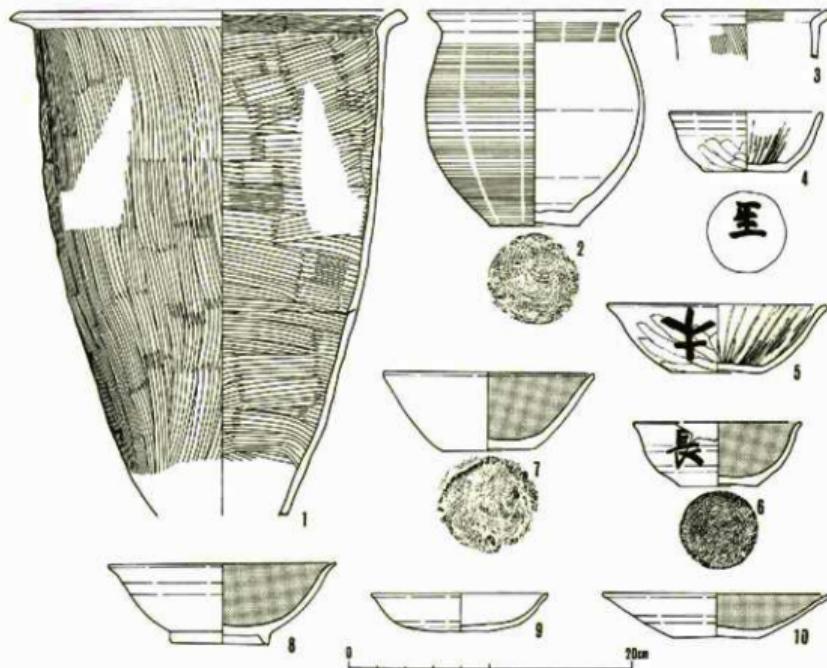
(出土遺物) 全く無し。

4. 29号住居址（第131・132・134図、図版17）

(形状・規模) 隅丸方形プランを呈する。東西310cm、南北320cmの規模で、ほぼ正方形である。

(カマド) 東壁のはば中央に設置されている石組みカマドであるが、石組みはほとんど破壊されている。焼土は直径60cmの範囲で残っている。

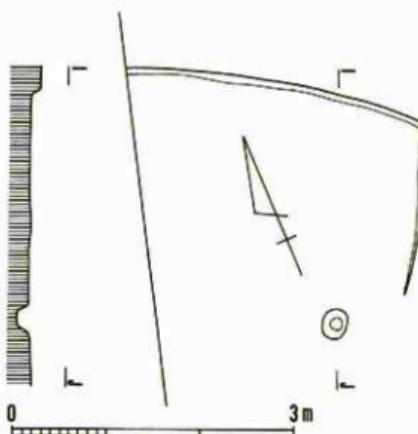
(床面・壁) 平坦な床面であるが、南西方向へ10cmほど低くなっている。周溝は北壁と東



第129図 27号住居址出土土器

壁の北側にそって掘り込まれている。幅は25~30cm、深さは5~10cmである。壁高は東壁が20cm、西壁が10cm、南壁が10cm、北壁が20cm。

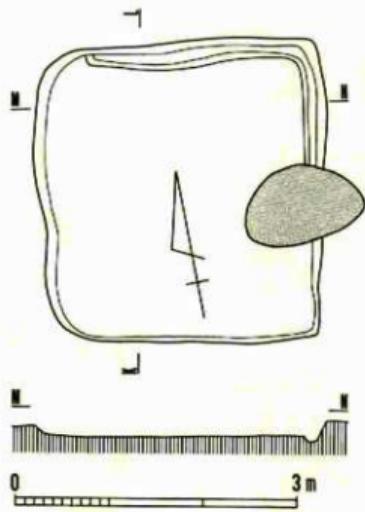
(出土遺物) 第134図1のみが出土遺物である。口径27cmの變形土器である。残存高5.2cm。色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒が多く含み粗い。外面の口縁はナデ、以下は刷毛調整。内面は全て刷毛調整である。口唇は体部と同じ厚さである。



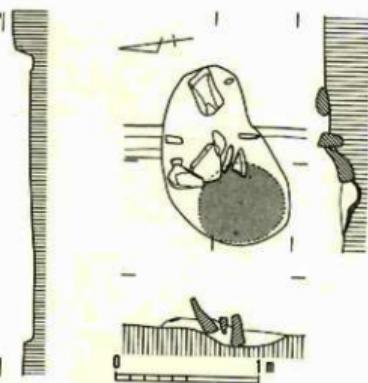
第130図 28号住居址平面図

5. 30号住居址（第133~135図、図版17・56）

(形状・規模) 隅丸方形プランを呈する。規模は、東壁325cm、西壁300cm、南



第131図 29号住居址平面図



第132図 29号住居址カマド平面図

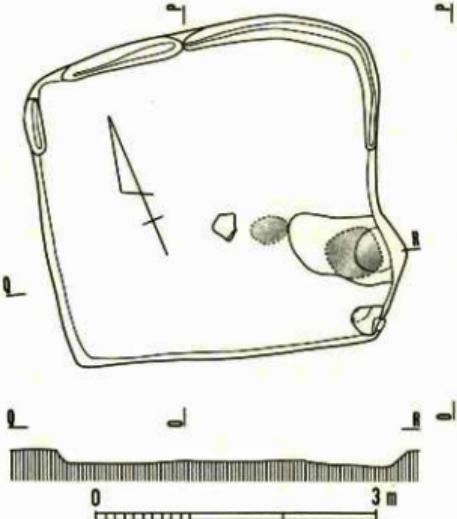
壁 315 cm、北壁 360 cm。

(カマド) カマドは大部分が破壊されており、掘り込みと焼土が残るのみである。両袖は全く残っていない。

掘り込みの規模は、東西 00 cm、南北 70 cm、深さ 20 cm ほどで、焼土も直径 50 cm の範囲で残っている。

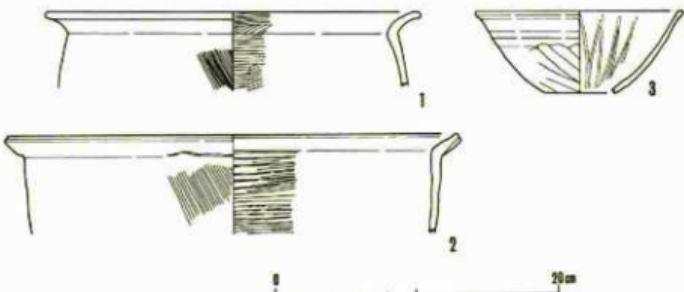
(床面・壁) 床面は住居址の中心部分が周囲より若干高くなっている、高低差は 5 cm ほどである。周溝は東壁の北側から北壁を経て西壁の北側までの範囲に掘られている。幅は 10~27 cm、深さは 10 cm 前後である。壁は全体的に低くて、東壁が 15 cm、西壁が 14 cm、南壁が 20 cm、北壁が 15 cm の高さである。

(出土遺物) 第134図 2と3の土器と、第135図の石製の纺錘車を出土している。



第133図 30号住居址平面図

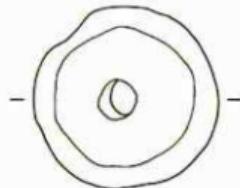
第134図 1 は口径 32 cm、残存高 7 cm の壺形土器である。口唇は折り返されて肥厚している。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂を多く含み粗い。外面は口縁部をナデ調整、以下を刷毛調整しており、内面も口縁部をナデ調整、以下を刷毛調整している。2 は杯形土器で口径 14.6 cm、器



第134図 29・30号住居址出土土器

高は5.7cm、底径は5.2cm。色調は茶褐色を呈する。胎土はきめが細かく焼成も良好。外面はナデの後にヘラ削り調整。内面はナデの後に暗文を施している。

第135図は軽石製の紡錘車である。重量は53g。



6. 31号住居址（第136～138図、図版17・49）

（形状・規模） 残丸方形プランを呈する。規模は東西400cm、南北380cm。

（カマド） 東壁の中央に石組みカマドが設けられている。遺存状態も良好で、両袖石はほぼ完存しているようである。しかし、袖石の並びは壁の線と直交していない。掘り込みの規模は127cm×70cmの大きさである。内部には、東側に拳大の焼土塊が残るのみであった。

（床面・壁） 床面はほぼ平坦であるが、東側へ若干低くなっている。西側との高低差は10cm程度である。周溝はカマドの部分を除いて住居址内を一周している。幅は20～35cm、深さは5～10cmを計る。壁は周溝から、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、東壁15cm、西壁20cm、南壁20cm、北壁30cmである。

（その他の施設） 住居址南東コーナーとカマドの中間に60cm×50cmの径で深さ30cmほどの皿状のピットが掘られている。

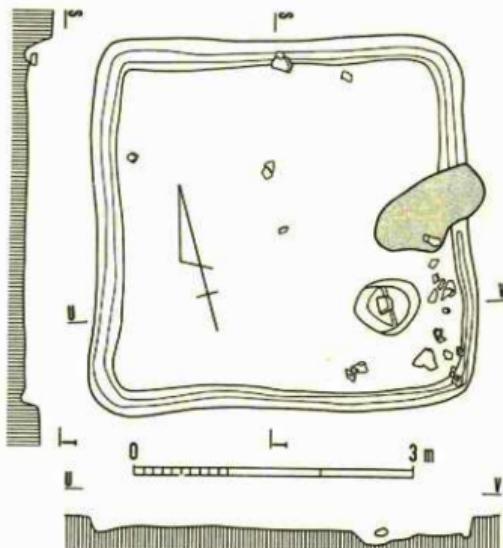
（出土遺物） 第138図に示したものが出土土器である。土師器の壺形土器、环形土器、皿形土器を出土している。

○壺形土器 1は口径32cm、残存高6cmで、色調は暗褐色を呈する。胎土は砂を多く含み粗く、焼成は良好。外面は口縁部がナデ調整され、以下は刷毛調整。内面は全面刷毛調整。2は小型の壺であるが、口径は13cm、残存高5.5cmを計る。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂を含み粗い。内外面共にナデ調整。

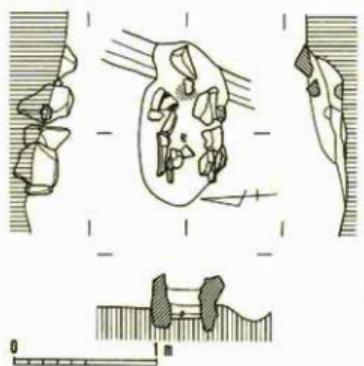
○环形土器 3は内面黒色土器である。口径13.6cm、器高4.2cm、底径5.4cmで底部は糸切



第135図 30号住居址出土石製紡錘車



第136図 31号住居址平面図



第137図 31号住居址カマド平面図

（床面・壁） 床面はかなりの凹凸がある。しかし全体的に見るとほぼ水平であり傾斜してはいない。周溝は東壁の南側と南壁の大部分を除いて周囲に掘り込まれている。幅は10~38cm、深さは5~15cmを計る。壁は全体的に低く、東壁が20cm、西壁が20cm、南壁が20cm、北壁が10cmである。また本住居址は覆土中より多くの炭化材を出土している。とくに住居址の東半分からまとまって発見されているが、本住居址に伴うものとは考えられない。炭化材の径は10cm前後である。

り。外面は黄褐色を呈し、ナデ調整されている。胎土はきめが細かい。内面黒色でよく研磨され光沢をはなつ。6も内面黒色土器であり底部は糸切り。外面は暗褐色を呈し、ナデ調整されている。4は口径12.5cm、器高4.6cm、底径3.6cmを計る。色調は黄褐色を呈し、胎土はきめが細かい。外面はナデの後にヘラ削り、内面はナデ。底部は糸切りである。5は口径12cm、器高4.4cm、底径4.4cm。茶褐色を呈し、胎土は密である。外面はナデの後にヘラ削り、底部もヘラ削り。内面はナデ調整。坏形土器は3~5に見られるよう

に玉縁口縁を呈している。

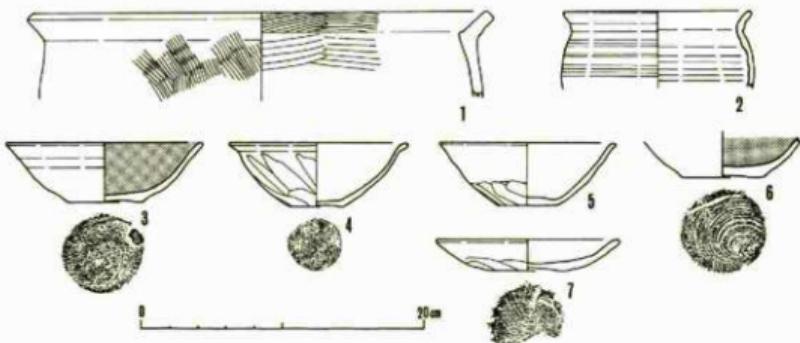
○皿形土器 7は口径12.6cm、器高2.2cm、底径5cmを計る。色調は茶褐色を呈し、胎土はきめが細かい。外面はナデの後にヘラ削り。内面はナデ。底部は糸切りである。

7. 32号住居址（第139・140図、図版18・49）

（形状・規模） 四角形プランを呈する。規模は東壁300cm、西壁280cm、南壁310cm、北壁350cm。

（カマド） 東壁の南東コーナー寄りのところに直径40cmほどの焼土が見られる。カマドの跡と思われる。

（床面・壁） 床面はかなりの凹凸がある。しかし全体的に見るとほぼ水平であり傾斜してはいない。周溝は東壁の南側と南壁の大部分を除いて周囲に掘り込まれている。幅は10~38cm、深さは5~15cmを計る。壁は全体的に低く、東壁が20cm、西壁が20cm、南壁が20cm、北壁が10cmである。また本住居址は覆土中より多くの炭化材を出土している。とくに住居址の東半分からまとまって発見されているが、本住居址に伴うものとは考えられない。炭化材の径は10cm前後である。



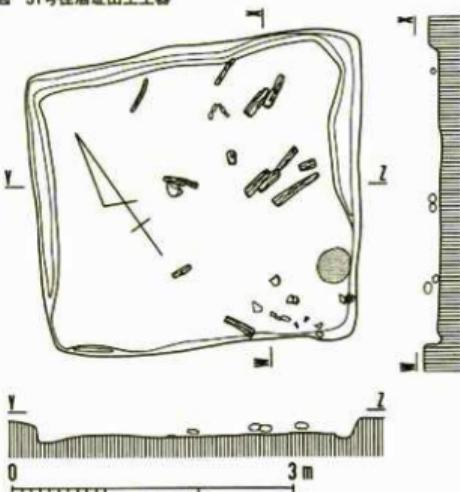
第138図 31号住居址出土土器

(出土遺物) 第140図に示す土器
器の變形土器を2個体出土している。
1は口径10.4cm、器高9.5cm、底径
5.4cmの小型の變形土器である。色調
は茶褐色を呈し、胎土は砂を含み粗い。
内外面共にナデ調整が行なわれている。
底部は糸切りである。2は變形土器の
底部である。底径は10cm、残存高7.8
cm。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂粒
を多く含み粗い。内外面共に刷毛調整
が行なわれているもの、磨耗が激し
く不鮮明である。底部も木葉痕が見え
るが明瞭ではない。

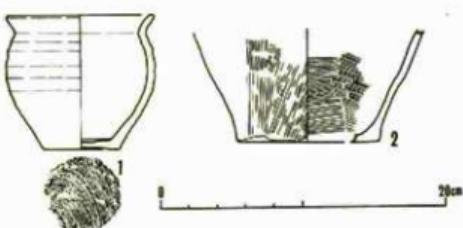
8. 33号住居址 (第141~143図、 図版18・49)

(形状・規模) 四丸方形プラン
を呈するものと思われる。北西のコ
ーナーは農道にかかって調査できな
かった。規模は東壁が380cm、南壁
が420cmで、およそ一辺が400cm
前後の方形プランと思われる。

(カマド) 東壁の中央部分に接
して、床面に焼土と、それを挟むよ
うに2本の溝状の掘り込みが並んで



第139図 32号住居址平面図



第140図 32号住居址出土土器

いる。焼土は径が40cmほどである。2本の溝状の掘り込みはカマドの両袖石を埋めこむための掘り込みと思われる。煙道と思われる壁の一部が張り出している。これらがカマドの跡であろう。石組みに使われた石材はその位置を全くとどめていない。

(床面・壁) 床面はほぼ平坦であるが、東側へわずかに傾斜している。東西の高低差は10cm程度である。周溝はない。住居址南側は44号住居址が重複しており、その部分は貼り床である。壁高は東壁が15cm、西壁が12cm、南壁が30cm、北壁が30cm。

(その他の施設) 住居址の北東コーナーと南東コーナー、それぞれの付近にピットが集中して掘られている。柱穴と考えられるものは存在しなかった。

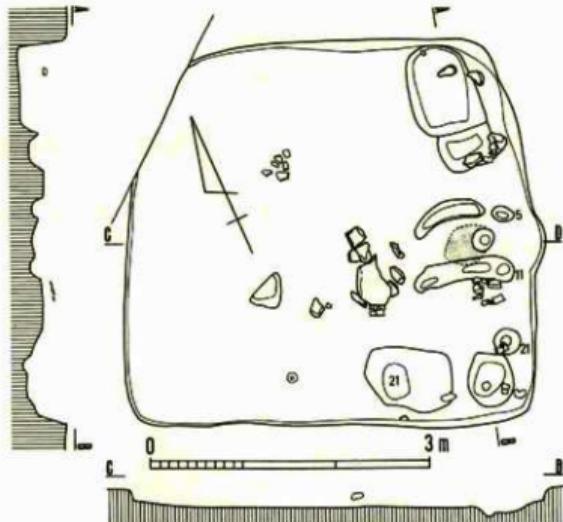
(出土遺物) 第142図に示したものが出土遺物である。土師器の壺形土器と环形土器、灰釉陶器、須恵器などが出土している。

○壺形土器 1は口径29.2cmで赤褐色を呈する。胎土は砂を多く含み粗い。表面は口縁がナデ、以下が刷毛調整である。内面の口縁は刷毛調整した後にナデを行なっている。以下は刷毛調整。2は小型の壺で口径は13.8cm。胎土は小石を含み、とても粗い。色調は赤褐色を呈する。表面の口縁部はナデ、以下は刷毛調整。内面は全て刷毛調整。

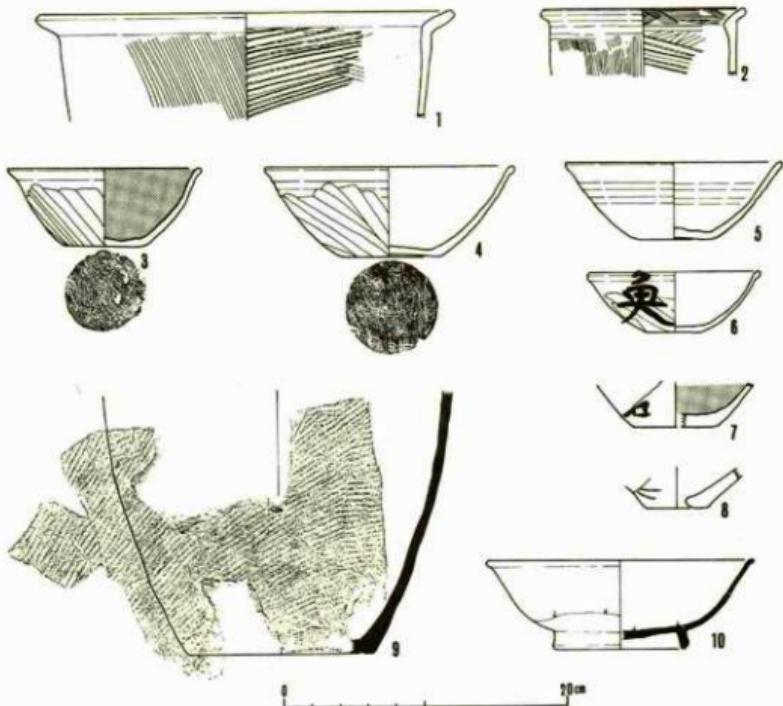
○环形土器 3は内面黒色土器である。口径は13.8cm、器高は5.5cm、底径は5.4cm。表面は赤褐色を呈する。内面の黒色は光沢をもたらす明瞭に残る。表面はナデとヘラ削り、底部は糸切り。4は口径17.6cm、器高6.3cm、底径7cmで、茶褐色を呈する。表面はナデとヘラ削り、内面はナデ、底部は糸切りである。5は口径が15.4cm、器高が5.4cm、底径が5cmで茶褐色を呈する。内外面共にナデ調整、底部はヘラ削りされている。6は「魚」の墨書きを有する。口径11.8cm、器高4.2cm、底径3.8cm。表面はナデとヘラ削り、内面はナデ、底部は糸切り。7も内面黒色土器で墨書きを伴う。字は「石?」か「名?」か。底部はわずかに糸切りの痕を残す。

○灰釉陶器 10は口径が18.6cm、器高が6.2cm、底径が8.6cm。施釉は刷毛塗り。内外面に施釉される。

○須恵器 9は須恵器の大甕の胸下部である。底径13cm、残存高18cm。表面のみクタキによる調整が行



第141図 33号住居址平面図

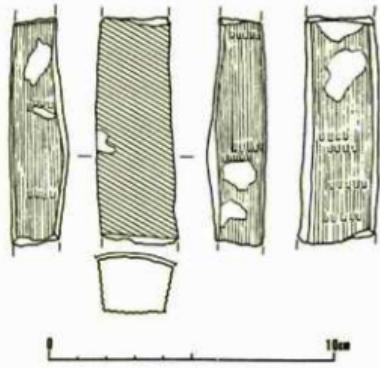


第142図 33号住居址出土土器

なわれている。その他、8の瓶形土器があるが、少々古い時代のものと思われる。また第143図の砥石も出土している。

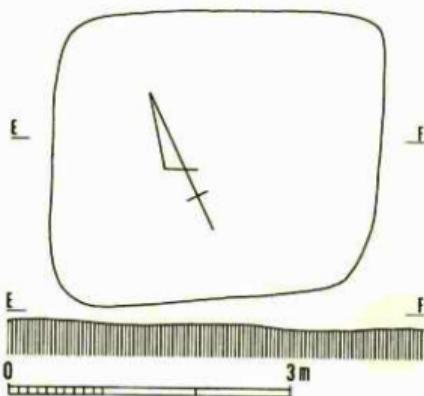
9. 34号住居址（第144・145図）

（形状・規模） 隅丸方形を呈するものと思われる。規模は一辺が300cm前後ほどあると考えられる。壁は完全に削られており、住居址の範囲は床面と思われる硬くしまった面の範囲でとられたわけである。カマドの痕跡も全くなし。周溝も存在しなかったものと思われる。確認した範囲内で、床面は東側へわずかに傾斜しており、西との高低差は15cmほどである。



第143図 33号住居址出土砥石

（出土遺物） 床面から土師器の皿形土器が唯一出土している。第145図に示したものがそ



第144図 34号住居址平面図



第145図 34号住居址出土土器

れである。内面は黒色で光沢をはなつ。表面は茶褐色を呈している。口径 13.4 cm、器高 2.6 cm、底径 5 cm。表面はナデ調整、底部の状態は小片のために不明である。表面に判読が不可能ではあるが、墨書きが見られる。

10. 35号住居址（第146～148図、図版18・49）

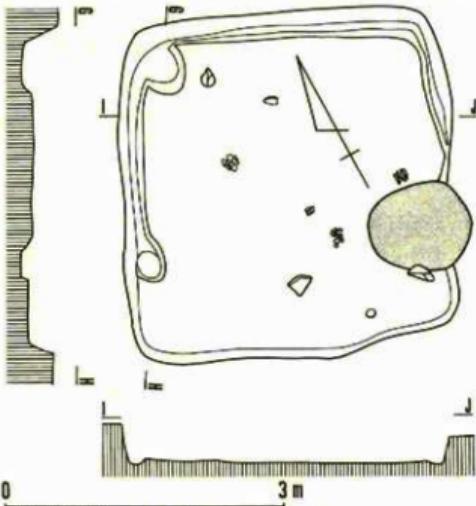
（形状・規模）隅丸方形プランを呈する。規模は、東壁が 320 cm、西壁が 340 cm、南壁が 340 cm、北壁が 300 cm。

（カマド）東壁の中央より南寄りに石組みカマドが設けられている。残存している袖石自体の遺存状態は良いものの、かなり多くの部分が抜き取られているものと考えられる。焼土の残りも良い。掘り込みの規模は 75 cm × 90 cm を計る。

（床面・壁）床面はほぼ平坦であるものの、北側へわずかに傾斜している。南との高低差は 10 cm 前後ある。周溝は東壁から北壁、西壁にかけて掘られており、南壁側には無い。幅は 10 ~ 20 cm、深さは 5 ~ 10 cm 程度。壁高は東壁が 25 cm、西壁が 25 cm、南壁が 25 cm、北壁が 30 cm ある。

（その他の施設）北西コーナーと西壁の南寄りのところに、各々ピットが 1 本づつ掘り込まれている。機能は不明である。

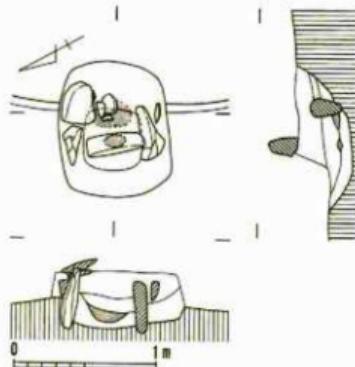
（出土遺物）第148図に示したものが本住居址の出土土器である。土師器の壺形土器と皿形土器、須恵器の环形土器を出土している。本遺跡で確認された平安時代住居址の中でも、最も古い段階の土器を出土し



第146図 35号住居址平面図

ている。

○変形土器 1はカマド内より出土した。口径が26.4cm、残存高が14cm。色調は茶褐色を呈し、胎土はやや粗めである。表面は口縁がナデ調整、以下が刷毛調整。内面は全面刷毛調整である。口唇は体部と同じ厚さしかない。2は小型の変形土器である。口径は10cm、器高は8.8cm、底径は3.3cm、色調は茶褐色を呈する。胎土には砂が多く含みザラザラしている。表面の口縁付近はナデ調整、以下は刷毛調整。内面は全面刷毛調整である。底部には木葉痕が残る。



第147図 35号住居址カマド平面図

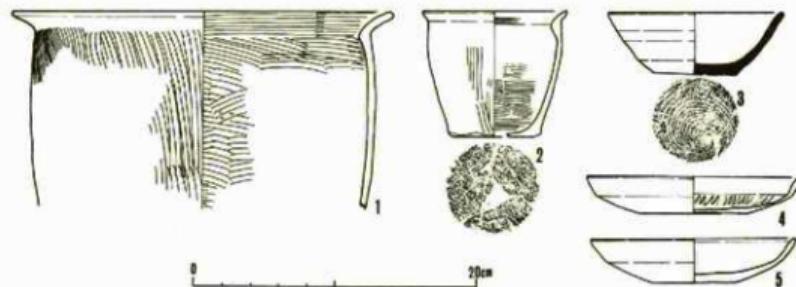
○皿形土器 4はカマド内より出土した。口径は14.8cm、器高は2.6cm、底径は7.4cm。器形は1段頸れており、表面はその頸れから上がナデ調整、下が2段に分け底部まで回転ヘラ削りを行なう。内面はナデ調整後に、頸れより下の部分に暗文を施している。色調は茶褐色を呈し、胎土はきめが細かい。5も4とほとんど同じ形状の皿形土器である。口径が14.2cm、器高が3cm、底径が6cm。表面の頸れより上はナデ調整、以下は2段に分け底部まで回転ヘラ削りを行なう。内面は全面ナデであるが4の土器のような暗文は無い。色調は茶褐色を呈し、胎土はきめが細かい。やはりカマド内出土。

○須恵器 3は須恵器の环形土器である。口径は12.2cm、器高は4.3cm、底径は6cm。色調は灰白色を呈する。内外面ナデ調整で、底部は糸切りである。

11. 36号住居址（第149・150・152図、図版19・49）

（形状・規模）隅丸方形プランを呈する。規模は東西が330cm、南北も330cmでほとんど正方形といってよい。37号住居址を切っている。

（カマド）東壁の中央より南寄りのところに石組みカマドが設けられている。両袖石は良好に遺存している。掘り込みの規模は140cm×80cmで、内部には焼土は見られなかった。ただ



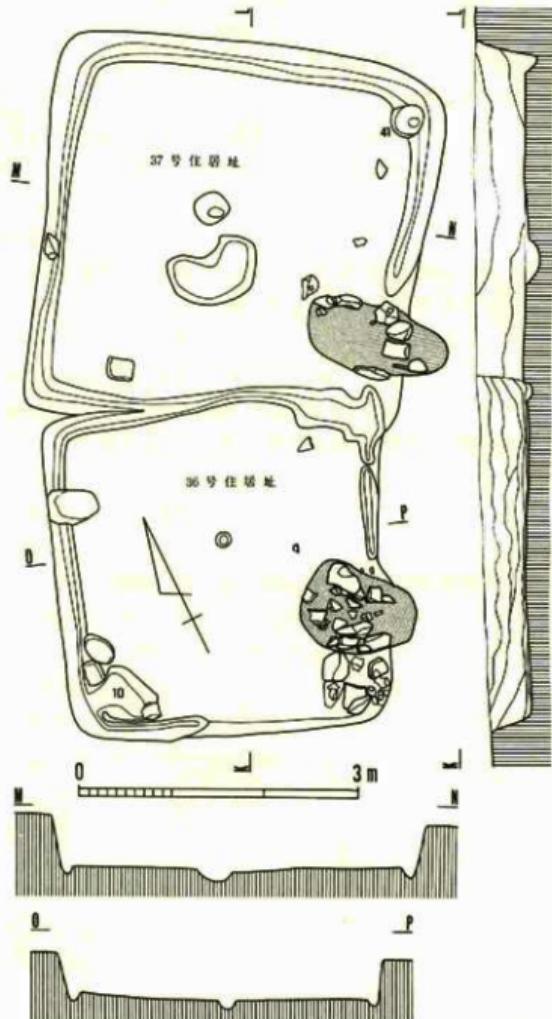
第148図 35号住居址出土土器

カマド内より多くの土器が出土している。

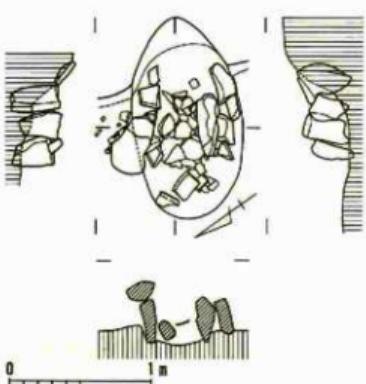
(床面・壁) ほぼ平坦な床面であるが、若干北に傾斜しており、南との高低差は15cmほどである。周溝はカマド部分と両壁の東側を除いて住居址をほぼ一周している。幅は10~28cm、深さは10~15cm程度ある。壁は周溝からほぼ垂直に立ちあがり、壁高は、東壁50cm、西壁50cm、南壁40cm、北壁50cmを計る。

(出土遺物) 第152図に示したものが出土土器である。土師器の壺形土器、环形土器、灰釉陶器などが出土している。

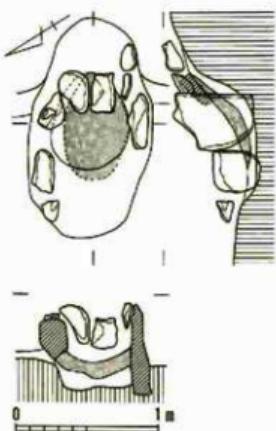
○壺形土器 1は口径30.4cm、器高33.6cm、底径10cmを計る。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂を多く含み粗めである。表面は刷毛調整後に口縁部のみナデを行なっている。内面は全面刷毛調整。器壁が厚い土器である。底部は糸切り底。カマド内出土。2は口径27cm、残存高11cmを計る。茶褐色を呈し、胎土は砂を多量に含み極めて粗い。表面は口縁部がナデ調整、以下が刷毛調整。内面は全面刷毛調整が行なわれている。口唇は折り返しされており肥厚している。3は小型の壺形土器である。口径17cm、残存高12.7cmを計る。表面は口縁部がナデ調整、以下が刷毛調整。内面は全面刷毛調整。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂が多く少々粗めである。口唇は内側の方にわずかに垂直気味に立ち上がっている。カマド内出土である。4は口径16cmで残存高4cmを計る。色調は暗褐色



第149図 36・37号住居址平面図



第150図 38号住居址カマド平面図



第151図 37号住居址カマド平面図

(床面・壁) 床面は住居址中央部が周開より3~5cmほど低くなっている。あとはほぼ水平で平坦である。周溝はカマド部分と36号住居址に切られている南壁の大部分を除いて、住居址内を一周している。36号住居址と重複している部分も後で精査したが周溝の痕跡はなかった。周溝は幅20~35cm、深さ7~15cm程度である。壁は周溝からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、東壁が55cm、西壁が60cm、南壁が46cm、北壁が64cmである。

(その他の施設) 住居址の中心部分に不定形な皿状のピットと円形の小ピットが掘られて

を呈し、胎土は砂を多く含み、やや粗めである。表面の口縁部はナデ調整、以下が刷毛調整である。やはりカマド内出土。5は壺形土器の体部下半である。底径は10cm、残存高は15.5cmを計る。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂を多量に含み粗い。内外面共に刷毛調整で、底部は木葉痕。6はやはり壺形土器の底部である。底径9.4cm、残存高9cmを計る。色調は茶褐色を呈し、胎土は砂を多く含み粗い。内外面共に刷毛調整で、底部には木葉痕が残る。

○环形土器 7は口径12.7cm、器高4.7cm、底径5.8cmを計る。内面黒色土器であり、黒彩と思われる。表面は茶褐色を呈し、ところどころに焼きムラのススが残る。表面はナデ調整。底部は糸切りである。器形はかなり湾曲した線を描く。

○灰釉陶器 8は口径14.8cm、残存高2cmを計る。内面のみ釉が見られる。施釉は刷毛塗りである。9は底径7.4cm。内面のみ施釉されており、刷毛塗りである。

○須恵器 10は底径7.8cm。11は口径14cm、残存高3.4cm。共に本住居址出土の他の土器よりは、少々古い段階のものと思われる。

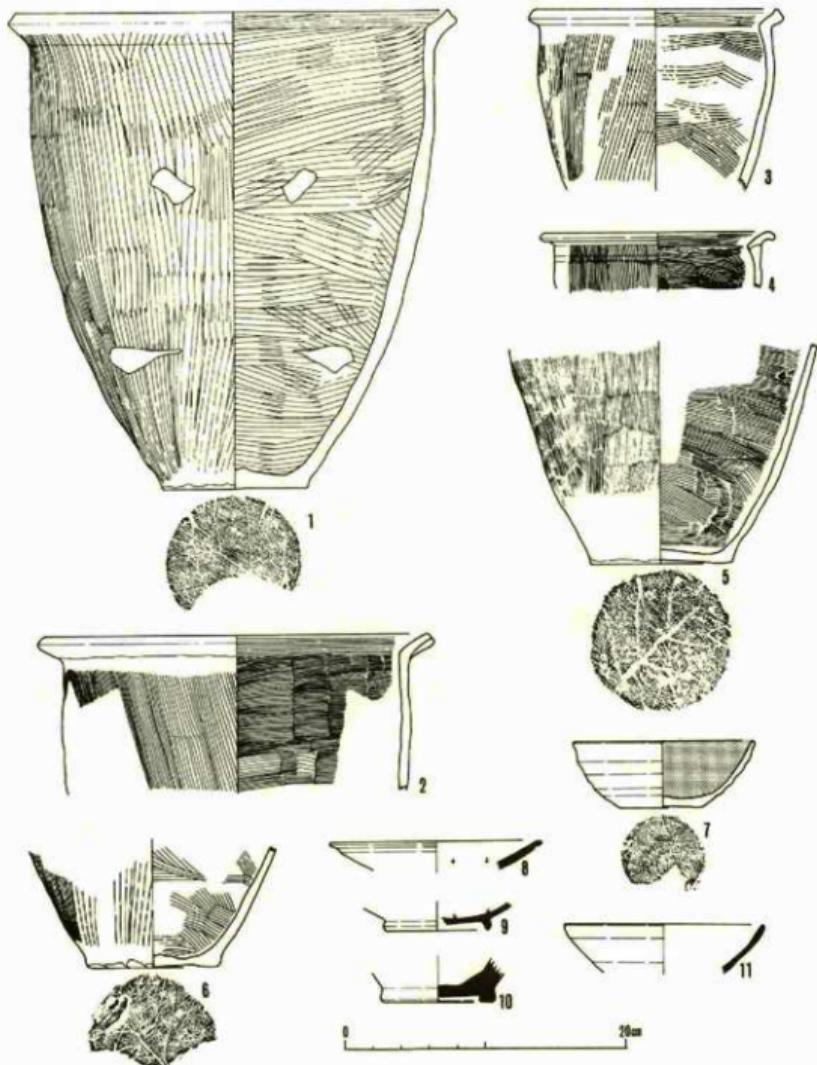
12. 37号住居址 (第149・151・153図、図版19)

(形状・規模) 圓丸方形を呈する。南東コーナー部分を36号住居址に切られている。規模は、北壁400cm、西壁390cmで、一辺400cm前後の圓丸方形プランであろう。

(カマド) 東壁の南東コーナー寄りに石組みカマドが設けられている。袖石は大半は破壊されているようであるが、2、3の雖は原位置をとどめていると思われる。掘り込みは東西が150cm、南北85cmで、焼土はカマド内に良好に残存している。

(床面・壁) 床面は住居址中央部が周開より3~5cmほど低くなっている。あとはほぼ水平で平坦である。

周溝はカマド部分と36号住居址に切られている南壁の大部分を除いて、住居

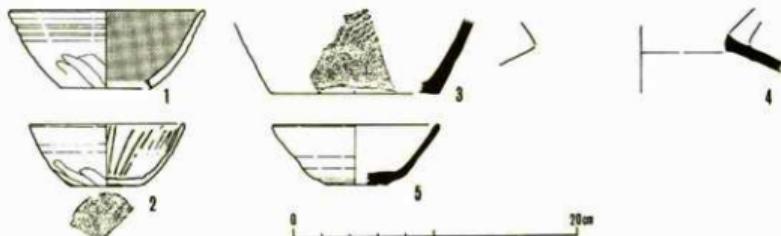


第152図 36号住居址出土土器

いる。また北東コーナーにも円形ピットが掘られている。役割は不明である。

(出土遺物) 第153図が出土土器である。土師器の环形土器と須恵器が出土している。

○环形土器 1は内面黒色土器である。口径13.8cm、器高5.4cm、底径4.8cmを計る。表面はナデの後にヘラ削りが行なわれている。内面はナデ。黒色は明らかにススの付着によるもの



第153図 37号住居址出土土器

であろう。表面は茶褐色を呈している。2は口径10.8cm、器高4.4cm、底径4.8cmを計る。色調は茶褐色を呈し、胎土は密である。表面はナデの後にヘラ削り調整。内面は研磨後に暗文を施している。底部は糸切りである。

○須恵器 3は壺形土器の底部である。色調は青灰色を呈し、底径は12cmほどである。4も壺形土器の頸部である。青灰色を呈する。5は环形土器で、口径11.8cm、器高4.2cm、底径6.4cmを計る。底部の状態は不明である。青灰色を呈している。内外面共にナデ調整が行なわれている。

13. 38号住居址（第154～157図、図版19・50）

（形状・規模） 隅丸方形プランを呈する。規模は東壁500cm、西壁480cm、南壁470cm、北壁430cmを計る。

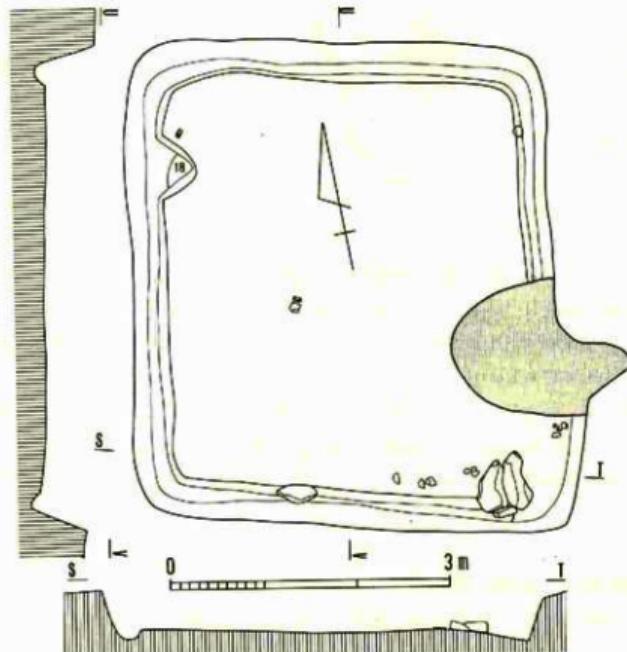
（カマド） 東壁中央よりも南寄りに石組みカマドが設置されている。両袖石は遺存状態は良好である。袖石の外側も全て粘土のようであり、ブロック状に積まれていることが断面図からわかる。カマド内には焼土が状態よく残っている。カマドの掘り込みは東西150cm、南北100cmほどの規模である。

（床面・壁） 床面はほぼ水平であり、平坦である。周溝はカマドの部分と、カマド南側の南東コーナーの部分を除いて、住居址内を一周する。幅は15～25cmで、深さは5～15cmである。壁は周溝からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、東壁60cm、西壁60cm、南壁58cm、北壁65cmを計り、全体として深い掘り込みの堅穴住居址である。

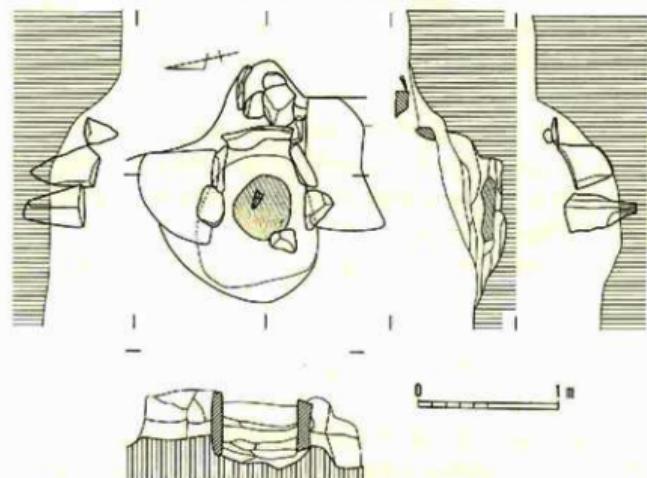
（その他の施設） カマドの南脇、つまり住居址南東コーナーの所に、平石が2枚床の上に置かれていた。加工の痕跡はなかったものの、何らかの機能が与えられていたのではないだろうか。

（出土遺物） 第156図が出土土器である。土師器の壺形土器、环形土器、蓋形土器や須恵器を出土している。

○壺形土器 1は小型の壺形土器で口径は12.4cmを計る。色調は暗褐色を呈する。胎土は砂を多く含み粗い。焼成は良好である。表面は、口縁部がナデ調整、以下が刷毛調整である。内面は、口縁部の磨耗が激しいものの、わずかに刷毛調整の痕跡が見られ、全面刷毛調整であつ



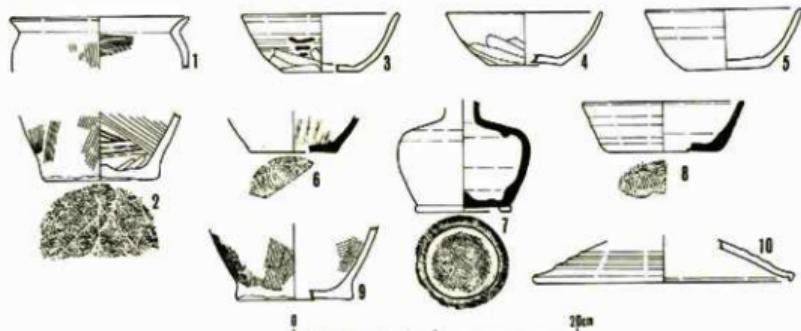
第154図 38号住居址平面図



第155図 38号住居址カマド平面図

たと思われる。2は壺形土器の底部である。底径は7.8cmで色調は茶褐色を呈する。胎土には小石や砂を多く含み粗い。内外面共に刷毛調整されているが、内面の底部付近には指頭による調整の痕跡が見られる。底部には木葉痕が残る。9も壺形土器底部であり、わずかに木葉痕が残る。

○壺形土器 3は口径11cm、器高4.2cm、底径5.4cmで赤褐色を呈する。表面はナデとヘラ削りが為され、内面はナデのみである。表面に「三」の墨書きが見られる。底部もヘラ削りである。4は口径11cm、器高3.7cm、底径5cmで赤褐色を呈する。表面はナデとヘラ削り、内面はナデ、底部はヘラ削りが為されている。5は口径11cm、器高4.2

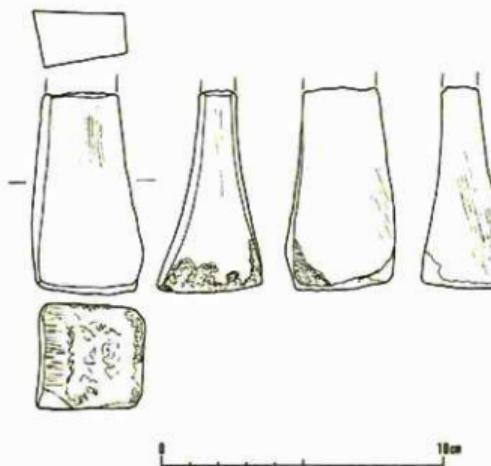


第156図 38号住居址出土土器

cm、底径5.8cmで黄褐色を呈する。内外面、底部共に表面の磨耗が著しく、調整の状態がよくわからない。基本的には2・4と同じと思われる。

○蓋形土器 10は口径18cmで赤褐色を呈する。内外面共にナデ調整。

○須恵器 6は壺の底部で底径6cm。糸切り底である。内面に暗文が見られる。7は小型の高台壺形土器である。口縁は欠損している。色は赤味を帯びており、底部は糸切り後に高台が貼付されている。内外面共にナデ調整。底径6.6cm、残存高は



第157図 38号住居址出土砥石

7.8cmを計る。8は环形土器で口径11.4cm、器高3.5cm、底径10cm。青灰色を呈する。内外面ナデ調整、底部は糸切りである。その他、第157図に示した凝灰岩製の砥石が出土している。

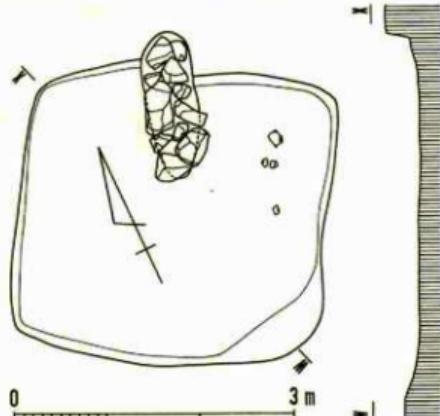
14. 39号住居址（第158～160図、図版19・50）

（形状・規模） 溝丸方形プランを呈する。規模は東壁265cm、西壁255cm、南壁300cm、北壁320cm。

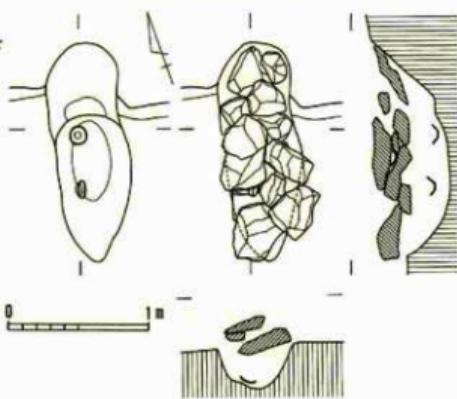
（床面・壁） 本住居址にはカマドと認定し得るような施設は勿論、その痕跡もない。その点からすると一般的な住居址とは異質なものなのかもしれない。床面は中心部が周囲よりやや低くなっている。南東コーナーは壁が緩く床面へと傾斜して続いており、入口のような感じである。壁高は、東壁17cm、西壁30cm、南壁15cm、北壁20cmと全体に掘り込みは浅い。

(その他の施設) 北壁の中央に特殊造構が存在する。南北155cm、東西60cm、深さ45cmほどの楕円形の掘り込みに、10数個の平石が蓋をするようにのせられている。はじめは、当地域では極めてめずらしい北カマドを有する平安時代の住居址かと思ったのであるが、調査の結果カマドと認められる証拠は何一つ得ることができなかった。そのため住居址内特殊造構としたわけである。ともかく火を使用した痕跡は全くなく、掘り込み内で底付近から2個の完形品の环形土器が、平石の間から1個の完形品の环形土器が出土している。

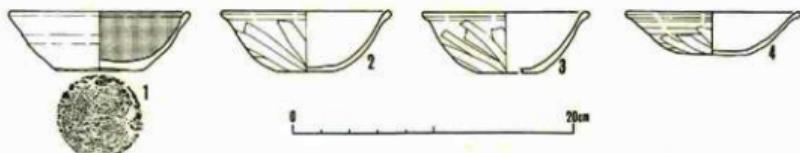
(出土遺物) 第160図に示したもののが出土土器である。1～3までが特殊造構内より出土した环形土器である。4は特殊造構の東側の床面から出土した皿形土器である。1は口径12.6cm、器高4.2cm、底径6cmを計る。内面黒色土器で光沢をはなつ。表面はナデ調整で暗褐色を呈する。底部は糸切りである。2は口径12cm、器高4.3cm、底径4.6cmで赤褐色を呈する。胎土は砂を多く含む。表面はナデとヘラ削り、内面はナデ、底部はヘラ削り。3は口径12cm、器高4.3cm、底径4.4cmで赤褐色を呈する。胎土は粗い。表面はナデとヘラ削り、内面はナデ、底部はヘラ削り。4は口径12.3cm、器高3cm、底径5.2cmを計る。赤褐色を呈し、胎土は粗い。表面はナデとヘラ削り、内面はナデ、底部はヘラ削りである。2～4までは調整は全く同じであり、口縁も玉縁を呈する。



第158図 39号住居址平面図



第159図 39号住居址特殊造構平面図



第160図 39号住居址出土土器

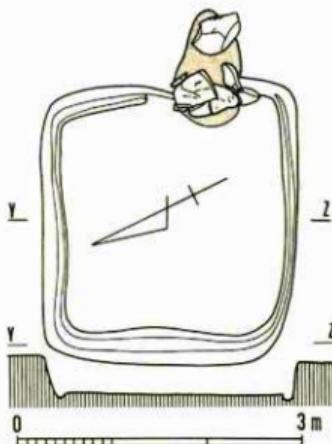
15. 40号住居址（第 161 ~ 163 図、図版20・50）

（形状・規模） 罔丸方形プランを呈する。規模は東壁 265 cm、西壁 230 cm、南壁 270 cm、北壁 265 cm を計る。比較的小型の住居址である。

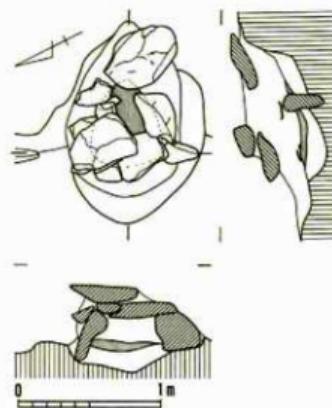
（カマド） 東壁中央より南寄りに設置された石組みカマドがある。遺存状態は良好であり、一部天井石も残存しているし、支柱もしっかりと立てられている。焼土の残りも良い。掘り込みは東西 120 cm、南北 80 cm の範囲である。

（床面・壁） 床面は平坦であり、ほぼ水平である。周溝はカマド部分を除いて、住居址内を一周する。周溝の幅は 10~25 cm、深さは 5~10 cm を計る。壁高は、東壁 47 cm、西壁 44 cm、南壁 40 cm、北壁 44 cm で、周溝からほぼ垂直に立ち上がっている。

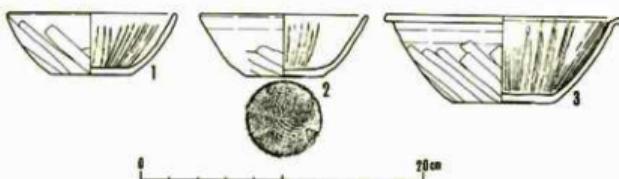
（出土遺物） 本住居址の出土遺物は極めて少ない。第 163 図に示したのが出土土器である。1 は口径 12 cm、器高 4 cm、底径 5 cm を計る環形土器である。色調は赤褐色を呈する。表面はナデとヘラ削り、内面はヘラ磨き後に暗文を施す。底部はヘラ削り。2 は口径 12 cm、器高 4.5 cm、底径 5.6 cm の環形土器で、赤褐色を呈する。表面はナデとヘラ削り、内面はヘラ磨き後に暗文を施す。ここまで 1 の土器と全く同じであるが、2 は底部が糸切りである。3 は口径 16.6 cm、器高 6.2 cm、底径 7 cm を計る鉢形土器である。口唇は水平に突出している。色調は赤褐色を呈する。表面はナデとヘラ削り、内面はヘラ磨き後に暗文を施している。底部はヘラ削り。1~3 は内外面の調整は全く同じである。



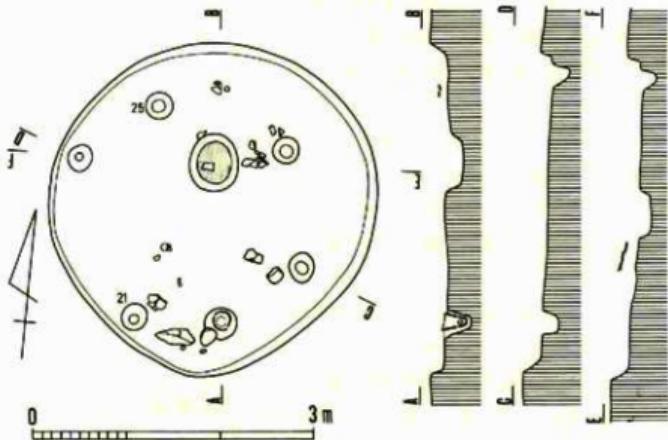
第 161 図 40号住居址平面図



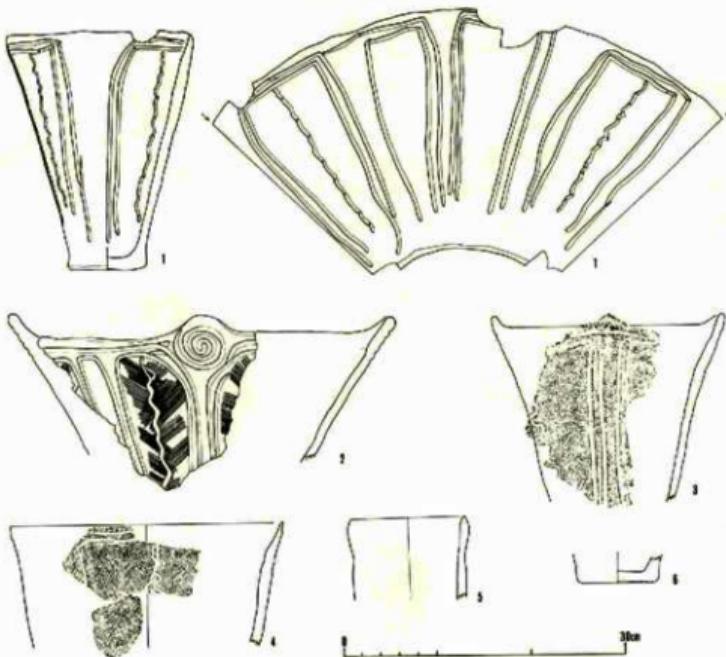
第 162 図 40号住居址カマド平面図



第 163 図 40号住居址出土土器



第164図 41号住居址平面図



第165図 41号住居址出土土器 (1)

16. 41号住居址（第164～166図、図版20・51）

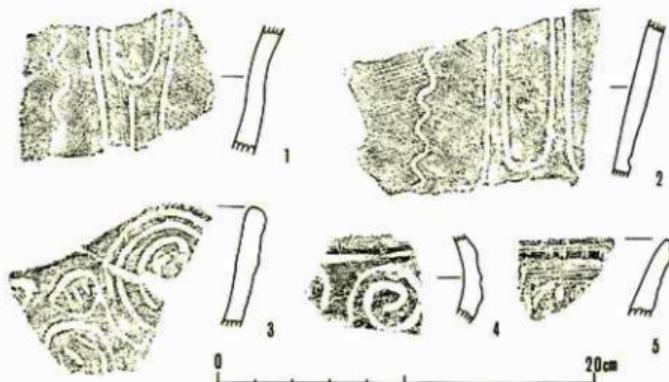
（形状・規模） 円形プランを呈する住居址である。径は東西が350cm、南北が355cmを計る。ほぼ円形だが南に一部角ばった所がある。

（炉） 住居址の中心より北寄りのところに竪穴炉が掘り込まれている。プランは円形で径は東西50cm、南北60cm、深さは20cmである。石囲いの痕跡は全くないが、時代から考えて、もともとは石囲い炉であったと思われる。焼土は薄いものの底面に残る。他に地床炉はない。

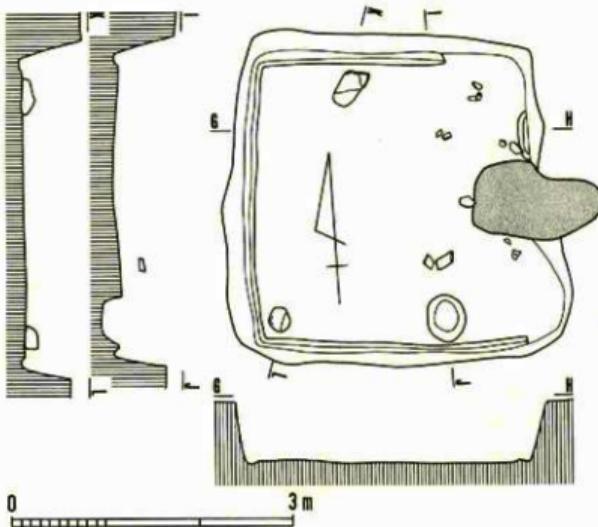
（床面・壁） 床面はソフトロームであるが、かなり軟弱であり、覆土中に混入したロームと区別がつきにくい。凹凸はさほどないが、東側から西側に向かってかなり傾斜している。その高低差は20cmにもなり、かなり急な傾斜である。周溝は無い。壁高は東側で20cm、西側で15cm、南側で15cm、北側で18cm。

（その他の施設） 主柱穴と思われるビットが5本検出されている。また埋甕は住居南側の壁から40cmもはなれた所に正置で埋設されていた。

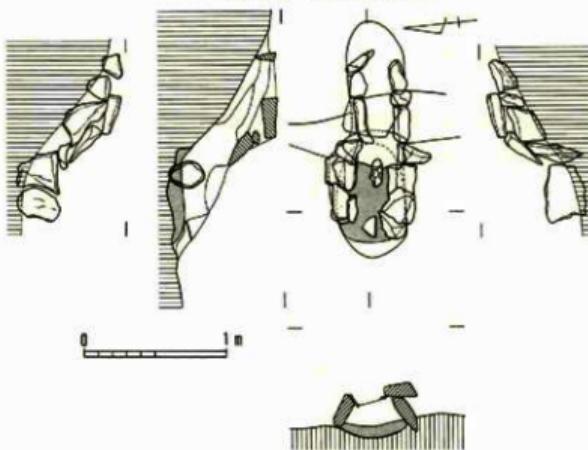
（出土遺物） 第165図1は埋甕である。口縁部に文様帶は無い。地文も無い。体部にかなりいい加減な“匁”状の懸垂文区画を行なっている。単位は4単位とみるべきだろう。その区画の中に蛇行沈線文を施しているが、2単位のみに施す。器形は直線的に立ち上がるもので、頸れは全くない。2も1と同様に、文様表現は全て沈線で行なわれる。口縁には4単位の小突起があったものと思われる。突起部分には渦巻文が施され、以下体部は“匁”状の文様区画を行なう。それも幅の広い区画の間に、幅の狭い区画を1つ施すもので、幅広の方にのみ、内側に地文の条線文を施す。そして蛇行沈線文を引いている。地文は区画後に施されている。また第166図1と2は同一個体と思われるが、そうすると、幅の狭い区画は“匁”状ではなく長方形かもしれない。第165図3も口縁に4単位の小突起を有する深鉢形土器であろう。突起部分には特別な文様は無い。この土器も文様表現は全て沈線で行なう。口縁には刺突文と1本の沈線文、体部は“匁”状の文様区画を行なう。単位は4単位と思われる。その区画の間の幅の



第166図 41号住居址出土土器 (2)



第167図 42号住居址平面図



第168図 42号住居址カマド平面図

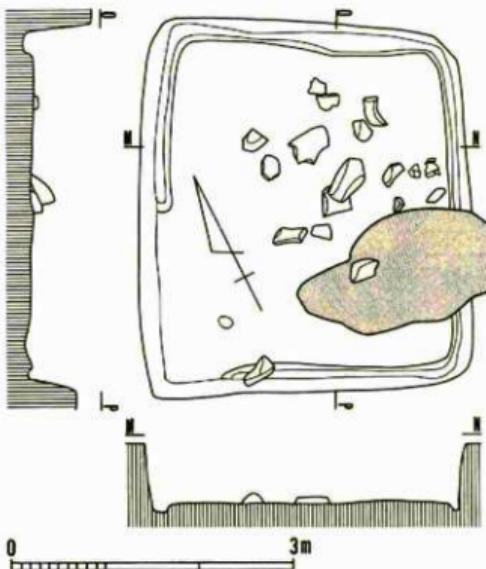
17. 42号住居址 (第167・168・171図、図版20・52)

(形状・規模) 隅丸方形プランを呈する。規模は東西が350cm、南北が340cmで、ほぼ正方形プランである。

(カマド) 本遺跡の中で、最も遺存状態の良好なカマドである。東壁中央より南寄りに石

狭い所に、ヘラ状施文具による「ハの字文」を施す。区画内には別の櫛状の施文具で条線文を施し、蛇行沈線を上から引いている。4も口縁に刺突文を施す。文様区画と地文の種類は3の土器とほとんど変わらないが、施文具が異なる。5は小型の深鉢形土器、6は底部である。

この41号住居址の出土土器は、縄文中期後半の文様表現の沈線文化がすすみ、まさにそれが一般化した段階を示しているものであろう。口縁部も文様帶といえるものは既にはば消滅しており、これらの土器の次の段階の土器で想定できる特徴といえば、蛇行沈線文の消失であり、地文としての「ハの字文」の一般化であると思われる。



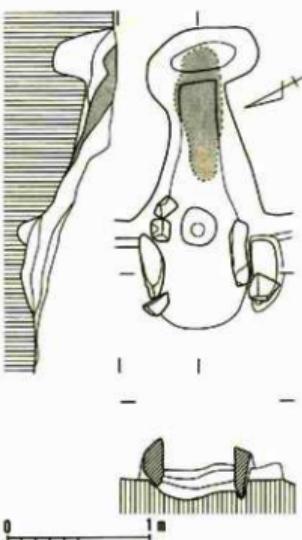
第169図 43号住居址平面図

組みカマドが設置されている。両袖石はほぼ完存している。焼土の残りも、そして焼土の中に直立して残る支脚の石も使用当時のままであろう。天井石も平石が2枚残存している。煙道も住居外へ50cmも突出し、袖石も住居外へ続いている。

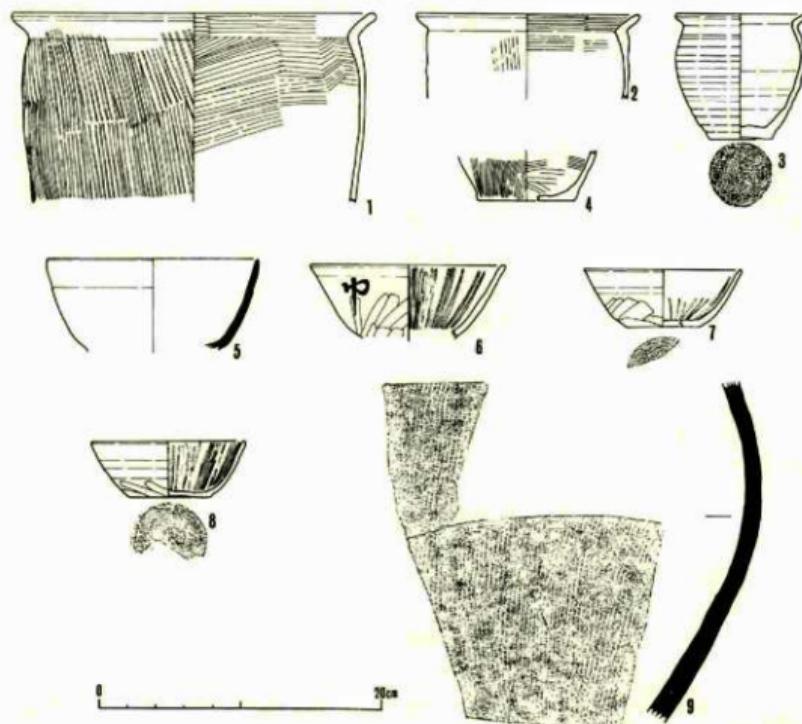
(床面・壁) ほぼ平坦であり水平である。周溝は北壁東端から東壁を経て南壁東端までの間は掘られてはいないが、それ以外は周囲をめぐっている。幅は10~15cmあるが、深さ

は10cm以下であり、全体として浅い感じを受ける。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は東壁63cm、西壁65cm、南壁55cm、北壁65cmと非常に深い竪穴である。

(出土遺物) 第171図1~7が出土遺物である。1は内外面刷毛調整で、表面の口縁のみナデ。口唇は薄い。口径25.4cm、残存高13cmで茶褐色を呈す。2も小型の壺形土器だが1と同じ調整である。口径16cm、残存高6cm。3も小型の壺形土器であり、内外面共にナデ調整。底部は糸切りである。口径9cm、器高8.8cm、底径4.2cmで黄褐色を呈す。6は「巾」の墨書きが見られる杯形土器である。口径13.6cm、残存高5.2cm。表面はナデとヘラ削り、内面はヘラ磨き後に暗文を施す。7も6と同じ調整を施すが、底部は糸切りである。6と7は共に赤褐色を呈する。以上の土器とは別に、8の須恵器の杯形土器が出土している。口径は14.8cm、残存高6.4cmを計る。青灰色を呈し、内外面共にナデ調整。



第170図 43号住居址カマド平面図



第171図 42号(1~7)・43号(8~9)住居址出土土器

18. 43号住居址 (第169~171図、図版21・52)

(形状・規模) 隅丸方形プランを呈する。規模は、東壁が340cm、西壁が400cm、南壁が330cm、北壁が290cm。

(カマド) 東壁でも南東コーナーに近いところに、石組みカマドが設置されている。焚き口と思われる場所の両袖石のみが残存している。煙道は非常に長いもので、住居址外へ100cm以上も突出している。まず袖石から見ると、両袖石共に粘土が外側に残存しており、とくに南側の袖の残りはよい。本住居址内には、床面上に多くの平石が散乱しているが、おそらくはカマドの骨組みとして使用していた石であろう。カマド内には焚き口と思われる所には焼土はない。焼土は煙道に集中している。支脚を立てていたと思われるピットがあるが、やや東側に寄り過ぎているようである。煙道の端には深い掘り込みがあるが、如何なる目的のためか不明である。

(床面・壁) 床面は、ほぼ平坦であり水平である。しかし住居址の中心部が周囲よりも若干高くなっている。その高低差は5cmほどである。周溝は西壁の南半分の部分と南壁の西端の

部分を除いて、周囲にめぐらされている。幅は10~20cm、深さは10~15cm程度である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は、東壁が70cm、西壁が75cm、南壁が75cm、北壁が60cmで本遺跡中で最も深い壁穴である。当時の生活面を考えると、階段でもなければ出入りは困難であろうと思われたが、その痕跡さえも確認できなかった。

(出土遺物) 本住居址は掘り込みが深い割には、出土遺物が極めて少ない。第171図8の土師器の环形土器と9の須恵器の大甕片が出土したのみである。

8は口径11cm、器高4cm、底径5.7cmで赤褐色を呈する。表面はナデとヘラ削り、内面はヘラ磨き後に暗文を施す。底部は糸切りである。特徴は東隣りの42号住居址の出土土器と同じである。9は青灰色を呈し、表面はタタキ調整が行なわれている。

19. 44号住居址 (第172図、図版18)

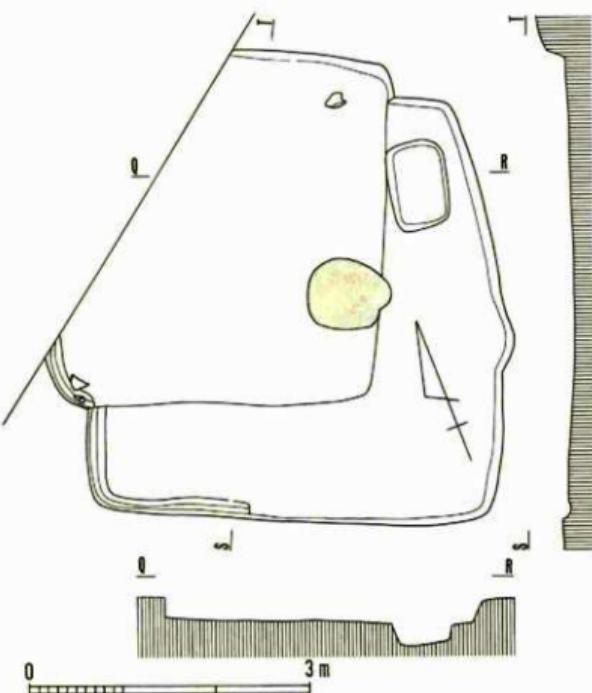
(形状・規模) 隅丸方形プランを呈すると思われる。西側の3分の1ほどが農道のために調査できなかった。一辺が350cm前後の規模と思われる。33号住居址が上にのっていた。

(カマド) 東壁の南寄りに焼土が残る。カマドの痕跡だと思われる。

(床面・壁) 床面は上層の33号住居址の荒掘りのため、かなり破壊されている。しかしほぼ水平で平坦であったと思われる。壁も一部を残すのみである。周溝もなく、出土遺物もない。

20. 45号住居址 (第173図)

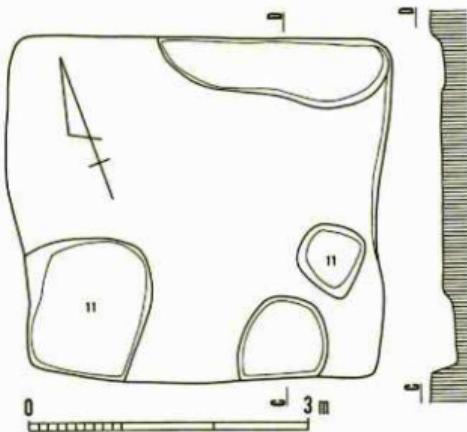
部分的に床面が残り、一辺が350cm前後の方形プランを呈する。ほとんど削られており、壁も東壁の一部が5cmほどの高さで残るのみである。カマドの跡も、出土遺物もない。



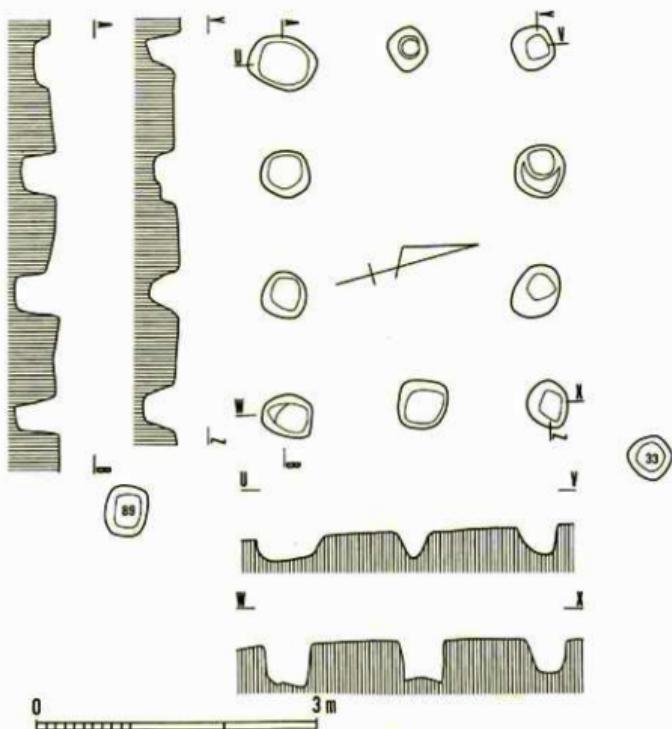
第172図 44号住居址平面図

21. 1号掘立柱建物址（第174図、図版21）

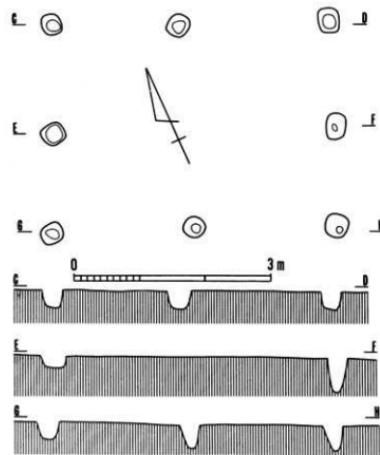
東西方向4本のピット、南北方向3本のピットを有する掘立柱建物址である。合計10本のピットが掘られている。最も径の大きなピットは75cm×60cmで、小さいものは50cm×45cmである。深さの深いものは46cm、浅いものは25cmを計る。掘立全体の規模は、東西が、430cm、南北が330cmで、ピット間の距離は約130cmで一定している。ピット内に平石などは置かれ



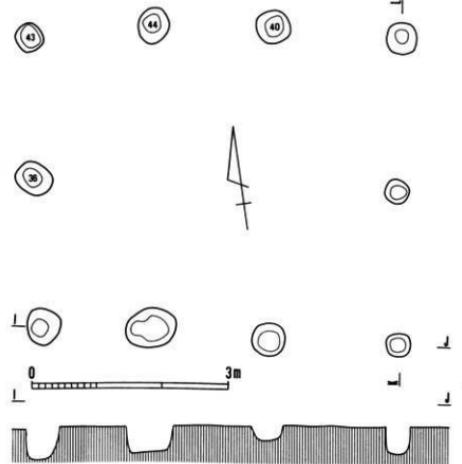
第173図 45号住居址平面図



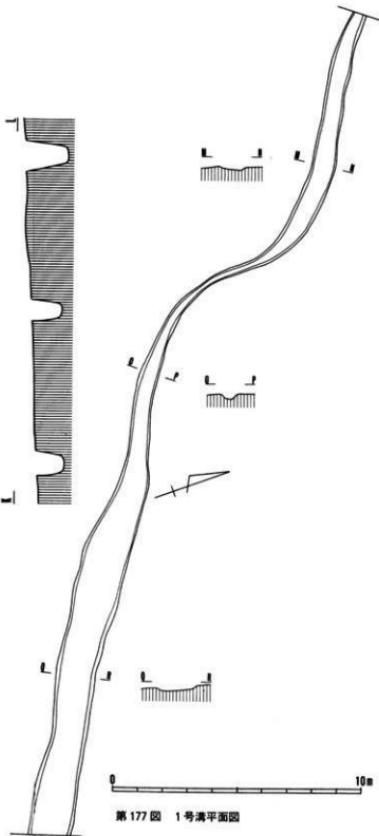
第174図 1号掘立柱建物址



第175図 5号据立柱建物址



第176図 6号据立柱建物址



第177図 1号溝平面図

ではいなかったし、出土遺物もなかった。

22. 5号掘立柱建物址（第175図、図版21）

東西方向、南北方向共に3本のピットで合計8本のピットが確認されているが、東西と南北とでピット間の距離が異なるため、規模は、東西450cm、南北350cmと長方形プランを呈している。ピットの径は約30cmで一定であるが、深さは、最も深いもので50cm、浅いもので20cmとかなりの差がある。ピット内に平石などは置かれていないかった。出土遺物も無い。

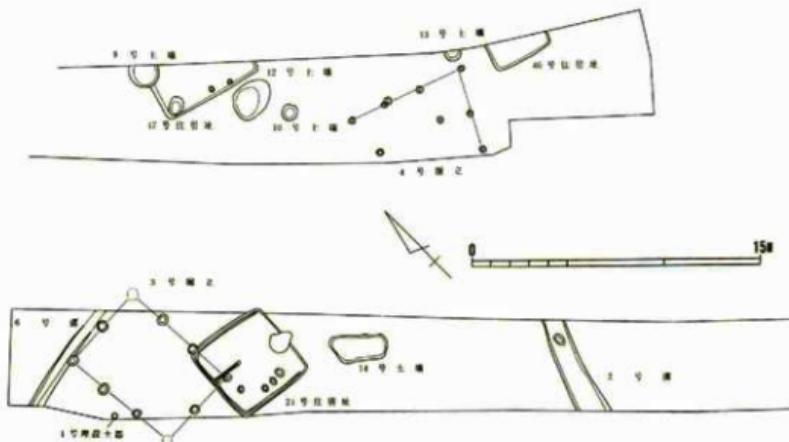
23. 6号掘立柱建物址（第176図、図版22）

東西方向4本、南北方向3本のピットで合計10本のピットを有する。規模は東西600cm、南北500cmで、東西方向の方がピット間の距離が若干短かい。径は最大のものが75cm×60cm、最小のものが35cm×35cmで、深さは深いものが70cm、浅いものが30cmである。やはりピット内に平石などは置かれてはいなかったし、出土遺物はなかった。

24. 1号溝（第177図、図版22）

東西の両端は調査区域外のため未掘である。確認できた範囲で長さ36m、最大幅200cm、最小幅30cmである。深さは浅く、全体として20cm前後しかなかった。出土遺物もなく、覆土中に砂利や砂の堆積は見られなかった。覆土の状態は平安時代の住居址のものと近似していた。

第6節 6区の遺構と遺物

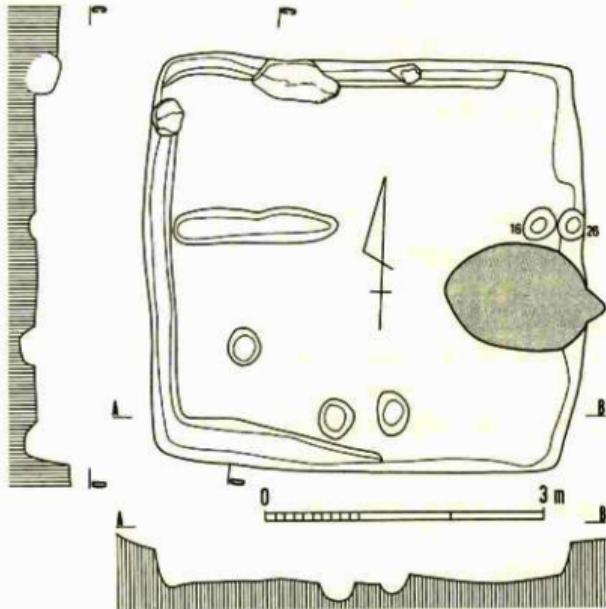


第178図 柳坪遺跡6区全体図

1. 24号住居址（第179～181図、図版23・52・53）

（形状・規模） 隅丸方形プランを呈し、規模は東壁410cm、西壁400cm、南壁420cm、北壁435cmを計る。

（カマド） 東壁中央より南寄りに設置された石組みカマドであり、袖石がわずかに残っている。カマドの北側に、カマドと関係があるのかどうか不明であるが、白色粘土塊が出土して



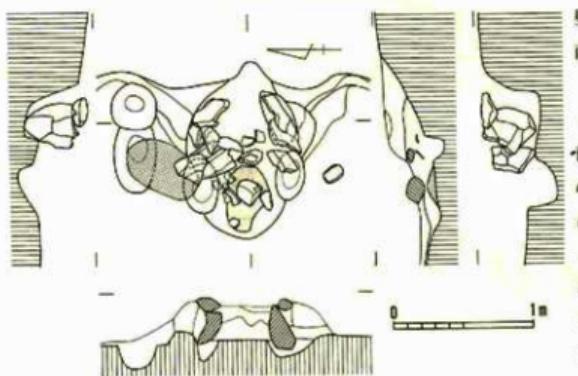
第179図 24号住居址平面図

いる。カマド内には焼土も残り、焼土の両脇には、袖石が抜き取られたと思われるピットが確認されている。残存する袖石の外側には粘土が状態よく残っていた。

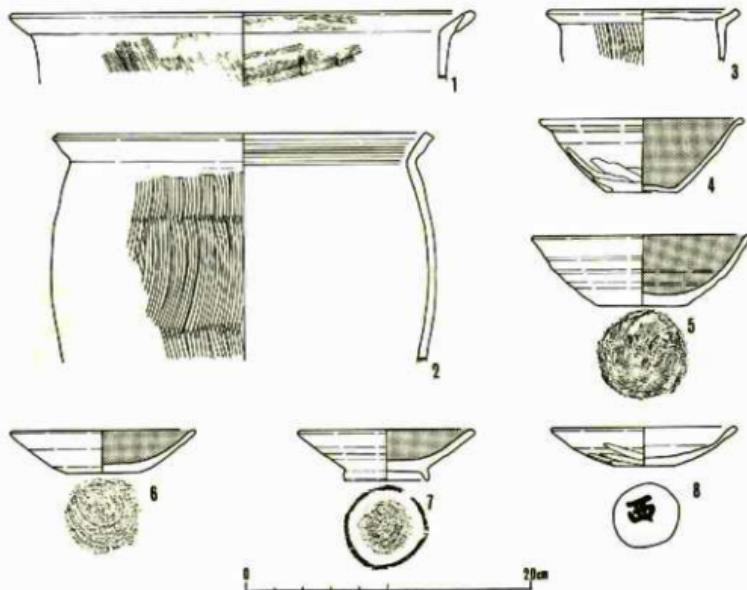
（床面・壁） ほぼ水平であり平坦である。周溝は北壁から西壁を経て南壁の西半分まで掘られているが、一部北西のコーナーのところで切れている。幅は15～35cm、深さ10～20cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、

壁高は東壁35cm、西壁38cm、南壁46cm、北壁20cmである。

（その他の施設） カマドの北に2つのピットがあり、南壁中央より住居内側へ30cmほど入ったところに2つのピットがあり、その他南西コーナー寄りのところに1つのピットが検出されている。また住居址中央より西壁に向かって、長さ130cm、幅30cm、深さ10cmほどの溝が



第180図 24号住居址カマド平面図



第181図 24号住居址出土土器

掘られている。それぞれが浅い掘り込みであり、機能は不明である。

(出土遺物) 第181図が出土土器である。土師器の壺形土器、杯形土器、皿形土器が出土している。

○壺形土器 1は口径32.4cmで暗褐色を呈する。口唇は折り返しで肥厚している。内外面刷毛調整で外面の口縁部のみナデ。2は口径25.8cmで赤褐色を呈する。表面は口縁部はナデ、以下が刷毛調整。内面は口縁部のみ刷毛調整、以下はナデ。3は口径13cmの小型の壺である。

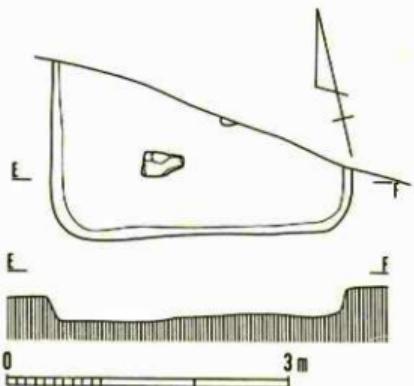
○杯形土器 4と5は内面黒色土器であるが5のみ光沢がある。4は表面ナデとヘラ削り、内面はナデ。5は底部糸切りで内外面ナデ調整。4の底部はヘラ削りだが糸切り痕が残る。

○皿形土器 6と7は内面黒色で光沢がある。6は表面ナデ、底部糸切り。7も表面ナデ、底部は糸切り後高台を付ける。8は「西」の墨書きが見られる。表面はナデとヘラ削り。内面はナデ、底部はヘラ削りされた後に墨書きが施されている。

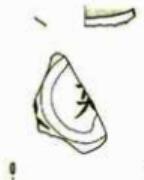
2. 46号住居址（第182・183図、図版23）

(形状・規模) 住居址の約半分ほどが未掘で正確なところは不明であるが、一辺が300cm前後の隅丸方形プランの住居址と思われる。カマドも調査区外に存在するのであろう。

(床面・壁) 床面はほぼ平坦であるが、わずかに西が低くなっている。高低差は10cmほどである。周溝は調査した範囲には無かった。壁高は30cm前後である。



第182図 46号住居址平面図



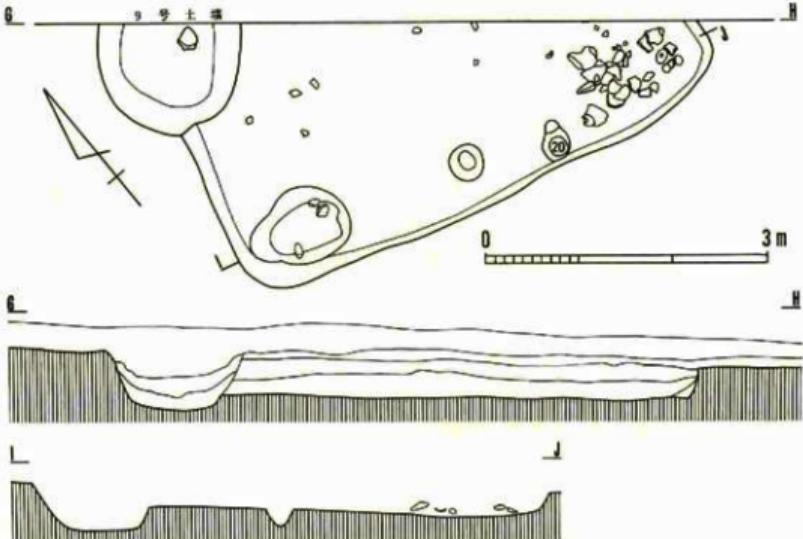
第183図 46号住居址出土土器

(出土遺物) 第183図に示した土器が1点のみ出土した。高台杯形土器の底部と思われ、高台部分は剥落している。底部に「真」(?)の墨書が見られ、表面にも墨書が見られるが判読はできない。内面黒色で光沢をはなつ。表面はナデ。底部は糸切

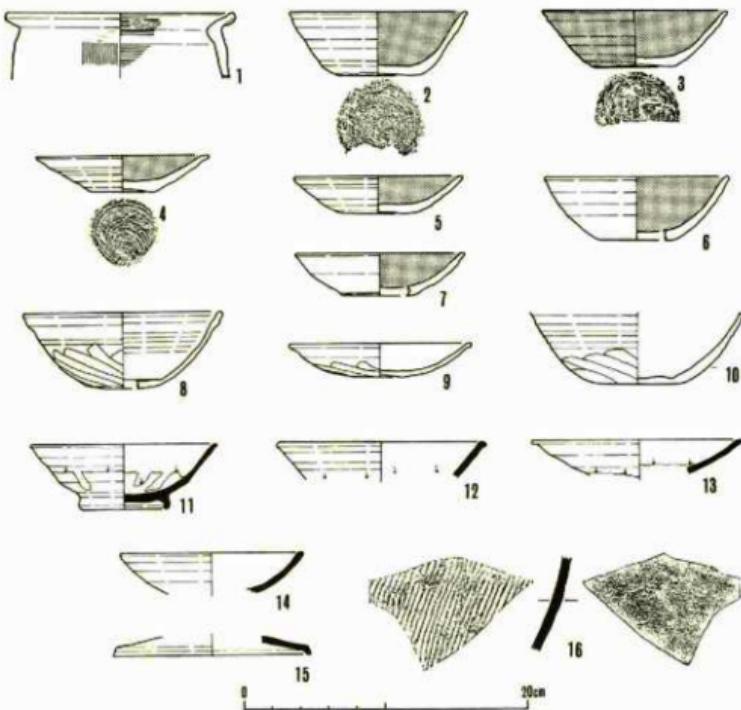
りであり、その上から墨書が行なわれている。

3. 47号住居址 (第184・185図、図版23・53)

(形状・規模) 住居址北側の大半は調査区域外のため未掘。おそらく一辺550cm前後の隅丸方形プランを呈する住居址になると思われる。カマドも調査区域外であろう。西側で一部を9号土塙に破壊されている。



第184図 47号住居址・9号土塙平面図



第185図 47号住居址出土土器

(床面・壁) 床はほぼ平坦だが、東側へ12cmほど低くなっている。壁高は10~30cmの範囲である。周溝は調査した範囲では確認できなかった。南壁中央の所に入口部に關係すると思われる2つのピットが存在する。南西コーナーの所にも浅い皿状の掘り込みがある。

(出土遺物) 土師器の壺形土器、环形土器、皿形土器と灰釉陶器、須恵器などが出土した。

- 壺形土器 第185図1は小型の壺形土器である。表面はナデと刷毛調整。内面は刷毛調整。
- 环形土器 2と6は内面黒色、3は内外面黒色の杯である。いずれも内面は光沢をはなつ。表面はナデ。2と3は底部糸切り。8は表面はナデとヘラ削り、内面はナデ、底部はヘラ削り。10も8と同様である。

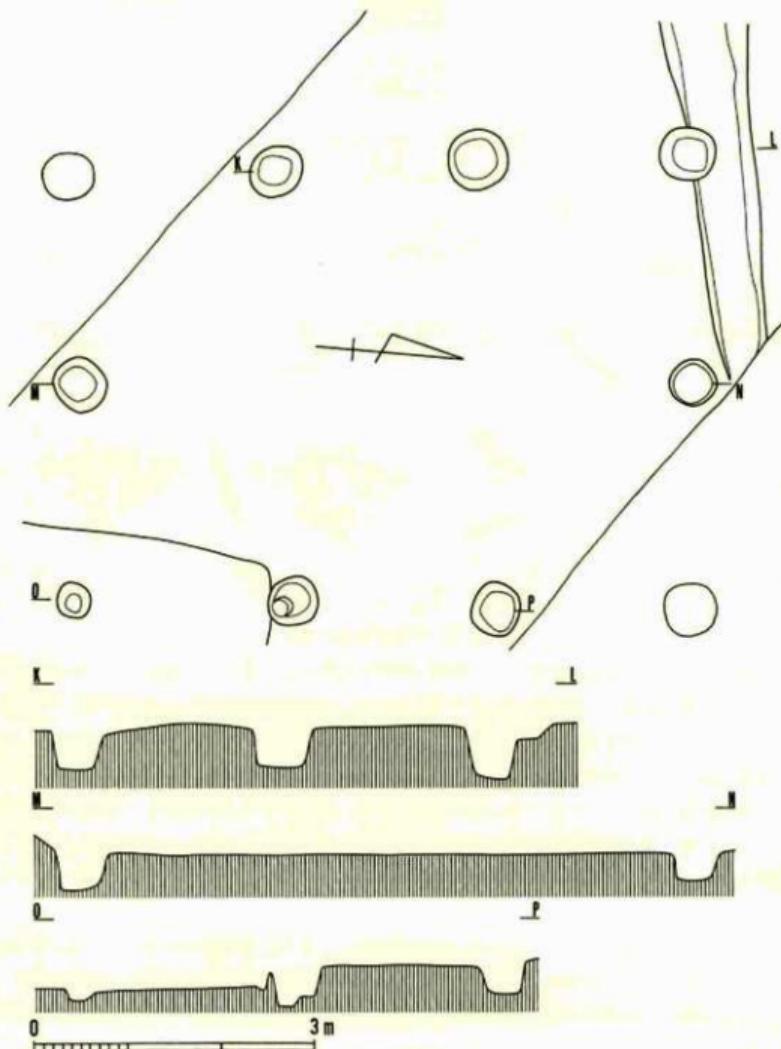
○皿形土器 4、5、7は内面黒色で光沢をはなつ。4と5は底部糸切りだが、5は磨耗していくで不明瞭である。いずれも表面はナデ。9は表面ナデとヘラ削り、内面はナデである。

○灰釉陶器 11は施釉は漬け掛けによる。12と13は刷毛塗りである。いずれも内外面共に施釉されている。

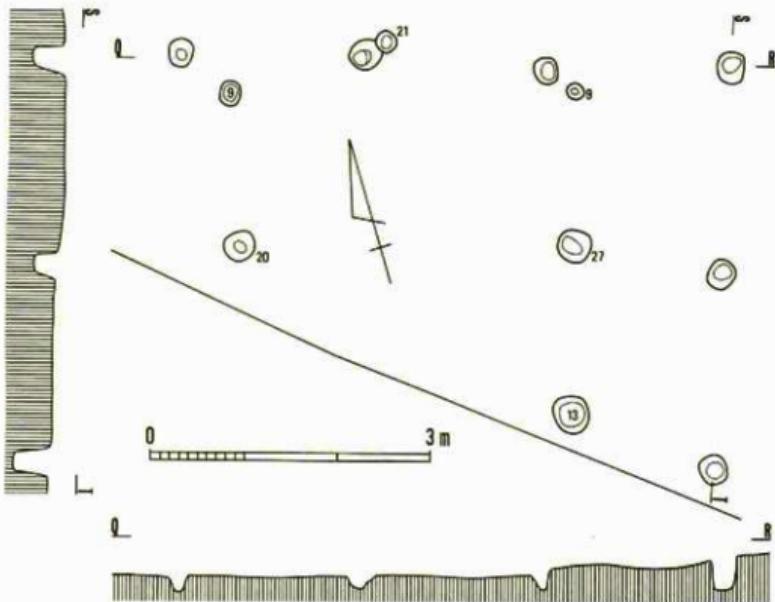
○須恵器 14は环形土器、15は蓋形土器で古い時代のものであろう。16は大甕の破片である。

4. 3号掘立柱建物址（第186図、図版24）

一部調査区域外のため未掘であるが、東西方向3本、南北方向4本で合計10本のピットを有する建物址と思われる。規模は東西が500cm、南北が700cmで、ピット間の距離は約220cmほどで一定している。また本建物址は、24号住居址と6号溝を破壊している。ピットの径は最大



第186図 3号掘立柱建物址



第187図 4号掘立柱建物址

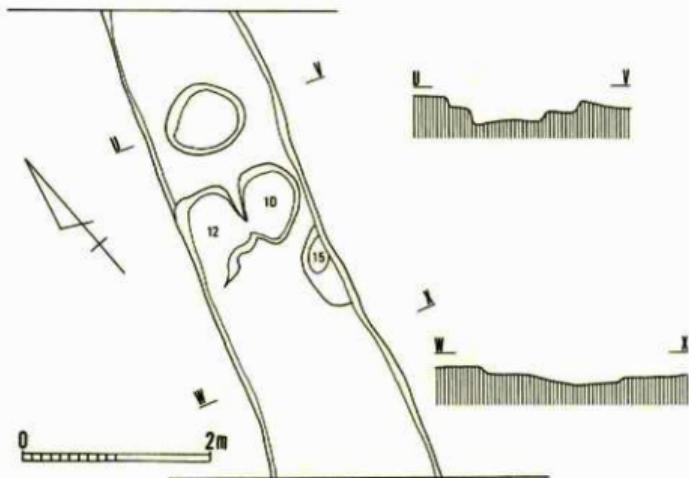
が $65\text{cm} \times 65\text{cm}$ で、最小が $50\text{cm} \times 50\text{cm}$ 。深さも最も深いもので 60cm 、最も浅いもので 40cm を計る。今回の調査で確認した最も大型の掘立柱建物址である。出土遺物は無かった。

5. 4号掘立柱建物址（第187図）

南側が農道のため調査できなかった。確認されたピットの数も合計12あるが、形がなかなか整合しない。東西方向4本、南北方向3本以上の掘立柱建物址と思われる。確認されたピットで最大径は $40\text{cm} \times 40\text{cm}$ 、最小計は $18\text{cm} \times 18\text{cm}$ 。最も深いものは 40cm 、最も浅いものは 9cm で、ピットの内容も一定していない。ピット内に平石などが置かれていた例はないし、出土遺物も全くなかった。

6. 2号溝（第188図）

6区を横断する溝である。南北に走り、幅は $140 \sim 180\text{cm}$ 。確認できたのは、わずか 5m の長さの範囲であり、性格はわからない。ただ深さが $10 \sim 20\text{cm}$ と極めて浅い上に、昭和48年の中央道の本線の調査の時には発見されておらず、少なくとも南側へ向かって、どれほど続いているのかは少々疑問に感じられる。覆土の状態は平安時代の住居址のものと近似している。また覆土中に砂利や砂の堆積は見られなかった。出土遺物も無かった。



第188図 2号溝平面図

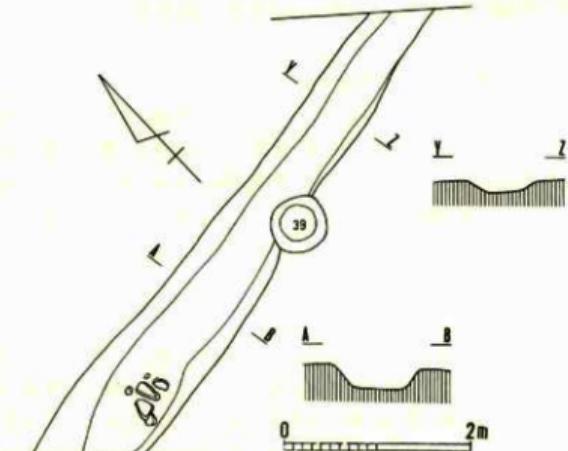
7. 6号溝（第189図）

2号溝と同様に6区に横断する溝である。ほぼ東西方向を向いており、東から西へ走っている。両端の高低差は30cm程度である。この溝は3号掘立柱建物址に切られており、時代的には24号住居址に近いものと思われる。覆土の状態も平安時代住居址のものに似ている。幅は50～100cm、深さは10～40cmであり、西の方が深く、そのぶん西の方が低くなっている。出土遺物は無い。やはり本線の調査の時には発見されておらず、どの程度西へ続くかわからない。覆土には砂の堆積はなかった。

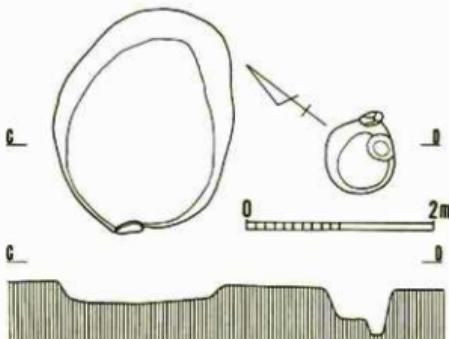
8. 9号土壙（第184図）

（形状・規模） 北側が調査地区外のため未掘。直径150cm程度の円形プランを呈すると思われる。47号住居址を切っている。底は丸みを帯びており、壁は緩やかに立ち上がる。深さは65cm。自然埋没したようである。

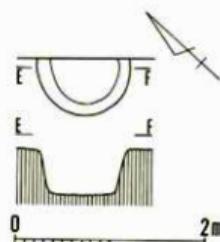
（出土遺物） 自然の疊が1個覆土中から出土。人工遺物は全く出土しなかった。覆土は漆黒であった。



第189図 6号溝平面図



第190図 10号土壤・12号土壤平面図



第191図 13号土壤平面図

9. 10号土壤（第190図）

円形プランを呈し、径は東西80cm、南北70cmを計る。底には1段低いピットが掘り込まれており、1段高い所までの深さは35cm、低い所までは50cmある。出土遺物はない。

10. 12号土壤（第190図）

椭円形プランを呈し、径は東西230cm、南北190cm。深さは20~30cmある。覆土中から風化の著しい縄文土器片が出土している。

11. 13号土壤（第191図）

北側は調査地区外のため未掘。直径100cm前後の円形プランを呈するものと思われる。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは45cmである。出土遺物はない。

12. 14号土壤（第192~194図）

（形状・規模） 不整椭円形プランを呈する。径は320cm×160cmを計る。

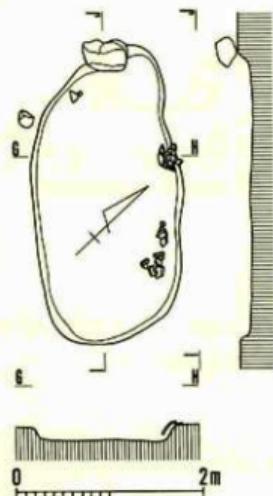
（底面・壁） 底は平坦であり、ほぼ水平である。壁は全体に極めて低く、10~20cmほどの高さしかない。焼土やピットなどは確認されていない。

（出土遺物） 覆土中から縄文土器を出土している。第193図と第194図に示したものがそうである。第193図1は深鉢形土器の底部である。底径は11.4cmで赤褐色を呈する。胎土は砂を多く含み粗い。粘土紐の貼付による隆線の懸垂文区画を行ない、隆線の両側は、なぞって磨りつぶしている。懸垂文の間をヘラ状のもので「ハの字」を施している。第194図の1と2も同一個体と思われるが接合しなかった。底面は磨かれている。第193図2も深鉢形土器の底部である。底径は10.4cmで色調は赤褐色を呈する。胎土は砂が多く粗い。ヘラ状のもので沈線の懸垂文を垂下させているが、地文は確認できない。底面はやはり磨かれている。第194図3は深鉢形土器の口唇部であるが、口唇が肥厚して、上面に太い沈線が施されている。地文は「ハ

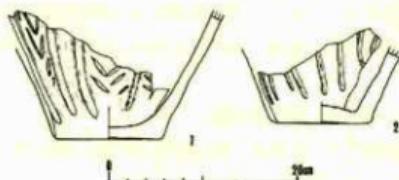
の字文」である。その他の土器も全て縄文時代中期後半のものであるが、中期末まではいかないものであろう。

13. 1号埋設土器 (第195・196図、図版24・53)

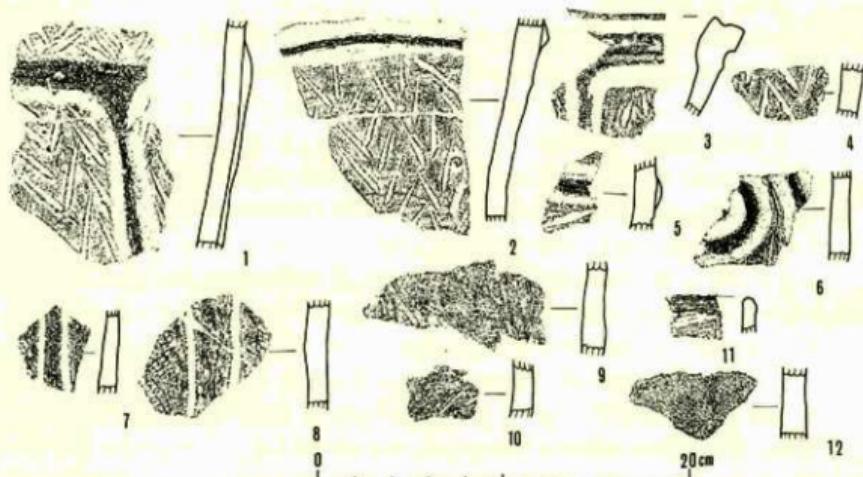
(埋設状態) 3号掘立柱建物址の西側を精査中に発見した。既に上部は破壊されていたようであり、周囲から見つけることはできなかった。掘り込みは直径75cmほどの円形プランを呈し、確認面からの深さは40cmであった。土器は正置の状態で埋設されており、底部は欠損していた。問題は、この土器が単独の埋甕なのか、あるいは、住居址内の埋設土器なのか、ということだろう。後述するが、この6区は、全体的に縄文時代中期～後期の土器



第192図 14号土壤平面図



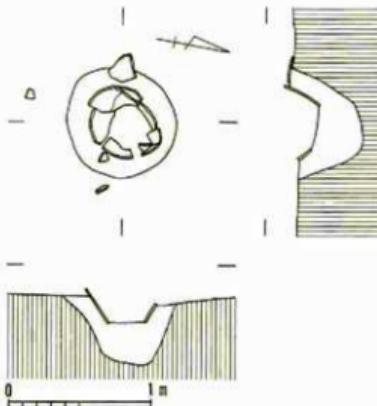
第193図 14号土壤出土土器 (1)



第194図 14号土壤出土土器 (2)

が散在しており、当初、かなりの数の住居址が検出できると予想された。この埋設土器も住居址内の埋甕の可能性が強く、とくに埋設土器の北側を精査して、炉址や柱穴の検出につとめた。しかし全くその痕跡さえも確認できず、単独の埋設土器と認定した。

(出土土器) 第196図に示した。まず原体Rの縄文を器面全体に縦方向に回転させて施す。次にヘラ状施文具で2本1単位の沈線の懸垂文を直線で垂下させている。単位は8単位と思われる。その懸垂文の間に同じ施文具により、蛇行懸垂文を垂下させている。ただ部分的に蛇行懸垂文を施さないところもある。

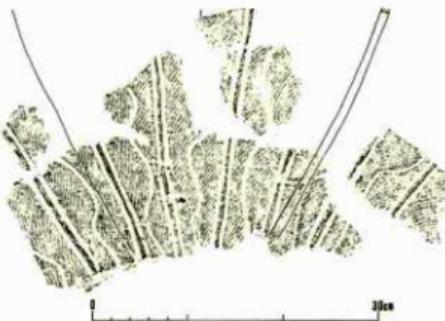


第195図 1号埋設土器平面図

14. その他の出土遺物(第197~199図)

前述したように、6区では調査中に地区全体から、かなりの縄文土器が出土していた。それらは確実な構造は把握できないまま終わってしまった。時代は縄文中期末葉から後期初頭のものである。

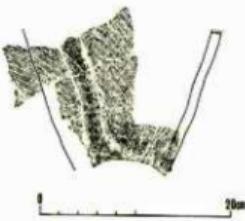
○縄文時代中期の土器 第197図は磨消縄文が行なわれる土器である。原体LRの縄文を縦位に回転して施文後



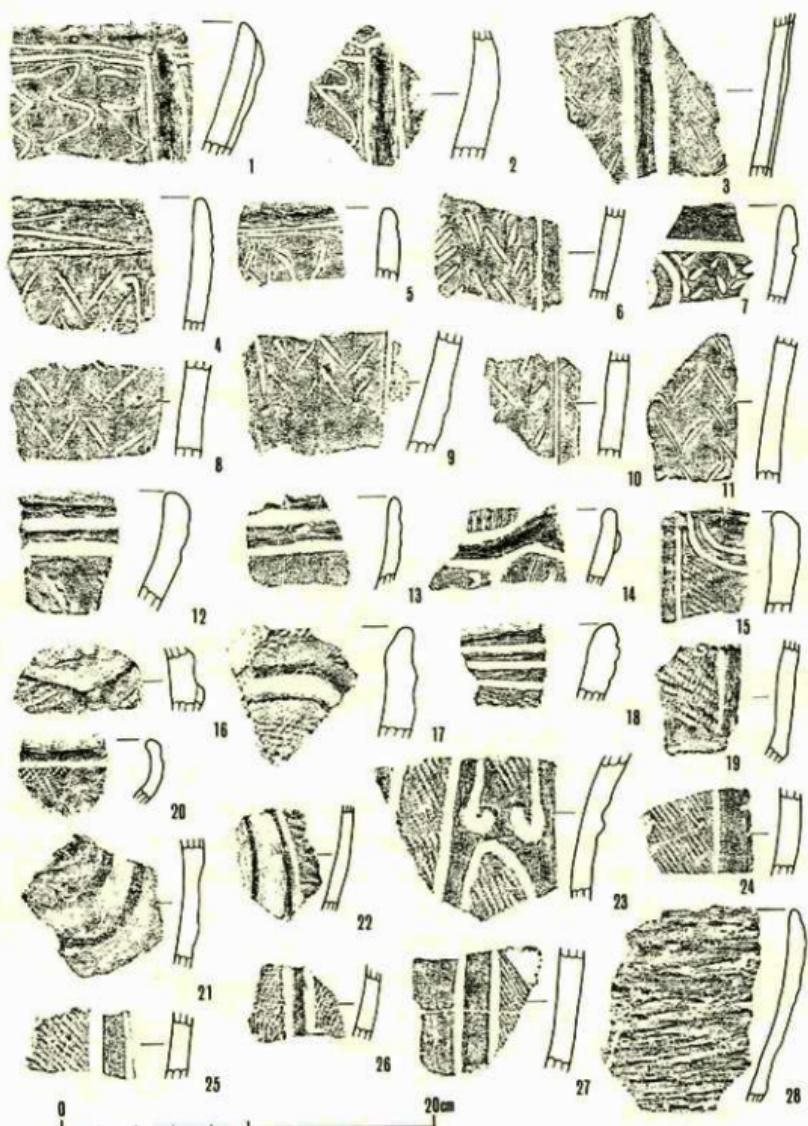
第196図 1号埋設土器

に、2本1単位の沈線の懸垂文を垂下させて、その間の縄文を磨り消している。第198図1~3は、先に4区の疊層で分類したa~6型式(P.81)の土器と酷似している。口唇直下から粘土紐の貼付による隆線の懸垂文を直線的に垂下させるもので、類例の少ない型式である。その他第198図4~12は、沈線のみの表現方法により、地文に「ハの字文」を施すものである。縄文を地文とするものも、モチーフを隆線で表現するもの(16・17・21・22)と沈線で表現するもの(15・18~20・23~27)があり、4区の疊層と同じ様相を示している。第199図1~5までは口縁が極端なキャリバー形を呈する深鉢形土器であろう。充填縄文の手法を行なっている。

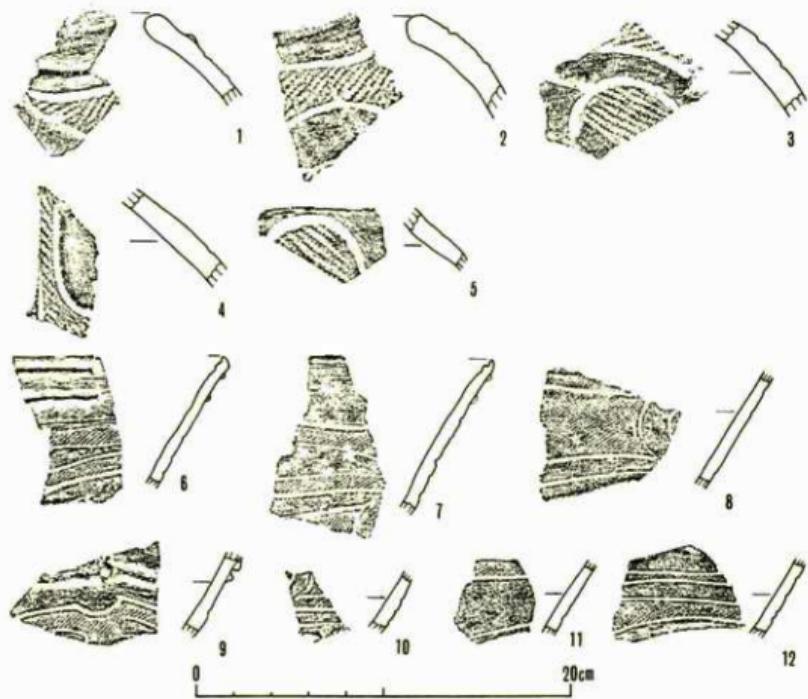
○縄文時代後期初頭の土器 第199図6~12までは同一個体である。口唇部は内面に2本の沈線をめぐらす。表面は口縁部に2本の粘土紐を貼付してめぐらす。縄文原体は



第197図 6区出土土器 (1)



第198図 6区出土土器 (2)



第199図 6区出土土器 (3)

然りの細かいLRの原体である。文様区画はヘラ状のもので沈線で表現されているが、最初に行なわれている。その次に縄文を施し、区画からはみ出したところを磨り消している。色調は暗褐色を呈し、胎土はとてもきめが細かい。焼成も良好である。

以上が6区で検出した遺構と遺物であるが、ほとんど本線上の発掘区に沿って調査が行なわれたにもかかわらず、遺構で多少場所の上で食い違うところがあった。当時は $2m \times 2m$ のグリッド方式の発掘方法をとったため、細かい遺構は検出できなかったと思われる。

第7節 7区の調査

1. 調査の背景

今回の7区とした場所は、本線上で柳坪遺跡B地区とした範囲の東端の南側にあたる場所である。東側はすぐ谷となっている。本線上では、平安時代の住居址3軒と縄文時代の住居址2軒が検出されている。今回も同時期の遺構あるいは遺物が多少なりとも確認できるのではない

かと思われた。

2. 調査の結果

重機の使用により、厚さ30~40cmの表土・擾乱層を取り除き、以下を人力で精査し、ローム面まで掘り下がった。ロームはソフトロームであり、遺構の遺存状態はかなり良好と思われたが遺構も遺物も全く発見できなかった。

第8節 8区の遺構と遺物

1. 調査の背景

本県では残念なことに、従来、遺跡の調査は台地上にのみ限られていた。しかし遺跡というものは古代人の生活空間の全てを指すものとすれば、台地上というのは、単なる居住空間でしかなかったかもしれないわけである。台地の斜面や谷間にこそ生業活動の痕跡が残されている可能性が高いと思われる。実際に発掘に先立って行なわれた、8区の土壤の花粉分析およびプラントオバール分析（付録参照）によっても、平安時代の水田遺構の存在の可能性が指摘された。同時に最近の他県の状況を見ても、谷間の発掘調査は常識化しつつあり、また実際に、それなりの成果をあげてきている。本県でもそれに従うのは当然と思われ、今回の調査になったわけである。

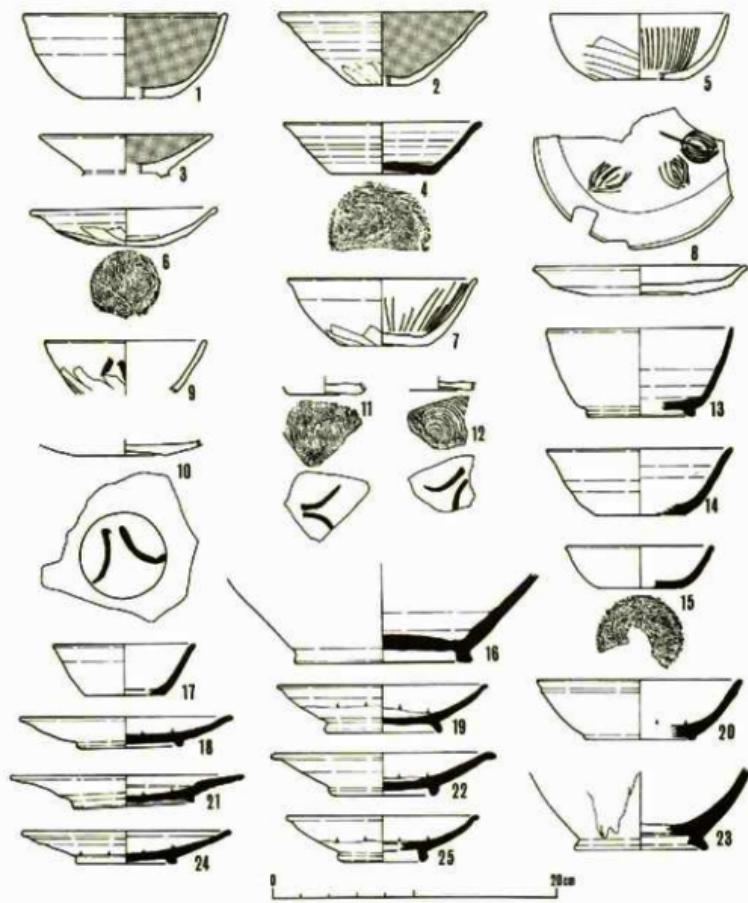
2. 調査の状況

3区の尾根と1区・5区の尾根との間の谷が調査対象であった。試掘の結果、約20cmの厚さの現水田面を取り除くと、厚さ10cmの床土がある。それ以下は約20cmの粘質土層となる。この粘質土層中には人工遺物はない。そして谷の中に2個所ほど、その粘質土層下に平安時代に形成された泥炭層が厚さ30cmほど残っていることが判った。その2個所を8区とした。その泥炭層以下は疊層となる。

3. 出土遺物（第200~204図、図版24~26・58・59）

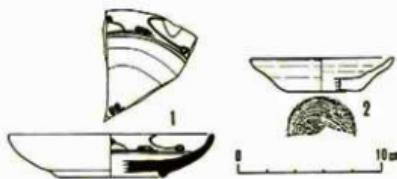
残念ながら水田遺構や、その他の遺構も、何ら痕跡さえも確認できなかった。しかし泥炭層中からは、平安時代のものと思われる流木群、土器類、木製品などが出土した。

○出土土器 第200図1~3・5~12が土師器である。1は内面黒色で光沢がある。表面はナデ。底部は磨耗しているが糸切りである。2も内面黒色であるが、表面はナデとヘラ削り。内面もナデ。底部はヘラ削り。3も内面黒色土器であり光沢がある。表面はナデ。5は表面はナデとヘラ削り、内面は研磨後に暗文を施している。底部はヘラ削り。6は底部糸切りであり、表面はナデとヘラ削り、内面はナデ。7は表面はナデとヘラ削り、内面は研磨後に暗文が施されている。底部はヘラ削り。8の皿形土器は、内外面共にスケティングが、黒色土器とはいい

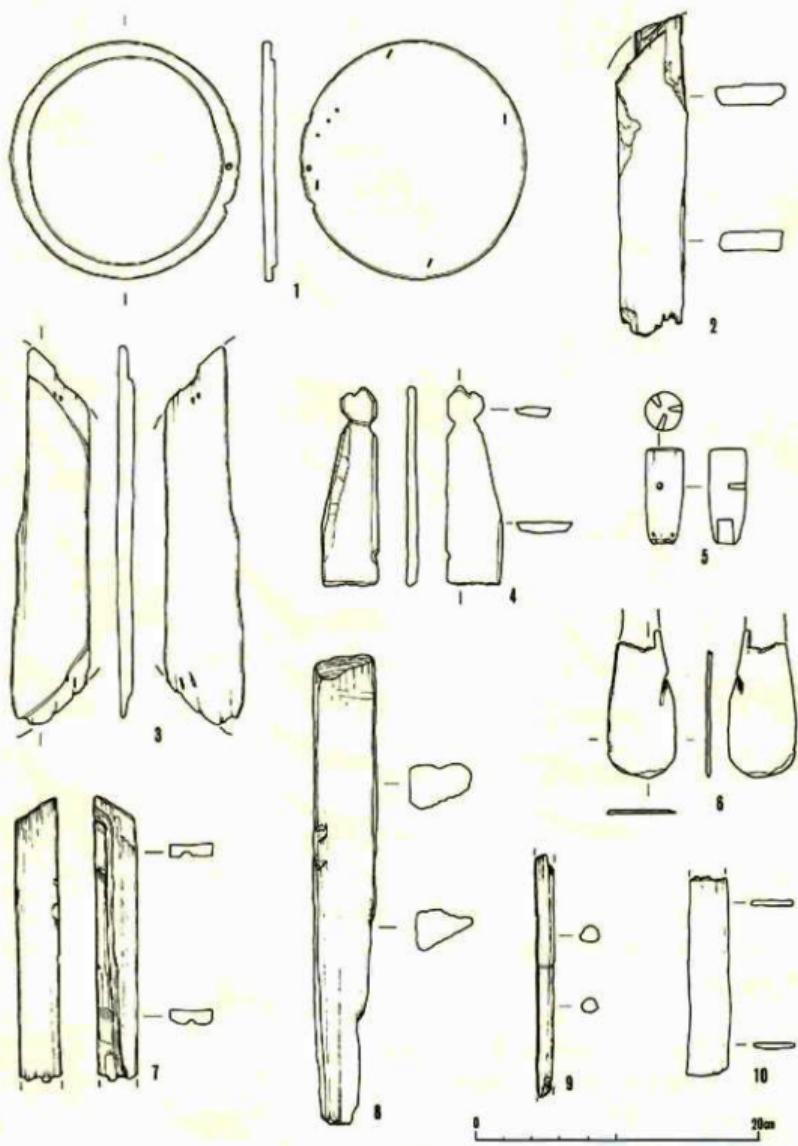


第200図 8区出土土器 (1)

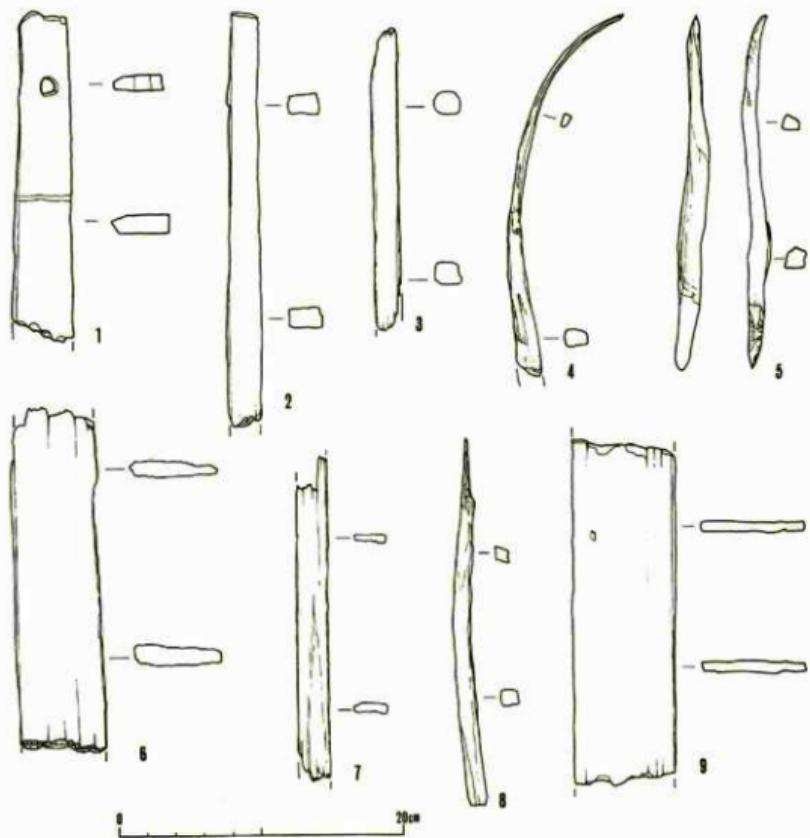
難い。表面には段を有し、段より上はナデ、以下は底部まで2回に分けて回転ヘラ削りが施されている。内面はよく研磨されており、暗文が施されている。9~12は环形土器あるいは皿形土器と思われるが、全て「八」の墨書きが行なわれている。9は表面はナデとヘラ削り、内面はナデ。10は底部回転ヘラ削り。11は底部糸切り後にヘラ削り。12は底部ヘラ削りである。



第201図 8区出土土器 (2)



第202図 8区出土木製品



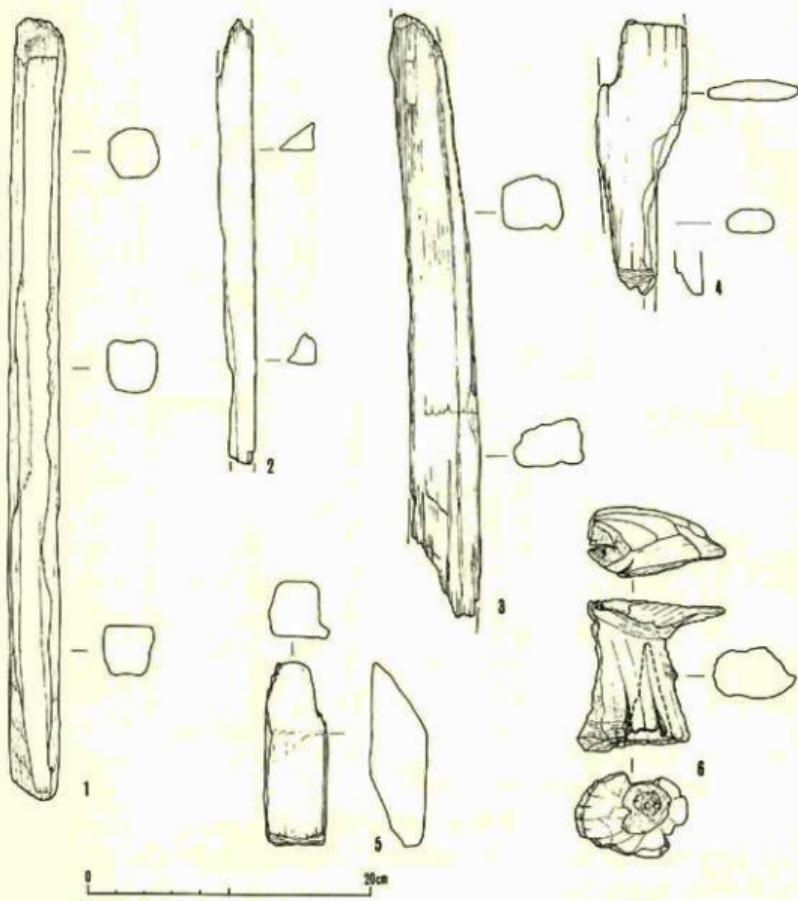
第203図 8区出土木製品

4・13～17は須恵器である。4と15は底部糸切り。18～23は灰釉陶器である。18～22・24・25は刷毛塗り。23は流し掛けか。

第201図1と2は平安時代以降の磁器と土師質土器である。

これらの土器は最も古い段階のものから最も新しい段階のものまでは相当長期間の隔りがある。しかし出土土器の主たるものは、尾根上の住居址群の時期と一致するものであり、当時、集落の人々にとって、この谷が生活の上で何らかの役割をもっていたことは明らかであろう。

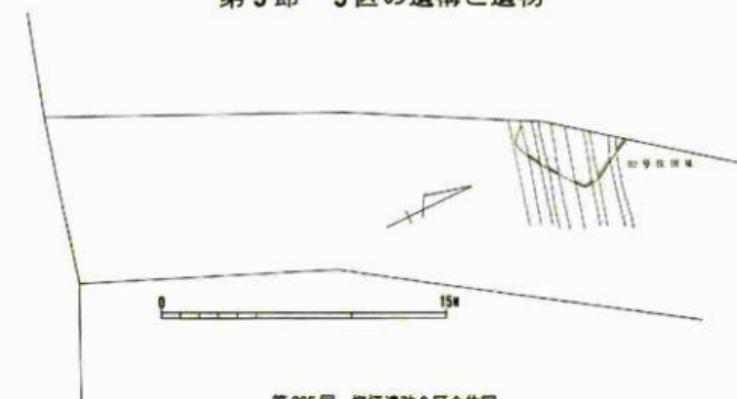
○出土木製品 第202～204図が泥炭層から出土した木製品である。製品が判るのは極くわずかであるが、併出している土器が示すように、平安時代の人々がその生活の中で作り出した木製品であることは間違いないであろう。第202図1は曲物の底部であり、直後約16cm、厚さ1cmである。周囲に4個所、樹皮が通されたままの穴が見られる。2と3も曲物の底部であろ



第204図 8区出土木製品 (3)

う。4は一見人形のようにも見えるが、木簡であろう。赤外線撮影なども試たが、墨書は確認できなかった。5は何らかの工具の柄であろうか。一端がソケット状になっている。6は杓子と思われるヘラ状の木製品である。これらの製品以外は、加工された板材、角材がほとんどである。7の板材は片面に溝が彫り込んである。9の棒状の製品は中央の部分に紐をしばったような痕跡が残る。第203図1は孔が穿たれている。第204図6もソケット状の彫り込みがある。板材や角材はもっと大きな道具の一部分の可能性が強い。図示した以外にも多くの木製品が出土している。なお、これらの木製品の材の同定については付編を参照されたい。

第9節 9区の遺構と遺物



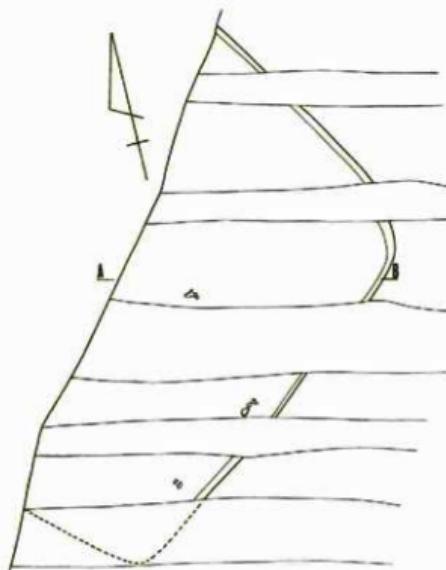
第205図 楠坪遺跡9区全体図

1. 52号住居址（第206・207図、
図版26）

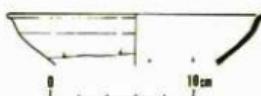
耕作によるトレンチャで著しい搅乱を受けている上に、北西側の半分が調査区域外のため未掘である。一边が450cm前後の隅丸方形プランを呈するものと思われる。カマドは確認できなかつた。床面はほぼ平坦であるが西がわずかに低い。周溝も見あたらない。壁高は10cm前後である。

第207図に示した灰釉陶器が1個体のみ出土している。口径は17.8cmを計る。施釉は内外両面に行なわれており、刷毛塗りである。

9区では52号住居址以外の遺構は検出できなかつた。



第206図 52号住居址平面図



第207図 52号住居址出土土器

第10節 その他の出土遺物

遺構内から出土した遺物でも、明らかにその遺構とは時代的にかけはなれたものは、遺構出土として図示しなかった。また紙面の都合上で遺構のところで図示できなかった若干の遺物もある。それらを集めた。

1. 縄文時代の石器（第208図～第211図）

○打製石斧 第208図1は刃部が欠損している。片面の一部 擦痕が見られる。2は基部が欠損している。片方の側面に敲打痕が見られる。3はかなりの反りがある。欠損部分はない。4は基部が欠損している。5も若干の反りが見られる。基部はかなり厚めにつくられている。6は基部の一部を欠損しているがほぼ完全な形である。7は刃部と基部が共に欠損している。刃部のやや上、側面に近い所に擦痕が見られる。8は刃部のみで他の大部分を欠損している。

○凹石 第209図1は不定形の凹石であり、片面にのみ凹みを1個有する。2は一部欠損している。2面に凹みを有する。片面は全面にわたり擦られている。片方の側面は敲打と擦りが両方行なわれている。3は2面に凹みを有し、片面は1個、もう片面は5個の凹みが存在している。4は両面に大きくて深い凹みが1個づつ存在する。5も大きくて深い凹みだが片面のみである。6はやはり大きくて深い凹みが両面に1個づつ見られる。7は半分ほど欠損していると思われるが、扁平な凹石である。残存部分には両面に2個づつの凹みがつくられている。第210図1は両面に1個づつの凹みを有する。片方の凹みは不定形である。2も約半分欠損しているが両面に凹みが見られる。3も両面に凹みが見られるが、片方は、3個の凹みがつくられており、両端の凹みが深くなっている。

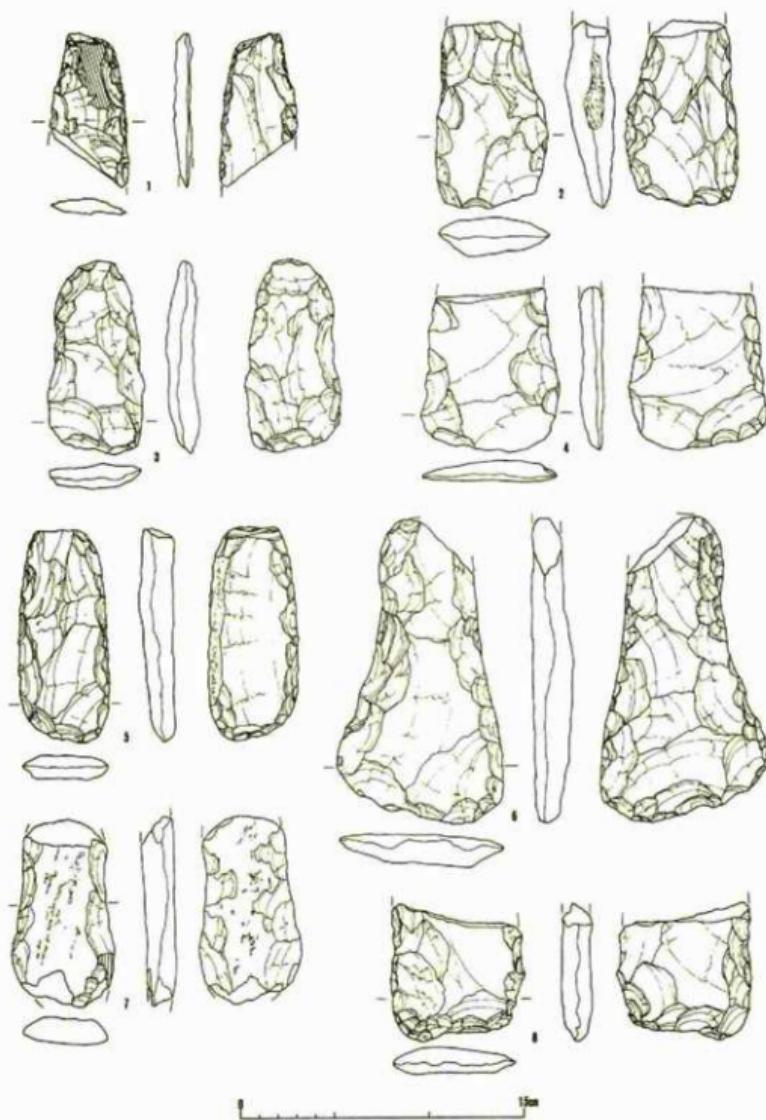
○磨製石斧 第210図4は刃部を含め半分以上を欠損している。全面にわたり細かい不定方向の擦痕が見られる。また基部をはじめ、ところどころに弱い敲打痕も見られる。5は基部であるが、敲打痕が著しい。4面にわたり、一定方向の研磨痕が残っている。6は両端が刃部として作られているようだが、片方にのみ擦痕が著しい。

○石匙 第210図はチャート製の横長の石匙である。

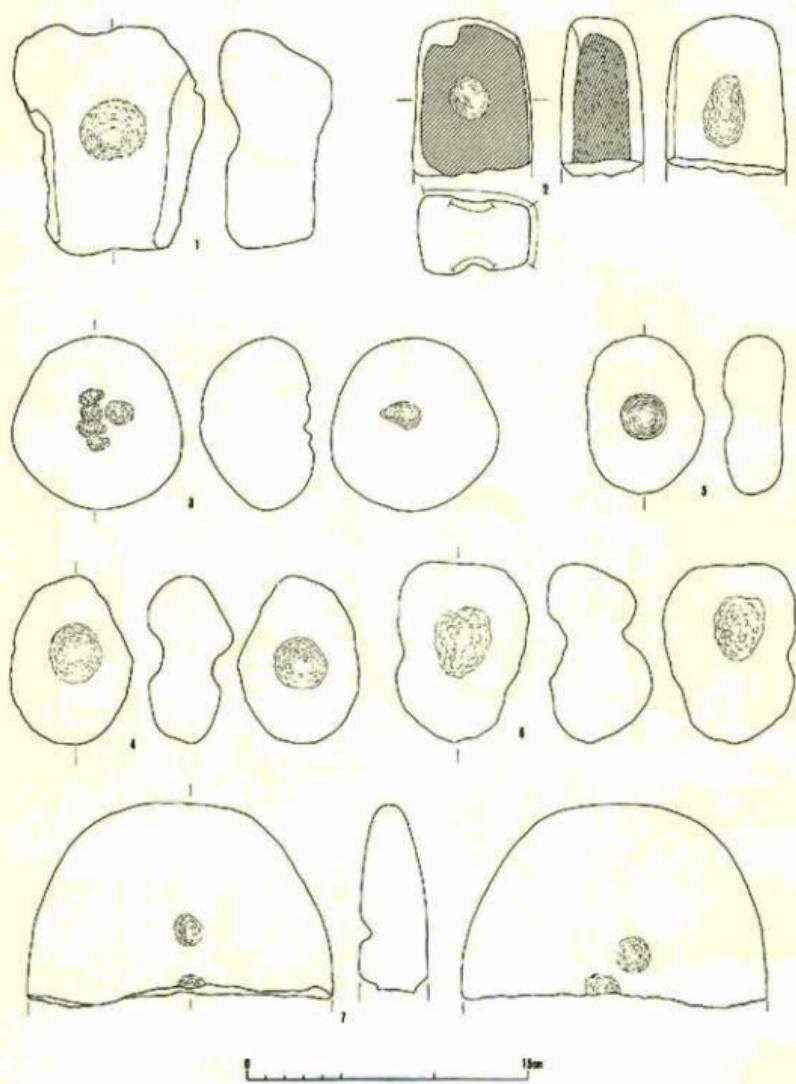
○石鎌 第210図8～19までが石鎌である。使用されている石材はチャートと黒曜石のみである。12と14は有茎の石鎌である。

○横刃型石器 第210図20はホルンフェルス製の横刃型石器である。周囲にところどころ細かい調整が見られる。

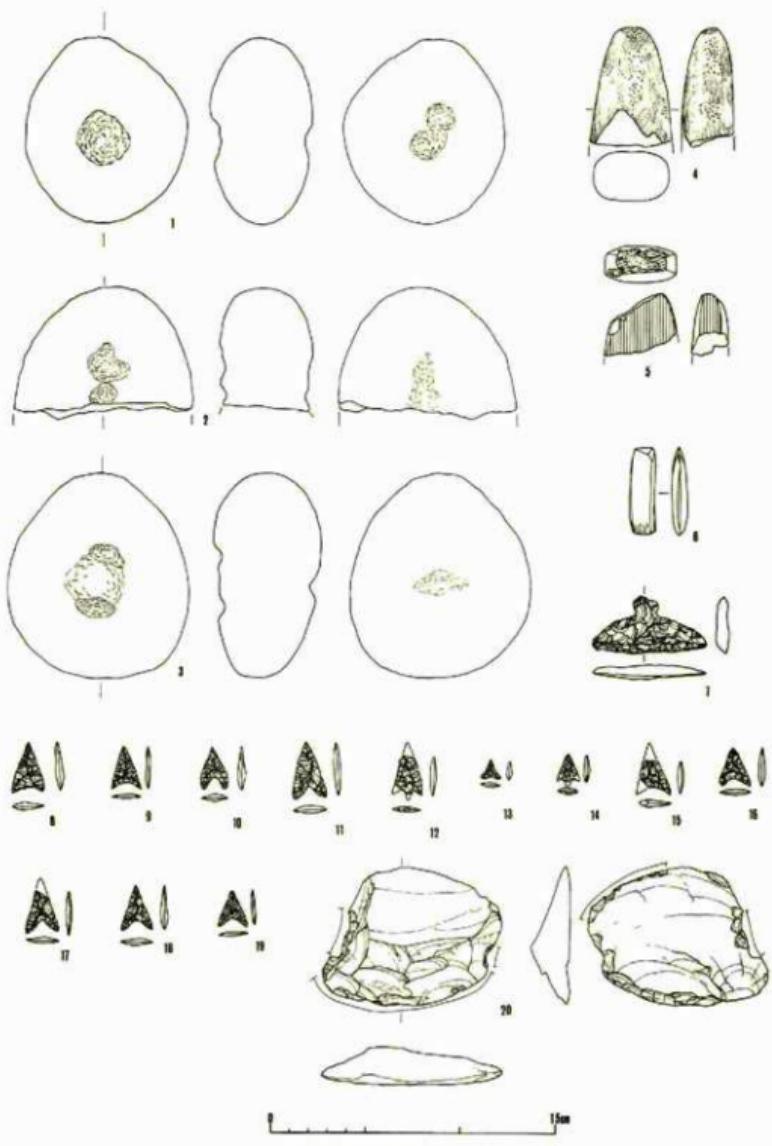
○敲石 第211図1と2は敲石である。1は両端に敲打痕が見られる。上端の一部は最近の剥離面である。周囲のところどころに擦痕が見られ、とくに指示してある個所は擦痕が著しい。第211図2も両端に敲打痕が見られる。下端の敲打痕の周囲には3個所の剥離面が見られるが、これは打撃による剥離である。片方の側面の上部は横方向からの打撃による大きな剥離面がある。また周囲にはところどころ磨きの痕跡が明瞭に残っている。



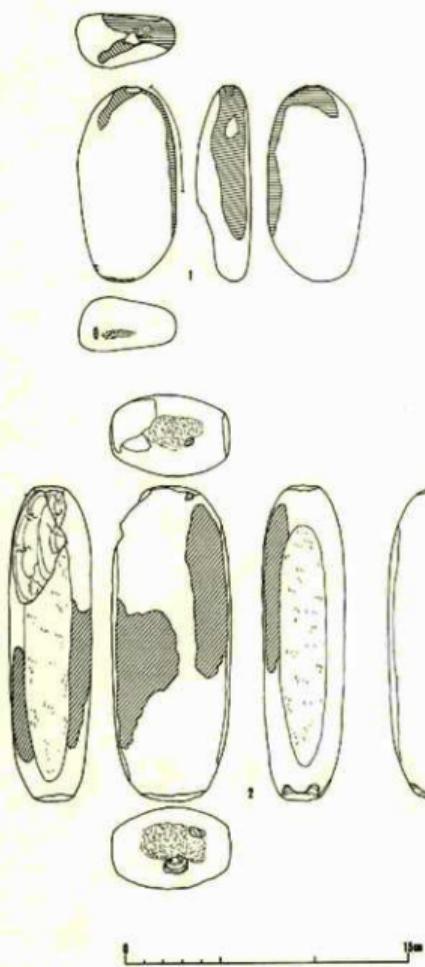
第208図 柳坪遺跡出土土器 (1)



第209図 柳坪遺跡出土石器 (2)



第210図 柳坪遺跡出土石器 (3)



第211図 布坪遺跡出土石器 (4)

である。5区の表面採集である。

第213図5は球形をした直径が1.6cmの石英製の玉である。6区での表面採集。

第213図6は流紋岩製の砥石である。正面から見て、上部から右側面の指示した範囲は整形された面である。それ以外の、断面図において指示した範囲が研磨に使用された面である。石材は凝灰岩である。8区の表面採集である。

2. 弥生時代の石器 (第213図)

1)

粘板岩製の磨製石鎌である。よく面取りされて磨かれている。第5区で表面採集された。

3. その他の遺物

第212図の土器は1区の2号住居址と3号住居址との中间の黒色土層中より出土した。須恵器の大甕で表面は暗褐色、内面は茶褐色を呈する。表面のみタタキ調整が行なわれている。

第213図2は土錘である。長さ4.7cmで、最大径が1.6cm。直徑3.5mmの穴が貫通している。5区の表面採集である。

第213図3は頁岩製の硯であるが磁石に転用されている。裏面などは相当使い込まれて擦り減っている。これも5区の表面採集である。

第213図4は磁器である。口径11.2cm、器高3cm、底径4.3cm。表面には鳳凰と思われる図が描かれ、底部には「萬曆年製」の文字があり明代のものに見せてあるが、おそらく国内で作られたものであろう。なお図示してはいないが、底部には赤色の塗料で「大十三」の文字が書かれているが意味不明

図面番号	種類	石材	出土地点	図面番号	種類	石材	出土地点
第208図1	打製石斧	頁岩	17号住居址	第210図5	磨製石斧	砂岩	17号住居址
	打製石斧	ホルンフェルス	4区		磨製石斧	頁岩	4区疊層
	打製石斧	ホルンフェルス	2区		石ヒ	チャート	19号住居址
	打製石斧	砂岩	4区		石鏃	チャート	17号住居址
	打製石斧	砂岩	5区		石鏃	チャート	6区溝
	打製石斧	砂岩	5区		石鏃	黒曜石	4区疊層
	打製石斧	粘板岩	表面採集		石鏃	チャート	4区疊層
	打製石斧	ホルンフェルス	6区		石鏃	チャート	5区
第209図1	凹石	安山岩	1号住居址	第210図5	石鏃	チャート	8A区
	凹石	安山岩	4区		石鏃	黒曜石	8A区
	凹石	安山岩	1号住居址		石鏃	黒曜石	8A区
	凹石	安山岩	4区		石鏃	黒曜石	表面採集
	凹石	安山岩	4号住居址		石鏃	チャート	表面採集
	凹石	安山岩	表面採集		石鏃	黒曜石	表面採集
	凹石	安山岩	6区		石鏃	黒曜石	表面採集
	凹石	安山岩	4区		横刃型石器	ホルンフェルス	4号住居址
第210図1	凹石	安山岩	5区	第211図1	敲石	砂岩	21号住居址
	凹石	安山岩	4区		敲石	砂岩	33号住居址
4	磨製石斧	砂岩	表面採集	2			

表1 石器一覧表(第208~211図)



第212図 1号・2号住居址間出土土器



第213図 柳坪遺跡出土遺物その他

第4章 各

説

第1節 繩文時代の遺構と遺物

1. 住居址群の展開

柳坪遺跡は1本の谷によって大きく2つの住居址群に分かれている。これを2つの集落と把える考え方もあるが、それは個々の集落概念によって異なるものであろう。本線A地区を中心とする群は、インター2区も含め、五頭ヶ台式期より中期末葉までの住居址が確認されている。本線B地区を中心とする群は、インター1区・5区も含め、中期後半の住居址群しか確認されていない。すなわち柳坪遺跡における縄文人の定着は、西尾根に五頭ヶ台式期より開始されたわけであり、以後、勝坂式期を経て、曾利式期になった直後から、住居址群が東尾根にまで拡がっていったと理解するのが自然であろう。確かに一時期に台地上で住居が飽和状態になることはないだろうが、1台地=1集落という公式も何ら根拠のないものである。

本遺跡と同じ長坂町に所在する頭無遺跡（末木、1975）も、本線B地区と同時期の住居址群が確認されている。八ヶ岳南麓をはじめ、八ヶ岳西麓でも同時期の遺跡が急増する傾向にあるようである（長崎、1973）。すなわち、中期後半になると、従来生活していた台地から、更に新しい台地へと生活の場を拡大していく傾向がある。この現象には幾つかの解釈が出されているものの、基本的には、自然環境の悪化と増加した人口による食料獲得の危機の打開策としての集落の分裂＝集落の増加、という解釈が妥当のようである（末木、1974）。

現在それ以外の説得力のある説は見あたらないものの、今一つ不満を感じことがある。それは八ヶ岳山麓の中期集落が減少していき、後期初頭にはほとんど存在しなくなる現象に対する解釈にも通じるものがある。つまり気候の寒冷化で人間集団が簡単に分裂したり、減少したりするものか、ということである。中期後半の遺跡の増加、そしてそれ以降の住居址数の減少というものの背景には、生業活動の何らかの変質、そしてそれ以降の集落としての広い縄文社会内部での存在意義・存在基盤の消失があるのではないか。今後はそのような社会的、経済的側面から八ヶ岳山麓の集落群の消長を考えていくべきではないだろうか。

2. 中期後半の土器の諸問題

○11号住居址出土土器の編年的位置

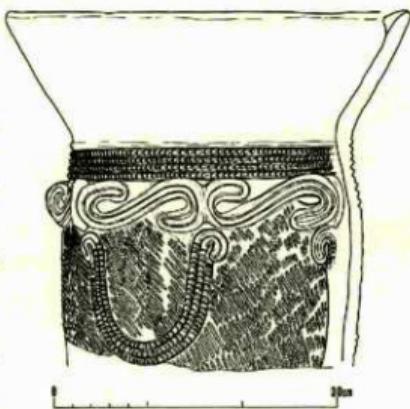
八ヶ岳山麓の縄文時代中期の土器編年は、報告書「井戸尻」（藤森、1965）によって大成された。その中で中期後半に位置するのが「曾利式土器」である。その中で曾利式土器は、I式→II式→III式→IV式→V式という5~6段階の編年が示された。以後、III式と呼ばれる一群は、II式に加えられた（長崎、1973）。そのIII式をII式に加えたことは、それ以後多くの研究者に支持されてきた（米田、1978・武藤、1978・長崎ほか、1980・樋口ほか、1981・末木、1981）。しかし、中部高地縄文土器集成グループの曾利式土器編年図を見る限り、I式とII式、II式とIII式、IV式とV式のそれぞれの内容に著しい混乱が見られ、とても「現在

では確定した感が強い」（樋口ほか、1981）とは決して言えない。柳坪遺跡11号住居址の出土土器を見る時、I式とII式、III式とIV式の関係が重要になってくる。

11号住居址の土器の中でまず注目したいのは、地文の点で、刺突文（第46図1～3・6）と結節縄文（第47図2・3）である。従来の編年では、刺突文のものはII式とIII式の両方に見られ、結節縄文はII式の特徴となっている（長崎ほか、1980）。この2つの異なる地文に時間的差異はないのだろうか。第214図に示したのは天神遺跡出土土器である。^[1] この土器は地文が縦位の条線文であれば、明らかに曾利I式と言えるものだろう。しかし結節縄文が使用されているのである。この土器と地文が刺突文の土器が共存することは、多くの事例から考えても極めて可能性が低い。^[2] つまり結節縄文の手法は、刺突文の手法よりも、やや古い時期に確立したと思われる。このことは別の意味も示している。つまり天神遺跡に見られる体部の“U”状モチーフは、従来曾利式土器の最初の段階に一般的なモチーフと考えられていた。しかし天神遺跡の結節縄文例を見ると、最初の段階の中でも比較的新しい部分のモチーフの可能性が高くなつた。勝坂式土器の最終段階の次の段階に、“U”状モチーフを置くことは少々無理があると思われる。このことは、かつて曾利I式を2段階に編年することが可能ではないかとしたことと同様な意味をもつてくる（米田、1980）。また刺突文を地文とする土器は、典型的な曾利II式土器を出土していると考えられている柳坪B10号住居址、頭無7号・9号住居址では、全く出土していないか、客体的存在であるか、のどちらかである点を注意しておこう。

ところで11号住居址出土土器の中で口縁に沈線の弧線文が施される土器群（第47図4～6・8）は、どんな編年の位置を有するのであろう。中部高地土器集成グループの表によれば、1個体だけ曾利II式の中に置かれている。しかし、その弧線文の発生時期を考えてみると、そう簡単には問題は片づかないだろう。そこで問題としたいのは、弧線文土器の地文である。無文のもの（第47図8）もあるが、多くは縄文が使用されているようである。このことは弧線文土器の系統に起因しているのかもしれないが、既に在地の土器として製作されていると理解すべきであろう。それだからこそ第215図に示すような在地型の土器にも技法として定着しているのである。その柳坪A2号住居址例は、地文として、口頸部は条線文、体部には刺突文が使用されているのである。しかし多くの資料を集めたにもかかわらず、弧線文土器で結節縄文を伴うものは見つけ出すことはできなかつた。つまり弧線文土器は、結節縄文手法の消滅直後、地文に刺突文を主体的に使用する段階と同じに登場してくるのである。

以上のように考えてみると、11号住居址の編年の位置が明らかになってくるであろう。つまり従来の曾利II式が結節縄文を重要なメ



第214図 天神遺跡出土土器

ルクマールとしている点を考えれば、從来の曾利Ⅲ式より新しい段階の土器が主体である、といえよう。しかし從来の曾利Ⅲ式よりも古い段階のものがほとんどである、ともいえるのである。11号住居址とほぼ同時期の土器を出土しているのは、柳坪A1号住居址・A2号住居址などがあげられるであろう。これらに先立つ段階のものが、曾利50号住居址（武藤、1978）曾利17号住居址・居平4号住居址（共に藤森、1965）、頭無12号住居址などの出土土器であろう。

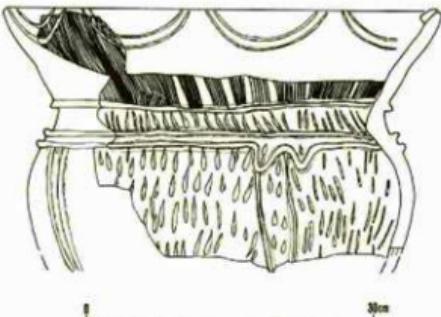
○41号住居址出土土器の編年的位置

先に從来の編年では曾利Ⅳ式とV式もかなりの混乱が見られるとしたが、41号住居址の出土土器はどう使えるべきであろう。第165図1～4までに共通していえることは、口縁部の横帯区画文様帯が消滅している点、文様区画も表現も全て沈線文で行なわれている点、蛇行沈線文が施されている点などであろう。これらの土器をもって、從来のV式の最も新しい部分としておきたい。つまり蛇行懸垂文が完全に消滅する段階で、1つの区切りをつけるべきだと考える。実際の住居址の共伴関係を見ると、41号住居址のようなまとまった資料は極く希である。かなり隆線で文様表現されたものや、口縁部横帯区画文様帯が残存しているかどうか微妙なものが混在している。ただ特異な例^[3]を除いて、隆線で文様表現される例は、蛇行沈線文の消滅とほぼ時を同じくして消滅していると思われる。口縁部横帯区画文様帯は、從来の曾利Ⅳ式以降ほとんど失われているが、わずかに中期末まで残存しているようである。

○4区躰層出土土器の編年的位置

4区の躰層出土の土器の中で地文として沈線文が使用されるa型式の中で、今日まで住居址出土資料として一般的なものはa3型式とa4型式の2型式である。曾利Ⅴ式土器と呼ばれている典型的な土器群である。しかし、a1、a2、a5、a6の4型式は、住居址に伴って出土している例はほとんどない。言葉を変えると破片資料ばかりの上に数が極めて少ない。また、地文で繩文が利用されるb型式の中でも、住居址に伴うものはb6、b8～b11の5型式である。これらは先のa3、a4の2型式と共に出土している。つまりb型式に関しては、文様区画を隆線で行なうものは、住居址からはほとんど出土していないのである。^[4]

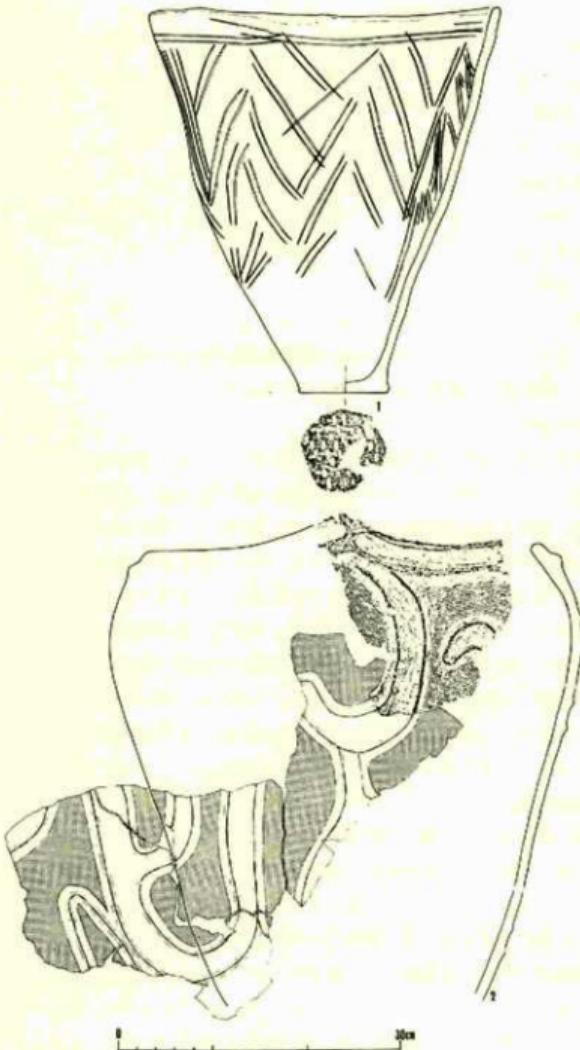
現在本県で中期最終末の資料として認められているものは、金の尾遺跡の土壤から伴出した第216図に示す2個体の土器である。2の土器は、関東の東京編年（安孫子ほか、1980）でも第Ⅷ段階に位置すると思われる。そして1の土器こそ曾利式土器最終段階のものと考えられているわけである。この段階の土器群は、住居址出土遺物として確認された例はない。関東地方では多くの場合、柄鏡形敷石住居址などから普遍的に出土している。しかし本県、とくに八ヶ



第215図 柳坪A2号住居址出土土器

岳山麓では、中期最終末の住居址が確認されていないのである。従来、曾利V式土器は2段階に編年が可能ではないかと指摘をされてきた（戸田、1977・長崎ほか、1980・樋口ほか、1981・末木、1981など）。その2段階とは、基本的には、住居址から出土する4区疊層出土a3・a4型式の段階と金の尾遺跡出土土器の段階のことであった。

4区疊層出土土器の中でa1、a2、a5、a6の4型式の中でa1とa6は隆線での文様表現が行なわれている上に、極めて類例が少ないために、今回は論述は避けることとして、a2型式やa5型式はどのような編年的位置を有するであろう。かって曾利V式の2細分が称えられた時と同じ理由で、住居址から出土するa3型式、a4型式とは分離が可能であろう。また、金の尾遺跡出土例の段階まで時代を下らせることはできないと



第216図 金の尾遺跡出土土器

思われる。最近a2型式の土器は、北巨摩郡須玉町川又南遺跡より、ほぼ完形のものが出土した（山路、1986）。極めて浅い沈線で文様表現されており、a2型式の特徴を明瞭に示している。やはり、a2型式は、a3・a4型式の段階と金の尾の段階の中間に置くことが妥当と思われる。同様にb型式の中で隆線で文様表現をするもののうち、b3型式のみが金の尾遺跡出

土器の2の土器と同じ段階に抑えられ、他の型式はa 2型式と同じ時間帯を与えてよいのではないだろうか。

○中期後半土器編年の総括（付図参照）

以上検討を重ねてきたが、それらをまとめたものが付図である。八ヶ岳山麓の縄文中期後半の深鉢形土器は大きく11の型式に分けられ、9つの段階に編年が可能であろう。

A型式：関東の加曾利E式土器あるいはそれに酷似したもの

B型式：口縁部文様帶と体部文様帶を有する非加曾利E式的土器群

B 1型式 口縁部に粘土紐の貼付による弧線文を施されるもの。

B 2型式 口縁部に粘土紐の貼付あるいは隆線による渦巻つなぎ文が施されるもの。

B 3型式 口縁部に沈線文で弧線文が施されるもの。

B 4型式 口縁部に粘土の帯が貼付され渦巻文や円文が施され体部は文様帶が1つで直線的な懸垂文区画されるもの。

B 5型式 口縁部に粘土の帯が貼付され渦巻文や円文が施され体部は文様帶が2つに分けられ上部は直線的、下部は曲線的な文様区画が行なわれるもの。

C型式：頸部を境にして文様帶が2つに分かれ、文様が全体に施されるもの。

C 1型式 口頸部に波曲状の文様表現が施されるもの。体部には縄文も使用される。

C 2型式 口頸部に斜状の文様表現が施されるもの。体部には縄文は使用されない。

D型式：頸部を境にして文様帶が2つに分かれ、口頸部が無文のもの。

D 1型式 体部に文様が施されるもの。

D 2型式 体部に文様が施され、頸部に粘土紐でX字状の把手が付けられるもの。

D 3型式 体部に文様が施され、口頸部に大形の把手が施されるもの。

第Ⅰ段階：A、C 1、D 1の3型式が存在。A型式以外は円筒形の器形。体部は直線的な文様区画が主体的である。地文は条線文主体で縄文も若干ある。A型式の口縁部は渦巻文が未発達である。D 2、D 3は存在の可能性があると思われる。

第Ⅱ段階：A、C 1、D 1、D 2、D 3の5型式が存在。A型式は第Ⅰ段階との区別は現時点ではつけ難い。それ以外の型式は体部のモチーフは“U”状や曲線的なものが主で渦巻文はまだ未発達。地文は条線文が主体で縄文も若干ある。シーメン状の粘土紐が多用される。

第Ⅲ段階：A、B 1、B 2、C 1、D 1、D 2の6型式が存在。A型式は口縁の下に無文帶が存在。他型式のモチーフでは大形の渦巻文が確立する。地文は結節縄文が主体で縄文がそれに続く。C 1型式の波曲状のモチーフは、重弧状に変化する。D 3型式は消滅している。C 2型式も存在の可能性がある。

第Ⅳ段階：B 1～B 5、C 1、C 2、D 1、D 2の9型式が確認されている。B 3～B 5型式が登場する。B 4型式の懸垂文は信州方面に祖型を求める。地文は刺突文を多用する。縄文と条線文がそれに続く。B 5型式では口頸部に無文帶ができるものも多い。体部に“+”状区画が登場している。

第Ⅵ段階：A、B 1、B 2、B 4、B 5、C 2、D 2 の 7 型式が確認されている。A 型式では磨消縄文されるものも存在。それ以外では地文としての刺突文はほぼ消滅。B 型式の体部文様はほぼ沈線でのみ表現される。

第Ⅶ段階：A、B 1、B 2、B 4、B 5、D 2 の 6 型式が存在。A 型式では磨消縄文が発達。B 型式では口縁部文様帯がほぼ消滅する段階。文様区画は隆線が発達するが、すぐ沈線文化が開始。幅広い沈線の蛇行懸垂文が盛行。体部の渦巻文モチーフの最後の段階。D 2 型式では前段階と把手の連結方法が変わり、頸部の屈折も弱くなる。また体部の隆線は 1 本で表現。B 2 型式と B 4 型式の区別がなくなってくる。

第Ⅷ段階：A、B、D 2 の 3 型式が存在。A 型式はようやく口縁部文様帯が消滅。B 型式は文様表現が沈線文化。蛇行沈線も姿を消す。D 2 型式のみ、把手の装飾表現のためか、文様区画を隆線で表現するものが多い。

第Ⅸ段階：A、B の 2 型式が存在。A 型式の文様表現は隆線が主体。隆線は断面半円形に近い。B 型式は浅く幅広い沈線で文様表現。体部文様区画が衰退してくる。

第Ⅹ段階：A、B の 2 型式が存在。A 型式の隆線は断面三角形で幅が狭くなる。幅広い無文帯が盛行する。B 型式では体部文様区画がほぼ消滅。地文は細く浅い粗雑な沈線文や半截竹管文で表現。

以上の 9 段階編年が八ヶ岳山麓以外の地域ではどのように対応するか今後検証していく必要があると思う。なお関東地方の東京編年と対比させると、次の様になると思われる。

東京	I	II	III	IV	V	VI	VII
八ヶ岳	I	II	III	IV	V	VI	VII

3. 遺跡間の石器組成の差異について

柳坪遺跡と頭無遺跡は 2.3 km ほど距離をおいて存在している。前述したように柳坪遺跡は中期全体にわたる A 地区を主体とする地域と、中期後半から営まれる B 地区を中心とする地域に分けられる。頭無遺跡は時期的には後者と同じである。これらの遺跡から出土する石器の種類と数を示したものが表 1 である。勝坂期との比較で境川村一の沢遺跡（昭和 58 年調査末報告）の例も掲げた。なお柳坪遺跡の今回の調査分は、地区別で A・B 両地区に分けて合計してある。また A 地区の中で中期後半以外の住居址出土の石器は、その数を除いてある。最終的に 1 軒の住居址あたり、どんな石器をどれくらい出土しているかを表わした。

今回は事実記載のみにとどめるが、八ヶ岳の同じ台地上で同じ時期に営まれた遺跡であるのに、遺跡により大きな差異があることがわかる。とくに注意をひくのが、頭無遺跡における凹石と多孔石の量の多さであろう。頭無遺跡と柳坪 B 遺跡は同じ中期後半に開始された遺跡であるのだから、柳坪 A 遺跡とは異なる何らかの共通性が見い出せると思ったわけである。しかし結果は頭無遺跡のみの異状な凹石・多孔石の多さであった。頭無遺跡の縄文人がクルミが大好物であったのならそれまでだが、そこにはもっと根本的な生業活動の差異を感じる。それはあ

る集落が特定の生業活動を担っていた可能性を示しているのかもしれない。

	一の沢遺跡（丹戸区～曾利I・12軒）		調無遺跡（曾利II～V・14軒）		柳坪遺跡A（曾利I～II・11軒）		柳坪遺跡B（曾利II～V・17軒）	
	総 数	1軒あたりの数	総 数	1軒あたりの数	総 数	1軒あたりの数	総 数	1軒あたりの数
凹 石	25	2.08	152	10.86	35	3.18	33	1.94
打製石斧	95	7.92	164	7.43	36	3.27	23	1.35
磨製石斧	23	1.92	12	0.86	6	0.55	6	0.35
石 盆	3	0.25	17	1.21	4	0.36	3	0.17
石 庫	1	0.08	3	0.21	0	—	1	0.06
多 孔 石	1	0.08	39	2.78	3	0.27	1	0.06
磨 石	18	1.50	11	0.79	5	0.45	5	0.29
石 斧	17	1.42	5	0.36	3	0.27	4	0.24
石 磨	7	0.58	3	0.21	12	1.09	10	0.59
輕 石	1	0.08	9	0.64	1	0.09	1	0.06

表1 編文時代中期後半の集落遺跡における石器出土数

第2節 平安時代の遺構と遺物

1. 柳坪遺跡における内面研磨黒色土器の在り方

本県における平安時代の土器類の編年は極めて精緻なものが組み立てられている（坂本ほか、1983）。その編年に沿って、本線上の住居址も含め、住居址の時期別の分布状況を示したのが第217図である。時期決定にあたっては、所謂「甲斐型土器」と灰釉陶器のみを決定材料とした。つまり長野方面からの搬入品と考えられている内面研磨黒色土器は一応無視したわけである。その結果、各時代で住居址はある程度密集して分布していることがわかったが、10世紀第3四半期をピークとして、10世紀第4四半期になると住居址が激減していることも判明した。同時に図の中に、本遺跡で内面研磨黒色土器を出土した住居址群の分布も示した。結果は興味深いことに、10世紀第3四半期の住居址群の分布とほぼ一致した。つまり本遺跡出土の内面研磨黒色土器は、時期的に、ほぼ10世紀第3四半期のものに限定されていることがわかったのである。各住居址で出土している黒色土器は、各々酷似しており、分類することも困難なほどで、各器形別でしか差異を把握できなかった。

さて内面黑色研磨土器で本遺跡より古い段階のものでまとまった資料を出土しているのは、須玉町大小久保遺跡である（山路、1983）。その1号住居址と4号住居址で多くの資料が見られる。彫形土器や他の环形土器の様相から、4号住居址の方が若干新しい段階と思われる。具体的には、1号住居址が9世紀第4四半期、4号住居址が10世紀第1四半期と考えてよいものであろう。1号住居址の内面黑色研磨土器は、底径／口径比が51%、底部厚さが8.0mmの平均値が出た。4号住居址は、底径／口径比が49%、底部厚さが6mmの平均値である。柳坪遺跡で比較的まとまった資料を出土している19号住居址で同様な計測を行なったところ、底径／口径

比が45%、底部厚さが4.6mmとなっていることが判明した。すなわち古い段階ほど、口径に比べて底径が大きく、底部の厚さが厚くなっているのである。また、大小久保遺跡例では、内面の底面周囲に削り痕が見られ、底面と立ち上がり部分との境が角ばっている。柳坪遺跡例では、内面は曲線、球面であり、底面と立ち上がり部分との境が不明確であった。他に大小久保遺跡では大型の环形土器に削り出しの高台が一般的である点が注意を引く。また柳坪以降の資料としては上平出遺跡5号住居址があげられる(末木、1974)。この段階では黒色土器も甲斐型土器の影響を受け底径も極めて小さくなってくる。以上、北巨摩郡地方の内面黒色研磨土器の推移をまとめると次のようになる。

- I 9世紀第4四半期——大小久保遺跡1号住居址
- II 10世紀第1四半期——大小久保遺跡4号住居址
- III 10世紀第2四半期 (+)
- IV 10世紀第3四半期——柳坪遺跡19号住居址、22号住居址など
- V 10世紀第4四半期——上平出遺跡5号住居址

2. 8区の平安時代堆積層の形成について

現在南北に走る浅い小谷の合流点が存在する遺跡中央部、すなわち8区には、調査の結果、平安時代にも現地形とはほぼ一致した谷地形が存在することが確認された。従って平安時代以降の流路はあまり変化していないものと考えられる。おそらく縄文時代にも同様の谷地形が存在していた可能性がある。

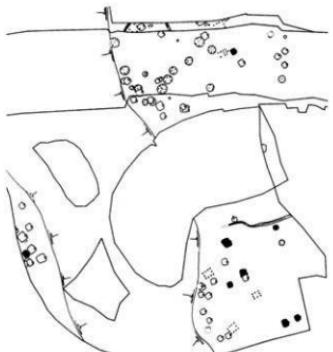
合流点での小谷堆積物は、黒色泥炭質粘土層～黒色粘土層で、褐鉄の沈着した弘法坂礫層を覆っている。(第217図)。遺物は、ほとんど磨耗していない平安時代のものが第V層中から出土している。出土情況から、これらは現地性のものと考えられる。縄文時代の遺物は磨耗が激しく少量で、出土層位が不規則であることから、斜面や上流域からの流れ込みによる異地性の遺物と判断される。従って小谷堆積物は平安時代以降のものと考えられる。

小谷两岸の斜面上には、下部ローム層を削り込んで多数の住居址が分布している。B地区3号住居址(縄文時代中期)、A地区13号住居址(古墳時代)、A地区12号住居址(平安時代)は、小谷に平安時代以降の堆積物が保存されていることから、その間の谷の下刻は微少であったと考えられる。従って、重力による斜面堆積物の断続的な下方への移動、あるいは流路の側方への移動による斜面の後退などに起因して、住居址の一部が削られたものと考えられる。

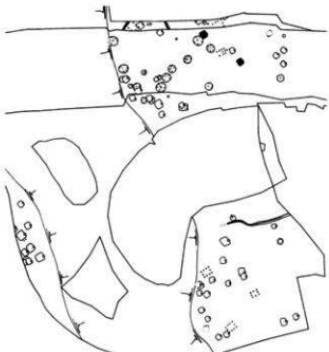
さて、8区における平安時代以降の堆積層形成の要因については、いくつかのことが考えられるが、



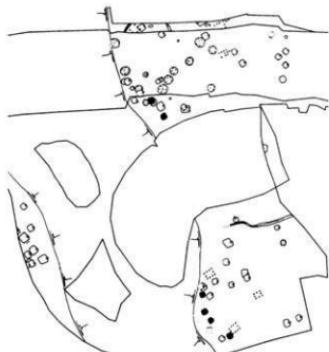
第217図 8区土層柱状図



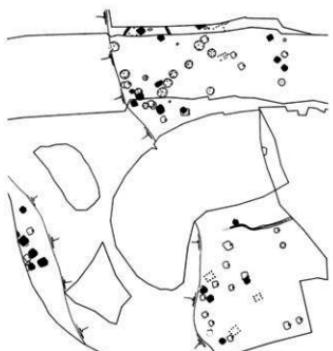
9世紀第4四半期



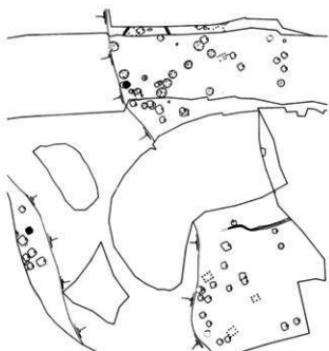
10世紀第1四半期



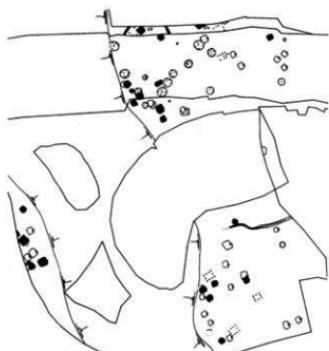
10世紀第2四半期



10世紀第3四半期



10世紀第4四半期



内面黑色研磨土器出土住居址

ここでは1つの可能性として次のように考えてみたい。

本地域には、本遺跡以外に、木ノ下・大坪（佐野、1983）、東姥神B（柳原、1985）、寺所（未報告）、城下（未報告）、東原（未報告）など多数の遺跡が存在し、平安時代の堅穴住居址が多数検出されている。東姥神B遺跡では「安曇」の墨書き土器が検出され、平安時代に他地域からの入植があったことが推定されている（柳原、1985）。また平安時代の甲斐の三御牧の1つの柏前牧の比定地（磯貝・飯田、1973）とされる念場ヶ原に本遺跡は隣接している。また、水田造構は確認されていないが、本遺跡8区の土壤の花粉分析、プラントオバール分析から、平安時代以降のイネ栽培の可能性が指摘されている。これらのことから、平安時代には人口が急増し、それに伴う農耕・放牧等の人間の生業活動が活発化したと考えられる。その結果、上流域では土壤が露出・流亡して削削量が増大し、谷の合流部は堆積の場に転じたものと考えられるだろう。

（注）

(1) 天神遺跡は北巨摩郡大泉村に所在する。未報告である。なお第214図の土器は住居址入口部に埋設してあったものである。

(2) 長野県居沢尾根遺跡（青沼ほか、1981）では曾利I式段階に若干の刺突文を地文とする土器が存在する。しかし土器の型式も特殊で限定されており、刺突文の技法も後のものと異なっている。以後の刺突文とどれほどの連続性を有するかは疑問である。また同じ居沢尾根遺跡では、“U”状のモチーフを有して縄文を地文としている土器群を曾利II式としている。しかし、それらの土器で結節縄文を使用している例が全くないことを注意すべきであろう。

(3) 本文中で後述するが、X字状把手が施される深鉢形土器は、把手装飾との関連性からか、かなり後まで隆線によく文様区画が行なわれている。

(4) 関東地方では、隆線区画で地文が縄文の土器と、沈線区画で地文が縄文の土器とは、頻繁に伴出しているようである（安孫子ほか、1980）。しかし八ヶ岳山麓地域ではそのような傾向は今のところ見ることはできない。ただ和田遺跡3号住居址（宮坂、1974）で共伴例が見られるのみであるが、それらの土器群も本県出土のものとかなり異質であり、今後検討を要する資料と思われる。

※付図で使用した土器の出土遺跡と文献は以下の通りである。

- 居沢尾根（青沼ほか、1981） 1～4、8～14、22、23
- 判の木山東（伴、1974） 5
- 梨久保（宮坂、1972） 6、7
- 曾利（藤森、1965） 15、16、18、24、28 （武藤、1978） 26、29、43、50
- 茅野和田（宮坂、1970） 17、19～21
- 頭無（末木、1975） 25、32、37、38、41、42、44、49、50、51、53、56、57、59、67、70、71、78、80、81
- 柳坪（本報告） 27、33、40、45、47

- 立沢（藤森、1965） 30
- 天神（未報告） 31
- 柳坪A（末木、1975） 34～36、38、46、55、61、69
- 柳坪B（末木、1975） 39、52、54、58、62～66、68、72、74～76、79
- 根古屋（平野、1985） 60
- 居平（藤森、1965） 73、77
- 川又南（山路、1986） 82～85
- 金の尾（未報告） 86～89

（引用文献）

- 青沼博之ほか 1981「居沢尾根遺跡」長野県中央道報文原村その4
- 安孫子昭二ほか 1980「縄文時代中期後半の諸問題——東京・埼玉」神奈川考古第10号
- 磯貝正義・飯田文弥 1973「山梨県の歴史」山川出版社
- 岡本範之 1984「小和田遺跡」長坂町教育委員会
- 岡本範之 1985「小和田館跡」長坂町教育委員会
- 櫛原功一 1985「東姥神B遺跡」大泉村教育委員会
- 郷原保真 1967「八ヶ岳南麓——穴山台地」第四紀11
- 甲府盆地第四紀研究グループ 1969「甲府盆地の第四系」地団研専報15
- 小林国夫ほか 1967「御岳火山第一浮石層」地質学雑誌73
- 坂本美夫ほか 1983「奈良・平安時代の諸問題」神奈川考古第14号
- 笠沢 浩 1976「奈良・平安時代の土器について」長野県中央道報文歴訪市その4
- 佐野勝広 1983「木ノ下・大坪遺跡」山梨県大泉村教育委員会
- 末木 健 1974「中原遺跡・上平出遺跡」山梨県中央道報文北巨摩郡小淵沢町地内
- 末木 健 1975「柳坪遺跡・頭無遺跡」山梨県中央道報文北巨摩郡長坂地内
- 末木 健 1981「曾利式土器」縄文文化の研究4 雄山閣
- 戸田哲也 1977「都留市海戸遺跡出土土器と中期末編年に就て」丘陵1—3・4
- 長崎元広 1973「八ヶ岳西南麓の縄文中期集落における共同祭式のあり方とその意義」信濃
25—4・5
- 長崎元広ほか 1980「縄文時代中期後半の諸問題——長野・山梨」神奈川考古第10号
- 伴 信夫 1979「伴の木山東遺跡」長野県中央道報文茅野市・原村その2
- 樋口昇一ほか 1981「関東・中部・北陸地方」縄文土器大成2 講談社
- 平野 修 1985「根古屋遺跡」白州町教育委員会
- 藤森栄一 1965「井戸尻」中央公論美術出版
- 三村弘二ほか 1982「自然残留磁器からみた韭崎岩屑流と流れ山」地質学雑誌88
- 武藤雄六 1978「曾利」富士見町教育委員会
- 宮坂虎次 1974「中ッ原・和田遺跡」茅野市教育委員会

- 宮坂英式 1957「尖石」
- 宮坂英式 1970「茅野和田遺跡」茅野市教育委員会
- 宮坂光昭 1972「梨久保遺跡」長野県岡谷市教育委員会
- 山路恭之助 1983「大小久保遺跡」須玉町教育委員会
- 山路恭之助 1986「川又南遺跡」広報すたま第209号
- 米田明訓 1978「曾利式土器編年の基礎的把握」長野県考古学会誌30
- 米田明訓 1980「南信天龍川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」甲斐考古17-1

お わ り に

柳坪遺跡は昭和59年の6月の初めより昭和60年の2月末まで調査が行なわれた。夏は強い日差しの中、住居址の写真撮影のために、何十回となく河と住居址の間をバケツを持って往復し、冬は身も凍るような八ヶ岳おろしの中で測量を行なった。とくに冬場は積もった雪をかきわけたり、10cm以上もある霜を削ったりの日々が続き、大変な毎日であった。しかしそんな苛酷な条件の中でも無事に調査を終了できたのは、地元長坂町を中心とする作業員の皆さんの協力によるものだった。とくに柳坪遺跡は昭和48年にも本線建設に伴って調査されており、当時の調査にも参加していた方が、今回も数名調査に加わってくれたことは、担当者としても、何故か感慨深かった。最後になってしまったが、地元長坂町役場の関係者諸氏、地元区長の方々には作業員の手配や作業の進行に関して骨をおっていただいた。心から感謝の意を表したい。

付 編

1. 柳坪遺跡 8 区土壤の花粉分析とプラントオパール分析について

発掘調査直前に、柳坪遺跡 8 区に若干の平安時代のものと考えられる泥炭層が存在することが明らかになった。そのため土壤サンプルを採集して、バリノサーヴェイ株式会社に、花粉分析およびプラントオパール分析を委託した。分析結果は詳細かつ長大なため、編集者の責任において、以下の如く要約させて頂いた。

1) 花粉分析

○全体の花粉構成をみると、草本花粉が 45.6%~64.5% を占め多産し、樹木花粉は 22.7%~49.7% を占めている。従って、現地は草本植物が十分生育できるような比較的開けた所と考えられ、樹木はその後背地に生育していたものと推定される。樹木花粉ではスギ属、T.-C. (イチイ科—ヒノキ科)、コナラ属コナラ亜属 (以後、コナラ亜属)、コナラ属アカガシ亜属 (以後、アカガシ亜属)、ツガ属、ハンノキ属、クマシデ属—アサダ属、クリ属、等を産出し、その中でスギ属、イチイ科—ヒノキ科、コナラ亜属の産出が多く、それらの消長から下位より、NY—I、II、III の局地花粉群集帯に分けられる。なお、これらの花粉群集帯は本来一つの花粉帯にまとめられ、細分は亜帯に相当すると考えられるが、試料の採取状況から花粉帯として分けた。また、花粉帯の NY は長坂町柳坪遺跡の略号である。以下に各花粉帯ごとに後背地の樹木の古植生について述べる。

○ NY—I 帯 No 1-9・1-8 (III 層)

スギ属とイチイ科—ヒノキ科の多産によって特徴づけられる。樹木花粉の構成からスギ、ヒノキ、イチイ等の針葉樹、ナラ類、ハンノキ属等の落葉広葉樹、カシ類、シイ等の常緑広葉樹などが生育していたものと考えられる。なかでも、スギ、ヒノキ、イチイ等が多く生育していたものと考えられる。

○ NY—II 帯 No 1-7・1-6・1-5・1-4・1-3 (III 層上部～I 層下部)

コナラ亜属の増加傾向と多産によって特徴づけられ、スギ属とイチイ科—ヒノキ科は減少傾向を示す。樹木花粉の構成からコナラ、クヌギ等のナラ類が多く生育するようになる。スギ、ヒノキ、イチイ等の針葉樹やカシ類、シイなどの常緑広葉樹等の樹木も生育していたものと考えられる。

○ NY—III 帯 No 1-2・1-1 (I 層)

NY—II 帯において減少したイチイ科—ヒノキ科が再び増加することによって特徴づけられる。古植生は NY—I 帯とはほぼ同じであろう。

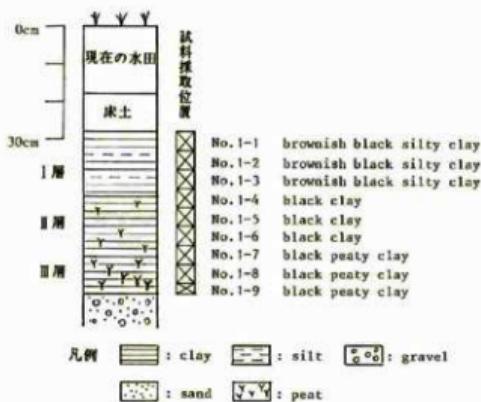


図1 柳坪遺跡 花粉、植物珪酸体
(プランツオバール) 分析試料
採取地点柱状図

イネ科花粉化石のOryza Typeと
Wild Typeの検出割合

Sample No.	Gramineae	個体数	% (*1)	% (*2)
No.1 - 1	Oryza Type	26	26	8.1
	Wild Type	74	74	22.9
	合計	100		
No.1 - 2	Oryza Type	30	30	5.0
	Wild Type	70	70	11.6
	合計	100		
No.1 - 3	Oryza Type	40	40	7.8
	Wild Type	60	60	11.7
	合計	100		
No.1 - 4	Oryza Type	43	43	5.4
	Wild Type	57	57	7.1
	合計	100		
No.1 - 5	Oryza Type	48	48	6.7
	Wild Type	52	52	7.3
	合計	100		
No.1 - 6	Oryza Type	47	47	5.6
	Wild Type	53	53	6.3
	合計	100		
No.1 - 7	Oryza Type	78	52	10.3
	Wild Type	73	48	9.7
	合計	150		
No.1 - 8	Oryza Type	111	62	10.8
	Wild Type	59	38	6.7
	合計	180		
No.1 - 9	Oryza Type	64	64	14.7
	Wild Type	36	36	8.3
	合計	100		

*1) イネ科花粉化石数を基準とした百分率。

*2) 花粉・孢子化石合計数を基準とした百分率。

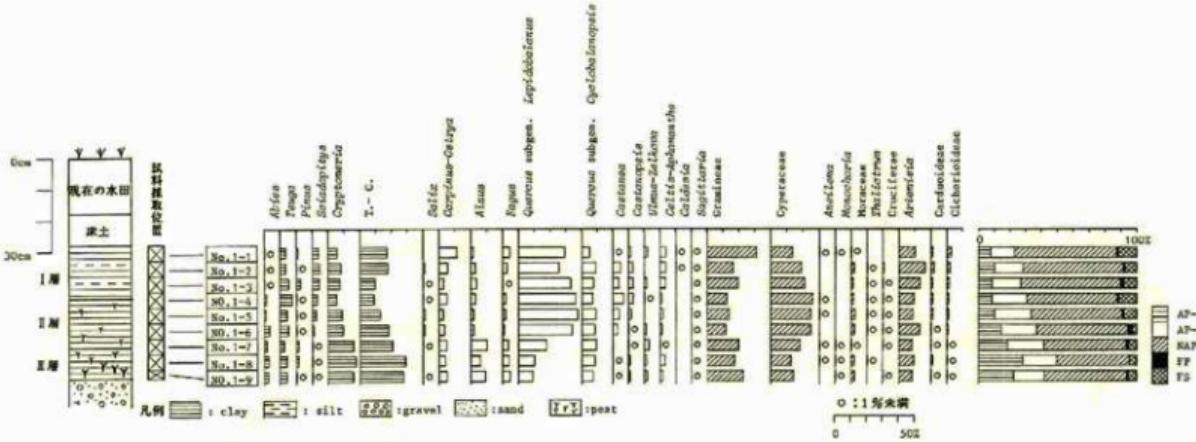


図2 柳坪遺跡試料主要花粉・孢子化石ダイヤグラム

○草本花粉について

前述したように、草本花粉の割合が45.6%～64.5%を占め多産していることから草木植物が十分生育できる比較的開けた所と考えられた。さらに、草本花粉の中には、ガマ属、ミクリ属、オモダカ属、マルバオモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属等の池沼、湿地等に生育する植物花粉が低率ながら連続的（種類によっては不連続）に産出していることから池沼、湿地、河川等の水の影響を受けた環境が存在していたものと推定される。草木花粉の構成はイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属によってその大部分が占められているので、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ等からなる草地と推定されるが、クワ科、アブラナ科、アザゼル科、マメ科、タンポポ亞科、キク亞科、キンポウゲ科等多くの草本植物が生育していたものと考えられる。草本花粉の消長からはNY-I帯にイネ科、NY-II帯にカヤツリグサ科、NY-III帯にイネ科が多い傾向が認められる。

○イネ科花粉と水田稲作について

表1にみられるようにNo.1～9からNo.1～1まで *Oryza Type*（イネ型）が連続して産出している。割合としては、No.1～9からNo.1～7までに *Oryza Type* の割合が多く、No.1～6以浅になると *Wild Type* の割合が多くなる。

前記したように池沼、湿地等に生育する植物花粉の産出により、全試料において池沼、湿地、河川等の水の影響を受けた環境が推定された。これらの植物分類群の中には、水田雑草とされる植物も含まれている（例えばオモダカ属ではオモダカ、ミズアオイ属ではコナギ等）。

従って、*Oryza Type* の産出と合せて、No.1～9からNo.1～1までの全層において水田稲作が行なわれていたものと推定される。とくに、最下部のNo.1～9において *Oryza type* の割合が最も多かったことは注目すべきことであろう。なお、今回の試料は全般的にイネ科の産出も伴なって、それ以外の草本花粉の産出も多かったので、水田であったとしても小規模なものか、水田から少し離れた所かもしれない。いずれにしても水田稲作の規模については今後の調査に期待したい。

2) プラントオパール分析

I・II・III層から検出されたプラントオパールは主にタケの類とススキの類であった。タケの類については、I層・II層まではメダケ属が40%前後を占め、検出されたプラントオパール中約半分はメダケ属であった。（メダケ属でも比較的大きいものはメダケの可能性がある。）他にヤダケ属も含まれていたが、風化浸蝕しているものが多く、新鮮なものは少なく、検出数は5%前後であった。ところが、II層の下部からIII層にかけてはメダケ属は30%弱となり、ヤダケ属が20%前後の検出となる。従って下位のII層下部～III層にはヤダケ属が多く、上位のII層～III層中部はメダケ属が多く含まれていた。

検出数は少ないが環境を知る手がかりとなる植物としてヨシ属がある。下位の地層から上位の地層にかけてすべてに含まれていた。ヨシは湿地性の植物であるから当時の柳坪遺跡付近は

プラントオバール(%)

地層	試料番号	イネ属 個数	ヨシ属 個数	スキ属 個数	メダケ属 個数	ヤダケ属 個数	ジカツ 属 個数	コブナ 属 個数	ナシケ 属 個数	ウシノケ 属 個数	オオムギ 属 個数	カムイ 属 個数	チヂミ 属 個数	不明 個数	合 計 個数
I	I-1	25 (23)	2 (2)	20 (19)	45 (42)	6 (6)		1 (1)			4 (4)	4 (4)			107
	I-2		2 (2)	19 (16)	71 (58)	6 (5)		4 (3)	12 (10)	4 (3)	4 (3)				122
	I-3	9 (15)	1 (2)	14 (23)	23 (37)	2 (3)				4 (6)	3 (5)	6 (10)			62
II	I-4	3 (4)	1 (1)	22 (27)	29 (36)	3 (4)		4 (5)	12 (15)	5 (6)			2 (2)		81
	I-5	5 (7)	1 (1)	16 (21)	34 (45)	4 (5)		3 (4)	7 (9)	4 (5)	2 (3)				76
	I-6	5 (5)	3 (3)	25 (24)	39 (37)	16 (15)		4 (4)	5 (5)	4 (4)	4 (4)	1 (1)			106
III	I-7	6 (8)	1 (1)	17 (23)	20 (27)	11 (15)	2 (3)	3 (4)	10 (14)	2 (3)	1 (1)				73
	I-8		2 (1)	27 (20)	35 (25)	28 (20)	1 (1)	8 (6)	20 (14)	4 (3)	8 (6)	5 (4)			138
	I-9	6 (4)	3 (2)	25 (18)	38 (28)	33 (24)	4 (3)	2 (1)	14 (10)	4 (3)	7 (5)				136

表2 山梨県柳坪遺跡試料プラントオバール分析結果

湿地であったことが考えられる。ヨシの群落のすきまにコブナグサの生育が一般的であるが、やはりここでもコブナグサ属のプラントオバールが検出されている。その他に検出されたプラントオバールには少数ではあるがイネ属も検出された。I層にはイネの葉の破片がいくつか入り、II層・III層よりは多かった。検出されたイネ属のプラントオバールは大きいもので縦の長さが15μ、小さいもので10μ、横幅が大きいもので8μ、小さいもので4μであったので、ジャボニカタイプの稻と判断した。400 メッシュの筋にひっかかった250 μ～37 μの大きさの植物破片をプレパラートにし、I層のNo I-1について検鏡した結果、イネの葉のみでなく根も含まれているので、I層においてはこの調査地で稻の栽培を行なっていたと考えられる。

今回調査した柳坪遺跡のI層～III層で検出されたプラントオバール数量は一般的な泥炭層と比較すると半分以下であり、植物遺体も少なくいわゆる低湿地であることを示すヨシの検出数も多くはなかった。遺跡周辺の地理的環境についてまだ不明な点はあるが、検出されたプラントオバールから考えるとかっては泥炭が形成されるような沼地ではなく、主な植生は草原に生えるスキ属やメダケ属、ヤダケ属が多いこと、また堤などに生えるウシノケグサ属などが多いことより、当時、柳坪遺跡は自然堤防上または河岸のような所であったのではないだろうか。このような地理的環境下での水田造構の存在は、否定的ではない。従って、イネ属のプラントオバールが検出されたことからも、稻の栽培が行なわれていたと考えてよいのではないかと思う。

2. 柳坪遺跡出土材試料同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 試料

試料は18点で、平安時代谷埋め堆積物中から出土の加工材である。

2 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柾目・板目三面の徒手切片を作成、ガム・クロラール (Gum Chloral) で封入、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に、顕微鏡写真図版 (図版68~73) も作成した。

3 結果

同定結果を一覧表で示す (表1)。

表1 同定結果

試料番号	製品名	種	類
第202 図-1	曲物底	<i>Chamaecyparis</i> sp.	(ヒノキ属の一種)
" - 2	曲物底	<i>Chamaecyparis</i> sp.	
" - 3	曲物底	<i>Chamaecyparis</i> sp.	
" - 4	木簡	<i>Chamaecyparis</i> sp.	
" - 5	柄?	<i>Pinus</i> (subgen. <i>Diploxyylon</i>) sp.	[マツ属 (複維管束亞属) の一種]
" - 6	杓子	<i>Chamaecyparis</i> sp.	
" - 7	板材	<i>Chamaecyparis</i> sp.	
" - 9	板材	<i>Chamaecyparis</i> sp.	
-10	板材	<i>Chamaecyparis</i> sp.	
第203 図-2	板材	<i>Abies</i> sp.	(モミ属の一種)
" - 4	板材	<i>Abies</i> sp.	
第204 図-1	板材	<i>Chamaecyparis</i> sp.	
" - 2	板材	<i>Abies</i> sp.	
" - 5	板材	<i>Cephalotaxus harringtonia</i>	(イスガヤ)
" - 6	板材	<i>Chamaecyparis</i> sp.	
" - 7	板材	<i>Abies</i> sp.	
" - 8	板材	<i>C. harringtonia</i>	
" - 9	板材	<i>Chamaecyparis</i> sp.	

次に各試料の主な解剖学的特徴や一般的性質などについて種類ごとに述べる。

・イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia*) イヌガヤ科 第204図-5, 8

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが、樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はトウヒ型 (*Piceoid*) ~ヒノキ型 (*Cupressoid*) で1~2個。放射組織は単列、1~10細胞高。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。

イヌガヤは、本州（岩手県以南）・四国・九州に分布する常緑小高木～低木で、時に植栽される。なお、北海道西部・本州の主として日本海側・四国的一部分には、匍匐性の変種ハイイヌガヤ (*C. harringtonia* var. *nana*) が分布する。イヌガヤの材はやや重硬で、器具・旋作材などに用いられる。種子は搾油（燈用）された。

・モミ属の一種 (*Abies* sp.) マツ科 第203図-2, 4, 第204図-2, 7

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は薄く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型 (*Taxodiooid*) で1~4個。放射組織は単列、1~40細胞高。

モミ属には、モミ (*Abies firma*)、ウラジロモミ (*A. homolepis*)、アオモリトドマツ (*A. mariesii*)、シラベ (*A. veitchii*)、アカトドマツ (*A. sachalinensis*) の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、アオモリトドマツは本州（福島県以北）の亜高山～高山帯に、シラベは本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に、アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。材の解剖学的特徴のみでは区別できないが、試料はモミである可能性が高い。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

・マツ属（複維管束亜属）の一種 [*Pinus* (subgen. *Diploxylon*) sp.]

マツ科 第202図-5

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエビセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状、単列、1~15細胞高。

複維管束亜属いわゆる二葉松類には、アカマツ (*Pinus densiflora*)、クロマツ (*P. thunbergii*)、リュウキュウマツ (*P. luchuensis*) の3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。したがって試料はアカマツと考えられる。アカマツの材は重硬・強韌で、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・家具材など広い用途が知られる。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 第202図-1~4, 6, 7, 9, 10,
第204図-6, 9

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

ヒノキ属には、ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが、強度・保存性は高い。建築器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが耐水性が高いため、樽や桶にするほか各種の用途がある。

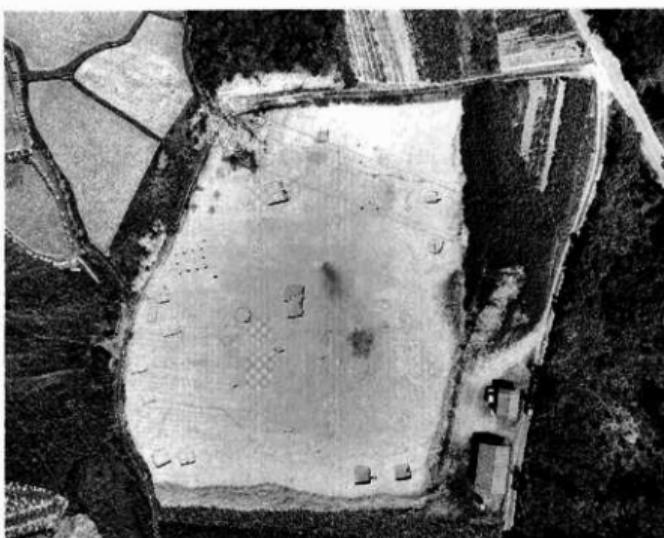
4 考察

同定された試料はすべて針葉樹であり、特にヒノキ属(11点)が多かった。ヒノキ属の材は加工が容易で材質は優れ、現在でも広範な用途に用いられており、この結果は首肯できる。しかしヒノキ属が入手できる環境にありながら、イヌガヤ(2点)やモミ属(モミと考える)(4点)も使われている。これらはその特徴をいかした用途に使われたか、ヒノキ属を用いるまでもないわば雑用材として使われたものであろうか。また第202図は柄? とされているが、その形状・樹種(アカマツと考える)からみて、小径ながら強度の必要とされる特殊な用途に使われたものと考える。多くの試料の用途は不明であるが、それぞれの用途に応じた樹種の選択が行なわれたものと考える。

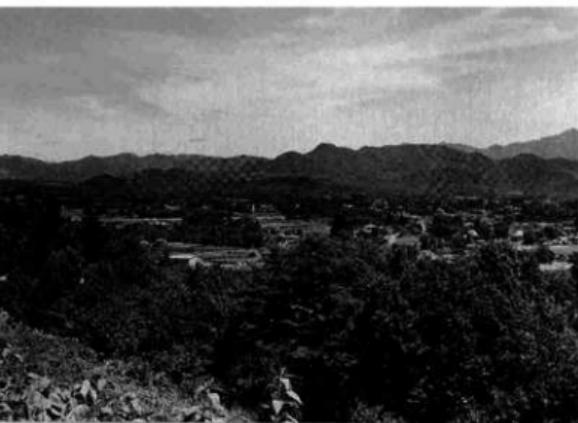
図 版



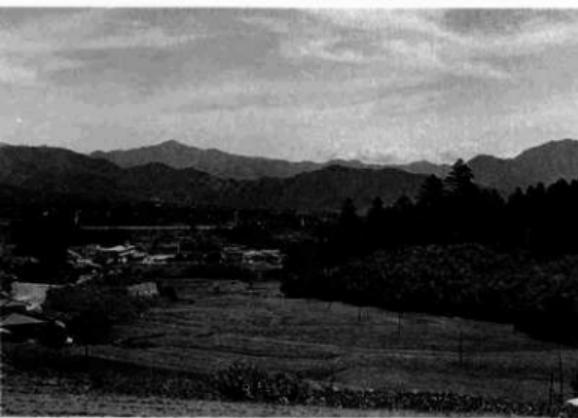
遺跡全景航空写真



5 区航空写真



○ 遗踪远景



○ 遗踪远景



○ 1区全景

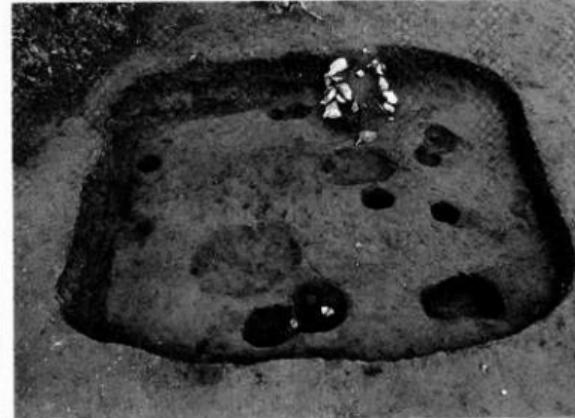
○ 1号住居址と同址カマド



○ 2号住居址と同址遺物出土状態

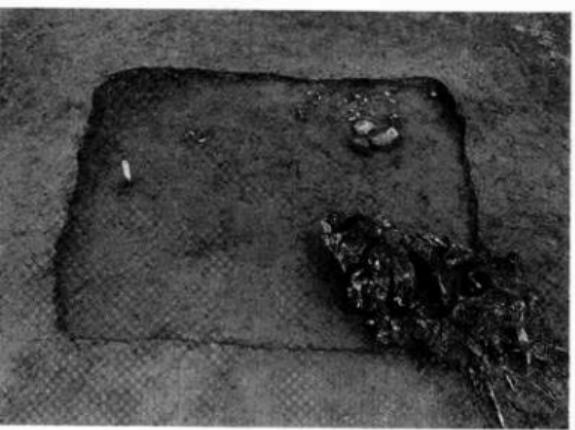


○ 3号住居址と同址カマド

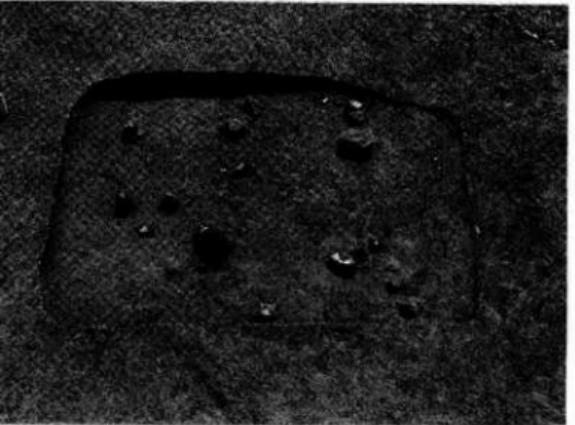




○ 4号住居址と同址カマド



○ 5号住居址と同址カマド



○ 6号住居址と同址カマド



○ 7号住居址と同址遺物出土状態



○ 14号住居址



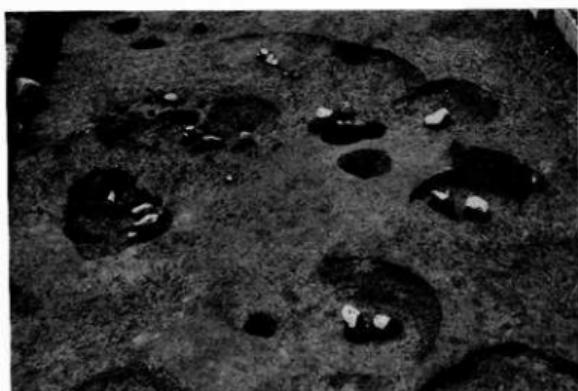
○ 14号住居址埋葬



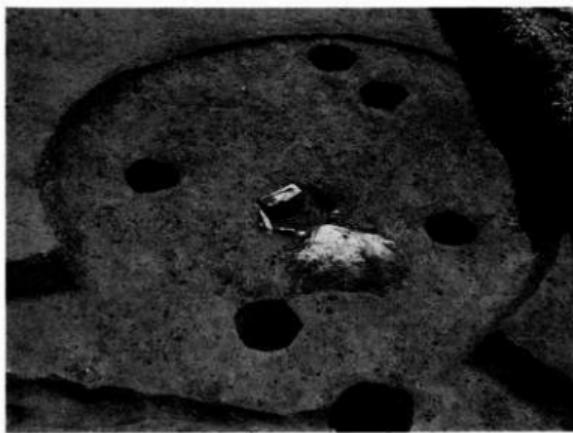
○ 2区全景と2区作業風景



○ 8号住居址



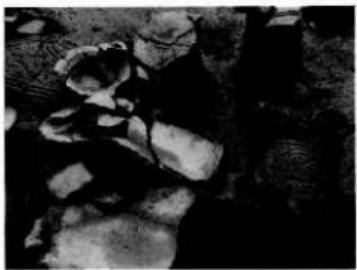
○ 9号住居址と2～6号土壤



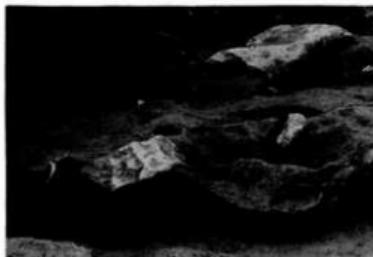
○10号住居址

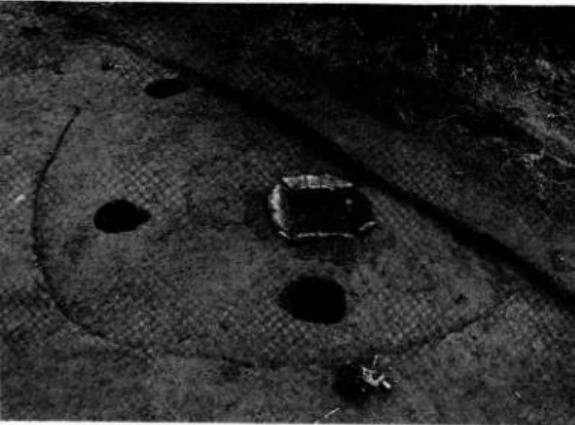


○11号住居址と同址遺物出土状態

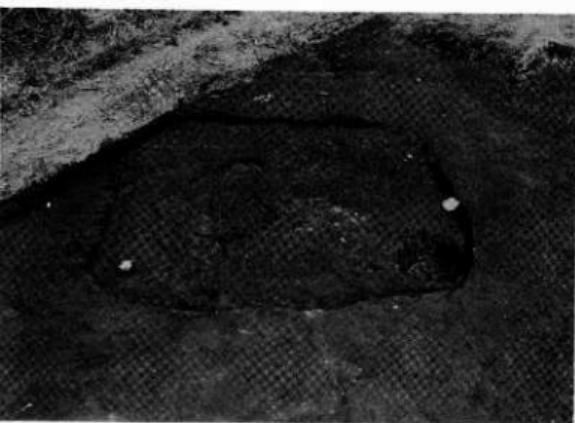


○11号住居址と同址埋甕





○12号住居址



○13号住居址と同址燒土ピット



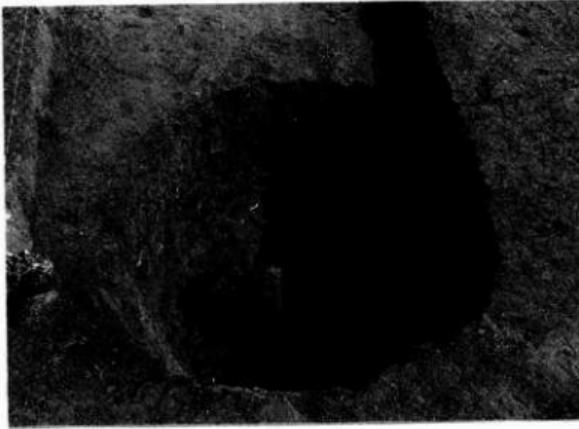
○16号住居址と15号住居址炉



○25号住居址と同址炉



○8号土壤



○2号据立柱建物址





○3区全景



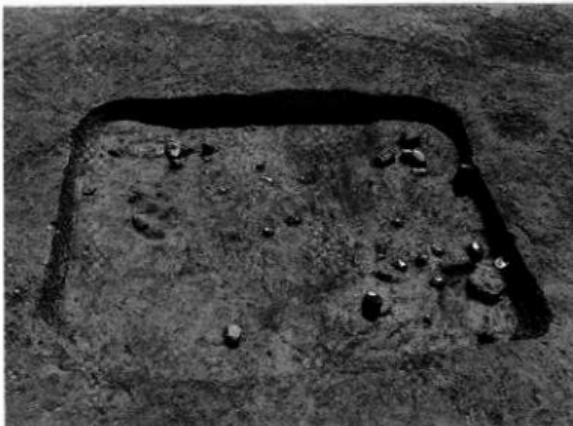
○3区作業風景



○17号住居址と同址カマド



○18号住居址と同址遺物出土状態



○19号住居址と同址カマド



○20号住居址





○21号住居址と同址カマド



○22号住居址と同址カマド



○23号住居址と同址カマド



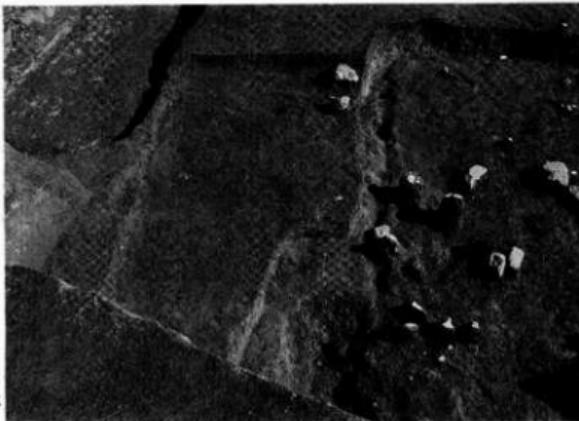
○49号住居址と同址カマド



○50号住居址



○51号住居址





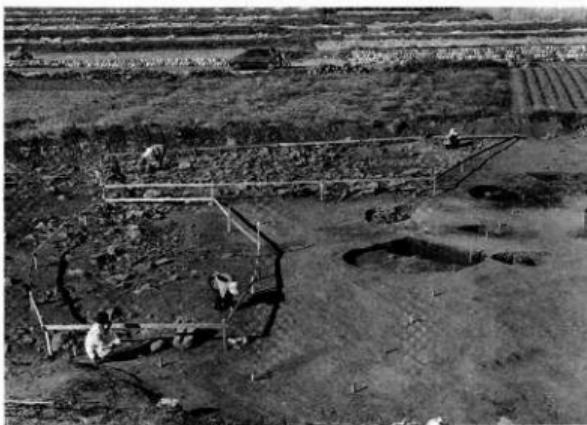
○4区3号溝・4号溝と11号土壤



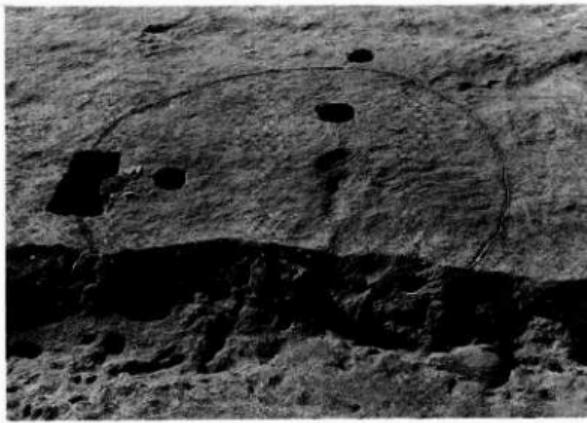
○4区礫群



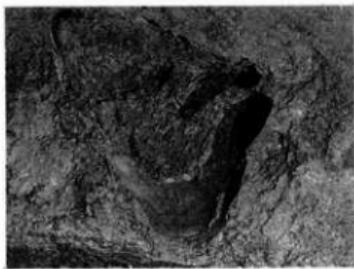
○4区礫群



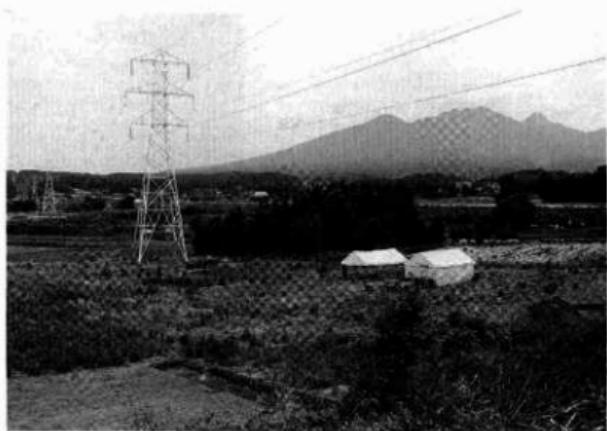
○4区群実測風景



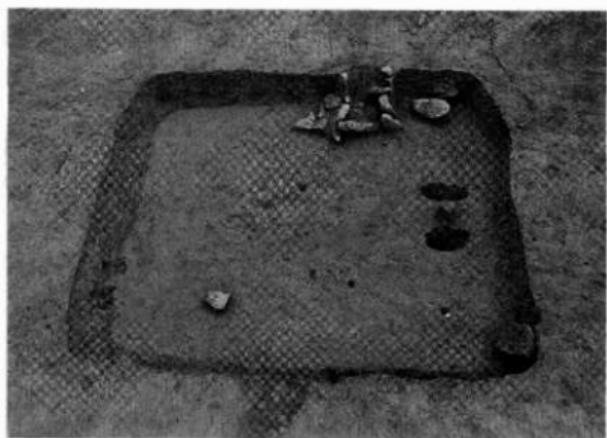
○48号住居址と同址埋甕



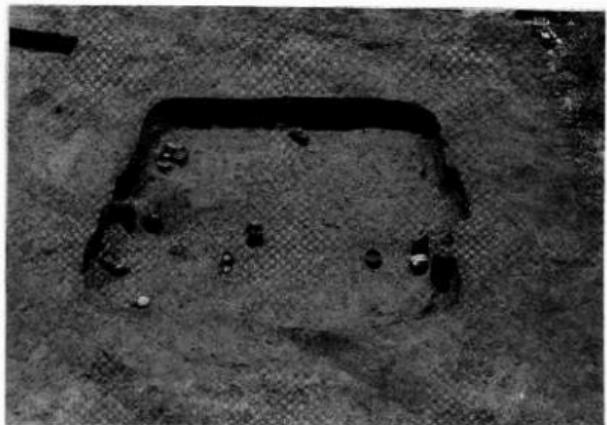
○5号溝



○5区調査前

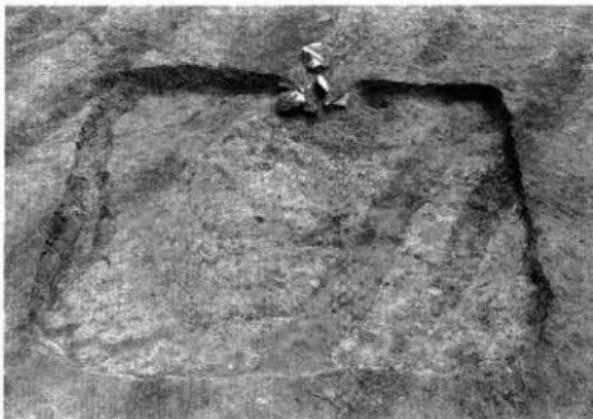


○26号住居址と同址カマド

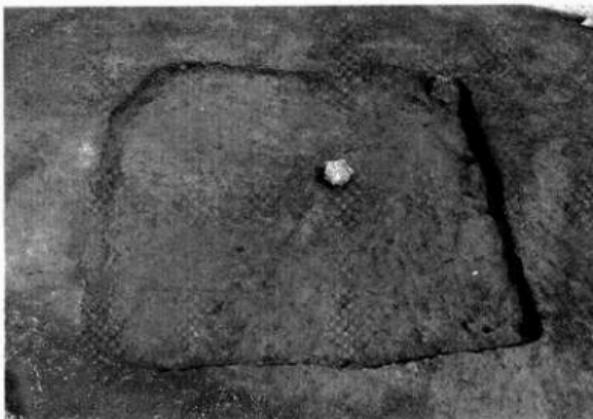


○27号住居址と同址遺物出土状態

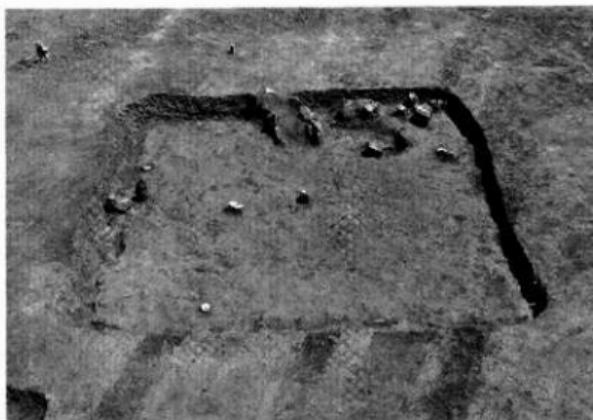




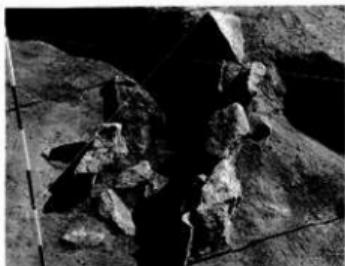
○29号住居址

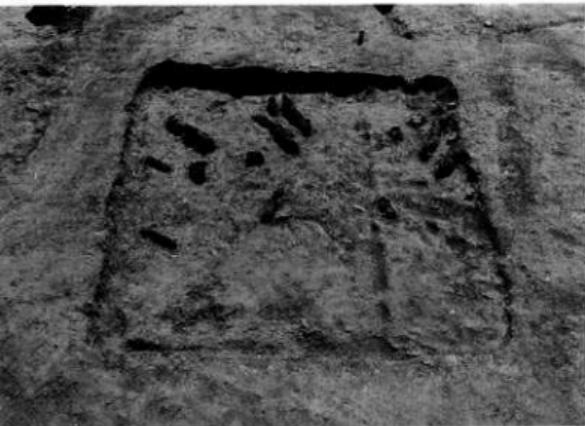


○30号住居址



○31号住居址と同址カマド





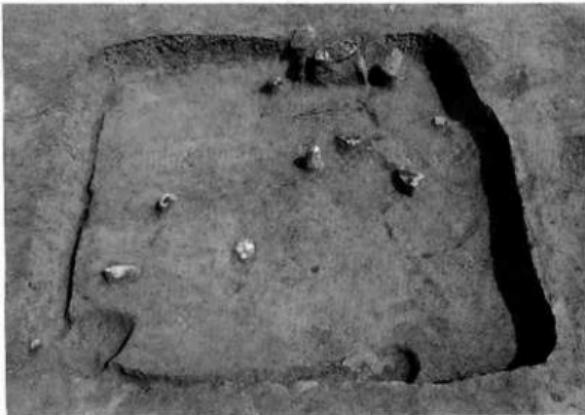
○32号住居址と同址遺物出土状態



○33号住居址と44号住居址



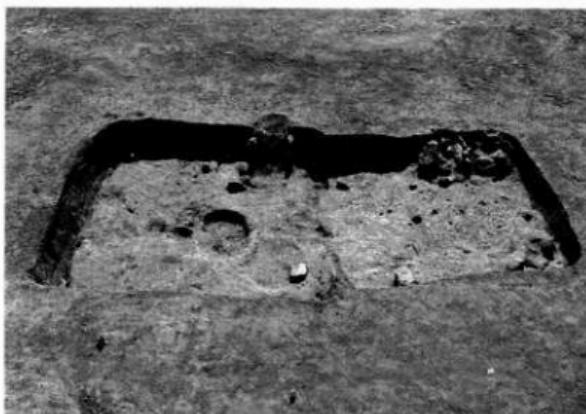
○33号住居址遺物出土状態（下）



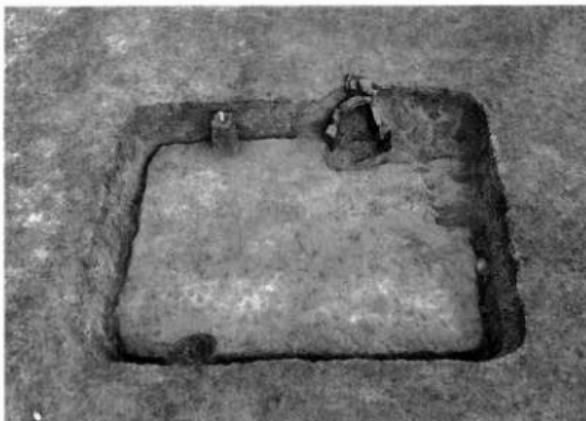
○35号住居址と同址カマド



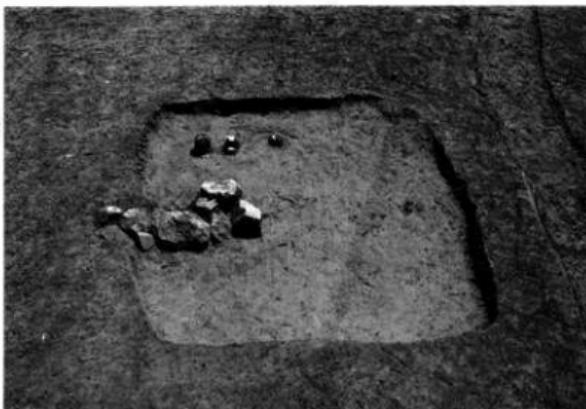
○36号住居址と37号住居址

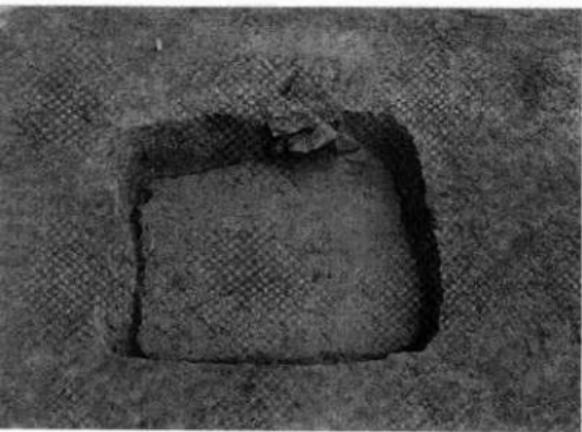


○36号住居址カマド

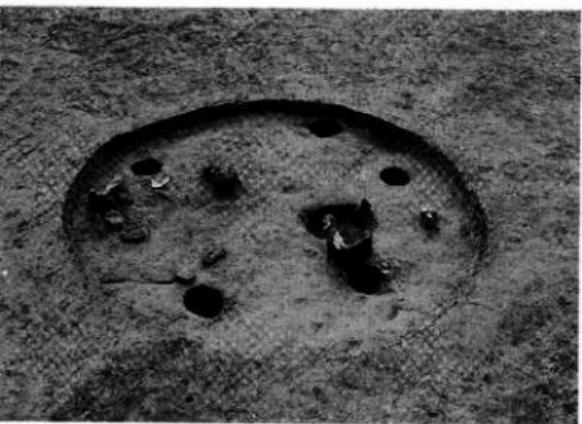


○39号住居址と同址特殊遺構





○40号住居址



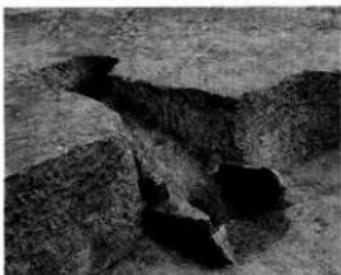
○41号住居址と同址埋甕



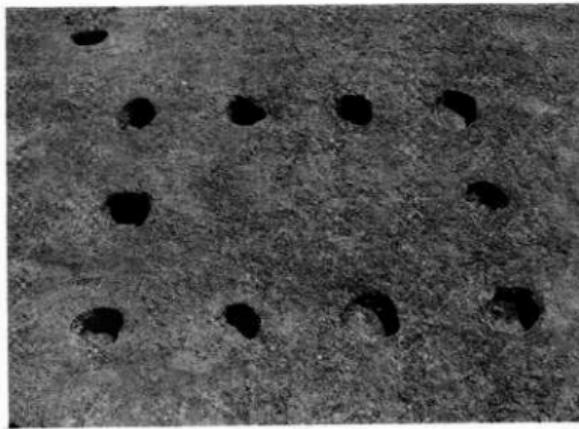
○42号住居址と同址カマド



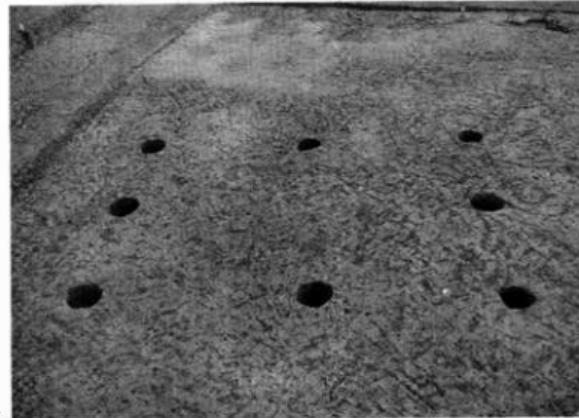
○ 43号住居址と同址カマド

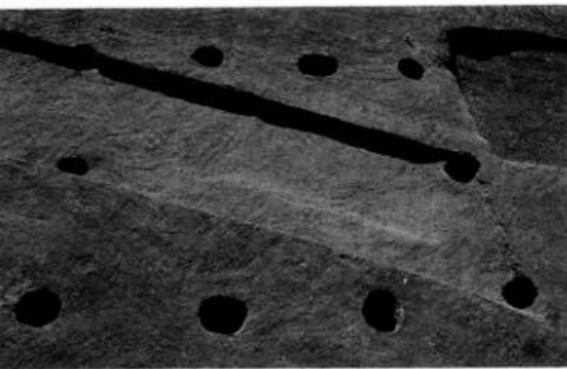


○ 1号掘立柱建物址



○ 5号掘立柱建物址





○ 6号掘立柱建物址



○ 1号溝



○ 6区全景

○ 6区作業風景



○24号住居址と同址カマド



○46号住居址



○47号住居址と同址遺物出土状態





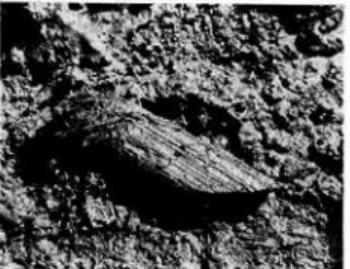
○3号掘立柱建物址と1号埋設土器



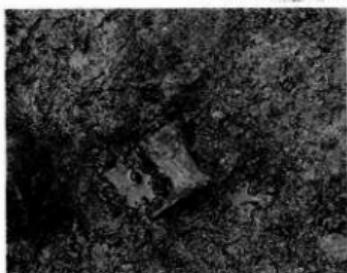
○8区全景と同区木製品出土状態



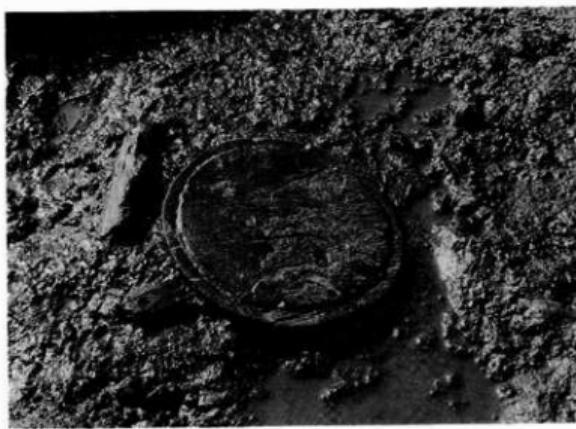
○8区全景と同区木製品出土状態



○ 8区自然木出土状態



○ 8区木製品出土状態

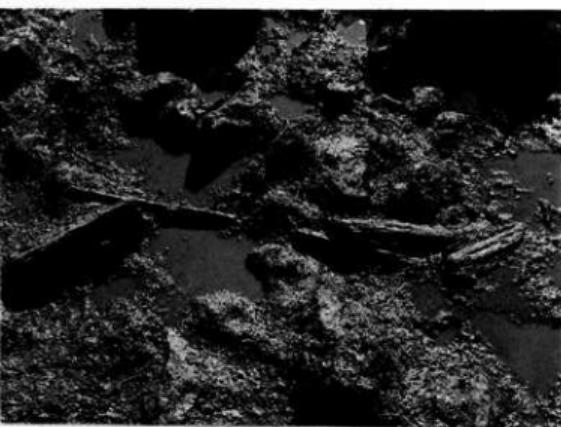
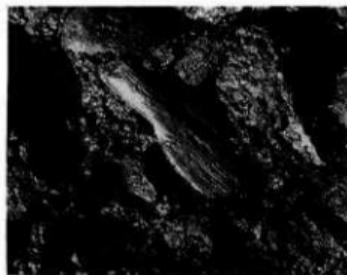


○ 8区木製品出土状態





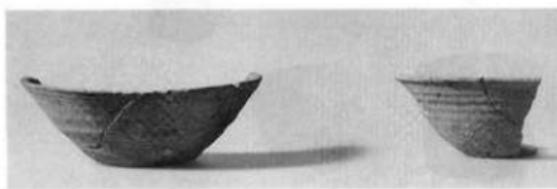
○ 8区木製品出土状態



○ 8区木製品出土状態



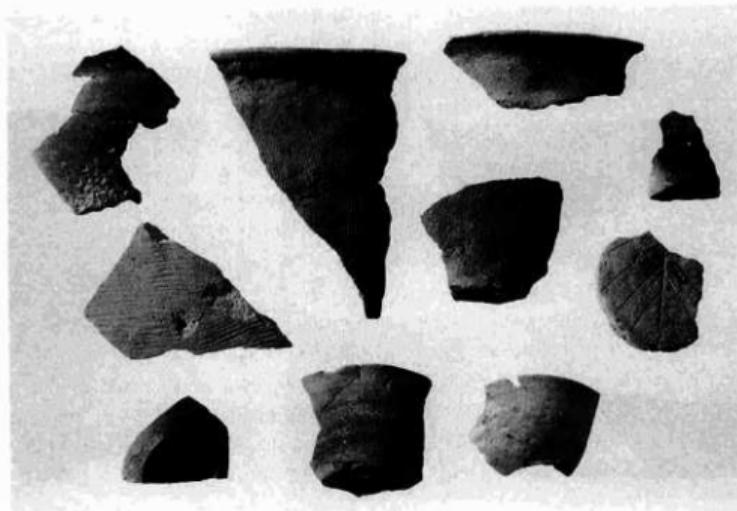
○ 52号住居址



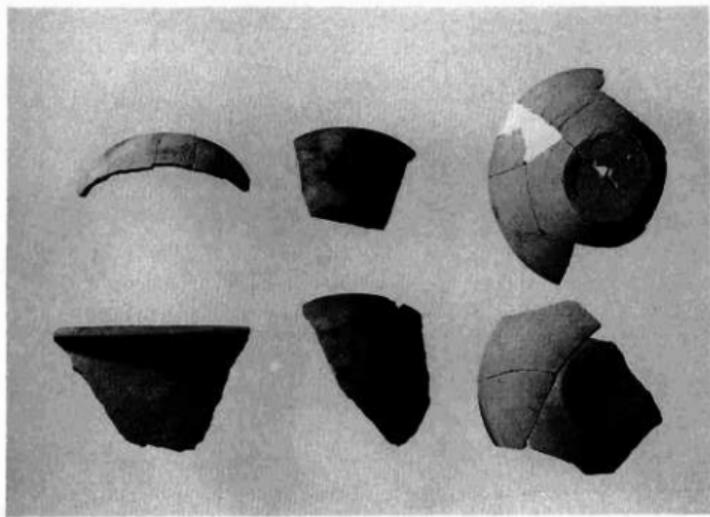
○ 1号住居址出土遺物



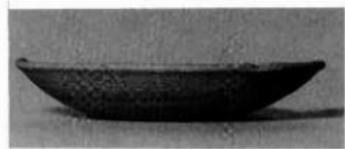
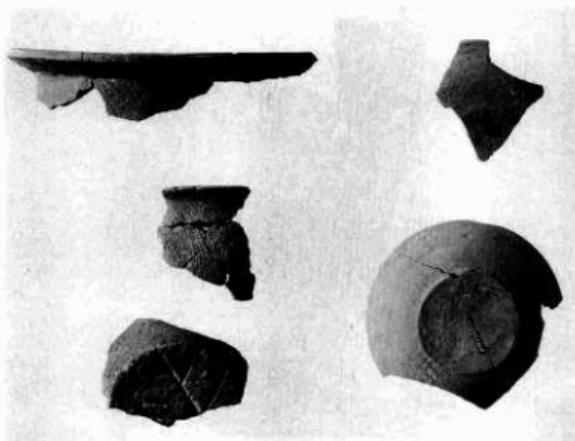
○ 2号住居址出土遺物



○ 3号住居址出土遗物



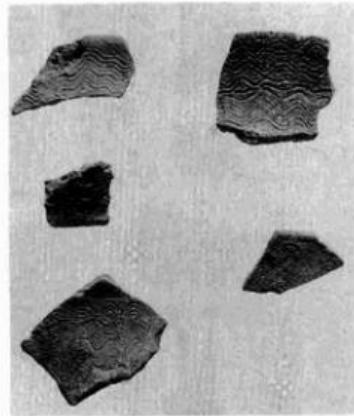
○ 4号住居址出土遗物



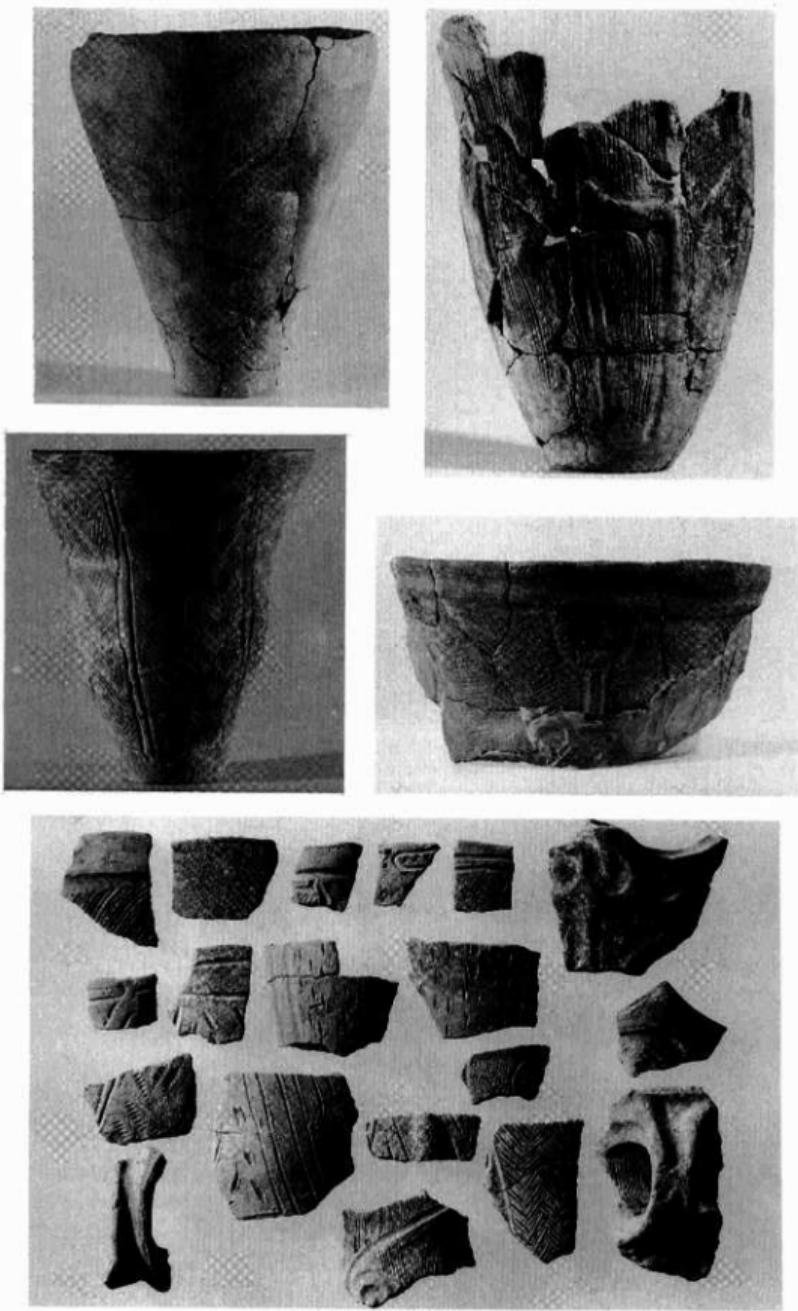
○ 5号住居址出土遗物



○ 6号住居址出土遗物



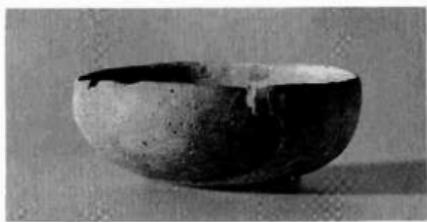
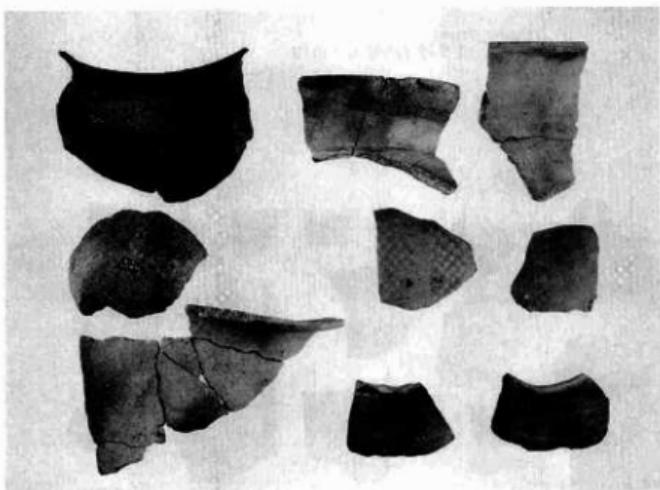
○ 7号住居址出土遗物



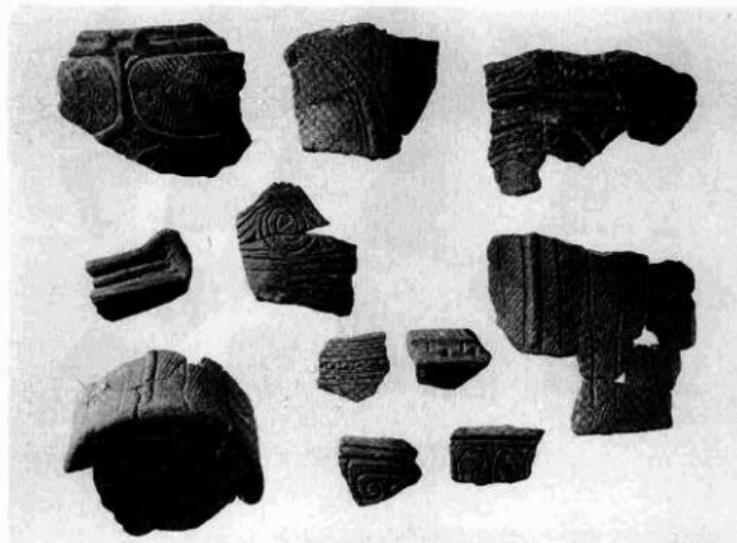
◎14号住居址出土遗物(1)



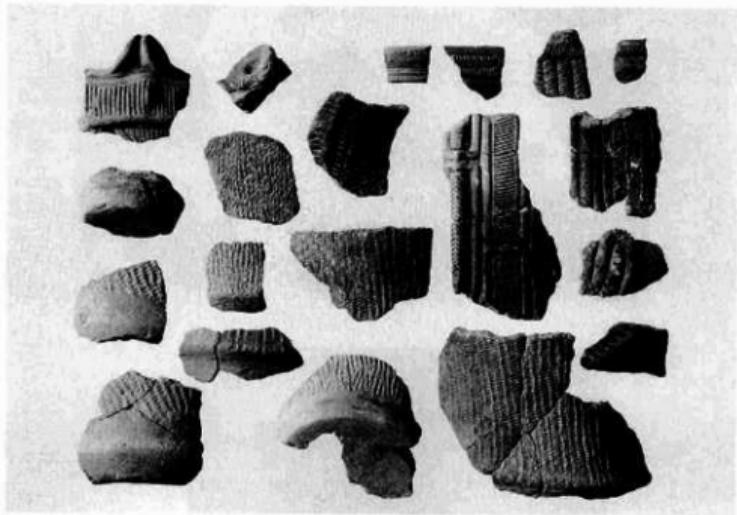
○14号住居址出土遗物(2)



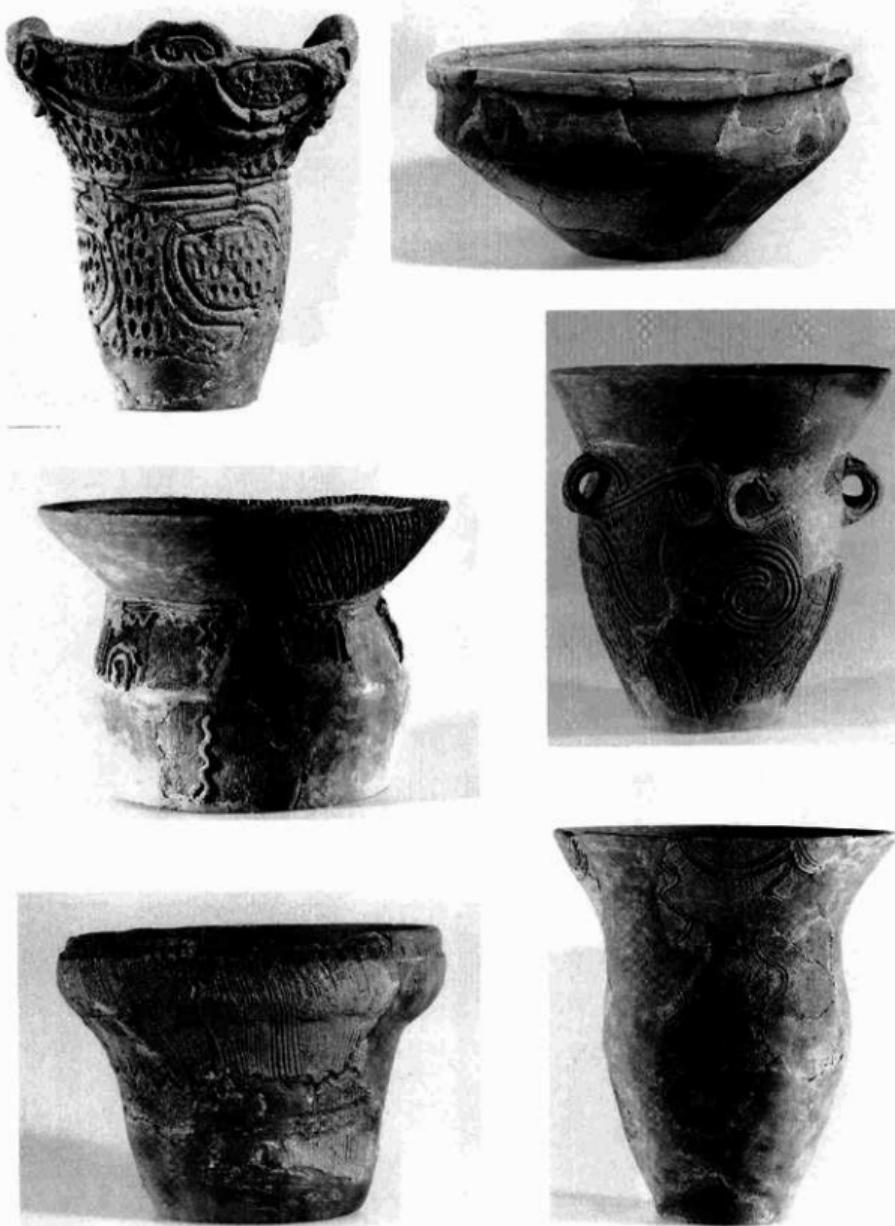
○8号住居址出土遗物



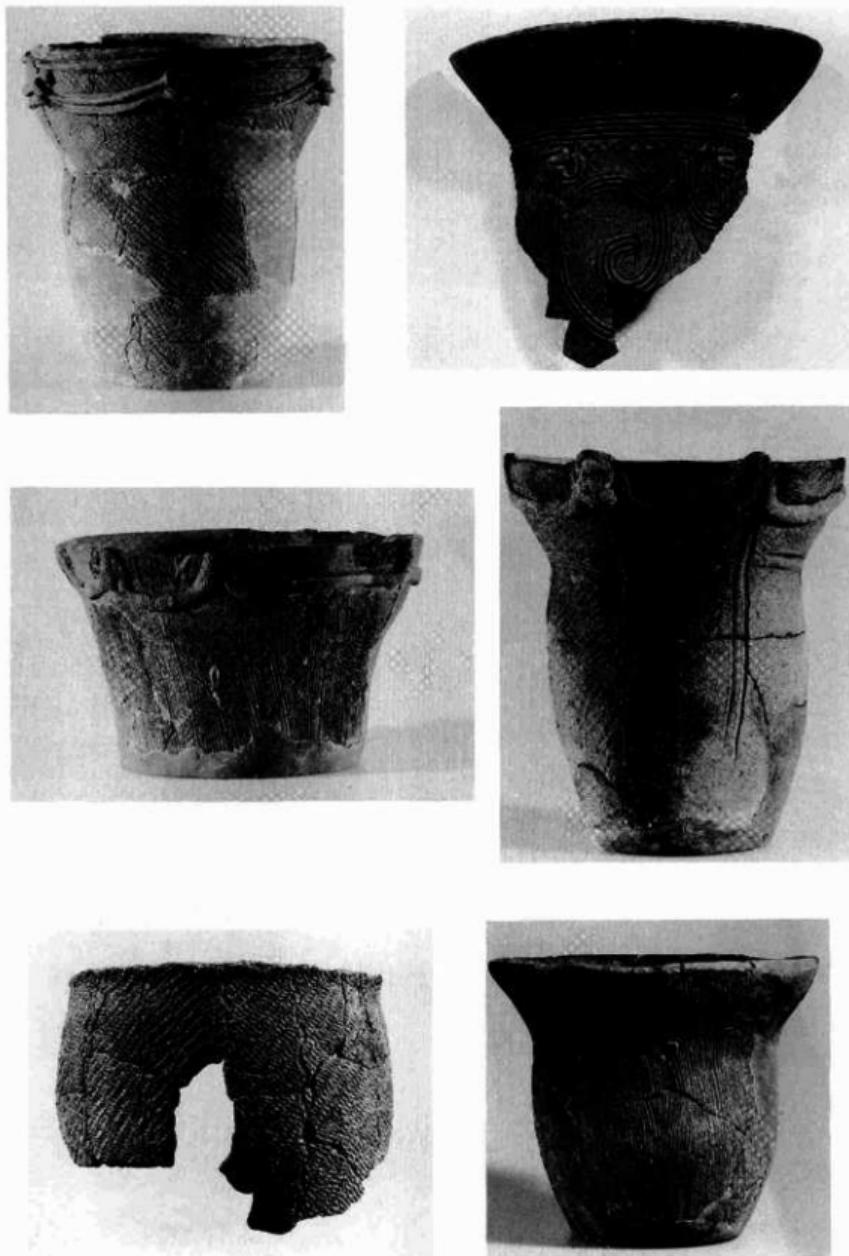
○ 9号住居址出土遗物



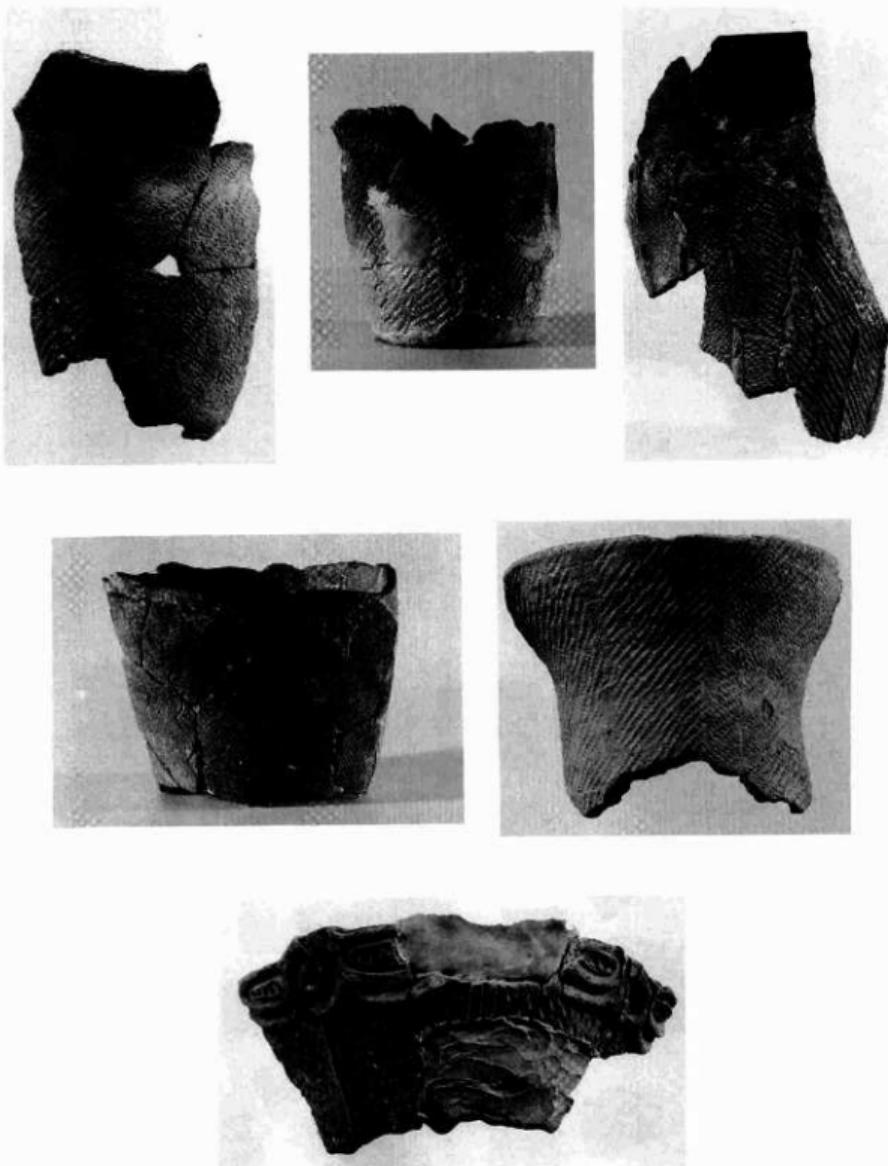
○ 10号住居址出土遗物



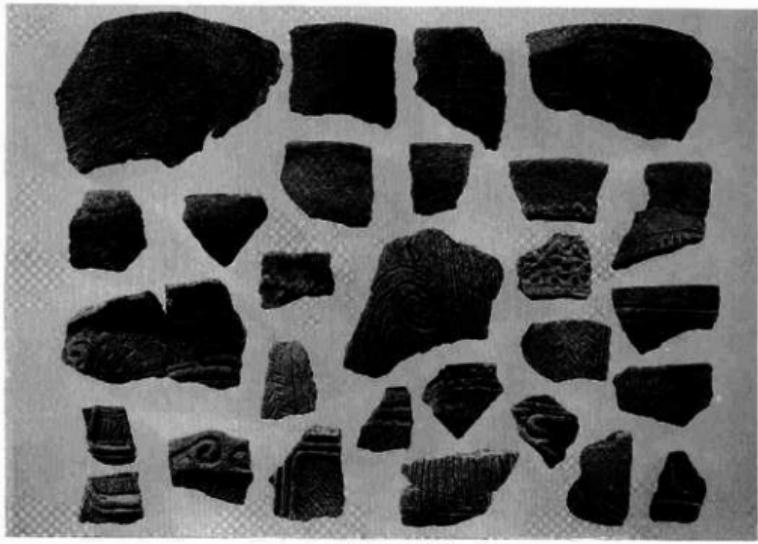
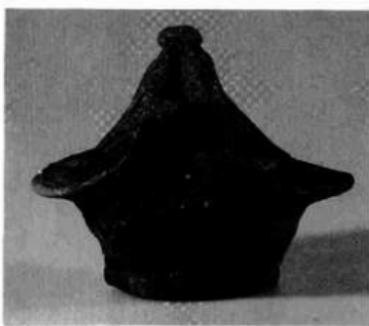
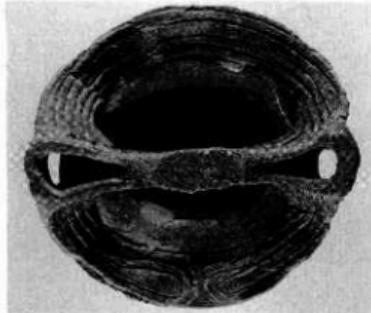
○ 11号住居址出土遗物 (1)



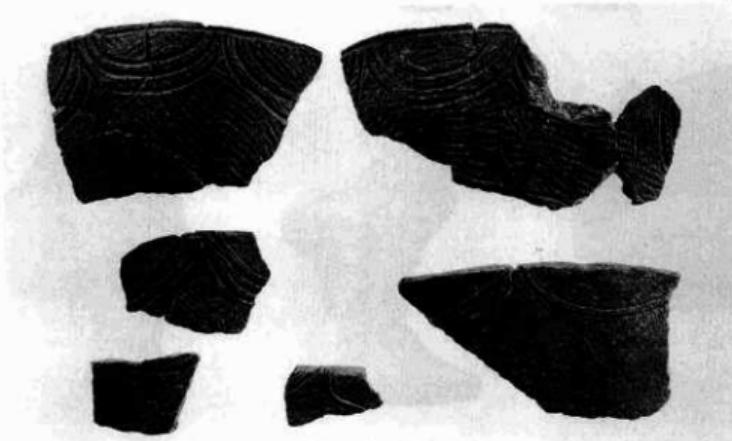
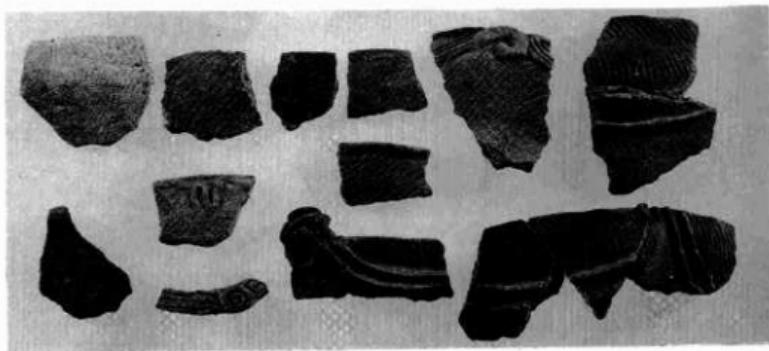
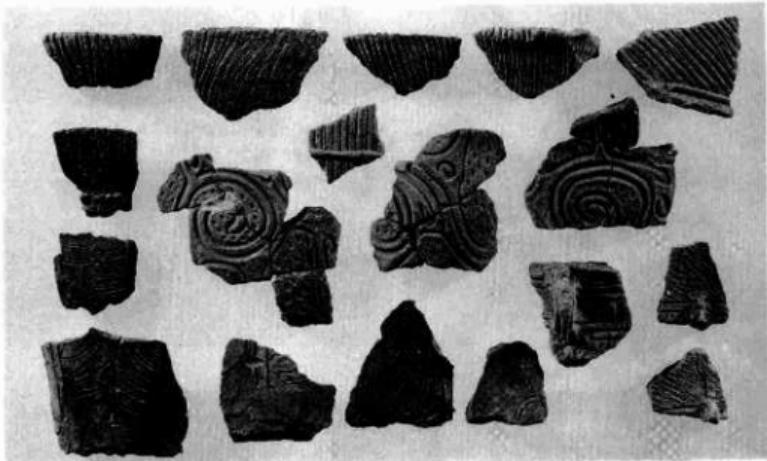
○11号住居址出土遗物(2)



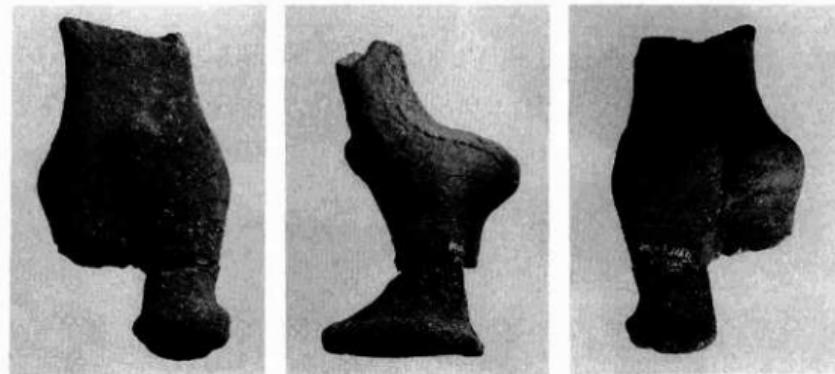
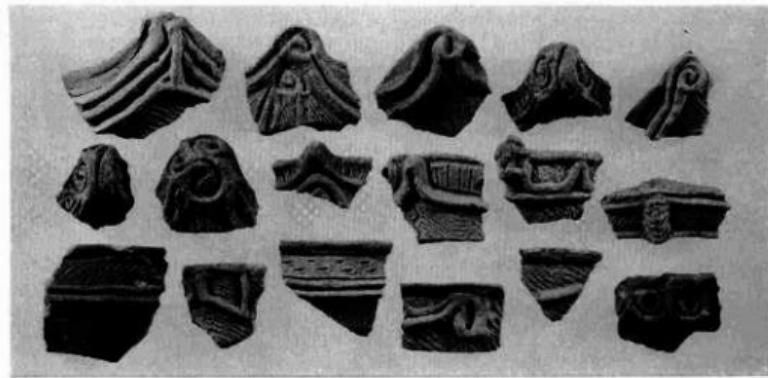
○11号住居址出土遗物(3)



○11号住居址出土遺物 (4)



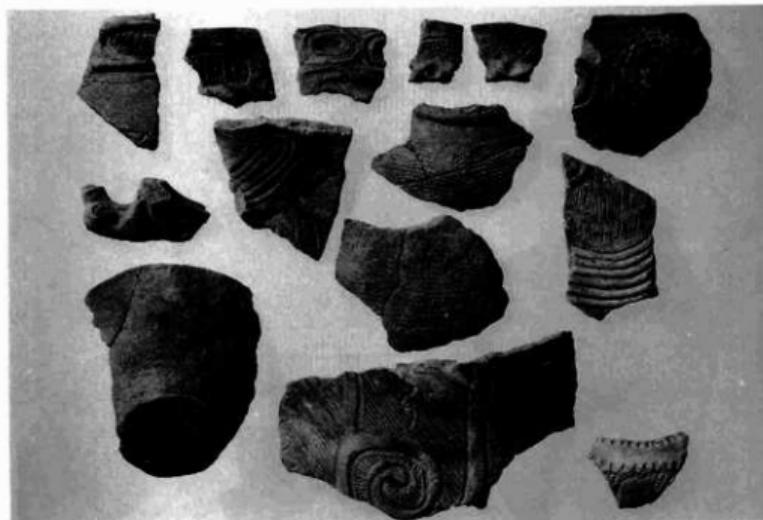
○11号住居址出土遗物 (5)



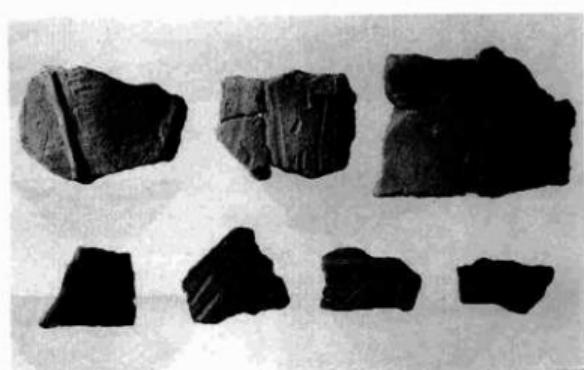
○11号住居址出土遗物 (6)



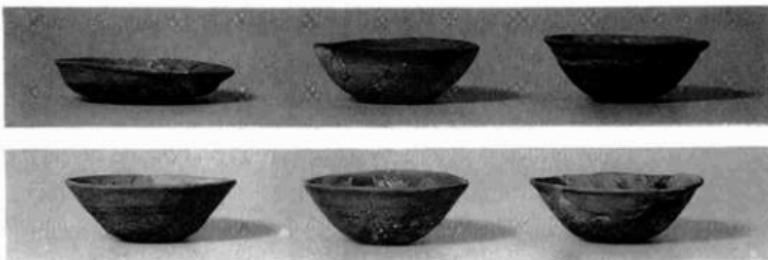
○12号住居址出土遺物



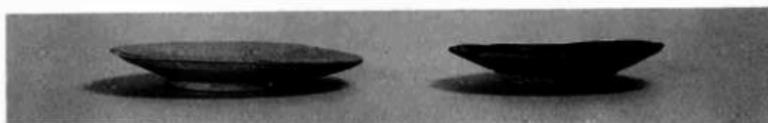
○15号住居址出土遺物



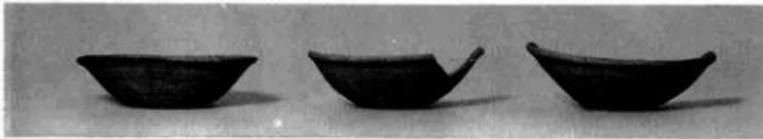
○16号住居址出土遺物



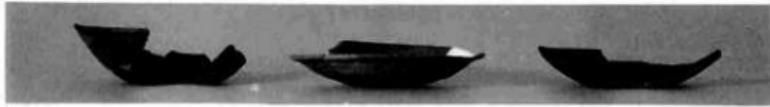
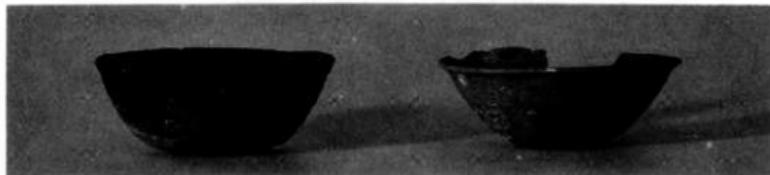
○17号住居址出土遗物



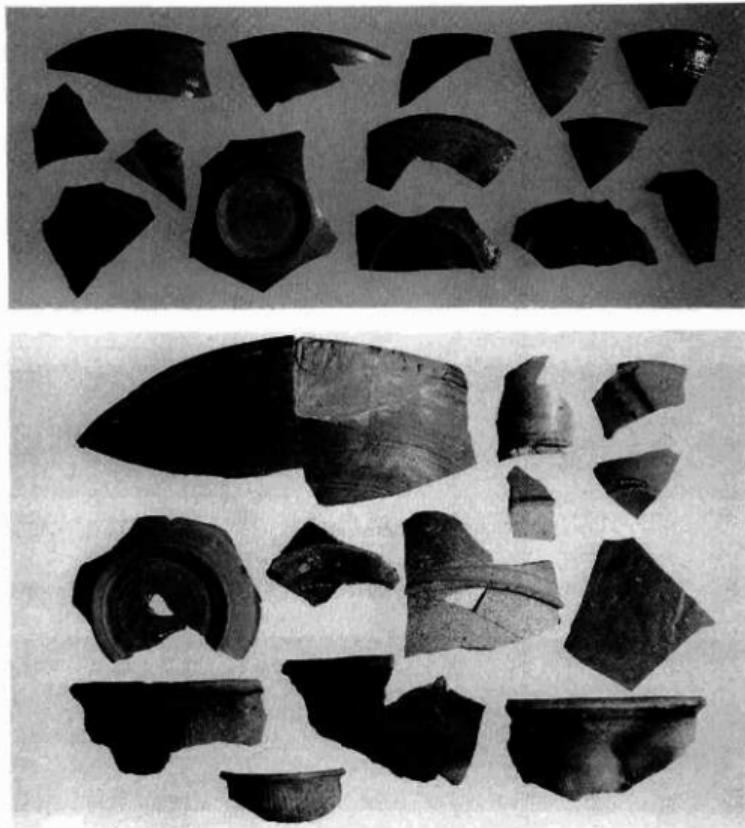
○19号住居址出土遗物



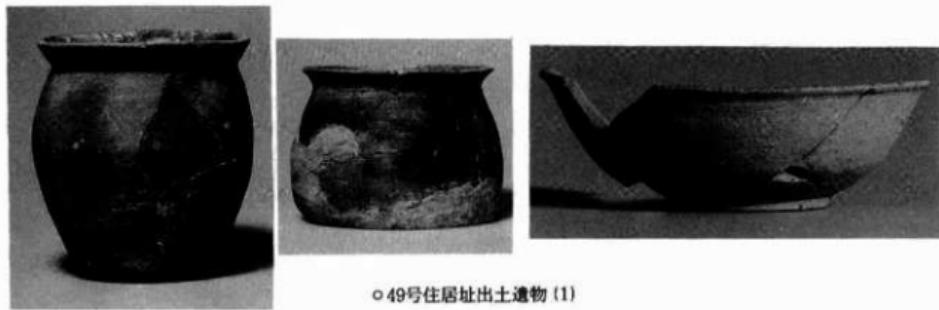
○21号住居址出土遺物



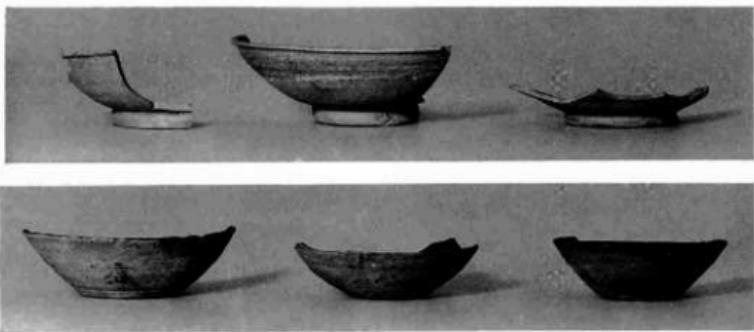
○22号住居址出土遺物(1)



○22号住居址出土遗物(2)



○49号住居址出土遗物(1)



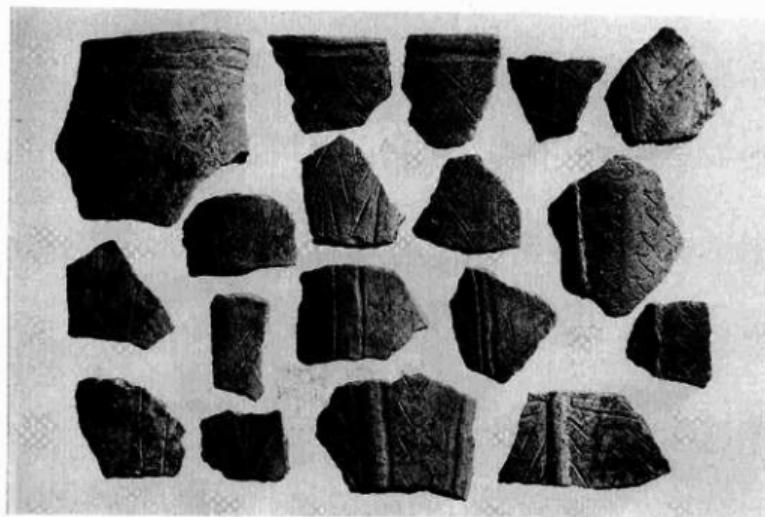
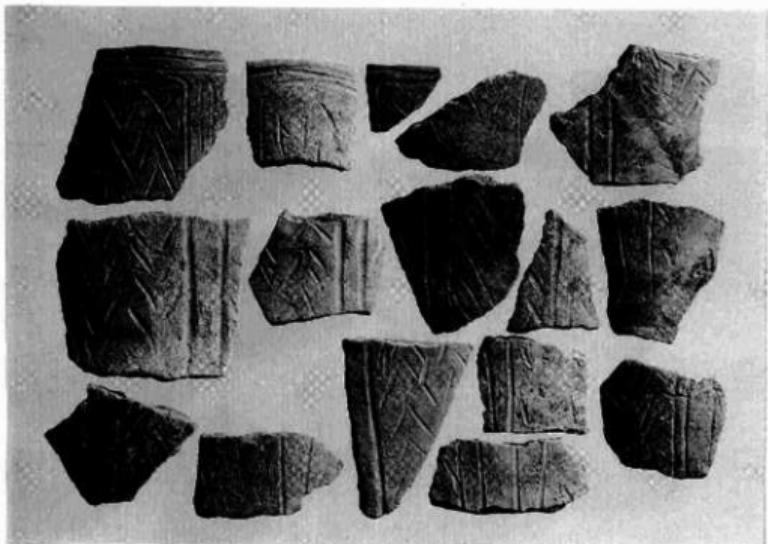
○49号住居址出土遺物(2)



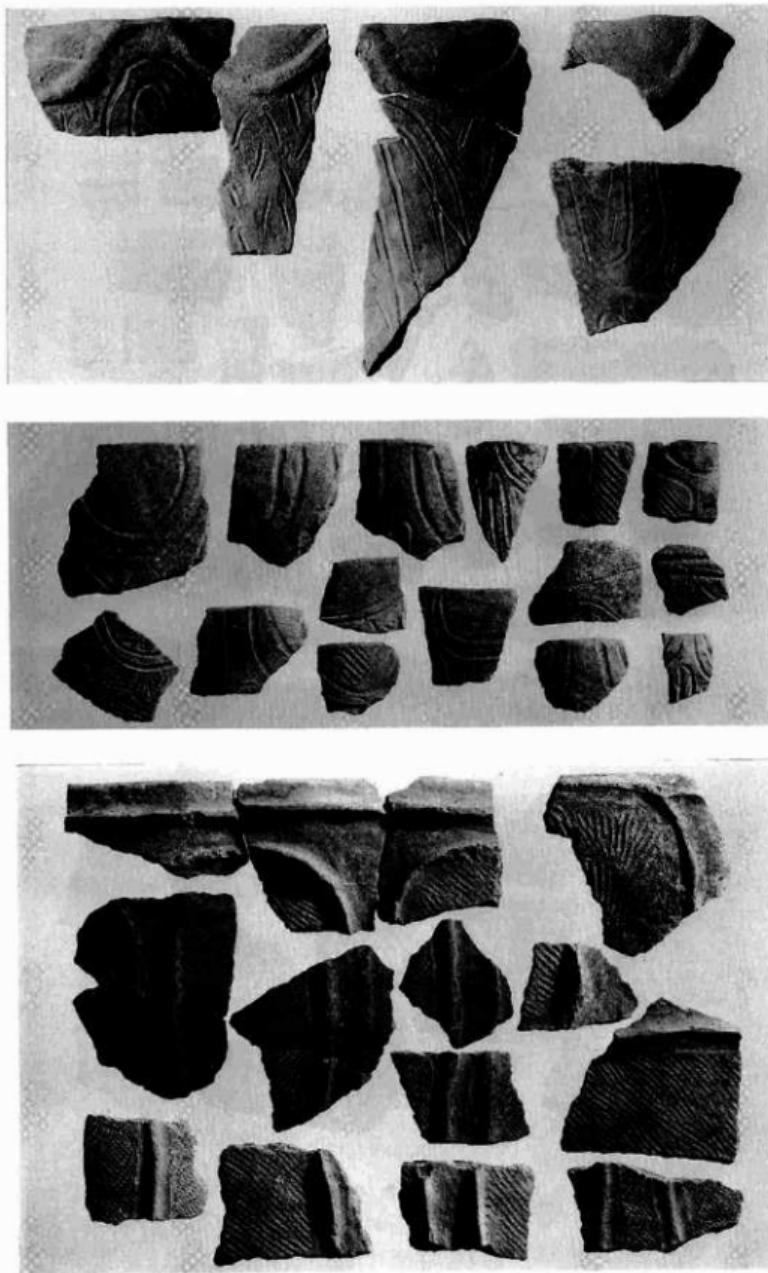
○48号住居址出土遺物



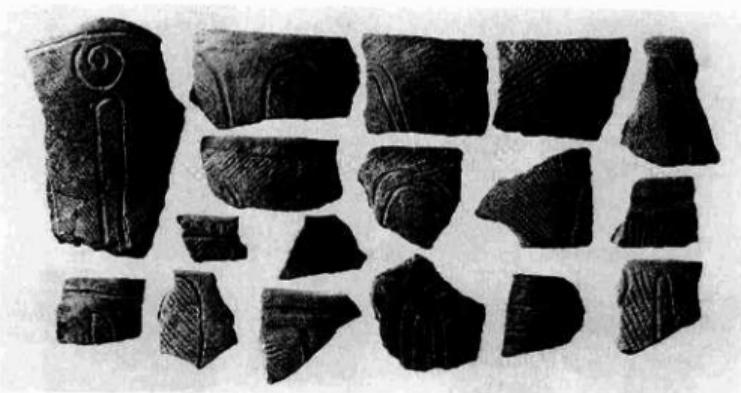
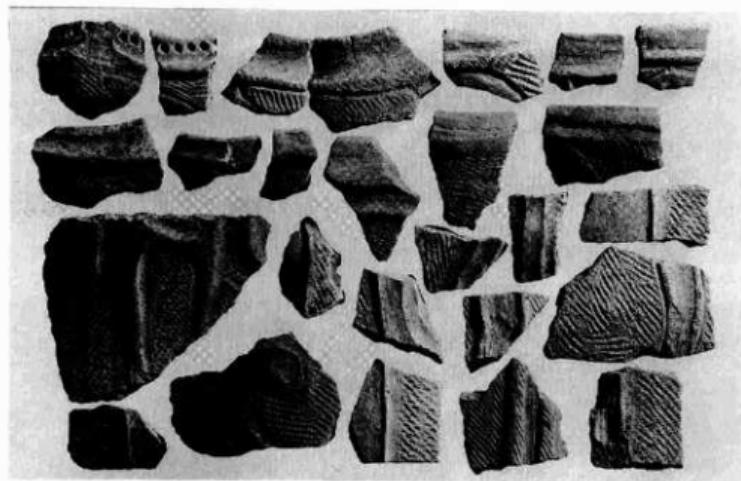
○4区礎層出土遺物(1)



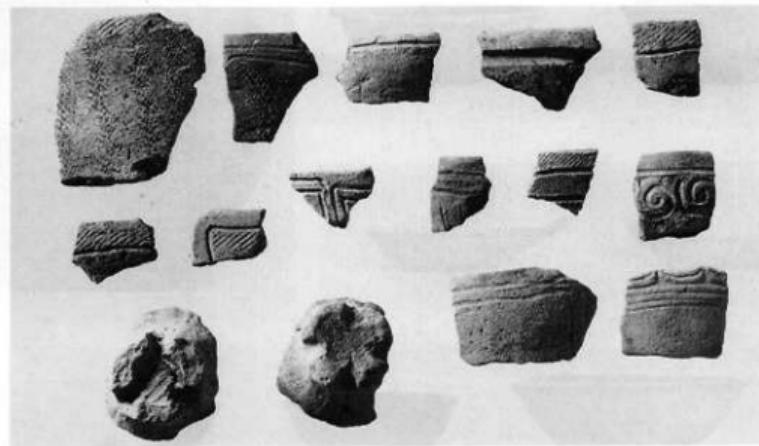
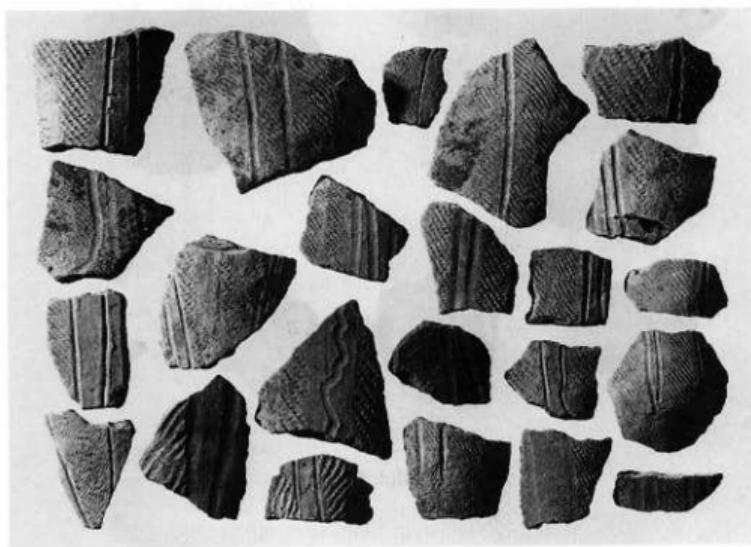
○ 4 区裸层出土遗物 (2)



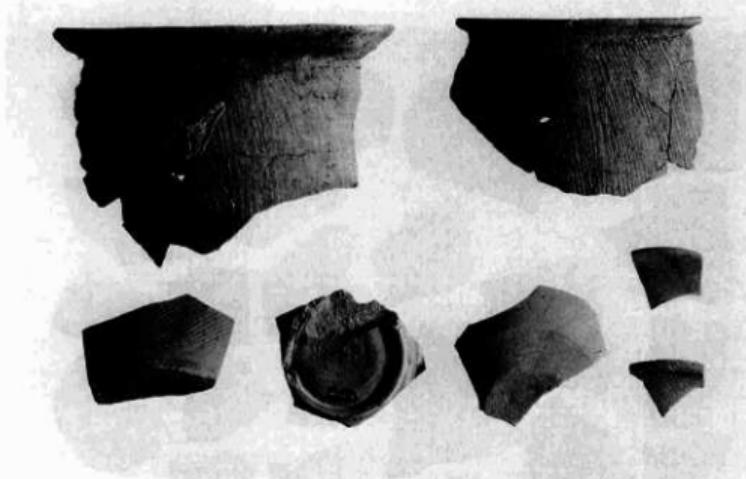
○ 4区堆积出土遗物 (3)



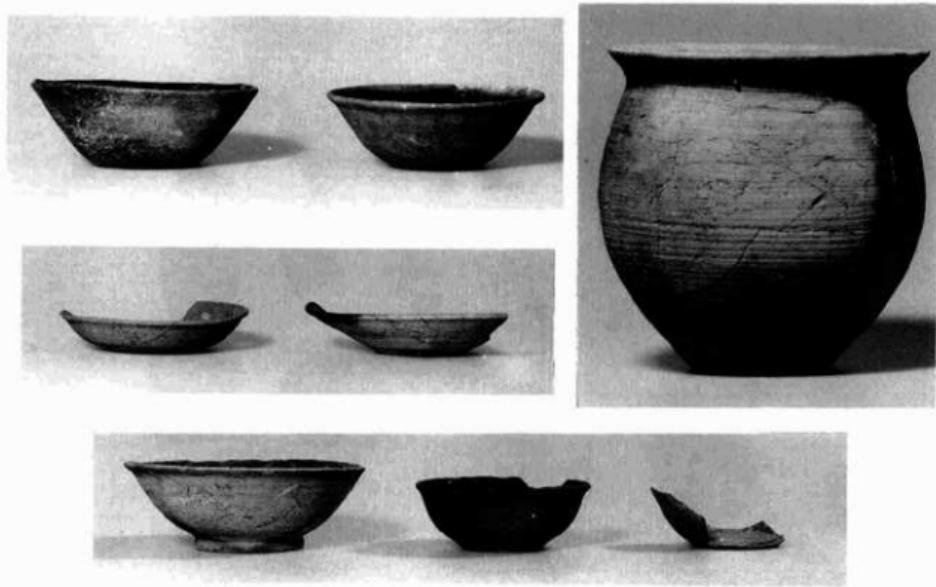
○ 4 区蝶層出土遺物 (4)



○ 4区砾层出土遗物 (5)



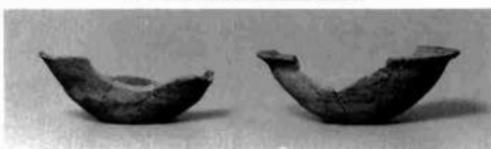
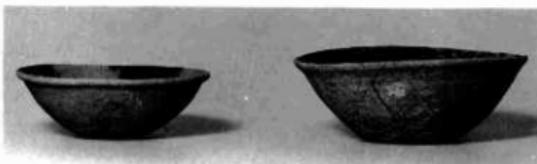
○26号住居址出土遺物



○27号住居址出土遺物



○31号住居址出土遺物



○32号住居址出土遺物



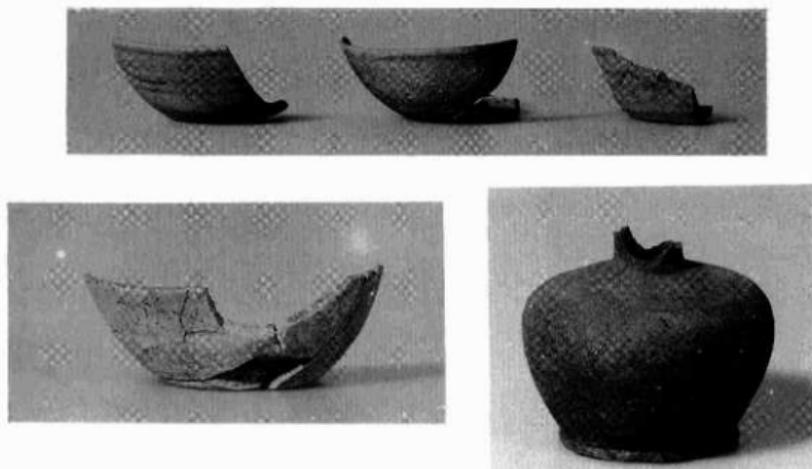
○33号住居址出土遺物



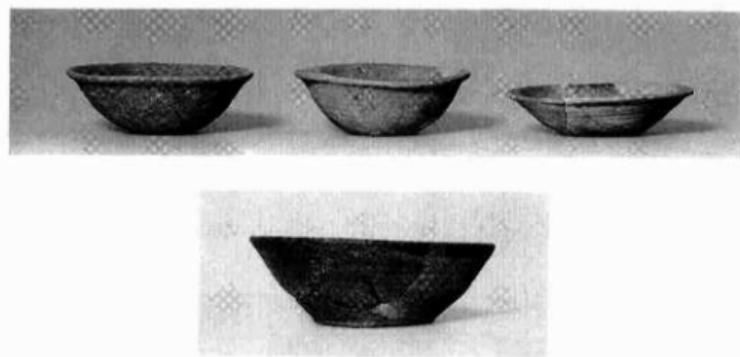
○35号住居址出土遺物



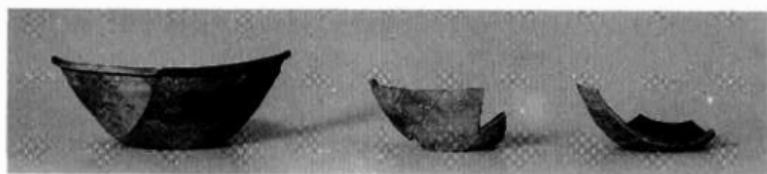
○36号住居址出土遺物



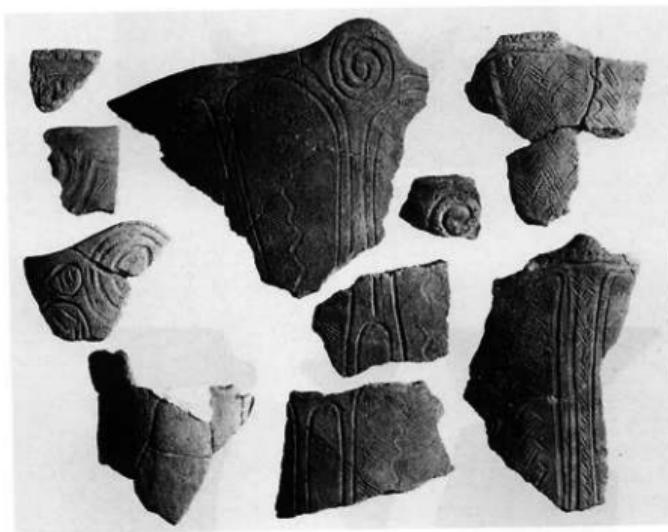
○38号住居址出土遗物



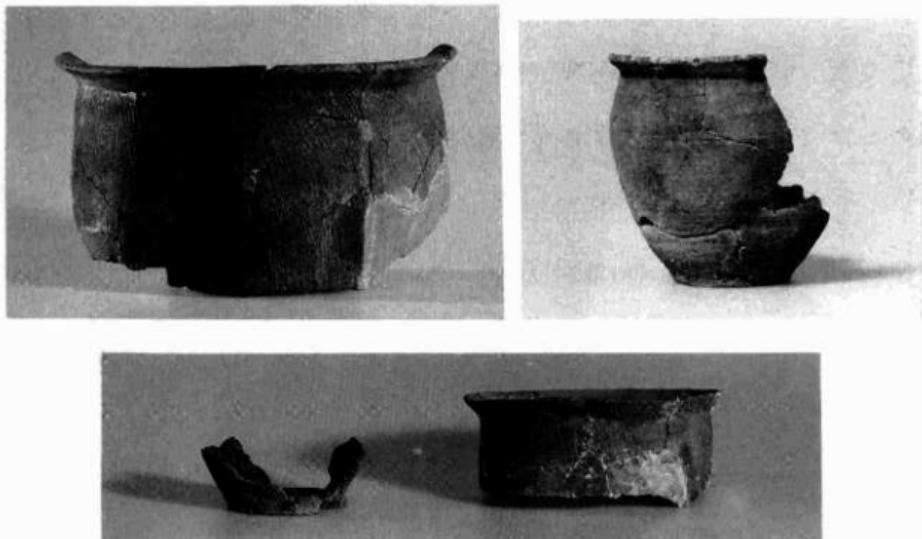
○39号住居址出土遗物



○40号住居址出土遗物



○41号住居址出土遺物



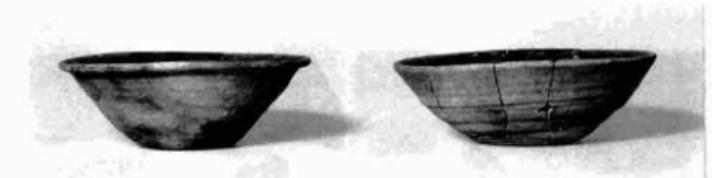
○ 42号住居址出土遗物



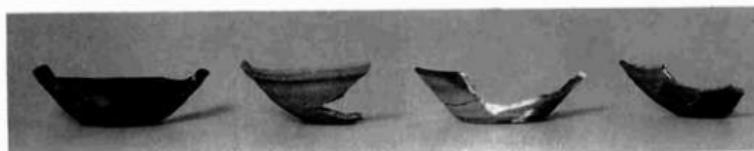
○ 43号住居址出土遗物



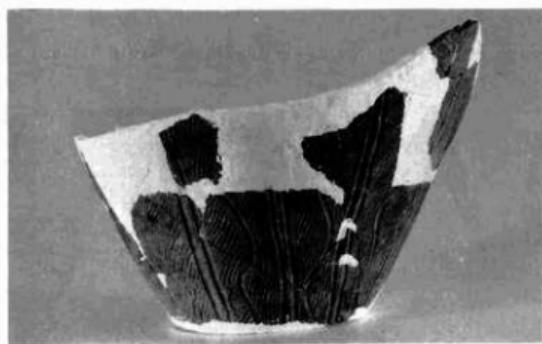
○ 24号住居址出土遗物 (1)



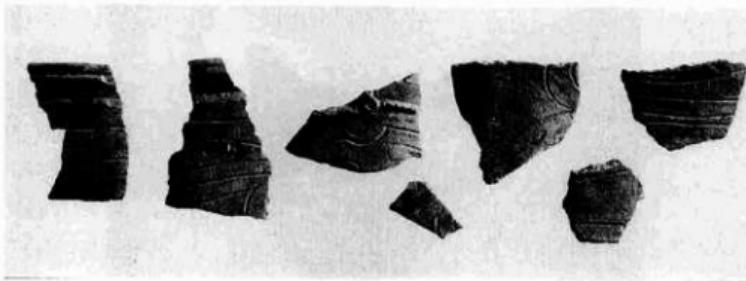
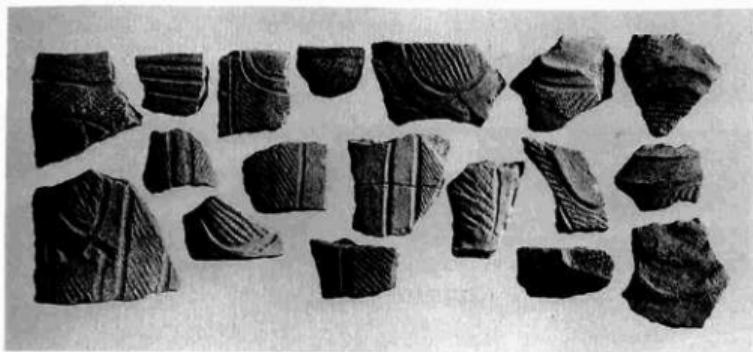
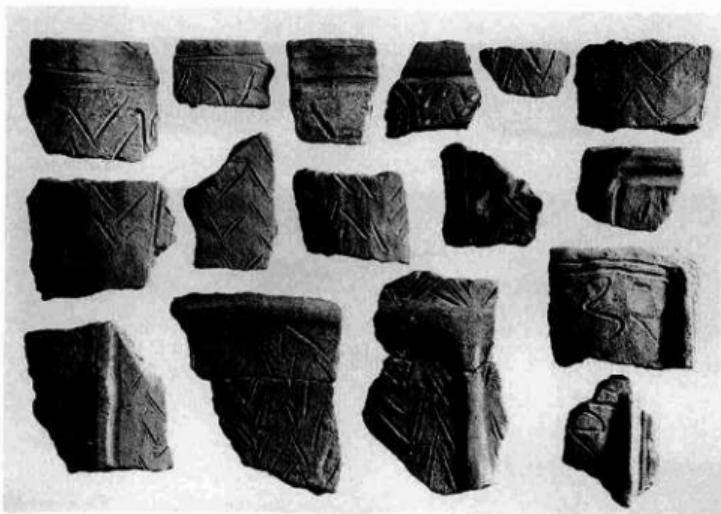
○ 24号住居址出土遺物 (2)



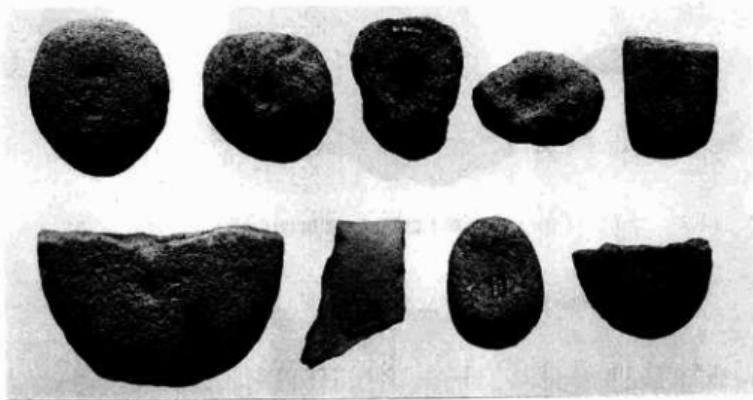
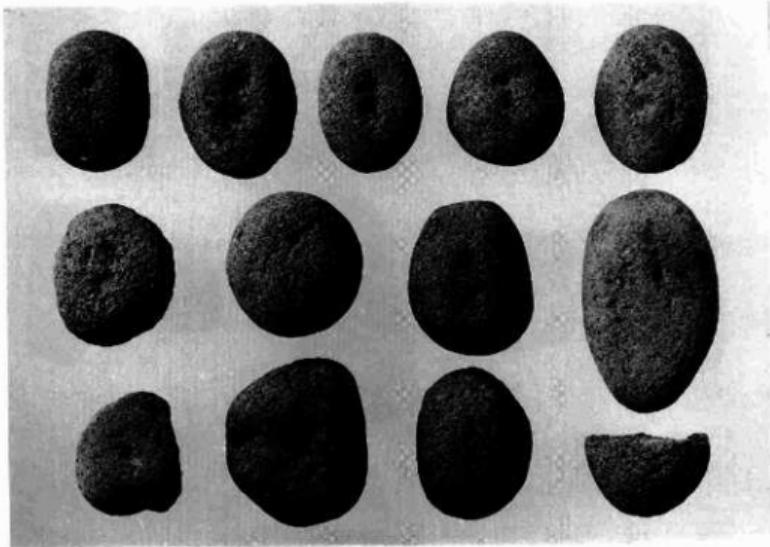
○ 47号住居址出土遺物



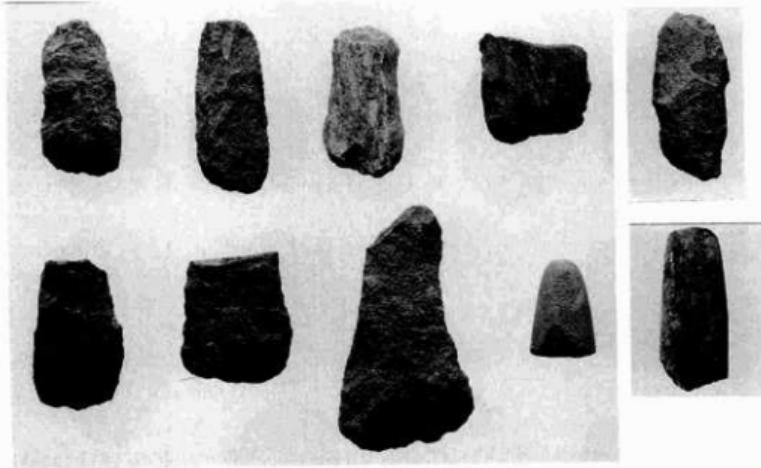
○ 1号埋設土器



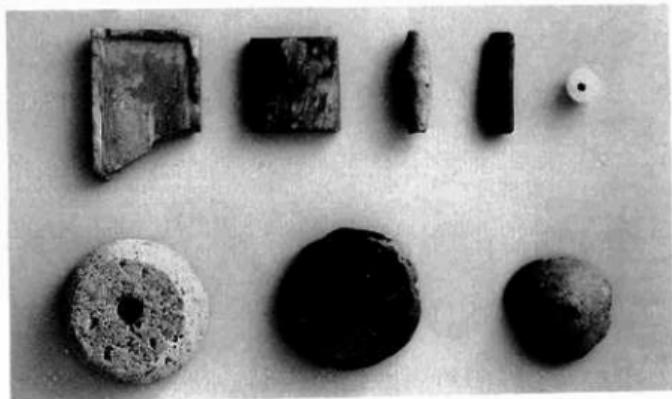
○ 6 区砾层出土遗物



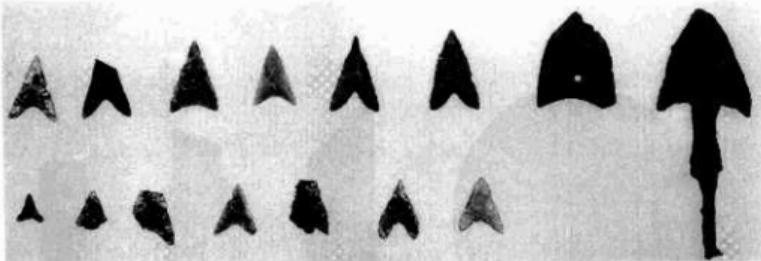
○柳坪遺跡出土石器類(1)



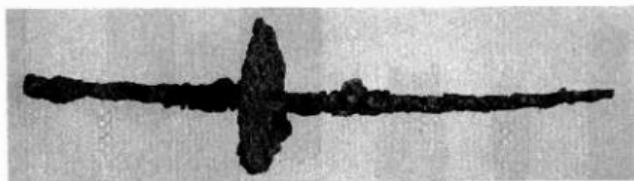
○柳坪遺跡出土石器類(2)



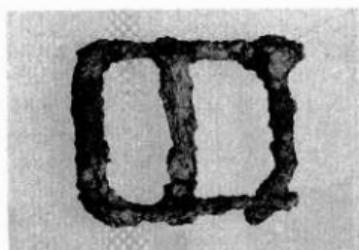
○柳坪遺跡出土石器類とその他



○石鏃・磨製石鏃・鐵鏃



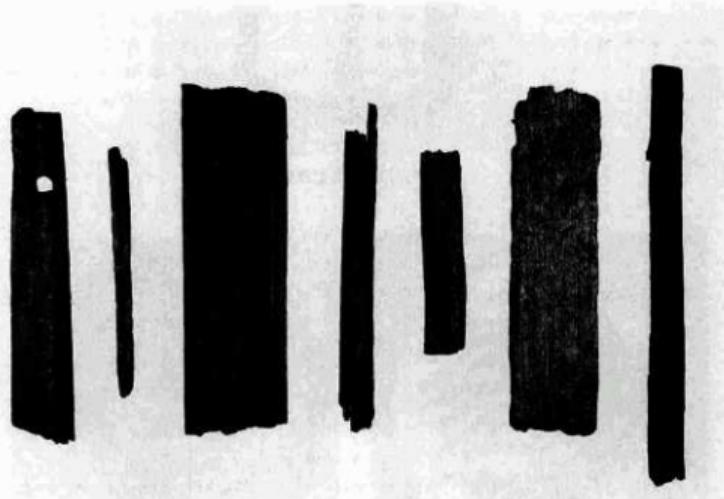
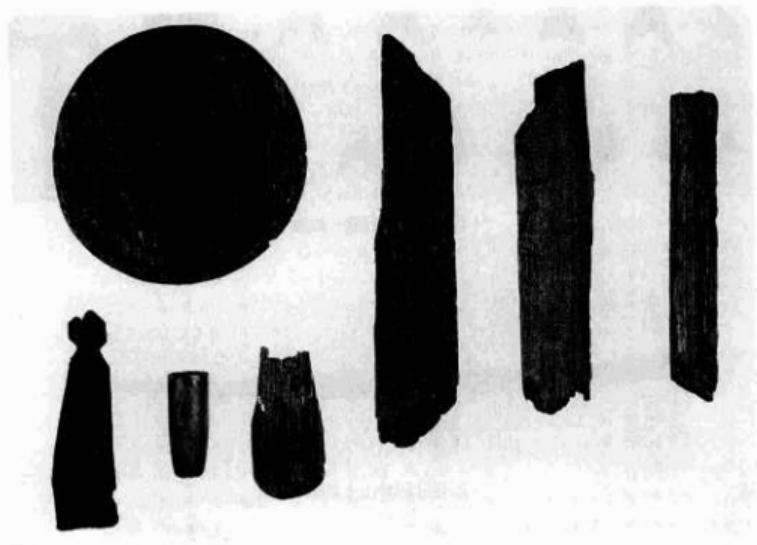
○25号住居址出土鐵製紡織車



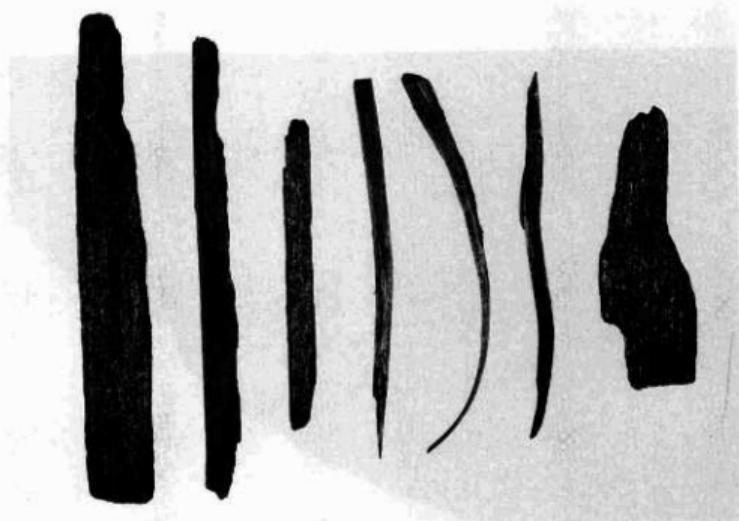
○19号住居址出土鐵製帶金具



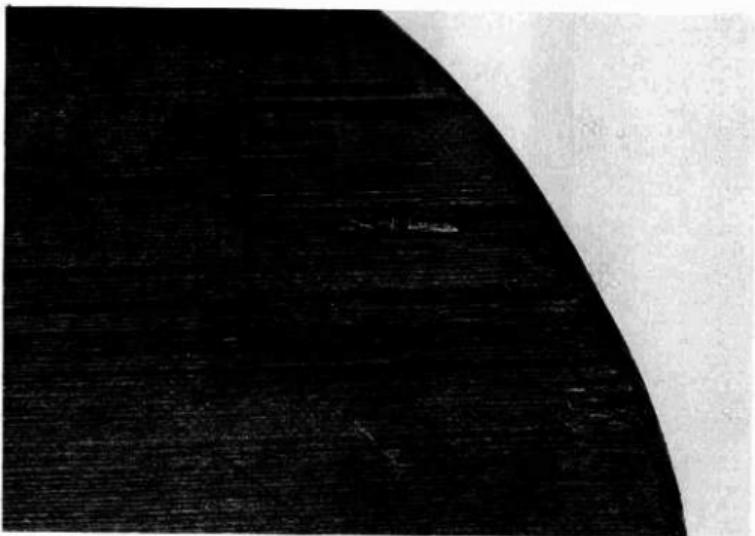
○5区出土磁器



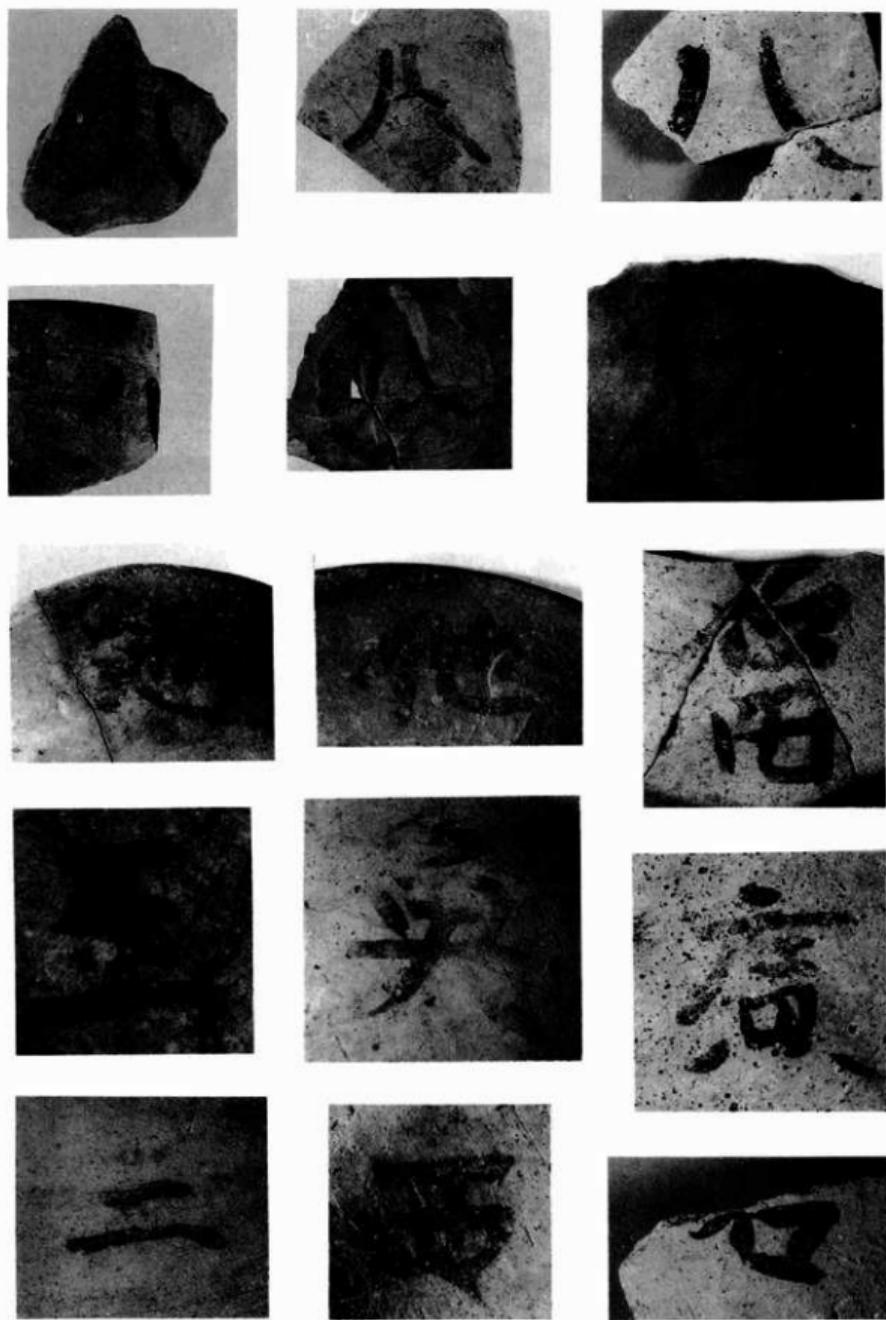
○ 8区出土木製品(1)



○ 8 区出土木製品 (2)



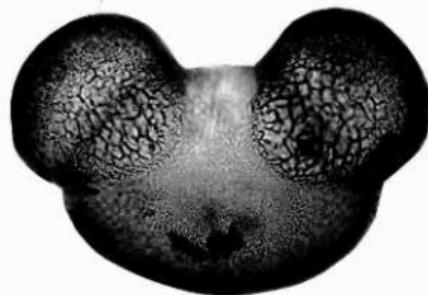
○ 8 区出土曲物拡大写真



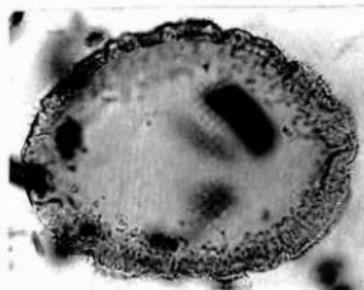
◎ 墨書土器 (1)



○墨書土器(2)



1



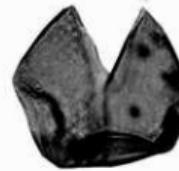
2



3



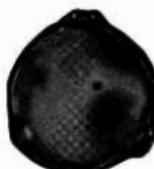
4



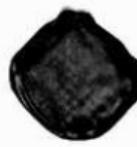
5



6



7



8

0

50μ (No.4-8, 10-21)



0

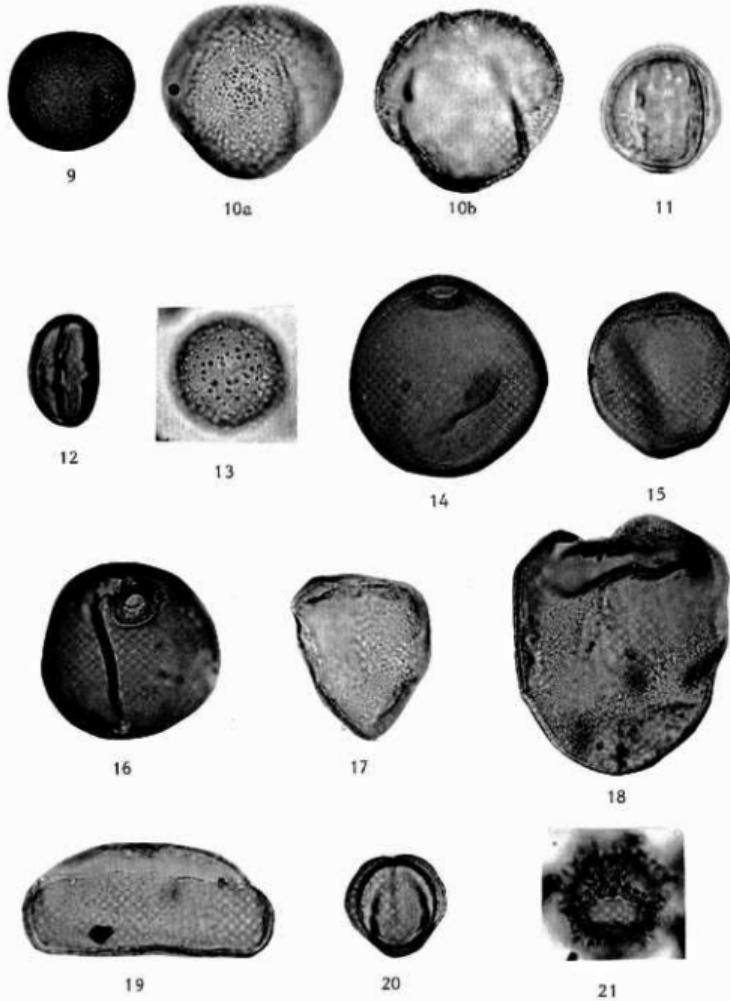
50μ (No.1-3, 9)



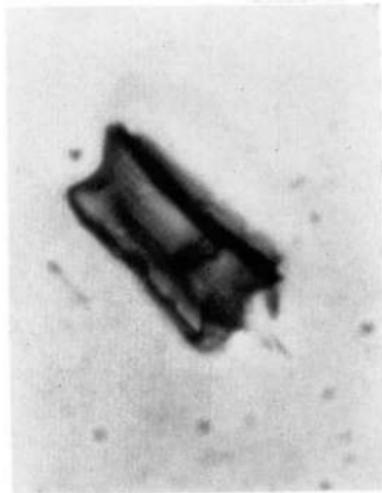
- | | |
|---|--|
| 1 | <i>Abies</i> |
| 2 | <i>Tsuga</i> |
| 3 | <i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i> |
| 4 | <i>Cryptomeria</i> |
| 5 | T. - C. |
| 6 | T. - C. |
| 7 | <i>Carpinus</i> |
| 8 | <i>Alnus</i> |

- | |
|----------|
| No.1 - 8 |
| No.1 - 2 |
| No.1 - 9 |
| No.1 - 8 |
| No.1 - 8 |
| No.1 - 9 |
| No.1 - 9 |
| No.1 - 9 |

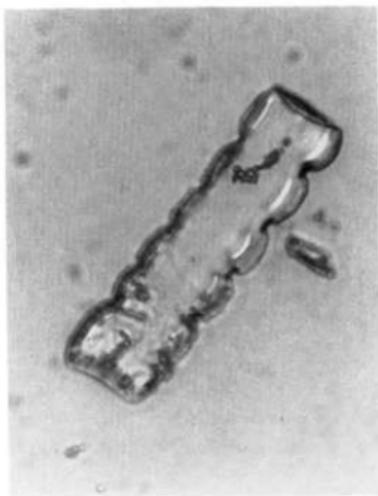
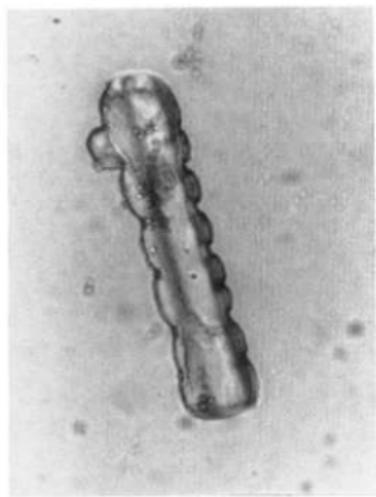
○ 8区検出花粉(1)



9	<i>Fagaceae</i>	No. 1 - 9
10a	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	No. 1 - 3
10b	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	No. 1 - 3
11	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	No. 1 - 2
12	<i>Castanopsis</i>	No. 1 - 9
13	<i>Sagittaria</i>	No. 1 - 5
14	<i>Gramineac</i>	No. 1 - 6
15	<i>Gramineac</i>	No. 1 - 8
16	<i>Gramineae</i>	No. 1 - 9
17	<i>Cyperaceac</i>	No. 1 - 2
18	<i>Cyperaceae</i>	No. 1 - 9
19	<i>Monochoria</i>	No. 1 - 8
20	<i>Artemisia</i>	No. 1 - 2
21	<i>Cichorioideae</i>	No. 1 - 4



0 20 μ

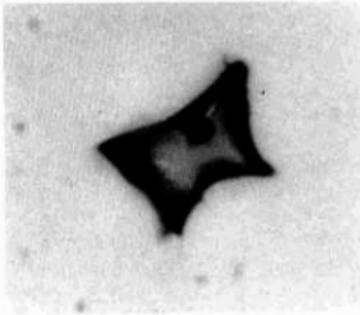
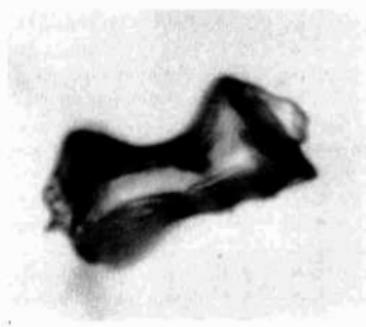
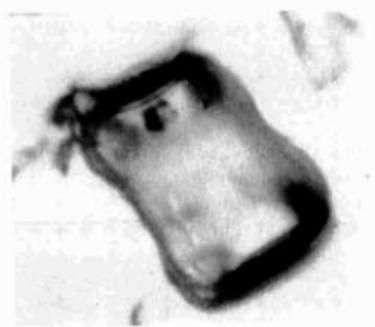
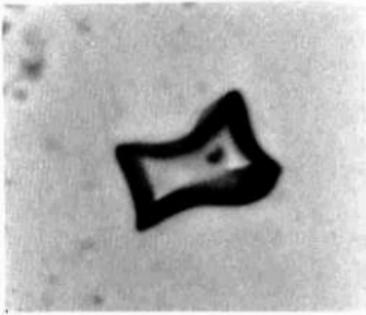
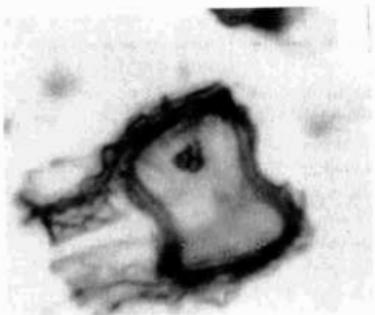


0 20 μ 50 μ

芋虫状プラントオバール

上から オオムギ族(左 表面、右 側面) カラスマギ族

○ 8区検出プラントオバール(1)



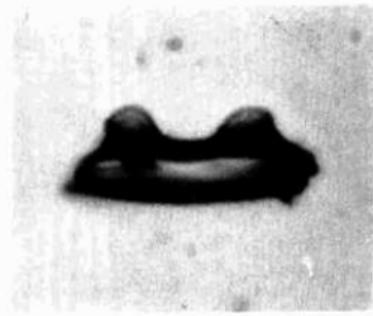
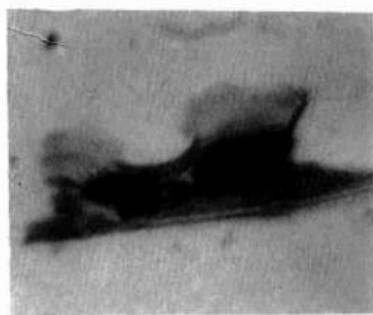
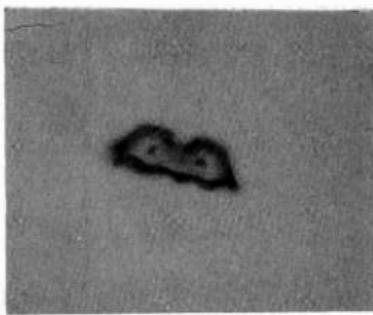
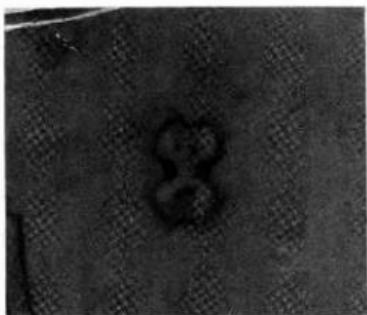
食パン状プラントオバール

0 20 μ

左 表面 右 側面

上から メダケ属 ヤケケ属 ヨシ属

○ 8区検出プラントオバール(2)



まゆ状プラントオパール

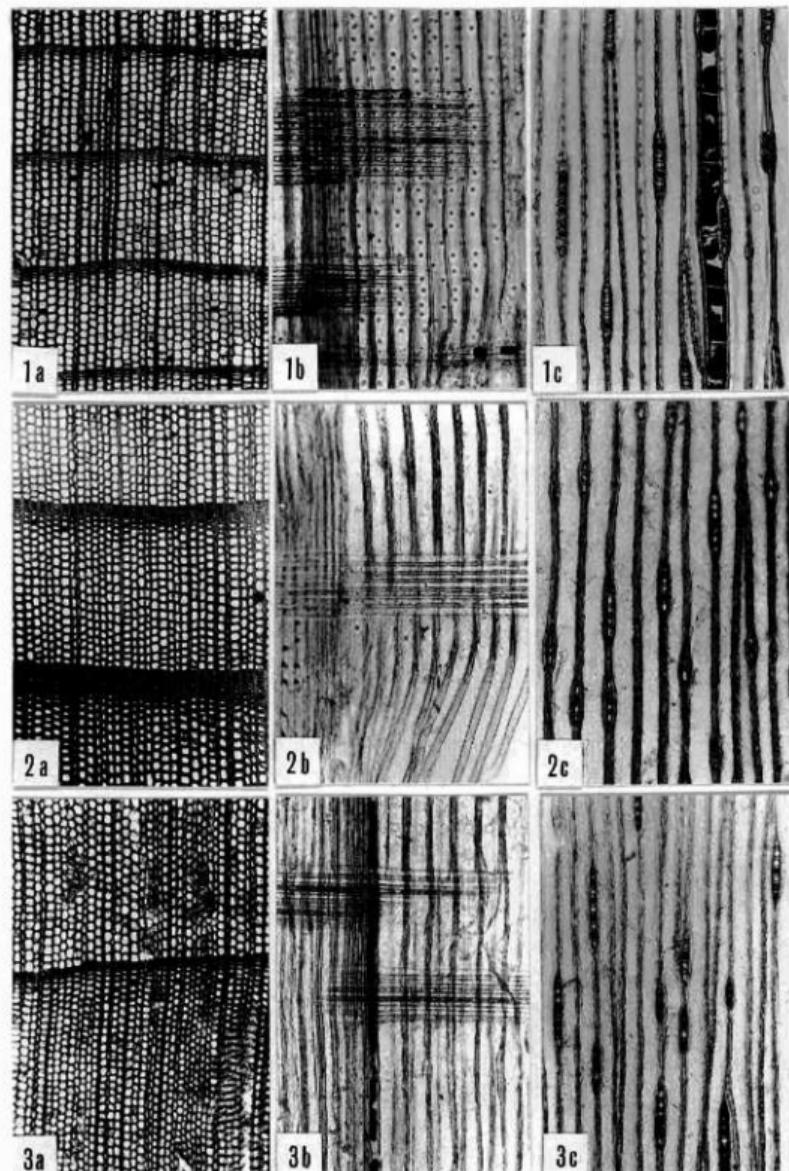
左 表面 右 側面

上から イネ属 ススキ属 コブナグサ属

0

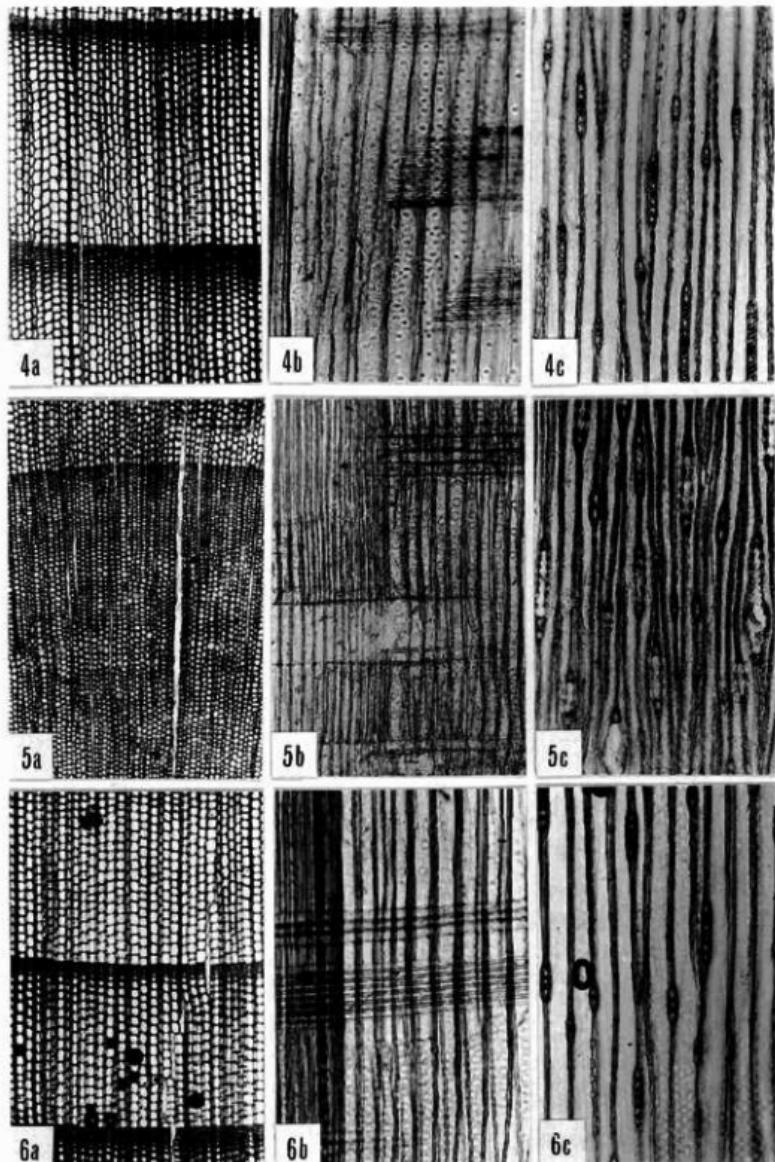
20 μ

○ 8区検出プラントオパール(3)



1. 第202図-1 ヒノキ属の一種 2. 第202図-2 ヒノキ属の一種 3. 第202図-3 ヒノキ属の一種

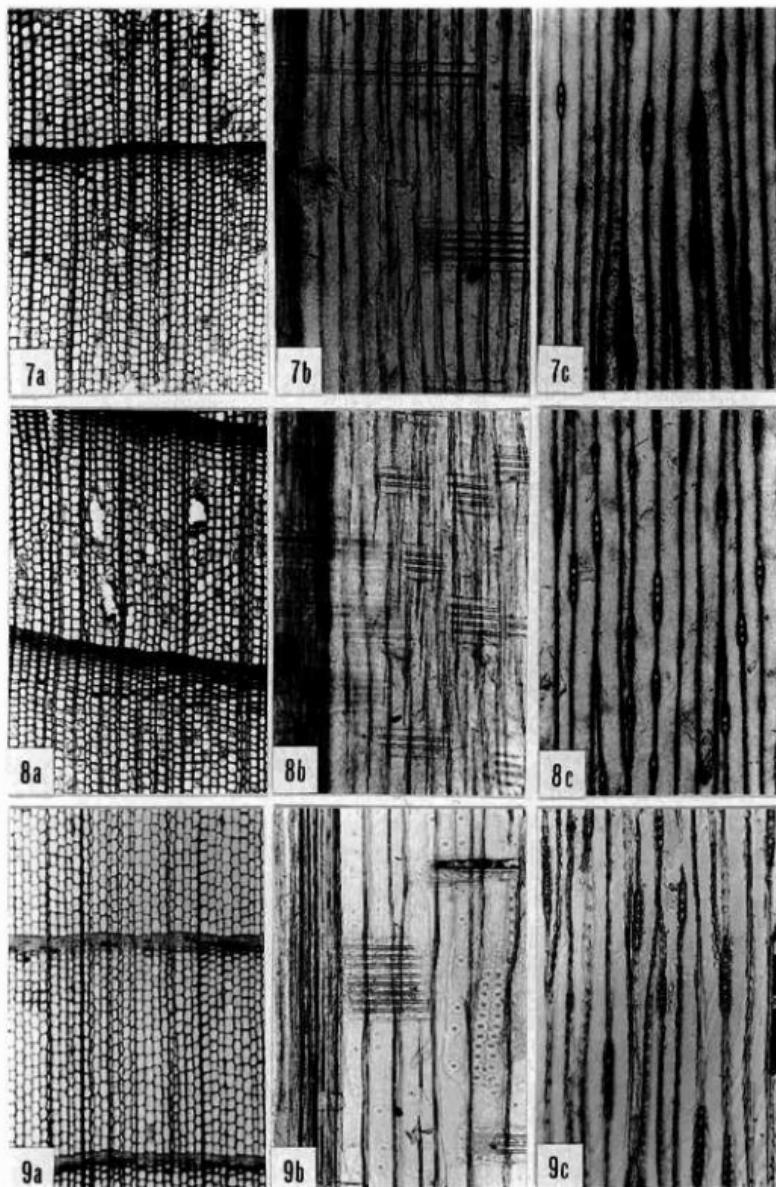
a : 木口×40 b : 横目×100 c : 板目×100



4. 第202図-4 ヒノキ属の一種

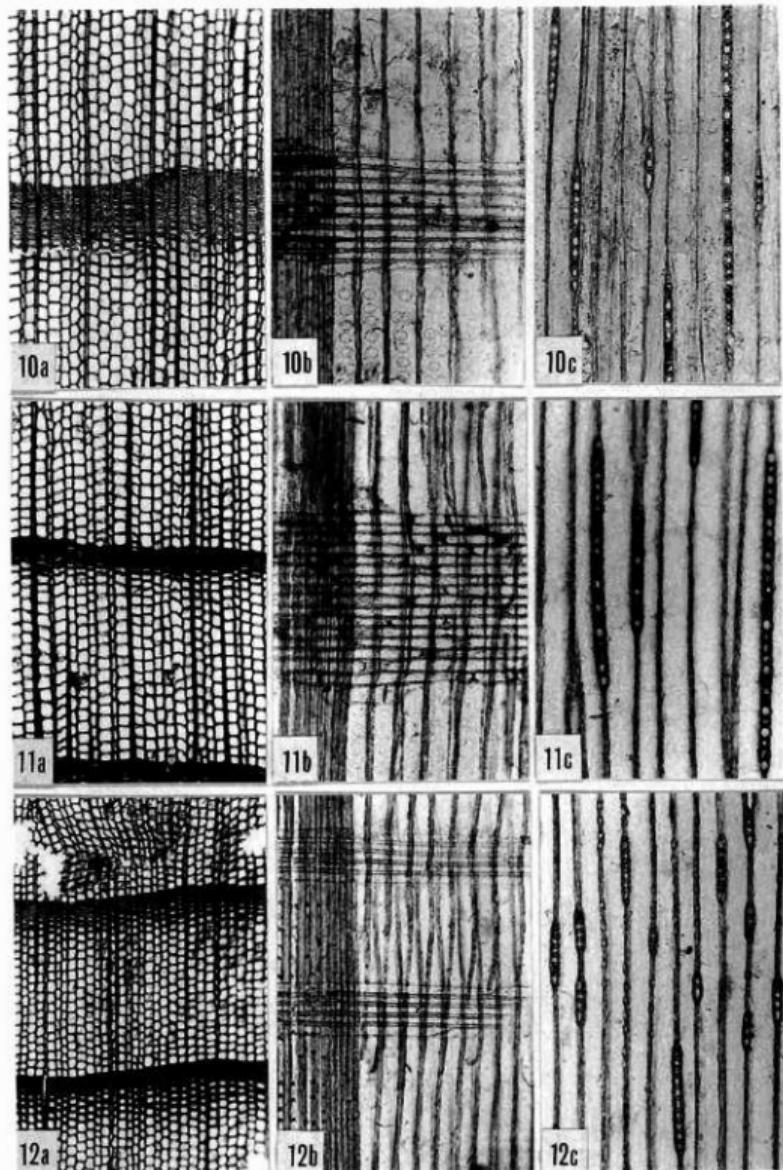
5. 第202図-5 マツ属(複維管束亞属)の一種

6. 第202図-6 ヒノキ属の一種



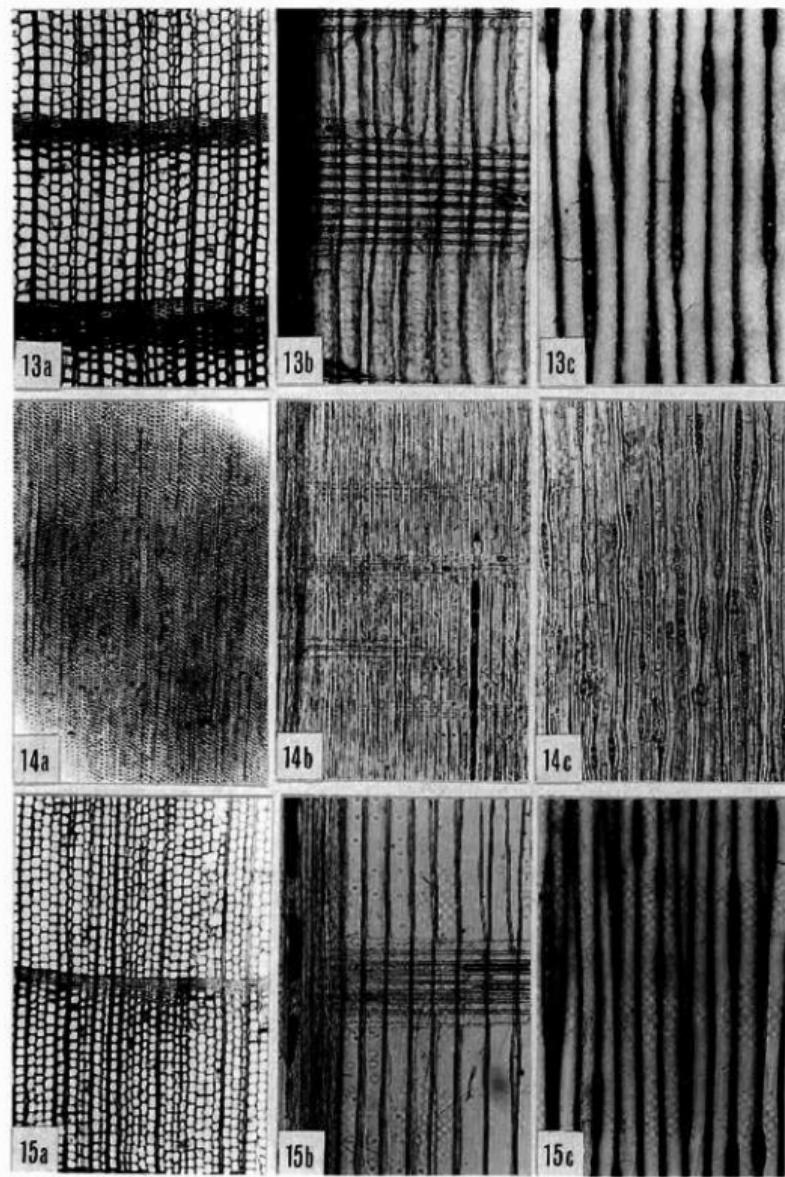
7. 第202図—7 ヒノキ属の一種 8. 第202図—9 ヒノキ属の一種 9. 第202図—10 ヒノキ属の一種

a : 木口×40 b : 横目×100 c : 板目×100



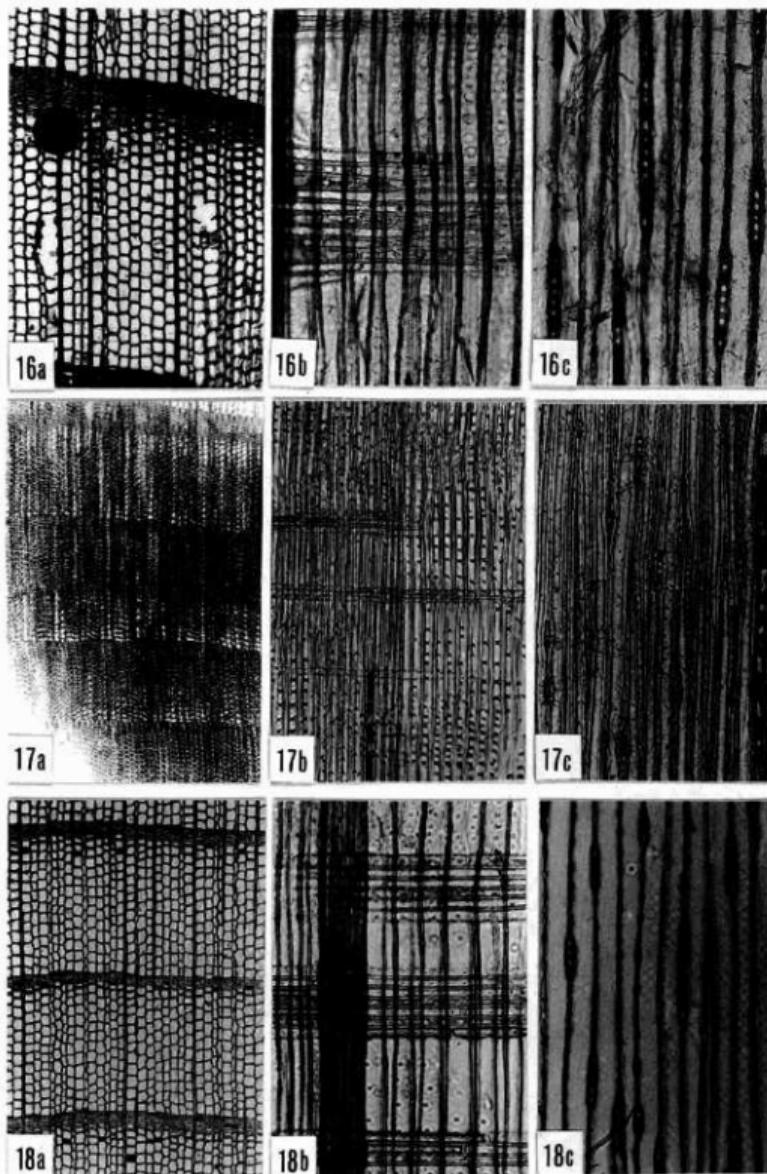
10. 第203図-2 モミ属の一種 11. 第203図-4 モミ属の一種 12. 第204図-1 ヒノキ属の一種

a : 木口×40 b : 粢目×100 c : 板目×100



13. 第204図-2 モミ属の一種 14. 第204図-5 イヌガヤ 15. 第204図-6 ヒノキ属の一種

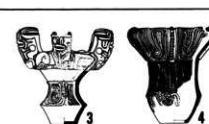
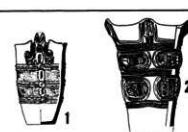
a : 木口 $\times 40$ b : 板目 $\times 100$ c : 板目 $\times 100$



16. 第204図-7 モミ属の一種 17. 第204図-8 イヌガヤ 18. 第204図-9 ヒノキ属の一種

a : 木口×40 b : 桁目×100 c : 板目×100

勝坂式土器



	1	2	3	4	5			
I	A 6	7	9	10	11	12	13	(+) 14
	8	D3	18	19	D1 15	16	17	(+) D2 20 21 22 23 24
II	B1 25	B2 26	27	B5 33	34	35	36	(+) 28 29 30 31 32
III	B3 37	B4 38	39	40	41	42	43	C2 44 45 46 47 48
IV	(+) 49	50	51	53	54	55	56	(+) 57 (+) 58 (+) 59
V	60	61	63	65	66	67	68	71 72 73
VI	74	(+) 75	76	77	78	79	80	81 82
VII	83	84	85					
IX	86	87	88		(+)			89
後期								

付図 八ヶ岳西南麓における縄文時代中期後半の土器の変遷（絵尽不同）

1986.3

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第13集

柳坪遺跡

印刷 昭和61年3月25日

発行 昭和61年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

発行 山梨県教育委員会

印刷 ヨネヤ印刷合資会社

